見眞大師　親鸞　眞宗宗祖　明治九年
承陽大師　道元　曹洞宗開宗　同十二年
慧燈大師　蓮如　眞宗本願寺　同十五年
月輪大師　俊伝　眞言宗泉涌寺　同十六年
慈攝大師　眞盛　天台宗流祖　同十六年
無相大師　開山　臨濟宗妙心寺　同　四三年
常濟大師　瑩山　曹洞宗總持寺　同　四三年
明照大師　源空　淨土宗宗祖　同　四四年
眞空大師　隱元　黃蘗宗萬福寺　大正六年
立正大師　日蓮　日蓮宗宗祖　同　十一年
徴妙大師　授翁　臨濟宗妙心寺　昭和二年

第八章　寺院の取締

第一節　參拜料、縱覽料及び寄附金募集

寺院は任意の寶物の外、參拜者に對し何等の名義を以てするに拘らず、參拜せしめるため特に料金を徴收することが出來ない。若し寺院がその殿堂、庭園、什寶等を觀覽せしめるために料金を徴收しやうとするには、地方長官の許可を受けなければならぬ。

又寺院が寄附金又は負債を募集するには、募集の目的、募集の方法、募集の金額、募集の區域、募集の期間、負債に付ではこの外に利率、償還の方法を記載したる願書を地方長官に差出して、その許可を受けなければならぬ。尙右の事項を變更する場合も、その事由を記して許可を受くべきものである。

寄附金又は負債募集の許可を受けた寺院が、他人をしてその募集に從事せしめるには、その住所、氏名、職業、年齢を記した願書を差出し、募集地々方長官の認可を受くべきである。

若し寺院が地方長官の許可を受けずして、寄附金又は負債を募集した場合は、事務擔當者を二十圓以下の罰金で處分する。

第二節　僧侶の托鉢

僧侶がその管長の免許を受け、免許證を携帶するときは托鉢を行ふことが出來る。管長が托鉢を免許して免許證を交付した場合は、その都度出願者所在地の地方廳（東京府は警視廳）へ、通知すべきものである。

托鉢は、午前七時より同十一時迄を限りとするが、遠路往復のために時間を遷延する場合は特別である。托鉢者は如法の行裝にて免許證を携帶し、行乞するを常とする。施者が請はなければ人家に接近し、濫りに歩行を駐めることは出來ぬ。且つ施物は施者の意に任せて、餘分を乞ふを許さない。一列は三人以上十人以下で、公衆の來往を妨げない樣に歩き、免許證は何時でも警察官等の檢閲に供すべきものである。

第十編　教育知識

第一章　教育の理論

第一節　教育の意義と目的

教育の意義　教育なる語は羅甸語のエゲユケーションから出たもので「引出す」といふことを意味して居る。即ち教育者が被教育者に働きかけ、その天性を啓發してこれを善導することが教育である。然し嚴密にいへば、教とは被教育者の精神に就ていひ、育とは身體についていつたもので、精神の啓發のみでは教育の意義が成立せぬと同じく、身體の發達をのみ目的とすることも教育ではあり得ない。精神と身體との兩方面を啓發善導して、初めて教育の意義が存することになるのである。故に教育の目的は、教育者が被教育者を善導して、强健なる身體と、生活上必須なる知識技能を養成し、且道德的觀念を啓發してこれを實行せしめるにあるが、人は一個人であると共に社會國家の一員であるから、一個人としての人格を完成すると共に社會國家の一員としての人格をも完成せしめねばならぬことはいふまでもない。而して教育者とは單に教育の事を職業とする學校教員のみの謂ひではなく、廣義に解釋するときは家庭にありては父兄、社會にありては先輩や年長者等も悉く教育者である。

秩序的に教育を受けない人でも、品性の高潔な者があり、これに反し高等教育を受けた者でも、犯罪に觸れて處刑される者があるので、教育の效果を疑はねばならぬが、高等教育を受けて犯罪者になつた者が、若し全く教育を受けないとしたならば、一層反社會性の行爲をするであらう。この點から考へると矢張り教育に重きを置かねばならぬ。それで教育は社會の進歩發達に伴ひ、これに順應して一層その必要を感ずるものである。

第二節　教育の期間

智育　智育とは智能を授けるために行はれる教育で、被教育の年齡も三四歳から二十歳前後までがその效果が最も著しく、三十歳までも幾分の效果はあるが、それ以後に於ては、自習の力が教育者の行ふ所に勝るといふのが、學者の議論の一致する所である。

德育　德育とは道德的觀念を附與し、これが實行方法を指導

するために行はれる教育で、小學校では主として修身科がこの役目を受持つて居るが、その德目は「父母に孝に」以下、教育勅語にあるものを基礎として居る。然し德育は小學校に入學して始めて行ふべきものではなく、兒童が嬰氣ながらも善惡の區別を知るに至つた年齡に達したときは、既に道德的意識の發芽したときであつて、然もこの時代の教育は所謂、「三兒の魂は百までも」の諺の如く、先入主となつて終生離脫しない傾向を持つて居るから、三四歲時代の家庭教育に於ては、特に德育に留意する必要があるのである。

體育　體育は身體の健全なる發達を期するために行はれる教育で、その效果の最も著しいのは、小學兒童の時代から始まり、凡そ二十歲前後までゞある。

情育　情育は道德心及び審美心の啓發を以て、直接の目的として居るが、教育上最も困難とするところで、その效果も一時にこれを收めることは殆んど不可能である。年齡からいつても何歲頃より施すべきかについて、一定した論據がないのであるが、普通は三四歲頃から始まり二十五歲位で停止すべきものとされて居る。要するに情育は絶えず行つてゐると、自然その效果を見るに至り、教育を終つた後に至つて著しく現はれて來るのが常である。

第三節　教育の方法

技術教育　技術教育は凡ゆる技能を授けるものであるが、教育の有效期間を經過したものに對してもまた教育の可能性がある。然し最も顯著なる期間は七八歲から十七八歲までの間で二十歲を過ぎると漸次後退する傾向がある。

國民教育　國民教育とは國民をしてその國の國民たるに適する教育を施すことである。何れの國家もその國家としての特徵と特性とをもつて居る。國民にしてこの特徵と特性に適した場合は國家は榮え、然らざるものは衰滅するを免れない。我國は上に萬世一系の皇室を戴き、國民は大和魂なる特性を持つて居るから、我國をして永遠に榮えしめるには、一般國民をして皇室を尊重する特性を知らしめ、善良な國民たるに資するやう教育しなければならぬ。

社會教育　社會教育には二つの意味がある。その一つは教育の可能性時代にある者が學校と家庭以外に於て、社會一般の風俗習慣、思想又は偶發事項等、すべて眼に見、耳に聽くものの影響を受けて、その知情意の發育の上に變化を生ずることで、この意味から社會は無形の教育者として、兒童教育上に重要な役割を動めるものである。他の一つは既に學校教育を終つた者が、社會の進歩に順應するために受ける教育である。社會は常に進歩し變化するから、人が社會の一員として活動するには、新しい思想や學術を理解し、近代人としての教養を持たなくてはならぬ。その機關として文化講座や、學術講習會等が開かれるのであるが、其他公共圖書館、美術展覽會、通俗講演會、學術講演會、活動寫眞、ラヂオ等もすべて社會教育の機關となつてゐるのである。

女子教育　最近一般女子の自覺によつて、婦人運動が盛んに起つて居るが、その原因は從來男子が女子を奴隸視して、事每に壓迫を加へて居たところに發して居る。男子の活動は女子と結合して初めて完成せられると同時に、女子も亦男子と結合して、初めてその本分を盡すことが出來るのであるから、女子の地位を男子と同程度に引上げることは、人としての活動を健全ならしめる所以である。從來の如く男子のみ發達し女子がこれに伴はないことは一種の畸形であるから、この點から女子教育を改善し、その發達を期する必要が認められ、近代特に女子教育が盛んとなつたのである。

第二章　國民教育の實際

第一節　教育の種類

教育には個人主義の教育と國家主義の教育との二方面がある前者は個人本位で、個人の完成發達を期することを眼目として他を顧みず、後者は國家の發達を本位とし個人の利害を度外する教育方法である。然し個人と雖も國家を離れて存在出來るものではなく、國家も亦個人の集團であるから、純然たる個人主義の教育を行ふにしても、個人の屬して居る國家を度外することは出來ない。又同樣に國家主義の教育も、個人の利害發達を眼中に置かないやうでは、結局は個人の集團である國家の不利となるから、この二つの主義はこれを併立せしめなくては、眞に教育の目的を達することが出來ない。現今に於ける我國の教育制度は、その形式に於ては專ら國家主義を採用し、國家の力によつて教育を統制して居るのであるが、その間に個人主義の教育を斟酌し、政府當局も實際教育の任に當る者も、學生々徒個人の發達に留意し、同一の學校又は同一の教室に於てすら、被教育者の個性や將來の目的に應じ、幾分の手加減を加へて居るのである。

第二節　國民教育

我國の教育は國民教育に重點を置き、小學校令第一條にも、初等教育の主義目的を示して「兒童身體の發達に留意し、道德教育及び國民教育の基礎並に、日常生活に必須なる普通の知識技能を授くるを以て目的とす」と規定して居る。現今の國民教育は、この根本精神に基き、

一　我國體を知らしめてこれを尊重愛護する念を起さしめ、以て國家のために貢獻せんとする思想を養成すること。

二　國家の制度法令を明かにし、國民の權利義務を知らしめ、これを尊重する精神を養ふこと。

三　國家の過去及び現在の狀勢を明かにし政治、經濟、軍事、教育上から見て、世界に於ける我國の地位及びその勢力を知らしめること。

四　國語及び國歌に通ぜしめること。

五　我國風、習慣、禮儀作法に通ぜしめることに努めて居る。

かくの如く我國の教育が、國民教育に重きを置く所以は、我國が世界各國に比して、建國の狀態を異にして特に卓絕せる國體であるからである。

第三章　教育制度

第一節　我國の教育制度

我國の教育制度はその範を外國に採り、我特性にあてはめたもので、形式上からは通常教育と特種教育とに分れ、實質の上から豫備教育、學理教育、業務教育の三つに區別されて居る。通常教育は更にこれを初等教育、中等教育、高等教育に分ち、特種教育は師範教育と特殊教育とに分れる。而して初等教育は小學校、中學教育は中學校及び高等女學校、高等教育は大學及び高等學校で行はれる。又實質上の豫備教育は小學校、中學校高等女學校等で行はれ、學理教育は大學及び各種專門學校で行ひ、業務教育は各種實業學校、實業專門學校、大學等に於て行はれて居る。

第二節　初等教育

初等教育は小學校で行はれる。小學校には尋常小學校、高等小學校、尋常高等小學校の三種があり、尋常小學校は修業年限を六年、高等小學校は二年とし、國民の義務として、學齡に達した兒童は必ずこれを卒業せねばならぬことゝなつて居る。教

科目は修身、國語、算術、國史、地理、理科、圖畫、唱歌、體操の九科目で、特に女子のためには裁縫、地方によつては手工の二科目を加へ、男子のためには手工を加へて居る。高等小學校の教科目は右の外（實業、農業、工業、商業）の一科目又は數科目で、女兒のためには家事、裁縫を加へて居る。小學校の要旨は兒童をして一個の人間として、且又國民の一員として、社會生活を營ましめるの基礎教育を施す點にあるから、單に兒童の精神を陶冶するに止まらず、特に身體の完全なる發達に留意し、且生活上必須なる知識と技能を授けることゝなつて居る。臺灣、朝鮮、樺太、關東州及び南洋等の各殖民地には、初等教育の機關として、內地人の學齡兒童を教育する小學校と、土人の學齡兒童を教育する公學校とが設けられて居る。小學校の制度教科等は、內地の小學校と異なる所はないが、公學校は修業年限を六ヶ年、兒童の學齡期を七歲以上十六歲以下とし、修身、國語、算術、漢文、體操の五科目と、女子のためには裁縫、土地の狀況によつて、手工、農業、商業の別科を設け、特に我國語を教へ、德育を施し、我日本帝國の國民たる性格の養成に努めて居る。

第三節　中等教育

中等教育は中學校と、高等女學校とで行はれる。中學校は修業年限を五ヶ年とし、男子に必要な高等普通教育を行ふ所で、修身、公民科、國語、漢文、歷史、地理、外國語、數學、理科、實業、圖畫、音樂、作業科、體操等を教科目とする。外國語は主として英語であるが、獨逸語、佛蘭西語の一を選ぶことも出來、土地の狀況によつては、隨意科として、實業に關する科目を加へることが出來る。高等女學校は科目は中學校の學科の外家事、裁縫がある。修業年限は五ヶ年又は四ヶ年である。女子に必須な高等なる普通教育を授け、隨意科としては裁縫、家事を加へることが出來る。中等教育はその實質から言へば、高等教育の豫備教育を行ふと同時に、高等普通の業務教育を行ふ所である。

第四節　高等教育

高等教育は高等學校及び大學で行はれる。高等學校は大學の豫科であると同時に、それ自身には完全なる高等普通教育を授くる所で、尋常科と高等科とに分ち、修業年限を尋常科四年、

高等科三年の七年制を本體とするが、高等科だけの三年制をも認めて居る。部制は高等科を文科、理科の二部とし、別に高等科の上に專攻科を置くことも出來る。官公立高等學校の所在地は東京(二校)仙臺、京都、金澤、熊本、岡山、鹿兒島、名古屋、新潟、松山、山口、松山、水戸、山形、佐賀、弘前、松江、大阪(二校)浦和、福岡、靜岡、高知、姫路、廣島、富山等の各地である。

大學　大學には官立、公立、私立の三種がある。帝國大學は大學院及び分科大學を以て構成し、分科大學は法、醫、工、文理、農、商及び經濟等の各科に分れて居る。

大學令概要

一大學は國家に必須な學術の理論及び應用を教授し、その蘊奥を研究することを目的とし、兼ねて人格の陶冶及び國家思想の涵養に從事する。

二官立大學の外に私立大學を認め、特別の場合には公立をも認可する。

三學生に自發的研究を奬勵するため學科課程を定めず、學生をして自由に學修せしめる。

四年別を廢し學生は必ずしも卒業することを要せず、學士の稱號を得んとする者に限り卒業試驗を行ふ。

五大學には研究科を置く。

六綜合大學の場合にはその分科は法、醫、工、文、理、農、商、經濟科とするが、單科又は其他の場合は之を分合して一分科とすることを得る。

七綜合大學の分科は各學部とする。

八入學試驗は高等學校卒業を原則とするが、各學部を通じて自由に入學を許す。

九大學には大學豫科を置くことが出來る。

官立大學

東京帝國大學（法學部、醫學部、工學部、文學部、理學部、農學部、經濟學部の各學部及傳染病研究部、航空研究所）。

京都帝國大學（法學部、醫學部、工學部、文學部、理學部、經濟學部、農學部）。

東北帝國大學（理學部、醫學部、工學部、法文學部の各學部及び金屬材料研究所）。

九州帝國大學（醫學部、工學部、農學部、法文學部）。

北海道帝國大學（農學部、醫學部、理學部、工學部及び豫科）

官立單科大學　東京商科大學、新潟醫科大學、長崎醫科大學、岡山醫科大學、千葉醫科大學、金澤醫科大學、熊本醫科大學、東京文理科大學、廣島文理科大學、神戸商業大學、東京工業大學、大阪工業大學。

公立單科大學　大阪醫科大學、愛知醫科大學、京都府立醫科大學、大阪商科大學。

私立大學　早稲田大學、慶應義塾大學、明治大學、法政大學、中央大學、日本大學、同志社大學、國學院大學、東洋大學、東京農科大學、駒澤大學、龍谷大學、大谷大學、關西大學、東京慈惠會醫科大學、立命館大學、專修大學、立教大學、立

東京帝國大學赤門（國寶）

正大學、上智大學、拓殖大學、大正大學、日本醫科大學、眞言宗高野山大學。

女子大學　女子大學は專門學校令によつて設置せられ、家政、國文、英文、社會學の各科を教授し、現代社會の淑女として必要な學理及び業務教育を授ける所で、日本女子大學、東京女子大學、神戸女學院大學部等の學校がある。

第五節　師範教育

師範教育は學校教員を養成することを目的とし、その學校には師範學校、高等師範學校、女子高等師範學校、農業教員養成所、商業教員養成所、工業教員養成所、臨時教員養成所等が設けられてある。

師範學校　師範教育は

一平素忠孝の大義を明かにし、國民たるの志操を振起せしめ

二精神の鍛錬、志操の練磨に心を用ひ、

三法律を守り秩序を保ち師表たるの威儀を維持し、

四教授は小學校令の要旨に添ふことを旨とし、

五教授法を會得せしめ、

六生徒をして自ら學識を進め、拔萃を養ふ習慣を養はしめることを要旨とし、

北海道及び各府縣に一校乃至數校を設けて居る。

高等師範學校　高等師範學校は、文理科大學に昇格した東京高等師範と廣島師範との二校があつて、師範學校及び中等學校教員の養成を目的として居る。學科は豫科、本科、研究科の三つに分れ、修業年限は豫科一年、本科三年である。本科は國語漢文科、英語科、地理歴史科、數理化學部、博物部の五部に分ち、女子のためには、東京と奈良に女子高等師範學校が設けられて居る。

教員養成所　教員養成所は師範學校、中學校、高等女學校及び各實業學校の教員を養成する所で、農業教員養成所は東京帝國大學農學部内、工業教員養成所は東京工科大學内、商業教員養成所は東京商科大學内に附設し、臨時教員養成所は文部大臣の指定する帝國大學、及び直轄各學校内に附設されて居る。

第六節　專門教育

專門教育は專門學校に於て行はれ、高等の學術技藝を授け、學理教育と業務教育とを兼ねて居る。官立の專門學校には東京外國語學校、大阪外國語學校、東京音樂學校、東京美術學校、富山藥學專門學校、神戸高等商業學校等がある。各高等商業學校、高等工業、高等農林、高等蠶絲、蠶絲專門の各學校もこれに加ふべきものである。又私立の專門學校には、私立大學の專門部及び其他の私立專門學校がある。

第七節　實業教育

實業教育は工業、商業等の實業に從事する者に對し、必須なる教育を施すもので、中等實業教育と高等實業教育とに分れて居る。

中等實業教育　農業學校（水産、蠶業、山林、獸醫の諸學校もこれに屬す）。商業學校、商船學校、工業學校、實業補習學校等は、何れも中等程度の實業學校で、學科の程度によつて甲種と乙種とに分れ、文部大臣に於て實業教育に貢献あるものと認められた學校に對しては國庫から補助金が交附される。

高等實業教育　高等實業教育は、專門學校令によつて設立された實業專門學校に於て行はれ、現在では高等農林學校、高等蠶業學校、高等商業學校、高等工業學校等が各地に設けられて居る。

第八節　特殊教育

特殊教育は、その文字の示す如く神職養成、聾啞者又は盲者の教育、軍事教育等の如く、普通一般の教育以外に、特殊性を帶びた教育のことである。是等の學校にも官公立私立の種別がある。

聾盲者教育　盲者及び聾啞者の教育は、官公私立の各盲啞學校に於て行ひ、普通の知識及び業務教育を施すことを目的として、東京盲學校と東京聾啞學校とは共に官立で、文部省の直轄學校となつて居る。

神宮皇學館　神宮皇學館は神宮司廳に附設し、神官及び神職に必要なる教育を施して居る。

軍事教育　我國の軍事教育は、軍人以外の青少年に對し、軍事的豫備教育を施し、壯丁の在營年限を短縮し、國家の生産能率を高めると同時に、國防力を增進する目的を以て大正十四年から開始されたもので、優秀なる將校を中等學校以上の各學校に配屬せしめ、學校長指揮の下に、兵式教練を行つて居る。教練は各週三時間（師範學校は四時間）以上とし、其他適當の野外演習をも行はれる。この教育を受けた者は、入營後その在營年限は短縮せられ、師範學校卒業者は五ヶ月、中等學校卒業者は一年、專門學校及び大學卒業者は八ヶ月を以て、現役を終る特典を與へられて居る。又大正十五年後は青年團を基礎とし、一般青少年に對しても、在鄕軍人によつて軍事教練を施し、この教練を受けた者は、四ヶ月乃至六ヶ月間その在營年限が短縮されることゝなつて居る。

青年教育　青年學校の教育は社會教育ともいふべきもので、北海道、府縣、市町村、商工會議所、農會其他の公共團體は青年學校を設立して、男女青年に對しその心身を鍛練し、德性を涵養すると共に、職業及び實際生活に必要なる知識、技能を授け、國民の資格を向上せしめることを得る。青年學校内には普通科と本科を置く。尙ほ研究科を置くことも出來る。普通科は二年、本科は男子五年、女子三年である。普通科に入學し得る者は尋常小學校卒業者、本科に入學し得る者は普通科終了の者、高等小學校卒業者である。科目は普通科の男子は修身及び公民科、普通學科、職業科、體操科で、女子にはこの外に家事と裁縫科がある。青年學校は公共團體の外一個人でも設置することが出來るものである。

學生及兒童發育標準表（文部省制定）

年齡	男 身長	男 體重	男 割合	女 身長	女 體重	女 割合
六	一〇二・七	一六・〇	〇・一五六	一〇一・五	一五・四	〇・一五〇
七	一〇六・七	一七・五	〇・一六四	一〇五・五	一六・九	〇・一六〇
八	一一一・二	一九・二	〇・一七三	一〇九・七	一八・四	〇・一六八
九	一一五・八	二一・〇	〇・一八一	一一四・二	二〇・二	〇・一七七
一〇	一二〇・三	二三・九	〇・一九〇	一一八・八	二二・一	〇・一八六
一一	一二四・九	二四・九	〇・一九九	一二三・六	二四・三	〇・一九七
一二	一二八・八	二七・一	〇・二一〇	一二八・五	二七・〇	〇・二一〇
一三	一三三・六	二九・九	〇・二二四	一三五・二	三〇・八	〇・二二八
一四	一三九・四	三三・六	〇・二四一	一三九・四	三四・七	〇・二四九
一五	一四六・四	三八・二	〇・二六一	一四三・九	三九・〇	〇・二七一
一六	一五二・七	四四・五	〇・二九一	一四六・七	四二・七	〇・二九一
一七	一五七・〇	四八・二	〇・三〇七	一四八・一	四五・二	〇・三〇五
一八	一五九・一	五〇・七	〇・三一九	—	—	—
一九	一六〇・三	五二・六	〇・三二八	—	—	—

割合は體重を身長で割つた商。

世界義務教育年限表

國名	年限	年齢
英吉利	九ケ年	五歲—一四歲
北米合衆國	州により最短四ケ年最長十ケ年	七歲—一八歲
獨逸	八ケ年	六歲—一四歲
佛蘭西	七ケ年	六歲—一三歲
伊太利	六ケ年	六歲—一二歲
墺太利	八ケ年	六歲—一四歲
匈牙利	六ケ年	六歲—一二歲
波蘭	七ケ年	七歲—一四歲
瑞西	八ケ年	六歲—一四歲
和蘭	六ケ年	六歲—一二歲
丁抹	七ケ年	七歲—一四歲
諾威	七ケ年	七歲—一四歲
露西亞	九ケ年	八歲—一七歲
智利	六ケ年	七歲—一三歲
土耳古	八ケ年	七歲—一五歲
日本	六ケ年	八歲—一四歲
濠洲	六、七、八ケ年の三種あり	六歲—一四歲

第十一編　社會知識

第一章　社會通念とその構成

第一節　社會とは何ぞや

社會とは何かといへば、形式的には「意思を有する人類の結合」であるともいひ得る。この定義によれば一般社會の外に學生社會、官吏社會、上流社會、勤勞社會などの特殊な社會をも含むことになるのだが、社會學では「社會とは人類の協同關係である」と說明し、それにも次に述べるやうに、學者によつて色々意見を異にしてゐるのである。

プラトーン

社會有機體說　社會は集合的な單一體ではなく、一つの體制を備へ、生命を有して自動的に內部から成長するといふ說で、プラトーンに依つて唱道せられ、これをホッブスが祖述し、更にコムトが現はれるに至つて、人間思想變遷の理と社會體制變化の理とを比較し、社會に有機的な素質のあることを說破したものである。

その後スペンサーは社會と有機體とを、科學的に考察して超有機體說を稱へるに至つた。それに依るときは一生長と連續、二體の增進に伴ふ機關の增進、三機關と機能の間に於ける相互の關係、四有機的な個々の單位の集合、五全體の生命と成素、等の點に於て社會と有機體とは類似してゐるが、生物的有機體は各部分を凝結した一體であるに反し、社會の各部は分離して存在し、且自由である點において、二者はその性質を異にしてゐる。

スペンサー

從つて生物的有機體は物質力により、直接に部分から部分に傳へて共働するが、社會は感情と思想の記號により、人から人に傳へて協同する。また前者は意識を細胞集合の一局部に集注するに反し、後者の意識はあらゆる集合に散在してゐる。

スペンサー以後において、ド・グレーフは更に、社會と有機

體との相異する點十二項を揭げ、その類似する點にもまた、甚しい相異のあることを說いた。またデュルケームは社會結合の種類を機制體、有機體、契約體の三種に分ち、契約によつて結合する契約體は、個人の自由意思の明瞭な社會にのみ存在すると說き、社會を以て有機體とすることはその體より見、契約體とすることはその用より見たものであると說いた。

以上の諸說は社會學系の成立時代に行はれたもので、當時は有力な學說であつたが、現在の社會學者は是等の說に餘り重きを置いてゐない。

同類意識說　社會は共同の利害のために混交し、結合し、交通し、組織を形成するところの多數の個々人であり、その本源的主要事實は同類意識であるといふ說で、米國コロンビア學派の長老ギディングスの主張するところである。つまり社會とは、他の生物が自己と同一種類の生物であることを意識してこれを享樂し、そのための共同の目的に向つて協働する個人の集團であるといふのであるが、この同類意識なるものは、社會の形成を促進する一つの力であることは相違なきも社會の本質を構成するものではない。從つてギディングスの同類意識說は、社會の本質を說明するものとはいへないのである。

模倣說　總ての社會事實の恒久的な特質は模倣であつて、この特質こそ社會現狀に固有な本質である。從つて模倣は社會であり、社會は模倣である、模倣は既に結合してゐる個人間においては社會的連鎖を維持し、且鞏固ならしめ、未だ結合してゐない個人間においては、やがて生ずるところの結合を準備するものであるといふ說で、カブリエル・タアルドの主張するところである。

然し模倣が結合を强め、且つ結合を準備するものとすれば、模倣以外に社會を形成する、何等かの特質が無くてはならぬ筈である。殊に模倣といふ社會現象は、共同社會內において初めて發生するもので、模倣によつて社會が發生したものではないから、この說も要するに同類意識說と同樣に、社會形成の原因と社會の本質とを混同したものに過ぎないのである。

精神的全體說　オトマル・シュパンが精神的に考へた社會有機體說で、それによるときは社會は個人の集合ではなくして、個人の存在より獨立した、精神的單一體である。從つて個人は獨立した存在ではなく、社會の肢體である。社會は全體として不斷の精神的生活であり、生長であり、創造である。

例へば一つの建築は石、煉瓦、木などの單なる集合ではなく、繪畫は單なる繪具の集合體ではない。繪具の總計が畫を作るものではなく、石や煉瓦や木材が家を造るものではない是等の建築物や繪畫は、この合計以上のものであると同樣である。

このシュパンの主張は、社會が統一體であるといふ意において注目に値するが、社會構成の要素である個人の地位を評價する點で缺けてゐる。

相互作用說　この說は今日一般に採用されてゐるもので、ゲオルヒ・ジメンが創唱したものである。ジメンは社會の本質を人間の心的相互作用に求めて、社會は相互關係によつて結合し、從つて統一體として現はれた人の集團であると說破したのである。

綜合的社會學者フランツ・オッペンハイマーも、社會は相互關係に立つ集合の總體概念なりと說き、フイヤカントもまた、社會は相互作用の把持者としての人の集團であると唱へた。英國のマックイヴアも、これに近い意見を立て「一切の社會的關係は心理的關係である。兩者の異るところは、社會的關係が常に動機を持つてゐることである。この動機とは客觀的には利益であり、主觀的には意欲である。然しこの兩者はたゞ概念の上で區別されるのみで、事實においては一つである。人が社會を創造するのは、相互關係を意欲するが故である、その基礎となるものは利益である」と述べてゐる。

第二節　社會構成の三條件

人は必ず社會の中に生れ來り社會の中に生存し、何等かの狀態における集團生活を營みつゝ、太古から現代に及んでゐるものであるが、それではこの社會は如何にして構成されたものであらうか。

これについてアリストレスは「人は社會的動物である」といつてゐるし、近世における多くの社會學者もまた、人間の有する社交性が、社會を構成せしめたものと說いてゐる。然しこれでは餘りに抽象的な說で、その意を十分盡してゐるものとは考へられない。

人類の根本的本能　人類において最も根本的なものは、生存といふことであるが、生存するには、一生命を維持するといふ

ことが何よりも必要であり、その目的のためには食糧その他の生活資料を要するのである。かくて生命を維持することが出來るやうになると、次には、二種々な文化によつて、自己の生存を充實せしめやうとし、三更に進んで自己を次代に延長し、集積された文化を次代から次代へと、存續せしめんとし、そのため生殖行爲が行はれて種族を保全するやうになるのである。

以上の生命の維持、自己の充實、種族の存續といふ三つの行爲は、人間に取つて根本的の本能であるが、この本能はやがて欲望の狀態となつて現はれ、生命の維持については生活資料への欲望、自己の充實については生活の向上、種族の存續については異性に對する欲望となるのである。

然るに人間の能力には限りあるに反し、欲望は無限大であるところから、この限りなき欲望を充たすためには、何等かの方法を講ずべき必要が生じて來る。そこでこの必要に應じ人間が相互作用の狀態に入り、その組織され統一された關係によつて能力を增大せしめんとして、こゝに始めて社會といふものが構成されるのである。

かくの如く社會は共通利害の意識によつて構成されるのであるが、共通意識を發生せしめることについてもまた、距離の遠近、接觸の度數及び同類意識の三條件が擧げられてゐる。

距離による條件　同一地域内に居住してゐる人は、異なる地域内に居住する人に比して、他の條件が同一である限り接觸する機會も多く、從つて共通の利害を意識する念も強い。遠い親類よりも近い他人といふ諺は、言葉は平凡であるが、能くこの間の消息を物語るものである。

接觸の度數による條件　距離の接近せる者は親しみ易い如く、接觸の度數の多いほど、共通利害の意識は強く、從つて意志の疎通も十分に行はれ、同情同感の念も起り易いのである。前述の距離の接近と、接觸の度數の多いことの二條件は同處同時に行はれる性質を持つてゐる。

同類意識　同鄕の人、同業者などの意識は人間の關係を密接にし、共通の利害を感ずる念の強いことは、人々の常に經驗するところである。勞働者はひとしく勤勞を提供し、殆ど相等しい待遇を受け、相似た生活を營んでゐる關係から、同類の意識を容易ならしめ、共通の利害を深く感ずることによつて、勞働組合なる團體は構成されるのである。同縣人はその故鄕を同一の地方に持つことにより、同類の意識を強くして同縣人會を組織し、日本人は祖國を同じくすることによつて、海外在留日本人間に到る處、日本人會なるものを設けて容易に團結するのである。

其他の條件　共通利害の意識を發生せしめ、相互作用を行はしめる主要なるものは上述の如く距離の接近、接觸の度數、同類意識の三條件であるが、この條件を助けて人間の結合を構成せしめ、既成の結合を鞏固ならしめる動因として同情、模倣、協働、社會などをも擧げることが出來るのである。

第二章　社會思想

第一節　左右兩翼思想

社會思想とは時代が推移し、社會の文化が進歩するに從つて在來の制度、組織及び方針、態度などが漸く弊害を生じ、勢力を失ひ、今後の社會生活に適合しないことを發見する結果、これを改善または改造して新時代に適應せしめ、社會文化の發達に順應せしめんがために起るあらゆる思想のことであつて、現代においては左翼思想と右翼思想とが對抗してゐる。

左翼思想　左翼思想とは社會改革の上に現はれた急進主義的、過激主義的思想のことで、これに對して改良主義的、穩健主義的思想を右翼思想といふのである。從つて左翼派といふ場合は、勞働運動または社會主義運動における急進派、革命派及び赤色派などを指し、これに對して勞働運動または社會主義運動における穩健派、改良主義派及び現實主義派、日和見主義派などが右翼派である。尤も是等の場合における左翼または右翼は、同一線上における左翼と右翼とを意味するものであるが、また一般に社會主義的思想を左翼思想といひ、これに對して保守主義乃至反動主義を右翼思想といふ場合がある。この場合における左翼、右翼はいふまでもなく、全然立脚線を異にして相對立するものである。

然らば我國現時の左翼思想とは一體何れを意味するかといへば、それは最近においては主として後者の場合を意味するのであつて、一般社會主義的思想を左翼思想と呼んでゐる。更にいへば全然立脚線を異にする一方を右翼思想といふに對して、一般社會主義的思想を左翼思想と汎稱するのである。

然し左翼思想なる語の意味を、上述の如く解することは一般的廣義の場合であつて、現今においては一層狹義な、局限された意味に解せられてゐる。つまり漫然たる社會主義的

思想ではなく、或る特定の社會主義的思想に、局限されてゐるのである。

それはマルキシズムであり、更にそれから進展し來つたレーニニズムである。換言すれば第三インターナショナリズムであり、共產主義である。

右翼思想　本來の意義における右翼思想は上述の如きものであるが、今日においては共產主義的思想の一團を向ふに廻して、相對立するところの一團の思想を右翼思想と呼んでゐる。左翼思想は社會主義的基調の上に立つものであるに反し右翼思想は國家主義的基調の上に立つてゐるのである。つまり社會主義か國家主義かといふ點において、兩者の間に差異があり對立があるのである。

然し今日の左翼思想として、共產主義を指すのが狹義な解釋であると同樣、今日の右翼思想を以て、國家主義の思想であると解することもまた廣義の場合で、これを局限的な狹義に解するときは、ファッショ化した國家主義である。つまり國家主義がファッシズムの影響を受け、その指導精神または實行理論を採用せんとするものが、今日いふところの右翼思想である。

第二節　左翼思想の發生

社會主義は資本主義に對立してこれを根柢から覆し、新たなる經濟制度または組織を樹立して、一般社會制度及び組織を變革せんとするものであるが、何が故にかゝる思想が起つたかといへば、それは資本主義の弊害がこれを生ぜしめたのである。

資本主義　歐洲の商工業は近代の初頭において、各種の機械の發明、新大陸の發見、新航路の開發などと共に非常なる發達を遂げ、年と共に激增する需要に應ずるため、產業は大量生產を目ざして、一大工場制の大工業に急變し、こゝに所謂產業革命が遂げられた。中でも英國の如きは十八世紀の末葉にこの大變革が達成せられたのである。

かゝる大工場制工業は當然大資本を要すると共に、多數の工場勞働者をも必要とするが、第一に必要なものは資本であつて、これによつて工場を建築し、諸種の機械を据ゑつけ、原料を買入れ、勞働者を雇用して、如何なる大量生產をも遂行することが出來たのであるが、一面には機械の使用によつて勞働者の過剩を來し、職を奪はれて路頭に迷ふ者が簇出するから、安い賃銀にてこれを雇用するに何等手數を要しなかつたのである。かくて產業革命が成し遂げられると共に、資本を中心とした產業組織は、確乎不拔の基礎を据ゑつけ、所謂資本主義經濟制度が樹立されたのである。

勞資二階級の發生　かくて資本主義制度は必然的結果として、人間社會に資本家階級と勞働者階級とを發生せしめたが、資本主義制度においては資本が產業の中心であるから、資本家が優勝者の地位に立ち、勞働者は劣敗者の地位に陷らざるを得ない。從つて資本家は經濟上の生產並に分配を支配して產業上の權益を壟斷し、勞働者は僅に糊口の資を得て勞役に服し、所謂賃銀奴隷の境界に甘んずるのみでなく、勞働者は增加するばかりなので、競爭の結果、賃銀は低下する一方である。かくて資本家は益々富み勞働者は愈々貧窮し、經濟上における貧富の懸隔は年を逐ふて甚大となつて來る。

企業の弊害　次に資本主義經濟制度における重要なる現象は企業であるが、企業は資本によつて生產機關を有し、勞働者を使役して生產を行ひ、市場における賣買によつて利潤を獲得せんとするものである。然も企業は自由競爭により、市場の景況を目當にして思惑的に生產し、より多く利潤を得んとするものであるから、生產費を低下する必要がある。そのためには勞働者の賃銀を低下するか、或はより多くの勞力を提供せしめねばならぬ。その結果として勞働者の貧窮を增し、然らざれば虐使せざるを得ないのである。

また自由競爭により市場の景況を目當にして、思惑的に生產するといふことは、供給不足のため市價の暴騰を來すこともあれば、又生產過剩を來し、或は需要不足ともなるのであるが、供給不足の場合は需要者が迷惑を蒙るが、生產過剩乃至需要不足が一般的であり多大である場合には、そこに所謂恐慌が起り、そのため資本家も無論困るが、それよりも一層困るのは工場の閉鎖、事業の縮少によつて解雇の憂目を見る勞働者である。

失業の脅威　失業は勞働者に取つて、二つの重大な意義を有つてゐる。その一は失業によつて、唯一の生活資料獲得の手段を喪失することであり、他の一は、失業が勞働者相互間に競爭を惹起せしめることである。唯さへ勞働者の增加が相互間に、就職の競爭を餘儀なくせしめつゝあるとき、多數の失業者を出せば、それが一層激甚となる。その結果勞働賃銀の低下となり、貧窮の增大となるのである。然も恐慌が資本主義制度において不可避のものである以上、失業もまた不可避

のものである。從つて勞働者は資本主義制度下においては、常に虐げられる上に時々路頭に迷はざるを得ないのである。

勞働者の工場生活　資本主義制度下における勞働者の一般的事情は、上述の如く不利であるばかりでなく、日常の生活もまた甚だ惠まれてゐないのである。

現在の生産は陰慘な工場内において行はれるところから、一般勞働者は健康上に極めて有害な影響を蒙り、或る場合には生命の危險をさへ伴ふ境遇に置かれてゐる。衞生設備の不完全な工場内に働く結果は健康を害し、罹疾者となる例は甚だ多く、産業の種類によつては、取扱ふ原料が既に健康に有害なものも少くない。燐寸の黄燐をはじめ、鉛、水銀、銅、錫などを用ゐる工場などが、人體に有害な影響を及ぼすことは人々の既に知るところである。

それに勞働時間の過長といふことも、勞働者の健康を害する。年少勞働者に對しては、殊に夜間の勞働はその弊害が大きく、また婦人を男子同樣に取扱はんとする結果肉體的、生理的に惡影響を及ぼすことは周知の事實である。

資本主義制度と資本家　かくの如く資本主義制度または大工場制産業下における、勞働者の地位及びその生活は極めて不利であり不幸であるに反し、資本家は産業上の生産並に分配の支配權を握り、然も生産は營利を目的として、分配は自己に厚くして勞働者に薄くすることにのみ腐心するが故に、資本家は愈々富むばかりである。尤も資本家といつても、その中には企業家と投資家とがある。企業家についていへば、彼等は企業の利害損得を自己の計算にかけて精神的、肉體的に勤勞してゐることは無論であるが、勞働者の如く常に生活の不安に脅かされながら、然も不衞生な工場で不愉快な、且危險な作業に從事するのとは雲泥の差がある。

更に投資家に至つては或事業に投資したのみで、何等の勤勞もなさず、坐ながらにして規定的な利潤の分配を受け、贅澤な生活を享樂することが出來るのである。事業の選擇、事業の不振乃至失敗には多少の危險は伴ふが、それは稀れなことで普通の場合は、所謂不勞所得によつて安逸な生活を享樂することが出來るのである。

以上が普通に説かれる資本主義の特質とその弊害であるが、かゝる弊害は資本主義の特質から、必然的に發生したものであるから、その弊害を除去するためには、根本的に且徹底的に、資本主義制度そのものから變革して行かねばならないとするところに、社會主義は生起したのである。

第三節　資本主義對策と社會主義

自然放任論　資本主義の弊害對策として、第一に擧げられるものは自然放任論である。これによれば元來資本主義制度そのものは、自然に發達したものであるから、今にしてこれが矯正改善の必要があるならば、それも矢張り自然がなすであらう。自然はそのまゝが善であり眞であるから、何事も自然であることを以て最も可とするのである。

徒らに人爲を加へるならば、それは不自然にして善に反し眞を裏切るものである。故に産業上、社會上のことも自然に放任するのが最も妥當である。勞働狀態に關する弊害の如きも、若しこれを弊害とするならば、それは産業經濟の狀態が尙ほ十分に發達を遂げてゐないことに起因するものであつて、後日産業經濟の狀態が發達完成するならば、夫等の弊害も自然に消滅し、勞働狀態も從つて改善されるであらう。故に勞働者の境遇を良好ならしめるためには、國家が人爲的な政策によつて束縛を加へることなく、眞の自由政策、自由競爭を行はしめ、これによつて産業または經濟の完成を期すべきであるといふのがその骨子である。

社會政策　社會政策は自由放任論と對立し、現在の資本主義の弊害は認めるが、この狀勢を成り行きのまゝに放任するときは、餘りに露骨な競爭が行はれ、經濟界は强食弱肉の壇場と化し去るであらう。その結果社會の調和は破れるであらうから、經濟上における弱者の狀態に對しては適當な保護を加へ、且自由主義の弊害の最も大なるものに對しては、社會の調和を保つ上から、ある程度の制裁を加へる必要があると主張してゐる。

勞働組合主義　資本主義の弊害に對する勞働者の自衞のため、組合を組織してこれに對抗すべしと主張するのが、勞働組合主義であつて、英國においては既に十八世紀末に成立を見たものであるが、現今では更らに職業別組合主義、産業別組合主義の域にまで發達してゐる。

社會主義の主張　資本主義の弊害に對し社會政策と勞働組合主義とは、これを除去矯正せんとする方法こそ異にしてゐるが、資本主義の弊害そのものを確認する上においては同一である。つまり兩者とも資本主義の弊を肯定し、自力または他力によつて、その弊害を除去すべしと主張するのである。

然るに社會主義は、資本主義の弊害は制度に附隨して生じたものでなく、人による餘弊と見る結果、その弊害のみを制度から切り離して矯正または除去することは出來ないと見るのである。つまり資本主義の弊害は、その制度の特質から必然的に發生する不可避なものであるから、これを除去矯正せんとするには、その根源に溯り、資本主義制度そのものを徹底的に改革しなければならぬといふのである。

更に詳しくいふならば、現在の狀態の如く私有財產制度と、これに伴ふ相續制度が存在し、生產は私的企業として營まれ、その生產に必要な勞働が、雇傭制によつて行はれてゐる以上、生產にも分配にも極度の不公平が行はれ、貧富の差は益々深刻化して、社會的害惡の發生を避けることは出來ない。是等の弊害を除去するためには、土地資本などの生產機關の私有制度や、自由產業制度を撤廢して、根本的にその禍根を絕滅しなくてはならぬ。

資本主義の弊害をかくの如く見るところに社會主義は生起し、延いてこれに對する實行手段が生れたのである。

第四節　社會主義の二大傾向と政治理論

社會主義は生產機關の私有私營を廢し、一切の生產機關や主要なる生產機關の公有公營を基礎とする、社會制度の實現を主張するものであつて、經濟上では集產主義と共產主義、政治上では民主主義と無政府主義とに分つことが出來る。

集產主義　集產主義はコレクティヴィズムの譯で、個人主義的經濟制度に對して反對の立場を取り、一切の生產機關を國家社會の公有として、管理統制せんとするものである。私有財產制の下における個人主義的經濟組織では土地、工場、機械などの生產機關は悉く個人企業の掌中にあつて、凡ての生產物は彼等の營利を目的として生產される結果、搾取と不公平とが生れざるを得ない。集產主義はかゝる生產機關の個人的私有を全廢し、一切の生產機關を社會又は國家の手に集中し、勞働を合理的に統一して、以て生產を行はうとするものである。

然しこれは主として生產の方面に限られるもので、消費方面では消費の個人的自由を認め、生活必需品の個人的所有はこれを禁じない。この點は共產主義が消費をも社會化せんとするのとは異り、生產方面のみの共產主義で、消費方面においては個人主義である。

共產主義　共產主義を理論的に解釋すると、財產を共有にしやうといふ主義で、これが狹義に解された場合には、生產財も消費財も共に社會の共有たらしめやうといふ主義を指すのであるが、廣義に解される場合は、生產財だけを共有にしやうといふ集產主義をも含むことゝなるのである。

狹義の共產主義は一切の財產を、社會の全成員の共有たらしめやうとするもので、これが政治的方面で無政府主義を採る場合には、無政府共產主義となり、また民主主義的立場を採る場合には民主的共產主義となるのである。無政府主義は必ずしも共產それ自體を目的とするものでなく、個性の自由な發達を主要目的とするがこの目的達成のためには各人が必要に應じて、消費し得る狀態を招來しなければならないといふ見地から、無政府共產主義となるのである。

マルクス

然し今日の共產主義といへばマルクス、エンゲルスによつて確立され、レーニンによつて繼承されたマルキシズムの意に用ゐられ、本來の共產主義であるべきところの、無政府主義に對立する概念だとされてゐる。從つて共產主義は生產機關の集中的共有、階級の廢絕、國家の死滅などを主要な內容とする社會の到來を歷史的必然であるとなし、革命による無產階級獨裁によつて、これを到來せしめねばならぬと說くものである。

民主主義　民主主義は社會主義ではないが、社會主義の政治理論として採用される主義であると同時に、社會主義の基礎的理論をも包含してゐる。

民主主義とはデモクラシーの譯で、その意味するところは、人民によつて、または人民の意思によつて、政權の運用される政治形態で、アブラハム・リンカーンが「人民の、人民による、人民のための政治」といつた定義は、一般に承認されてゐる。

デモクラシーといふ語は古代希臘に起り、人民が直接政權を行使することを要望し、都市國家においてその主張が實現されてゐることもあつた。然しこの主義は、近代國家の範圍が擴大されると共に事實上行はれなくなり、間接的民主主義即ち代議政治となつたのである。

近代の代議政治は、一般人民の政治的自由と平等とを目標とし、婦人をも包括した普通選擧が要求されてゐる。政治的自由と平等とをブルジョア階級に止めないで、一般プロレタリア並に婦人にも與へよと要求するものが、政治的民主主義なのである。

社會的デモクラシー　デモクラシーは政治上に自由と平等とを要求するものであるが、近代では各種の方面にこれが要求されることゝなり、殊に平等の要求が、社會主義の基礎的理論となつて産業的デモクラシー、社會的デモクラシーなどが唱へられるに至つた。産業的民主主義はサンヂカリズムやギルド社會主義の如く、産業上の自治を主張するものであるが、更にいへば、資本主義を廢絶してすべての生産者のために、すべての生産者による、産業の自己管理をなさうとするものである。

また社會的民主主義は社會主義實現のために、民主主義を主張するもので、勞働階級が政權を把握し、社會主義を實現せんとするものである。

民衆的デモクラシー　ブルジョア・デモクラシーがブルジョアに對してなした如く、プロレタリアだけに政權を與へ、階級的對立のない社會主義社會を實現すべく、その國家權力を運用しやうとするものがプロレタリア・デモクラシーであるが、これは結局無産者階級による階級的獨裁で、また眞のデモクラシーではない。

無政府主義　無政府主義はアナーキズムの譯で、無支配即ち一切の支配否定を意味する。更にいへば個人を支配する一切の權力を否定して社會的にも經濟的にも、個人を絶對自由の境地に置かうとする政治理論である。

無政府主義は東洋では釋迦の教義、老莊の哲學にも存し、希臘ではストア學派の始祖ツェノーンの思想にも見ることが出來るが、近代的無政府主義はゴドウイン、スチルネル、プルードンなどがその祖とされてゐる。

無政府主義と社會主義の異同　バクーニンは道德や人類相愛を前提として土地、勞働器具など一切の生産機關を、社會の共有に歸せんとする點において集産主義的であるが、マルキシズムのやうに中央集權的とはせず、地方分權的にせんとするものである。またバクーニンの直系たるクロポトキンは相互扶助に立脚し、新社會を建設して强制的支配を消滅せしめ、各人は完全なる獨立を保ちながら地域的、職業的の集團を形成し、所謂「各人は能力に應じて勞働し、各人は必要に應じて消費する」社會を實現せしめんとするものである。

社會主義は現存の私有財産制や賃銀制を攻擊し、個人所有の土地、鑛山、鐵道、銀行などを凡て國家社會の手に收め、中央集權的に集中しやうとするが、無政府主義では、かゝることは厚い暴君に代へるに、新しい暴君を以てするに過ぎないとし、徹底的に個人の自由を發揮せんとするものである。

第五節　社會主義の分類

空想的社會主義　空想的社會主義とはマルクス及びエンゲルスが、サン・シモン、フーリエ、オウエンなどの唱へた、近代初期の社會主義を呼んだ名であるが、殊にエンゲルスの如きはこの三人を「三大空想家」なりと稱し、三人の說の共通する點として歷史的發展の結果から生じた、當時の勞働階級の利害の代表者ではなかつたことを擧げ、彼等は特殊なる一階級の解放を要求するのではなく、一擧にして全人類を救はんと欲したものだといふのである。

第十八世紀の啓蒙哲學者は何れも『理性の勝利』と叫び、社會の合理化を說いたが、彼等三人の社會主義者もまた自然法を重んじ、理性の發展と完成とによつて、社會の合理化が招來されると考へてゐたのである。即ち現在の罪惡に充ちた社會は、自然法に違反した假想的知識の過誤から生れたものであるから、人間の理性を覺醒せしめ、人間の過誤から現在の如き罪惡に充ちた社會が生れたことを自覺すれば、理想社會が現實されるものと考へてゐたのである。空想的社會主義に取つては、社會の變革は科學的社會主義におけるが如く、歷史的發展の結果として必然的に起るものではなく、また無産階級の手によつてなさるべきことではなく、全人類がその過誤を覺ることによつて、偶發的に起る一慶事であり、然もそれは社會の有識階級によつて起さるべき運動であつたのである。

科學的社會主義　この科學的社會主義は、近代の社會主義に科學的基礎を置いたもので、一般的社會主義の中堅を形ちづくつてゐる。從つて今日における左翼思想の根幹となつてゐるものである。

科學的社會主義とはマルクス及びエンゲルスが、彼等自身の社會主義を呼んだ名稱である。彼等は彼等以前の社會主義を空想的であると批難した。彼等は現在の社會狀態は、空

想社會主義の說く如く、人類の過誤は偶發的理由に基づくものではなく、社會進化の上における必然的段階であるとし、そして現在の社會もまた必然的に生產機關の集中的共有、階級の廢絕及び國家の死滅などを、主要なる內容とする社會主義社會へと推移すべきものであるとしたのである。

彼等によるときは、現實の社會は、空想的社會主義者が考へられるやうに、善や愛や理想などによつて動かされるものではなく、必ず經濟的條件、更に遡つて考へれば物質的生產力の發達に基いて、必然的に進化するものだといふのである。更にいへば、社會主義社會の到來は、神意や理性で說明せられるものではなく、それを招來すべき物質的條件が現在の社會中において成立しつゝあるといふのである。

修正派社會主義　修正派社會主義はマルキシズムの修正を唱へる一派である。

獨逸の社會民主黨はマルキシズムを奉ずるものではあるが、その領袖ベルンスタインは千八百九十六年より七年に亙つて、黨の學術的機關雜誌ノイエ・ツアイトに「社會主義の問題」といふ論文を連載し、マルキシズムの基礎となつてゐる唯物史觀が、經濟的要素のみを重視するのを難じ、社會變革の原因には、生產力と生產方法の矛盾の外に、各時代の法律觀念、倫理觀念、歷史的宗教的の傳統精神などの影響を十分認めねばならないとし、且社會變革の方法を、階級鬪爭やプロレタリア獨裁に歸せずに、消費組合や勞働組合の漸進的方法によるべきであるとした。この主張は歐洲一般社會に可なり衝動を與へ、以來修正派の漸進的進化思想は、各國の社會主義に採用されるに至つたが、修正派に對する正統派マルキシズムの指導者たるカウツキーは、これを以て科學的社會主義の基礎原理及び觀念の放棄であるとして、熱心にベルンスタインを反駁した。然し理論的にいへば、修正派社會主義と正統派マルキシズムとは、その目的を異にするものではなく、現在の個人的所有制度の代りに共有制度を作らうとする主張においては、無論相一致してゐるのである。

社會民主主義　この主義は民主的政治形態の下に社會主義を實現せんとするもので、社會主義が空想的共產主義から目覺めて實際的となり、運動上、政治と結合するに至つて生じたものである。現今各國にこの主義を唱へる者があるが、最も勢力を得てゐるのは獨逸の社會民主黨である。獨逸の社會民主黨はマルクスが萬國勞働者同盟を提唱し、ラッサレが全國勞働者同盟を組織したときに始まり、主義としてマルクスの說を奉じてゐる。

從つてその綱領とするところはマルクスの共產主義的見地に基き、勞働者を社會の本位に置き、生產機關の公有、分配の平等、一切の特權廢止を理想とし、この目的を達成する手段としては、政權の獲得を必要なりとしてゐる。この主義を奉ずる社會主義者は、現在ソヴイエット・ロシヤを支配しつつある無產者獨裁主義に反對し、飽くまで議會政策によつて漸進的に社會主義社會を實現せんとするものである。

サンヂカリズム　サンヂカリズムは集產主義に對する反動として佛蘭西に生れ、修正派社會主義が多分に獨逸的特色を有つてゐる如く、多分に佛蘭西的特色を發揮してゐる。

サンヂカリズムの理論の中樞をなすものはサンヂカ、即ち產業別組合主義による勞働組合である。サンヂカは彼等に取つては、現在の資本主義社會と、その政治機關たる國家とを破壞するための階級鬪爭の機關であるとゝもに、將來の社會組織の根幹となつて生產機關の所有し、且生產の管理をなすべき機關なのである。そしてサンヂカが行はんとする現社會組織の破壞は、直接行動特に總同盟罷業をその手段とし、議會主義を否認する。現在の國家は資本家階級の政治組織で、その階級の道具に過ぎない。生產者の釋放はかゝる資本家階級の道具によることなく、また知識階級たる政治家の手を借ることもなく、無產者自身の直接行動によらねばならないとするのである。

要するにマルキシズムに出發し、無政府主義の主張を採用してゐるもので、その革命的な點において他の穩健なる勞働組合主義と異り、自ら革命的サンヂカリズムと稱してゐる。

はじめ佛蘭西、伊太利において發達し、英吉利に渡つては固有の勞働組合主義と結び着いて、ギルド社會主義を生んだが、サンヂカリズムそのものは、同國においては多く發展の餘地を見出し得なかつた。また伊太利においてもファッシズムの擡頭と共に、その勢力に壓倒され、今日におけるサンヂカリズムの勢力は、極めて微々たるものである。

ギルド社會主義　ギルド社會主義は、近年に至つて英吉利に發生したもので、獨逸における修正派社會主義、佛蘭西におけるサンヂカリズムが夫々その國の特色を有つてゐるやうに、最もよく英吉利の特色を發揮してゐる。

ギルド社會主義の理論はまだ發育の途中に置かれてをり、

これが主張をなす者も各自の立場によつて內容か區々であるが、集產主義とサンヂカリズムとを批判して、兩者を折衷せんとする點で一致してゐる。

彼等は中世の職業的團體であつた、ギルドに類似した勞働組合を中心として、新社會を組織しやうとするものである。先づ同一產業に從事する者の全部をその擔當作業の如何に拘らず網羅する產業別勞働組合を組織し、更にこれを擴大して全國的な組織とする。この最も包括的な全國的勞働組合をナショナル・ギルドと稱し、これを生產部面における最高權力となし、生產經營の當局者とする。從つてナショナル・ギルドは、自治的に產業の統制を行ひ勞働の條件、方法などをも決定するものである。

このナショナル・ギルドに對立するものとして國家がある。國家は消費者の利益を代表する機關で、生產物の分配を統制する外立法、司法、保健、教育などの非經濟的機能をも營むものとする。かくてナショナル・ギルドと國家との權力は平等で、相均衡するものとせられる。そしてナショナル・ギルドと國家との上には更に兩者の代表者から成る聯合委員會があつて生產、消費の兩方面に亘つた問題及び、ギルドと國家との衝突した場合の解決に當るといふのである。

社會改良主義　社會改良主義は社會主義ではないが、社會の改良を企圖する點において社會思想の一であり、然も穩健なる進步主義を主張する點において、有力なる實行理論である。

社會改良主義はその實行に關する特色によつて社會政策主義とも稱し、社會主義の急進的なるを排し、自由主義の保守的なるを斥け、兩者の特長を折衷して漸進的に社會問題の解決をなさんとするものである。

社會改良主義は諸種の流派に分れてゐるが、その一般に通ずる主張は第一に現代社會組織の二大支柱たる自由競爭と私有財產制度とを維持し、その弊害を矯正せんとするものである。自由競爭と私有財產制とは現在社會における經濟發達の前提であり、社會組織の根柢をなすものであつて、これを廢止した新社會なるものは、畢竟架空の妄想である。そして現社會における貧富の懸隔より生ずる諸種の弊害は、自由競爭及び私有財產そのものが、直接に招致した結果ではなくして唯だこれを無制限に擴張した結果に外ならない。故に貧富の懸隔より生ずる諸種の害惡は、私有財產と自由競爭とを直に否認することによつて解決し得るものではなく、これを特

定の範圍に制限して、社會問題の生起を緩和すべしとなすものである。

そのためには例へば自由主義學派の說くが如く、資本家と勞働者との關係において、自由競爭を絕對的に承認する場合には、本來弱者の地位に立つ勞働者は强者の地位に立つ資本家と對抗する力がないから、多くの場合殆んど資本家に屈服せざるを得ない。若しかゝる場合その中間に政府の權力が加はれば、一方には强者たる資本家の權能を制限し、他方には弱者たる勞働者の權利を伸張せしめ得るから、兩者の關係は對等の位置となり、勞働契約より生ずる諸種の弊害を防止し得る筈で、工場法の如きはこの見地から施設されたものに外ならぬのである。

また私有財產の方面からいへば社會改良主義は、すべての產業乃至財產に對して、成るべく私有を許すことが、諸種の社會問題を惹起する所以であることを認めるが、私有財產主義そのものゝ根本原理を否定しない。唯だある特定の私人に經營せしむれば、その事業の性質として、勢ひ獨占的傾向を帶びるから、これに對しては、私有を或程度に限定するか、或は一步進んで國家又は公共團體の經營に移すことにより、その害惡を防ぎ得るものと認めるのである。例へば鐵道國有、電車市有の如きはこの見地に立つものに外ならぬ。

第六節　マルキシズム

今日の左翼社會運動の指導理論となつてゐるものは、マルキシズムとレーニニズムとであるが、マルキシズムは單なる社會思想ではなく哲學、經濟思想、社會思想、政治思想にわたつて、一聯の體系を具へてゐる。そして思想の哲學的根據を示すと同時に、その思想實現の方法まで敎へる學說である。

先づ哲學においてマルキシズムは唯物論を採つてゐる。宇宙現象の根本實在は物質であり、人間生活の基礎となるものは物質生活である。そして人間社會は正、反、合の形式によつて、絕えず進化發展してゐる。卽ちこゝに一つの正があれば、必ず反が起り、その正と反が合に轉化するが、合が一つの正となればまたその反が起り、更に正と反が合に轉化する。かうして永遠に進化發展するのである。

ところで斯る歷史的發展の原動力は何かといへば、それは物質條件、特に經濟條件であつて、精神的條件や精神的生活は第二次的、派生的のものに過ぎない。

以上の如く人間社會は經濟條件を原動力として辯證的に進展するから、常に正と反との矛盾を含んでゐる。階級鬪爭がこゝに生れるのであるが、この矛盾の解は合に轉化することによつて行はれる。卽ち今日の資本主義社會(正)は、その中に含まれる反抗的勢力(反)によつて必然的に崩壞し、新たに社會主義(合)が生れるといふのである。

またマルキシズムは勞働價値說を出發點として、餘剩價値說を唱へてゐる。人間の欲望を充たす一切の物は使用價値を有してゐるが、これが交換價値を有する商品となるには、必ず勞働力を加へなくてはならない。

然るに勞働力は勞働者が、賃銀を得てこれを資本家に提供してゐるから、資本家は自分の利益のために、賃銀以上の勞働力を要求して、生產價値を增加せんとするのである。この場合賃銀以上の勞働力によつて產出される生產價値が餘剩價値で、資本家はこれを勞働者から搾取してゐるのみでなく、彼等は常に勞働者から餘剩價値を搾らうとするのである。こゝに資本の蓄積が起り、反對に勞働者は貧困となつて、資本階級と勞働者階級との鬪爭が續くといふのである。次にマルキシズムは資本主義社會を變革して、社會主義または共產主義社會を實現しやうとするのである。

資本主義社會はその內部より生起する新勢力の矛盾から、必然的に崩壞して社會主義的な新社會が生れるといふのであるが、この新勢力とは勞働者階級であり、無產者階級である。是等の階級は資本家階級に對し、絕えず階級鬪爭を行ひながら遂に彼等を倒し、資本主義社會を崩壞せしめて、こゝに社會主義的新社會を實現せしめるであらうといふのである。

マルキシズムは社會主義または共產主義社會を實現する方法として、暴力革命主義と無產者獨裁主義との採用を主張してゐる。

資本主義は內部的矛盾から自然に崩壞するのであるとする他面に、階級鬪爭を力說して資本主義社會が自然的、必然的に崩壞して社會主義的社會に移るのを待たず、無產階級の暴力革命によつて、資本主義社會を打倒すべしといふのである。

そして資本主義社會が共產主義社會に到達する過渡期の政治形態として、無產者の獨裁を說いてゐる。これが謂ふところのレーニニズムである。

第七節　レーニニズム

レーニニズムはソヴエイト・ロシヤのレーニンが唱へた主義であるが、今日では一般にこれを共產主義と呼んでゐる。

レーニンは眞正マルキシズムの主張者であるから、レーニニズムが哲學としては辯證法唯物史觀に立脚し、經濟理論としては餘剩價値說に據り、實行手段としては階級鬪爭說を採り、理想としては共產主義社會の實現を目ざしてゐることは言ふまでもないが、レーニンの眞正マルキシズムが、從來の正統派社會主義と異なる點は、共產主義への過渡的政治形態として、暴力革命による無產者の獨裁を强調することである。

レーニン

ベーベルやカウツキーなどの獨逸におけるマルキシストは、社會革命は民主政治によつて遂行すべしと說いたのに對し、レーニンは飽くまで、暴力革命による無產者の獨裁を主張したのである。

かゝる事情による過渡時代においては、生產機關は全體としての社會に屬さないで、無產者階級の國家的組織に屬するものである。從つて完全な共產主義は行はれないのみでなく、この社會にも尙ほ階級は存在するのである。卽ち支配階級としての無產階級が存在し、一切の生產機關をこの支配階級であるところの無產者が獨占するのである。

それ故この時期には經濟的支配に應じて、政治的權力も存在しそれがまた、經濟的支配階級である無產者によつて行使されるのである。然しこの權力は過渡的狀態においてのみ必要で、やがてこの狀態が經過し、資本主義社會の支配的勢力が、完全に破碎されてしまふと同時に次第に不必要となり、この不必要となる程度によつて自然的に消滅し、やがて眞の共產主義社會へと推移して行くといふのである。

第三章　社會運動

第一節　我國の左翼運動

すべて社會主義思想は資本主義の弊害に起因するものであるから、我國について見るならば、資本主義の輸入前に社會主義思想の發生する譯はあり得ないのであるが、資本主義の種子乃至萌芽は、明治維新前に發見することが出來る。尤もこれは德川時代における永年の鎖國政策により、自然の發達を遂げるこ

とが出來ず、明治新政府によつて西歐の資本主義が移植され、且保護育成されることによつて、初めてその發達を遂げ得たのであつた。從つて我國の資本主義が官僚主義、國權主義の色彩を帶びてゐたことも當然である。資本主義に對する反抗運動も最初は先づ自由主義運動の一部にして、その最左翼として現はれたものであり、然もその自由主義的思想及び社會主義的思想もまた、西歐から輸入されたのである。

最初の社會黨　我國に初めて社會主義が紹介されたのは明治四五年の頃で、爾來社會主義は自由主義の一部として論議せられ、かの自由黨の內部には中江兆民を初めとして、社會主義的主張を試みるものが尠くなかつた。かくて明治十五年には九州島原に「東洋社會黨」なるものが組織された。これは社會黨と名乘る最初の政黨で平等を主張し、社會公衆の最大の福利を目標としたものであつたが、忽ち禁壓されて終つた。次いで十六年自由黨の名士奧宮健之が、東京で人力車夫を集め、社會黨をモヂり「車界黨」なる團體を作つて活動したが、當時は自由

中江篤介

黨の社會主義的運動が盛んで、その機關紙上にも社會主義に關する記事論說が登載されたものである。

然るに明治二十三年帝國議會が開設されると共に、自由民權の運動は下火となり、然も自由黨の根本利害が地主や資本家のそれと結ばれてゐることが漸く世人に知られ、二十四年に自由黨は、社會主義の排斥を宣言するに至つたので一部の急進主義者は脫退した。

基督敎社會主義　翌二十五年、自由黨の脫退者などは「社會問題研究會」を起し、ついで自由黨を脫した大井憲太郎が、貧民勞働保護を標榜する「東洋自由黨」を組織した。三十年頃には從來の自由黨系のみならず片山潛、安部磯雄などの基督敎徒もまた、社會主義的關心を有つやうになり、翌三十一年には芝のユニテリアン協會に「社會主義研究會」を起し、三十三年の暮「社會主義協會」と改稱して、社會主義者のみの團體となつた。三十四年五月彼等は更に「社會民主黨」を組織したが、即日解散させられて了つた。

平民新聞　社會民主黨の解散後も是等の人々は社會主義協會を復活させて活躍してゐたが、その外に田川大吉郎などの「社會問題研究會」や、萬朝報の「理想團」などが現はれて社會主義運動を續けてゐる間に、日露戰爭が勃發した。このとき萬朝報記者の幸德秋水、堺利彥、內村鑑三などは非戰論を唱へて退社し、幸德、堺などは週刊「平民新聞」を發刊した。この新聞は自由黨の名士小島龍太郎などが後援したもので自由、平等、博愛を三大要義とする宣言を發表、我國における社會主義運動の中心となつた。かくて三十七年八月片山潛がアムステルダムに開かれたインターナショナル大會に出席して、露西亞社會黨代表プレアノフと握手した。同年十一月平民新聞は、一周年記念號に「共產黨宣言」を記載して起訴され、發行禁止を命ぜられたが、平民社はこれに代へて「直言」を發行し、社會主義運動を續け、翌三十八年內部の紛爭によつて解散した。

その後は西川光次郎、山口義三によつて「光」、安部磯雄、木下尙江、石川三四郎によつて「新紀元」、堺利彥によつて「社會主義研究」等の月刊雜誌が創刊され、また白柳秀湖の「火鞭」も頻りと氣焰をあげてゐた。

主義者の政黨運動　一方政黨運動としては三十九年二月樋口傳、西川光次郎などの「日本平民黨」、堺などの「日本社會黨」が組織され、同月二十四日に兩黨の合同大會が開かれた。その目的とするところは國法の範圍內で、社會主義の主張と實現とを期するにあつた。かくて同年四月日本社會黨は、三十八年五月山路愛山、斯波貞吉などによつて組織された「國家社會黨」と提携して、市電値上問題に反對の示威運動を起したため、日本社會黨員中十名が兇徒嘯聚罪で檢擧され、四十年二月には日本社會黨も解散した。

その後社會主義運動の機關紙としては、森近運平などの「大阪平民新聞」、片山、西川などの「社會新聞」が創刊されたが、四十一年二月には片山、西川の間に衝突が起り、西川は別に「東京社會新聞」を發行した。この頃から社會主義者の分裂が盛んとなり、分裂した各派が同年六月山口義三の出獄を機とし、共同して歡迎會を神田錦輝館で開催したところ、こゝに端なくも赤旗事件を惹起した。

赤旗事件　この歡迎會において大杉榮、荒畑勝三などを初め菅野須賀子、神川松子などの婦人を加へた硬派社會主義者と無政府主義者の二團が、軟派社會主義者たる西川光次郎一派に對する示威の目的で、赤旗を押し立てゝ會內を練り歩き、餘勢の赴くところ場外に溢れ出でんとするや、臨席の警官と衝突し、大杉等は拘禁された。堺利彥、山川均等の同志は

彼等を取返さうとして警視廳に出頭したところ、却つて宇都宮等の同志と共に捕へられ、何れも一年乃至二年の禁錮に處せられたのである。

この事件の結末は、やがて官憲の壓迫が漸く酷烈となつたことを語るもので、大逆事件の遠因をなすものとも稱せられてゐる。

大逆事件とその反映　前の電車値上反對運動の兇徒嘯衆事件と赤旗事件とのために、闘士の大部分が下獄したところから、中央の社會主義運動は頗る消沈して一二年を送つたが、四十三年の夏に至つて突如として大逆事件なるものが起つた。

赤旗事件以後官憲の壓迫は一層嚴しく、然も尚ほ幸德秋水などは密かに無政府主義思想の宣傳に努めつゝあつたが、四十三年六月に至つて幸德等一味の隱謀が、長野縣明科において發覺し、幸德等二十四名は直に捕へられ、翌四十四年一月十八日大審院の判決によつて十二名は死刑に、他の十二名は無期懲役に處せられた。これが世にいふ大逆事件である。

この事件以來社會主義者、無政府主義者に對する官憲の監視は一層嚴重となり、他方この事件が一般民衆を驚駭せしめ呼ぶに大逆の名を以てしたところから、世人の社會主義や無政府主義に對する感情には反感憎惡を伴ふに至り、その後數年の間は社會主義運動は、火の消えた如き狀態となつた。

然るに大正四年歐洲大戰の勃發に伴ひ、デモクラシーの波が世界に横溢するに及んで、社會主義思想は再び勢力を盛り返すことゝなり、大杉等の近代思想は「平民新聞」と改題して、實際的勞働運動の機關紙たらんとしたが、發賣禁止連續のために間もなく廢刊した。堺の「へちまの花」は大正四年九月から「新社會」と改題して、社會主義運動の機關たらんとし高畠素之、山川均等がこれを援けたので、次第に勢力を得るに至つた。かくて發行所たる賣文社を中心とするマルキシズム的社會主義者に對し大杉、荒畑等は無政府主義的傾向を代表して對立してゐたが、五年八月に至つて大杉、荒畑が分離することとなり、大杉は無政府主義の立場を守つて雜誌「文明批評」を發行し、後ち和田久太郎などゝ「勞働新聞」を出すことになつた。荒畑はサンヂカリズムに走つて、同じくサンヂカリズムの影響を受けてゐた山川均と共に小雜誌「青服」を出した。

社會主義再興時代　この頃から勞働組合が盛んに組織され、社會主義的思想も次第に勢力を盛り返して來た。かくて大正七年三月には社會主義の中心團體である賣文社の内部に、高畠素之を首領とする國家社會主義の提唱が起り、堺等は引退し國家社會主義者の立てこもる某社からは機關雜誌「國家社會主義」が創刊された。

殊に同年八月米騒動の勃發を見るに及んで、一般世人の社會意識が活潑となり、翌八年には勞働運動の勃興、勞働運動と社會主義運動との結合など記憶すべきことが多かつた。學生社會主義團體、新人會、曉民會、建設者同盟などが續々組織されたのもこの年であつた。

サンヂカリズム時代　歐洲大戰が終りを告げて間もない大正九年の春、我國の經濟界は大恐慌に見舞はれた。勞働者階級は資本家階級が自衛策上講ずる攻擊的壓迫に對して、次第に守勢的屈服を餘儀なくせられるに至り、こゝに勞働爭議は漸次深刻化した。

これより先大正六七年頃より大杉、荒畑等の無政府主義者によつて、宣傳せられつゝあつたサンヂカリズムは、この時に至つて漸く勞働者階級に迎へられ、十年頃にはその急進的、戰闘的な直接行動は、嵐の如く全無産階級を風靡して、勞働爭議は非常な活氣を呈すると同時に、甚だしく惡化した。

社會主義同盟　大正九年大杉榮などの勞働運動者が、印刷工組合信友會と提携して、アナルコ・サンヂカリズムの運動を起すと同時に、高畠等は週刊「大衆運動」を創刊して國家社會主義の立場から大衆に呼びかけた。この空氣の中に、各社會主義團體の大同團結たる社會主義同盟が生れた。

大正十年には大杉の週刊「勞働運動」、高尾平兵衛などの月刊「勞働者」などの無政府主義雜誌が生れ、社會主義同盟の機關紙「社會主義」に對抗したが、是等の諸雜誌は何れも程なく廢刊した。社會主義同盟はこの年五月第二回大會を開いて解散を命ぜられ、續いてその結社も禁止された。

これより先大正六年に革命成就した露西亞の過激派政府は同八年第三インターナショナルを設立し、外國に對して共産主義の宣傳を試みるに至り、我國においても山川均、堺利彦などによつて同十年頃からその輸入が行はれた。かくて當時はボルシェヴィズムとアナーキズムの論爭が盛んになり、山川の「社會主義研究」は前者を、荒畑勝三の「日本勞働新聞」は後者を熱心に支持してゐた。また堺や山川などは雜誌「前衛」を創刊して、共産主義運動の先驅たらしめんとし、これに對して大杉榮、和田久太郎、近藤憲二などは旬刊「勞働運

動」を再興して論陣を張つた。そして同年五月には「前衛」が主となつて露西亞饑饉救濟運動を起し、十一月には各地に露西亞革命五周年記念會が開かれた。

共産黨事件　かくの如くして、露西亞の共産主義たるマルキシズムは我國に輸入され、狹義の左傾思想は、漸次傳播跳梁を逞しうするに至つた。これがため大正十年には、所謂曙民共産黨事件が起り、同十二年には日本共産黨事件が起つて天下の耳目を聳動した。

然るに同年九月關東大震災が起り、大杉榮は慘殺され、我國の社會運動は全般的に頓挫し、共産主義運動もまた一時沈衰するに至つた。

政治運動熱　大正十三年には「日本フェービアン協會」が生れ同十四年には普通選擧法が通過したところから、從來サンヂカリズムの立場に立つて政治行動を蔑視してゐた社會主義者の間に、政治運動熱が旺盛になつて來た。即ち六月には無産政黨の組織が叫ばれ、九月には無産黨組織準備委員會が開かれた。その結果十二月に農民勞働黨なる無産黨が生れたけれども、僅か三時間後に結黨禁止を命ぜられた。そこで農民勞働黨は極左翼分子を整理することによつて、翌年三月名稱を勞働農民黨と改めて結黨し、杉山元次郎を中央執行委員長とした。併し勞働農民黨の内部では依然として左翼分子が勢力を振つてゐたので、日本勞働總同盟其他の右翼分子は脱退して、社會民衆黨を組織した。また總同盟系の急進的分子も別に「日本勞農黨」を組織し、これより先「日本農民黨」も結成された。かくの如く無政府政黨が結成されて以後は、社會主義者は何れも政治運動に熱中することになり、昭和二年の府縣會議員選擧、同三年の衆議院選擧には各派候補者を出して爭つたが、爾來次第に勢力を加へ、昭和十二年の總選擧には、社會大衆黨は一躍四十に近い議席を獲得した。

主義者の大檢擧　大正十二年の日本共産黨事件以後における、共産主義運動について見るに日本共産黨の一味は、同十五年暮再び黨を建設して次第に同志を獲得し、昭和三年二月からは機關紙「赤旗」を發刊して積極的活動を試みるに至つたので、同年三月十五日に所謂三・一五事件が起り、共産主義者の全國的一齊檢擧が行はれた。

このため日本共産黨は大多數の黨員を失つたが、最高幹部が檢擧に洩れたゝめ、黨の再建運動は執拗に行はれ、翌四年二月以降著しく黨勢を挽回するに至つたので、更に四月十六日には四・一六事件が起り、全國各地に亘つて第二次の一齊大檢擧が行はれた。その後も引續き檢擧が續行されて、日本共産黨は殆んど壞滅の狀態に陥つた。

然し實際にはその後も尙ほ殘留分子の周密なる潛行運動によつて、又々再建運動が進められ、四年五月下旬より積極的に活動を開始し、東京市電ストライキに際しては、共産行動隊を編成して、二十五名の警官を殺傷するなど兇暴の限りを盡し、更に五年五月一日のメーデーを暴動に導かんと企てたが、これより先當局においては五年二月の總選擧當時より全國的に大搜査を開始し、遂に北海道、樺太外三十六府縣に亘つて第三次の一齊大檢擧を行ひ、千五百名を檢擧した。

新生共産黨事件　かくの如くして、黨員の殆んど全部が芟除され盡したかの觀があつたが、なほ巧に檢擧の手を免れた殘黨は、その後各黨の新組織に着手し、七年四月機關紙「赤旗」を活版刷りにして、積極的活動を開始した。たま〳〵同年十月、大森銀行ギャング事件が突發して、彼等の陰謀が暴露したゝめ、當局は十月三十日を以て一齊大檢擧を行つた。これが所謂新生共産黨事件である。

この事件は、日本共産黨が既に衰滅に歸したものと思はれてゐた折柄とて、一般世人に與へた衝擊は非常なもので、左翼分子の執拗さと根強さに驚駭せしめたと同時に、その取つた手段の如何にも惡辣にして破廉恥なるに、憎惡と侮蔑の念を抱かしめ、日本共産黨の斷末魔を思はしめた。

これより先昭和三四年頃、三・一五事件で入獄した幹部級の數名が、獄中において黨從來の行動を反省した結果、こゝに解黨派なるものを發生して、反幹部的態度を表明した。その後黨中央部の公判廷において、黨幹部は頻りにその態度を批難攻擊したが、爾來社會の情勢は漸く變化し、殊に滿洲事變突發以來、國家主義的右翼思想の擡頭により一般左翼思想は殆んどこれに壓倒せられ、然も八年六月には、日本共産黨の兩巨頭佐野學、鍋山貞親の急轉向が傳へられ、次いで高橋三田村、中尾などの幹部もまた右兩名に追隨し、こゝに獄の内外より多數の轉向者を續出するの形勢に至つた。

今後の左翼運動　かくの如くして大正十年頃、露西亞の共産主義が輸入されて以來、我國左翼運動の中心は共産主義運動に移り、專らコミンテルンの指導下に活動を續け、社會民主々義並に無政府主義の如きも、それ相當の發達を見ながら、殆んど共産主義に壓迫されつゝある狀態であつた。

然るに上來述べた如くその共產主義運動も、打續く大檢擧によつて日本共產黨の首腦部以下、凡そこれに關係を有する者は殆んど全部檢擧され、その上黨幹部の急轉向によつて自滅の外なき運命に遭遇しつゝあるが、かくの如くして共產主義運動が壞滅に歸するならば、左翼運動の將來は今後生ぬるき社會民主々義運動に一縷の命脈をつないで、僅かにその餘喘を保つの外ないであらうと想像されるに至つた。

第二節　左翼の政治運動

我國における左翼運動は、大正十四年の普選實施以來、所謂政治鬪爭を主眼とするに至つた。從つて左翼運動の現況を知らうとするには、無產政黨の動きを中心として觀察することが最も便利である。

左中右の三政黨　現在我國における無產政黨の代表的なものを擧げるならば、議會制度を否定し暴力革命を信條とする非合法政黨に極左翼の日本共產黨があり、多少は議會制度を認容する左翼、中間及び右翼の合同派に社會大衆黨があり、極右翼に國家社會黨が控へてゐる。

以上の外にも現在多くの左翼運動團體はあるが、夫等は大部分上記三派政黨の何れかに對して何等かの關係を有するか或はその系統を引いてゐるものに外ならない。從つて右三派の政黨を中心として、夫等の關係を見れば、大體左翼運動の現況を知ることが出來る譯である。

日本共產黨　日本共產黨は三・一五事件、四・一六事件、新生共產黨事件と打續く當局の大檢擧によつて、今は全く社會から掃蕩され、その存在は獄中における日本共產黨となり終り現在の社會には日本共產黨なるものは存在しない。殊に同黨の內部には、昭和三四年頃以降解黨派、勞働者派などの反幹部的異分派を生じて內訌を演じ、最近に至つては幹部中の最高幹部たる人々の轉向によつてその首領を失ひ、今や事實上殆んど沒落壞滅の途上にある。尤も彼等といへども、全然共產主義を拋擲した譯ではないが、我國の特殊性を確認し、我國體の尊嚴、民族性の卓越を確認し、少くともコミンテルンと關係を絕つ以上、從來の如き大逆無道の非國民的團體でなくなることは明白で、一般國民の彼等に對する態度もまた自から一變するに至るであらう。

日本共產黨の外廓團體　日本共產黨の所謂外廓團體としては日本勞働組合、全國協議會（全協）、日本反帝同盟（反帝）、日本赤色救援會（赤救）、日本共產青年同盟（共青）などの團體があり、また支持團體としては日本プロレタリア文化聯盟（コップ）、日本勞農救援會準備會及び全農全國會議などがあるが、是等の諸團體も昭和六年以來は當局の檢擧方針が變り、黨員の一齊檢擧主義によらず、一般關係團體の間斷なき檢擧を斷行することゝなつたゝめ、その主力は殆んど檢擧され盡したのと、親團體たる日本共產黨が根柢より芟除されたので、現在においては殆んど息の狀態である。

社會大衆黨　社會大衆黨は社會民衆黨と、全國勞農大衆黨との合同により、昭和七年七月に結成されたものであるが、右の中全國勞農大衆黨は、同六年七月舊勞農黨（左翼）、全國大衆黨（中間）及び、社會民衆黨（右翼）中の一部分子の合流によつて組織されたものである。當時無產政黨はこの全國勞農大衆黨と、社會民衆黨の左右二政黨に淸算されたのであつたが、その後七年四月社會民衆黨から合同を申込み、大衆黨もまたこれを承諾して合同結成がなつたのである。

以上の如き事情であるから、社會大衆黨の支持團體は、各種の勞働組合及び社會運動團體を包含し、これが大同團結によつて、社會主義運動の主體となり、戰線の强大化を企圖せんとするものである。

今その支持團體の主要なものを擧げると、舊勞農黨系の日本勞働組合總評議會（總評）、全勞黨の代表的支持團體であつた全國勞働組合同盟（全勞）、社民黨の代表的支持團體であつた日本勞働總同盟（總同盟）、日本海員組合などがその代表的なものである。

國家社會黨　國家社會黨は右傾運動勃發の氣運に刺戟され、社民黨の書記長赤松一派が國家社會主義を懷抱するに及び、社會民主々義派の片山一派との內部抗爭を惹起した結果、赤松派が社民黨を脫退して組織したものである。

これより先下中一派によつて、日本國民社會黨の結成運動が進められ、社民黨や大衆黨內の同志の引入を見越して結黨を差控へ、專ら赤松派の動靜に注意しつゝあつたが、七年四月國家社會主義學盟の成立を機として、こゝに兩者の合同協議が行はれ、その結果黨の名稱も國民日本黨として結黨の運びにまで漕ぎつけたところ、役員の比率問題其他で意見の衝突を來し、結局赤松派は日本國家社會黨、下中派は新日本國民同盟と別々に結黨することゝなつた。

國家社會黨の主なる支持團體は國家社會主義婦人同盟、關

東合同勞働組合、北陸合同勞働組合、遞友同志會、日本農民組合、全國鑛山勞働組合、海員向上會などで國家社會主義を指導原理とし、一君萬民の眞日本建設を目指して、亡國資本主義撲滅、亡國共產主義撲滅、亡國ブルジョア・デアッショ撲滅、亡國社會民主主義撲滅などを標榜し、左翼陣營中の純右翼政黨を以て任じてゐたが、その後黨に內訌を生じ、先づ日本農民組合一派が分裂して皇道會に走り、ついで遞友同志會一派が分裂して日本主義のグループを作り、更に國家社會主義派もまた脫退するに至り、こゝに同黨は結黨以來一年餘りで、四分五裂の狀態に陷つて終つた。

第三節　右翼思想の擡頭

我國は元來家族主義の基礎の上に立つ大家族主義の國柄で、國家なる語が最も明らかに表現してゐる如く、これが我國の國家主義であり、卽ち我國存立の原理である。

然るに明治維新以來、歐米の個人主義的思想が我國に押し寄せ、一般國民の思想と文化を一變せしむるに至つたのである。

歐米個人主義　先づ政治上について見るならば、歐米の個人主義は、當時の國情に刺戟せられて自由民權の運動となり、帝國議會の開設となつて自由主義、民主主義は次第にその羽翼を張り、遂には政黨政治は憲政の常道と看做されて政界の腐敗、政黨の橫暴となつて現はれたのである。

次に經濟上では歐米の個人主義は我國商工業の發達に伴はれて一面においては自由主義、資本主義となり、他面には組合主義、社會主義となつて相反噬し、終には勞資の鬪爭、社會問題の亂舞など殆んど收拾すべからざる狀態を呈するに至つたのである。

其他社會各方面に於て歐米個人主義の跳梁跋扈は、餘弊害惡は年と共に增大し、家族主義、國家主義の國情民心を攪亂して、底止するところを知らざる勢を示したのである。

國家主義　外來思想の跳梁跋扈とその餘弊害惡によつて、我三千年來の國情民心を攪亂せられつゝある狀勢に當面し、翻つて我國固有の團體、歷史、民情、風俗を回想するとき、そこに油然として湧き起るものは、かゝる外來思想を克服し得べき觀念、卽ち國粹主義でなければならぬ。傳統主義、家族主義、國家主義でなければならぬ。一般的右翼思想でなければならぬ筈であつた。

右翼思想の發生　かゝる一般的右翼思想の擡頭は、それが反動的であり、復古的であるにしても、我國に關する限り本來の立脚地に歸り思想、觀念の正路に返つたものと言はねばならない。それは我國家、國民の眞骨頭の自覺であり本來の面目の開悟である。妄念謬想からの解脫であり惡鬼妖魔からの離脫である。

然るに今日謂ふところの右翼思想なるものは、國家主義ではなく、國粹主義でも傳統主義でもない。それはファッショの實行理論または實行手段を採用せんとするものである。卽ち急進的右翼思想である。

第四節　急進的右翼思想

ファッシズムの影響　我國の一般的右翼思想は、何故に急進的右翼思想に轉化したかと言へば、それが國家主義のファッショ化である以上、伊太利のファッシズムの影響を受けたことはいふまでもない。伊太利のムッソリーニは千九百二十二年十月羅馬進擊を敢行して政權を握り、ファッショ革命を成立せしめ、世界各國に大衝擊を與へたのである。それ以來、ファッシズムの潮流は漸次世界各國に波及し、到る處にファッシズムの擡頭を見るに至つたが、我國もまたその例に洩れなかつたのである。

ファッショ化の內部原因　然しそれは畢竟するに外部的原因である。外部的原因が如何に大きかつたにせよ、若し內部にそれを激成せしむべき原因がなかつたならば、結局單なる一大衝擊に止まつたであらう。然るに我國にも既に急進的右翼思想を激成せしむべき、諸多の內部的原因があり、內外相應じて國家主義のファッショ化は急激に行はれることゝなつたのである。

然らばその內部的諸原因とは何かといへば、第一は日本共產黨の跳梁跋扈、第二は未曾有の經濟的恐慌、第三は政黨政治の不信墮落、第四には財閥に對する反感憎惡、第五には軟弱外交に對する不滿憤激であつた。

日本共產黨の跳梁　我國の社會主義は、露西亞の共產主義革命の成功に刺戟せられて共產主義化し、大正十年には早くも曉民共產黨の組織となつたが、翌十一年には第一次日本共產黨の組織を見るに至つた。その後大正十二年夏の檢擧以來、昭和三年三月、翌四年四月と相次いで多數の黨員が檢擧されたが、然も該運動は容易に屛熄せず、再建に次ぐに再建を以てし、ために檢擧又檢擧と殆んど底止するところを知らざるの

狀勢を呈した。

かくの如き狀勢に對應して、勞働爭議は次第に惡化し、社會問題は年を逐ふて頻發するに至つたが、しかもその間不祥事件は屢々突發し、社會不安は日に月に深刻化して行つた。憂國の情に燃ゆる國家主義者としては、これを坐視するに忍びぬことである。進んで社會改革に當り、この思想國難を救はんとの念を懷くに至つたのは、寧ろ當然であつたが、恰も伊太利のムッソリーニが、ファッショに依つて一擧共產黨の暴威を彈壓した。これに刺戟された國家主義者は急進的となり、ファッショ化したのである。

ムッソリーニ

經濟恐慌　歐洲大戰後の不景氣は世界的であるが、大戰中財界の好景氣に有頂天になつただけに、我國民に取つてそれは一層の苦痛であつた。殊に大正十二年の關東大震災以後不景氣は一段を加へ、物價は安定を缺き、生活難は愈々その度を增して行つた。

これより先大戰中の大正六年九月、米國に倣つて金の輸出を禁止したが、同十三年の三派聯立內閣當時より財界の不況物價の不安定を救ふの途は、金解禁の外なしとの意見が唱へられ、昭和五年一月、濱口內閣によつて、遂に金解禁は斷行されたのであつた。

然るに金解禁に先立ち、濱口內閣の採つた緊縮政策は物價の低落を來し、ために一層を加へた不景氣は、金解禁によつて何等回復の兆も見せず、却つて惡化するところへ、翌六年七月獨逸財界の恐慌が起り、更にまた九月には英吉利が金再禁止を斷行することゝなつて、世界の經濟界が大動搖を來すと共に、我國の不景氣は層一層を加へ、有らゆる產業は操短に次ぐに操短を以てし、破產するものも續出し、その結果は夥しい失業者が街頭に投出された。然も民政黨內閣は依然整理節約と產業の合理化を唱へて、この情勢に更に拍車をかけた。ために失業者は百萬を突破し、中小商工業者の倒產するもの相次ぎ、農民は餓死線上に追詰められて終つた。

こゝに於て職を與へよ、パンを與へよとの眞劍な要求は、全國に充ち滿ちたが、現在の經濟組織下に於ては、また現在の政治事情下に於ては、それは容易に望まるべくもなかつた。

かくの如き狀勢に直面して、國民の休戚を念慮とする國家主義者が、何等かの經濟組織の改革を企圖するに至るべきは自然の成行であつて、こゝにまたファッショの成功が彼等の心を摑んだのも、必ずしも無理ではなかつたのである。

政黨政治の墮落　我國の政黨は政權の爭奪に沒頭し、黨利黨略を先にして、國利民福を等閑に附するの陋態を演じ、ために選擧の不正、政界の腐敗は年を逐ふて愈々甚しきものがあつた。殊に財閥と結んでこれが走狗となり、利權を漁り、賄賂を貪つて公器を利し、然も恬として恥ぢざるに至つては、その腐敗墮落も極まれりといふべく、ために一般國民の政黨政治に對する不信賴と嫌惡とは、日に月に增さりゆくばかりであつた。

殊に政黨政治が一般國民の不信賴と嫌惡とを一層甚しからしめたのは、最近に於ける幾多の疑獄事件と、不景氣對策に於ける無能力とであつた。

政黨領袖等の瀆職的行爲が極めて大仕掛けに行はれて、一般國民に大衝擊を與へたのは最近の疑獄事件に於けるより甚しきはなく、かくて政黨政治の內幕が曝露されるに伴れて選擧界の腐敗、政治家の墮落は、一般國民の政黨政治に對する絕望的な不信賴と嫌惡との情となつたのである。

また不景氣對策に於ては、當時民政黨は衆議院に於て二百七十名の絕對多數を擁しながら、濱口內閣の行づた政策は遂に何等の効果をも齎らさなかつた。却つて物價の大下落、不景氣の深刻化、正貨の夥しき流出、國內金融の逼迫、失業者の大量生產、農民の窮乏となり、續いて出來た若槻內閣もその無能さにおいて前者に優るとも劣らないものであつた。

民政黨內閣失敗の後を承けて成立した犬養內閣は、成立と同時に金の再禁止を斷行した。然もそれは總選擧において、三百三名といふ非常數の黨員を得るための犬養景氣と、前古未曾有の外國爲替の大暴落とを齎したに過ぎなかつた。

かくの如くして、國民の政黨政治に對する信賴は全く地を拂つたとき、かねて政黨政治に反感を懷く急進的國家主義者が、ムッソリーニの擬に倣はんとするに至つたのは、强ち理由のないことではなかつたのである。

財閥への反感　民政黨內閣の金解禁後における、正貨政策は全く失敗に歸し、夥しい正貨は國外に流出した。續いて起つた獨逸經濟界の大恐慌、英國の金本位制の停止は、我國の經濟界を根本から動搖せしめ、磅を買込んでゐた三井、三菱住友等の大財閥は非常なる損害を蒙つた。そこで彼等はこの

大損害を取返すために、早晩我國も金再禁止の外なしとの見透しをつけ猛烈に弗買ひを開始した。さなくとも金の流出が悪しい矢先へ、財閥の猛烈な弗買はこの狀勢に拍車をかけその流出額は巨大に上り、ために國内の金融は殆んど梗塞するの窮地に陷り、不景氣は一層深刻化した。

財閥のかくの如き行爲は、自己の採算上已むを得ざるに出でたものとはいへ、その結果より見るときは、自己の利益のために國利民福を、犧牲にしたものである。

都下各新聞も見るに見兼ね筆を揃へて攻撃した。一般國民はこの弗買ひこそ、財閥の我利々々根性を最もよく表明したものとして非常な反感を懷き、猛烈なる批難を浴びせた。かねて財閥乃至大資本家の横暴に反感を抱いてゐる急進的國家主義者が、進んで彼等の膺懲を意圖するに至つたのも、無謀とのみは言はれなかつたのである。

軟弱外交　我國の外交は、由來歐米追隨主義に終始して、自主獨往の外交方針を執つたことがない。國力の未だこれに伴はざるときにおいては、それも已むを得ないところであるが、歐洲大戰後國位は既に上り、國力もまた漸く充實するに至つた後、容易に舊態を改めず、依然として、追隨主義を保守しつゝあつたことは、國家主義者乃至國粋主義者は素より、一般國民の遺憾措く能はざるところであつた。然るに濱口内閣に至り倫敦海軍々縮會議が開催せられ、幾多の波瀾曲折を經て條約の締結を見たが、軍部の強硬意見と政府の軟弱意見との間に非常な齟齬を來し、當時の海軍々令部長加藤寛治大將は、この軍縮の結果に憤慨して職を辭した。これは獨り海軍軍人ばかりでなく、愛國主義各團體の憤懣もまた高調を示すに至つたものである。

かゝる間に滿洲問題は漸く複雜化して、第二次若槻内閣の末期には、遂に滿洲事變の勃發を見た。然もこの間における政府の態度は優柔不斷を極め、あらゆる醜態を續けてゐる間に、出先軍隊は夙くも火蓋を切り、ために内閣の面目は丸潰れとなつた。然もなほ彼等は徒に國際聯盟にのみ氣を兼ねて、軟弱外交の本色を遺憾なく發揮した。

軟弱外交は獨り民政黨内閣ばかりではなかつた。犬養内閣に於ても、滿洲事變、上海事變、滿洲國獨立などいふ重大問題を控へて、外務當局と軍部とは幾度か正面衝突を惹起した。この事態に當面して、軍部は勿論愛國主義各團體は、外務當局の軟弱外交に憂想をつかし、外交刷新の聲は終に

強硬外交、自主獨立外交の樹立への叫びとなつた。ファッショの對外強硬政策が、愛國主義者の憤激に拍車をかけるに至つたことは、當然の成行といはねばならぬ。

かくの如くして我國の急進的右翼思想は發生した。換言すれば我國の國家主義的思想は、如上の諸原因によつてファッショ化したのである。そしてそれが急激に擡頭し來り、幾多の大事件を惹起した。

第五節　國家主義と個人主義

國家主義　我國の右翼思想の基調は國家主義であるが、國家主義とは、有らゆる部面に於ける個人の生活が、國家の中心とし、國家を基準として行はれねばならないと主張するのが國家主義である。即ちこれを内にしては、國家の安寧秩序と國力の充實增進を第一義とし、國民たる各個人を從位に置いて如上の目的に奉仕せしめんとし、これを外にしては國家を以て、人類の到達し得べき最も發達した團體生活の樣式なりとし、これを單位とし基礎として先づ第一に國家の進歩發達を圖り、以て世界に貢獻するところあらしめんとする主義である。

個人主義　國家主義は個人主義並に國際主義に對立するものであるが、然らば先づ個人主義とは何かといへば、個人を以て個人以外のもの、例へば國家又は他の個人の手段は見ず、個人自身を一の目的と見る主義である。從つて個人主義は國家の統一性や至上性を拒否し、國家は個人の安全や自由や幸福のために、計畫的に設立された一個の團體に過ぎないものとするのである。國家は個人のために存在し、個人は國家のために存在するものではないとするのがこの主義である。これに反して國家主義は個人を以て國家の有機的一分子と見、國家をそれの統一された有機的全體と見る。從つて個人は當然國家のために存在し、國家の要求に適順し、國家のために犧牲を拂はねばならないのである。

また個人主義はその自由の方面を強調する時には、スペンサーの言つた如く、國權の作用を極小ならしめやうとする自由主義となり、更に極端に走ると無政府主義となる。その平等の方面を強調するならば、生產並に分配において平等を主張するところの社會主義となり、更に極端に走ると共產主義となるが、更にまた自由平等の兩方面に亘つて個人主義を徹底せしめるならば、それは所謂無政府共產主義となつて終ふ

のである。かくて個人主義の基礎の上に立つ自由主義、無政府主義、社會主義、共産主義、無政府共産主義は、共に國家主義とは相容れないものなのである。

世界主義　個人主義の自由平等を世界的に擴大して考へるときそれは必然的に四海一如の觀念の下に世界萬民を同一視し、國家的偏見や、人種的差別を撤廢して、人類全體の安寧幸福を第一義とする、世界主義に赴くことはいふまでもない。かくて世界萬民を同一視し、人類全體の安寧幸福を第一義とするところから、國家を超脱し國境を撤廢せんとする世界主義が、國家至上主義であり、國家第一主義である國家主義と、相反するのは當然である。

國家主義の利弊　國家主義は、個人主義や世界主義と對立し、その特長がそこにあると同時に、缺點もまたそこに伏在するのである。

國家主義の理論は、人類の現在に於ける進化程度においては、最も現實的なものであり、妥當適正なものである。その特徴とするところは、國家の統制を鞏固にして、進歩發展を促し、國民の安寧幸福を圖らんとするところにある。然しながら國家主義が國家を至上のものとする結果、動もすれば人民を奴隷視してその人格を認めず、個人の自由と權利とを束縛して發達を阻害したり、又自國の幸福と權益とにのみ囚はれて他國を眼中に置かず、進んではこれを侵害して世界の安寧幸福を破壞したりするが如きはその陷り易き弊竇である。

帝國主義　國家主義が主我的となり、利己的となり、侵略的となつた場合、これを帝國主義といふのである。自己の國家を至上のものとし、内には富國强兵の策を採り、外には軍國主義的態度を取つて領土の擴張、國權の伸長を圖り、一大帝國の實現を豫期するもので、かゝる政策態度に出づるものは、君主國たると共和國たるとを問はず、すべて帝國主義の國家である。

國家主義は國家乃至國民の進歩發展を圖る上からいへば、尤も妥當適切なもので少しも危險なものではないが、國家主義が國家至上第一の意を强調して個人を無視し、只管主我利己に陷つて侵略的となると、それは國民各自に取つての暴君であり、世界各國に取つての脅威である。

社會主義と國家主義　個人主義を基調とし、個人の優越を認めてその平等の方面を高調するところの社會主義乃至共産主義に對し、團體主義を基礎として國家の至上を認め、個人の犠牲を要求するところの國家主義は、正に相反する立脚地に立つてゐる。從つて社會主義化乃至共産主義化したものを左翼といふならば、國家主義化したものを右翼と呼ぶのは當然であるが、今日いふところの右翼乃至右翼思想は、單なる國家主義を指すものではない。國家主義がファッショ化するに及んで、始めて右翼乃至右翼思想と呼ばるべきである。

第六節　ファッショ化した國家主義

ファッシズム　ファッシズムは、伊太利のファッショ運動から發生し、その主張乃至理論の傾向もまた、ファッショ運動に發源してゐる。

もと〳〵伊太利のファッショなるものは、赤色暴徒に對する反對運動として蹶起したもので、最初から一定の主義を中心とする團體ではなかつた。殊に彼等はムッソリーニを最高至善の存在と考へ、その指揮下に唯々として活動してゐるのである。そして破壞的であると同時に建設的であるムッソリーニが行動第一主義の人で、思想を無視する思想を看板としてゐるだけに、ファッシズムとは即ちムッソリーニズムであるとは理解し得るにしても、然らばムッソリーニズムとは何かといふことになると、最早不明となつて終ふ。從つて伊太利に於る、ファッシズムの理論的特色を捉へやうとするにはファッショ運動に現はれた行動に就いて、その思想的傾向や特徴を捕捉するの外はない。

元來ファッショの成立が、社會主義者殊に共産主義者の暴威を彈壓せんがためであつた限り、その奉持する思想が、反社會主義的であることは容易に察知される。又輿論を暴壓し議會を無視した點において反民主主義的、反自由主義的であり、然も獨裁主義的であるといひ得るが、更に對外硬政策を强持する點では國權主義的であり、古代ローマの光榮を再現せんとするところは傳統主義的であり、國粹主義的である。即ちファッシズム社會主義、民主主義、自由主義、世界主義平和主義に對して對立的位置を取つてゐるから、もし是等の諸傾向を社會進化の正動と見るならば、ファッシズムは反動的である。

ファッシズムの主張　けれどもファッショ運動の全體は、必ずしもこれが全部ではない。如上の反動的特色は彼等の所謂、餘りに硬化した政治機構の機械的組織を破壞せんがための手段であつて、既に建設の事業に進化した今日では、さう單純

に片付けることは出來ない。勿論今日といへども彼等は政治上の自由主義や民主主義を寛容しない。ムッソリーニを最上唯一の獨裁者たらしめてゐるばかりでなく、強度なる專制的中央集權組織を以て、苟も放縱自慾を許さないが、產業上には自由主義を認容し資本、技術及び勞働が相互に特立する聯合組織により、地方的なると同時に產業的なる分權主義を採用してゐる。かゝる政治上の集權主義と、經濟上の分權主義とを稱して、彼等は國家サンヂカリズムと呼んでゐるのである。

要するにファッシズムは、國家主義や民族主義に立脚する政治的並に經濟的改革の實行理論であつて、指導原理として團體主義や全體主義を採り、個人主義や階級主義を排斥するものである。故に凡てにおいて國家並に國民全體の利益を先にして、階級乃至個人の利益に沒頭する利己的なる社會主義や資本主義を、極力彈壓せんとするものである。そしてかかる團體主義乃至全體主義の統制原理として、獨裁主義及び國權主義を採り、民主主義や世界主義を排斥するものである。それゆゑ無能にして墮落した議會政治を排し、內には英雄主義的に國家並に國民の統制を行ひ、外には强硬政策を固持して國權の伸長を企圖せんとするものである。

國家主義が政治上或は經濟上の現實の野に下り、それに基くところの實行政策を樹立し、更にこれを實行運動に具現することになると、各種の部面において多くの實際問題を惹起せずには居らない。この場合國家主義が急進的となつてファッシズムの實行理論を採用し、これによつて實行政策を樹立し、更にこれを實行運動に具現せんとするならば、それは國家主義のファッショ化であつて、今日我國の右翼思想がそれなのである。

ファッシズム獨特の理論　ファッシズムは團體主義であり、全體主義であつて、個人主義乃至部分主義を排斥すること、從つてそれが極端なる無政府主義乃至共產主義を排斥するものであること、更にまたそれが傳統主義的であり、國粹主義的であり、國權主義的であつて國際主義や、世界主義と相容れないものであるにしても、民主主義による議會中心主義を排して、英雄主義的獨裁主義によらんとし、又階級主義による社會主義や共產主義と共に、個人的自由主義による資本主義をも排擊して、經濟の國家統制を敢行せんとし、更に是等政治上經濟上の改革を行はんがためには、暴力革命主義をさへ採用せんとするが如きに至つては、是れ國家主義の理論や觀念の外に出づるもので、ファッシズム理論の特殊なる部面といはねばならない。

それは共產主義が暴力革命による無產者獨裁を主張するに至つて、一般社會主義の理論乃至觀念の外に出でたと同樣、國家主義が若しファッシズムの實行理論を採用するならば、それは最早單なる國家主義ではなくして、國家主義のファッショ化である。

ヒットラー

ファッショの危險性　國家主義のファッショ化とは現在における國家主義觀念が容認しつゝあるところの民主主義的議會制度、資本主義的經濟組織を排斥し、獨裁主義による專制政治と、共產主義ではなく國家統制による經濟組織とを樹立せんとするものであり、かゝる改革を斷行せんがためには、非合法的なる暴力革命主義をも採用せんとするものである。

勿論現在の一般的ファッシズムは、必ずしも暴力革命主義を採用せんとするものではなく、また必ずしも獨裁主義による專制政治を企圖するものではないが、伊太利におけるムッソリーニ一派のファシストは、事實において暴力革命による獨裁主義を主張し、且つ實行しつゝあるのであるから、ファッショ化といふ場合、かゝる傾向に赴き易いことは爭はれない。これは獨逸に於けるヒットラーのナチス運動においても、十分看取し得るところである。

また前述せるが如く、伊太利におけるファッシズムも、現在に於ける資本主義經濟組織を根柢から覆して、共產主義の如く私有財產制度を廢絕せしめんとするものではなく、資本勞働及び技術を對立せしめて、國家の統制下に置かんとするものではあるが、その國に適切なる經濟企畫を有たないものが、時潮に驅られてファッショ化する場合、一岡に資本主義の破壞に出でんとすることもまた、陷り易き弊害であるといはねばならない。

政治上における獨裁主義、議會政治の無視、少くも既成政黨の排擊、經濟上における共產主義の排擊と共に、資本主義經濟組織の變革、國家統制經濟の實現、暴力革命主義の採用等が、國家主義のファッショ化であるとするならば政治上、經濟上、社會上種々の重大な問題を惹起するに至るべきは

當然で、國家主義ファッショ化の危險性もまた實にそこに伏在するのである。

第七節　日本主義運動

明治維新と共に開國進取の國是が定まり、我國に歐米の文物が盛に輸入せられるに及んで、歐化主義は一世の風潮をなし、個人主義的思想が滔々として上下を風靡するに至つた。即ち自由民權思想は、我國民が永い封建時代の間、極度に壓制せられてゐただけに、激烈な勢で國内に弘布し、世は擧げて歐米崇拜時代を現出して文物典章、風俗習慣、皆な歐米を以て範とした。

杉浦重剛

この時潮を慨して起つた陸實、杉浦重剛、三宅雪嶺等の一派は雜誌「日本人」及び「日本新聞」を發行してこの歐化主義に反抗した。

日本主義の鼓吹　即ち日本新聞は、明治二十二年二月に創刊せられたが、その創刊の辭に於て「近世の日本はその本領を失ひ、全國民を擧げて泰西化せんとす。茲において先づ日本が一旦亡失せる國民精神を回復し、且つ之を發揚せんことを以て自ら任ず……日本新聞は國民精神の回復發揚を自任すと雖も、泰西文明の美點はこれを知らざるに非ず、その權利自由及び平等の說はこれを重んじ、その哲學道義の理はこれを存し、その風俗習慣も或る點はこれを愛し、特に理學經濟實業の事は最もこれを欣慕す」とその主張を掲げ、明かに日本主義を標榜した。

彼等の主張は決して固陋なる排外的國家主義ではなかつたが、また不徹底なる日本主義でもあつた。この立場はまた日本人の立場でもあつたが、三宅雪嶺は同誌上において盛んに國粹保存を唱道した。

大日本協會　次いで井上哲次郎は基督教徒の非國家主義と戰ひ我國の論壇を賑はしたが、明治三十年に至つて木村鷹太郎が日本主義を唱へ、高山樗牛もこれに和して大日本協會を組織し雜誌「日本主義」を刊行した。彼等の目的とするところは、日本建國の精神を發揮するにあつたが、高山樗牛のいふところは「日本主義とは日本國民の守るべき主義といふ義なり、精しくは國體民性に基き、皇祖建國の企圖を體認して、その國家的大理想と國民的大抱負とを實現せんことを期する所の實踐道德の主義をいふ」といふのであつた。これによつても窺はれる如く、當時の日本主義乃至日本主義運動は、單なる主義主張乃至實踐道德の理論であり、そしてそれの宣傳普及であつた。

日本主義協會　かくの如き日本主義運動は大正五年に至り、岩野泡鳴等によつて繼承された。彼はその徹底自然主義から徹底日本主義に入り、政治にも宗教にも日本中心を以て、世界人類を吸收同化する目的の下に日本主義協會を組織し、雜誌日本主義を再刊した。「僕等はもういゝ加減に日本人として思想の根本まで覺醒してもよからうぢやないか。これからの世界的文明は僕等から與へるやうになつて來た。僕等が日本主義を唱道するのを見て、鎖國攘夷的だなぞといふ者があるのは、全くかゝることを悟らぬからである。僕等が日本人として自覺して行くのは、單に日本の文明を日本國内に發展させるばかりではない。それが直ちに世界の文明を一新する所以だ。僕等が立たなければ日本が滅んで行くばかりではない、世界の文明が滅んで行くのだ。これが我日本主義の傾向と信念とである」とは、當時の彼の主張であつた。

日本主義運動　以上の如く日本主義運動は、國民生活の思想的原理の樹立及びこれが、宣傳普及にあつた。而してそれが歐化主義乃至個人主義的思想の跳梁跋扈に對し、時々國民の覺醒を促し國粹主義、傳統主義の自覺を喚起したのである。然し大正中期頃までの日本主義運動は未だ政治的、社會的並に經濟的に、實際的革新を企圖するところまでは行かなかつた。それは單なる思想運動であり、覺醒運動たるに止まり、それが實行運動となり、改革運動となるに至つたのは歐洲大戰後、政治的、社會的乃至經濟的に諸種の問題が深刻化すると共に、デモクラシーの傳播や共產主義の擡頭を見るに至つてからのことである。

第八節　國家主義運動

大正中期までの日本主義運動が、思想運動や覺醒運動に止まつた如く、國家主義團體の組織乃至運動も、同期頃までは修養的或は對外的のものが多かつた。從つて國家主義團體が政治上社會上乃至經濟上の革新を目的として組織され、これが實行運動をなすに至つたのは、矢張り同期以後のことゝいはねばならない。

初期の諸團體　我國に於ける國家主義團體の嚆矢は玄洋社であ

る。玄洋社が平岡浩太郎によつて福岡に創立された當初は、舊幕時代の修養塾と同樣な青年の結社であつたが、頭山滿が、これを率ゐるに至りその雄大な人物により、後には天下の浪人志士の集りとなり、かの國家の興廢を賭した日清、日露兩戰役に於ける同社員の目覺しい活躍は、福岡の玄洋社をして東亞の玄洋社たらしめ、爾來同社から幾多の傑物を出したのみでなく、今日の國粹的國家主義團體は、多くこれを搖籃とした觀がある。

其後玄洋社から浪人會と黑龍會とが生れた。浪人會は頭山滿を中心としたもので、彼等は天下の浪人を以て任じ、盛に天下國家を論じ仁俠を以て立ち、國家有事の日に奉公の忠誠を致さんことを目的とするものであつた。

又黑龍會は明治三十四年二月、內田良平を中心に、伊東知也、葛西修亮、平山周等によつて組織されたもので、三國干涉の屈辱を雪ぎ帝國の振興、東亞萬年の大計を樹つべく露西亞、支那及び朝鮮等の事情を研究すると共に、一朝有事の日に役立つべき志士の養成を目的としたものであつた。

是等の團體は、國家主義に立脚し國運の進展、國權の發揚を以てその主眼とし、併せて亞細亞民族興隆の指導者たらんことを期したものである。

大正中期前の團體　以上の外明治九年に創立された西村茂樹の日本弘道會、三十九年の創立に係る蓮沼門三の修養團、大正六年に創立された坂本雄次郎の一心會及び國教宣明團の如きは、皆國家主義に立脚するところの修養團體である。

以上の如く大正中期以前の國家主義團體は國家の興隆、國威の發揚を目的として、對外強硬政策の實行を主張し、國難に際しては一命を賭して、祖國のために粉骨碎身したところの團體か、然らざれば歐化主義、個人主義乃至社會主義の跋扈跳梁に對して日本主義、國粹主義、傳統主義乃至國家主義を主張し、一般國民の修養向上を企圖したところの團體であつた。

かくの如く大正中期頃までの國家主義團體が、主として對外的團體または修養教化團體であつたことは、一面我國がこの期間において對外的に大飛躍を試み日清、北淸、日露の諸戰役を始め朝鮮の併合、支那革命の勃發、つゞいて歐洲大戰への參加等幾多の對外的大事件が發生して國家の興隆國威の發揚が、國民關心の最大要點であつたがためであり、他面にはまた議會政治並に資本主義經濟制度の弊害は、年と共に漸

く甚しきものがあつたにしても未だ憲政は進歩の途中にありとされ、資本主義に反抗しつゝあつた社會主義も、未だ多くの勢力を有するに至らなかつたがためである。この間かの大逆事件の如きが勃發したけれども、國民大衆は只管反感憎惡の眼を以てこれを迎へ、以後數年間は殆んど社會運動の影を認め得なかつた。

歐洲大戰當時の諸團體　然るに大正三年歐洲大戰の勃發以來、デモクラシーの思潮が世界的に傳播し、それが機緣となつて我國にも大逆事件後、全く屏息してゐた社會主義運動が再び擡頭し來り、大正六年露西亞の共產主義革命が成立するに及んで益々その氣勢を高め、全國的に擴大した勞働爭議と共に社會問題は頻發惡化し、終に社會主義全盛時代を現出するに至つた。

こゝに於てデモクラシー乃至社會主義の跋扈跳梁に對抗するため多くの國家主義または國粹主義團體の勃興を見たのである。先づ大正七年十月、急進的國家主義團體の搖籃ともいふべき老壯會が組織された。これは社會主義者、國家社會主義者、國粹主義者乃至國家主義者が一堂に會して、吳越同舟の觀があつたが、翌八年には大川周明等の猶存社結成運動が行はれ、他方においては上杉愼吉一派の興國同志會と高畠素之一派の提携よりなる經綸學盟が結成された。同時にまた意氣を以て立ち仁俠を本領とする大日本國粹會が、當時內相床次竹次郎等の盡力によつて結成され、社會主義團體の向ふを張つて、直接行動にその力を振ふことゝなつた。

猶存社　大正九年に入ると、當時支那革命軍の總參謀として、上海にあつて活躍してゐた北一輝を迎へて大川、滿川等が相結び猶存社が結成された。この結成は我國家主義團體運動に一時期を劃したもので、目的が國家社會の改造を企圖するにあつたことは、從來の諸團體に曾て見ないところである。彼等は北一輝が大正八年上海にあつて、四十日間斷食の後記草したといはれる「日本改造法案大綱」に基き、一の綱領政策の下に活動することゝなつたからである。

左翼運動の勃興　然し當時の一般國家主義團體は、多く左翼運動に對する反抗的團體たるに止まり、危險思想の撲滅を以てその主眼とした。當時は無政府主義者によつてサンヂカリズムが宣傳せられ、大正九年の春我經濟界が大恐慌に見舞はれてからは、その急進的、刺戟的、戰鬪的な直接行動は嵐の如く無產陣營を風靡し、勞働爭議が頻發すると共に非常に惡

性を帶びて來たからである。

大正十年に至つては第三インターナショナルの宣傳によつて、共產主義が次第に傳播せられ、夙くも同年秋には曉民共產黨事件が勃發して黨員の一齊檢擧を見たが、翌年夏頃より第一次日本共產黨の結成が行はれ、十二月に至つて正式に第三インタ日本支部として日本共產黨の成立を見、これと共に共產主義は我國左翼社會運動の指導的地位を占め、これに對應して新日本協會や赤化防止團が生れた。

赤化防止團　新日本協會は大正十年五月、山本悌次郎の首唱により國家主義學者によつて結成され、「充分なる活動精華ある貢獻は、必ずその社會に完全なる組織と秩序と國家權威の確立とを要求し、國家の無視を許容せず、故にかの危險なる思想行動の奔放を默過し得ざるは勿論、その國家內において、必ず共存共榮のためにする國民相互の協力扶助なかるべからず、是亦祖國發展、國民幸福の淵源たるなり」との主張の下に、言論に對する言論戰、思想に對する思想戰を展開し、盛んに大小パンフレットなどを刊行し、更に機關紙「共存」を發行して國家主義思想の宣傳普及に努めた。

また赤化防止團は翌十一年十一月米村嘉一郎を團長として結成された。その主眼とするところは皇室中心主義を標榜して、赤化思想の徹底的撲滅を期するにあつたから「赤化は社會秩序の根柢を破壞し、人類の幸福を呪咀するものなるが故に、本會は一死以てこれが防遏に任ずべきを誓ふ」といひ、且つ資本家の横暴と富豪の專恣とを戒飭し、社會主義と勞働運動の分離を要求した。その機關紙として「大鵬」を發刊し後に「赤防論陣」と改め、更に「新日本」と改題したが、同團員は言論よりは實行を主とし、猛烈に左翼運動の破壞を試み、血腥い幾多の事件を惹起するに至つたのである。

國本社　大正十二年に入つて、猶存社は內部の人的關係の不圓滑から解散したが、同年勃發した關東大震災や虎の門事件は國民に一大衝擊を與へた結果、國家主義者、愛國主義者等は一齊に起つて憂國の叫びをあげ、多くの愛國主義團體の結成を見た。このとき陣容を新にして大結成を遂げたのが國本社である。

國本社はもと東京帝大における新人會の、左傾運動に對抗して生れた興國同志會が、竹內賀久治の奔走によつて國本社と改稱し、平沼騏一郎を顧問として思想善導、國家主義鼓吹に盡力して來たものであるが、十二年の大震災後、國民精神作興の詔勅を拜した當時の平沼法相は、詔勅中の國本の二字に感銘し、野に下るや自ら會長となり、朝野各方面の名士を網羅して、こゝに國本社は國家主義團體の大本山たる偉容を現出し、機關紙旬刊「國本新聞」並に月刊雜誌「國本」を發行して、盛んに國家主義乃至國粹主義の宣傳普及に努むるに至つた。

國本社と殆んど同時に橋本徹馬の紫雲莊、大井成元を盟主とする軍人團體の恢弘會、清水行之助の大行社、寺田稻次郎の秋水會、武智德平の大日本國家思想善導會などの國家主義團體が生れた。

右の中大行社及び秋水會は、大正十三年六七月頃、當時世論を沸騰せしめた對米問題に激して生れ、その他は主として虎の門事件に刺戟せられて結成を見たものである。

行地社　大正十四年には、十二年に解散した猶存社の後を承けて大川周明一派の行地社が結成された。行地社もまた日本改造法案の趣旨に基いて社會改革を目指し、更に有色人種の解放を要求し、天に則り、地に王道を行はんとの理想を抱くものであつた。そして月刊「日本」を發刊すると共に、社會教育研究所を設置し、大學寮を置いて、青年の行地思想養成に努め、八月には大阪行地社が創立され、次いで京都行地社が起り、つゞいて全國の主要都市に多くの支部が設置されるに至り、實際運動に於ける彼等の行動は極めて急進的なものとなつた。

無產政黨運動　大正十年には、行地社の外片岡君惠の大日本護國會、村野金七、原島清等の同志會、大阪における大日本正義團、東大七生社などが結成され、翌十五年に入ると更に多くの國家主義團體が結成された。赤尾敏の建國會、北一輝、西田稅等の士林莊、後藤武夫の日本魂聯盟、增井潤一郎の大日本殉國會、大和茂樹の立憲維新黨、石田徹の一心會、早大國防研究會、京大の猶興學會などがその重なるものである。

かくの如く大正十四年から十五年にかけて、多くの國家主義團體が生れたのは、十四年に普選が實施され、同年末農民勞働黨が結成されて即日禁止となり、翌年三月に勞働農民黨として更生したのを始め日本農民黨、社會大衆黨、日本勞農黨が續々結成されて、無產政黨運動の全盛時代を現出したのに對應したものである。

共產黨の擡頭　かゝる間に大正十二年夏の檢擧によつて、一頓挫を來した日本共產黨は、十四年の夏頃に至つて再建を企て

翌十五年末にこれが創立大會を行ふに至つた。是等の事情の下に共產主義は再び擡頭し來り、福本イズムは無產陣營の指導理論として喧傳せられ、左傾運動は次第に活氣を呈して來たが、更に昭和三年に入つて機關紙「赤旗」を發刊し、一般に黨の名稱を大衆の面前に露出して、積極的活動を試みるに至つた。茲において同年三月には所謂三・一五事件が起つて、同黨員の大檢擧が行はれたのである。

かくの如き狀勢に刺戟されて、昭和二年には遠藤友四郎の錦旗會、丸山德次郎の皇國旗團、翌三年には小島保次郎の七生旗團などが結成された。何れも共產黨運動に對抗するもので、或は錦旗を奉じて社會改革に當らんことを期し、或は皇室中心主義を奉じて外來思想の排擊を企圖し、或は帝國憲法を尊奉して國家社會の秩序破壞者に挑戰せんとするなど、その活動は目ざましいものであつた。

これと同時に當時の對支外交の軟弱を憤つて、岩田愛之助の愛國社や、內田良平の內治外交作振同盟などが結成された。

日本共產黨事件　日本共產黨は昭和三年三月十五日の三・一五事件を見たが、殘黨分子は同年十一月頃より再建に着手し、やがて全國的組織が出來上つたため、翌四年四月十六日に至つて四・一六事件が起り、多數の黨員が縛に就いた。

この前後に亘つて結成された國家主義團體には前に述べたものゝ外、草野馨の戊申農民會、熱田佐の國心會、富岡彥造の正義同志會、河野龜芳の大日本青年護國聯盟、北吟吉の祖國同志會、大川周明指導の愛國興國學盟などがあつた。

昭和初期の運動　要するに昭和三四年頃までの國家主義團體運動は、主として社會主義乃至共產主義運動の進展に伴れ、これが排擊を目的としたものか、然らざれば歐米追隨主義の軟弱外交を憤り、且つ亞細亞民族の解放を要求して結成、運動されつゝあつたものである。

その間猶存社並にその流を汲んだ團體が、國家社會の改革を旗印としたことは、それ以前の國家主義團體に對して、一時期を劃したもので、今日のファッショ化運動の源泉をなすものといふことが出來るが、當時においてはなほ未だ急進的實行運動に出づるほどの時機には到達してゐなかつた。

即ち歐洲大戰前の國家主義運動は、對外的運動は別として主として盲目的なる歐化主義を排し、國粹を基礎として西洋の長所を採用せよといふにあつたが、大戰後デモクラシーの流行、社會主義の再燃、續いて共產主義の傳播を見るに至つて、國家社會の革新は漸く一般國民の問題となり、國家主義團體をして日本國家の革新は、我國獨自の國體に準據して行はるべきであり、歐米の模倣によつてなさるべきではないとの主張を確持せしむるに至り、殊に共產主義の傳播に對しては、極力これを排擊すべしとのことである。

第九節　運動のファッショ化

昭和四・五年は實に多事多難な年であつた。四年四月十六日には、共產黨第二次檢擧の四・一六事件が起り、同八月以降には鐵道疑獄、賞勳疑獄、朝鮮疑獄などが矢繼早に摘發された。その矢先同七月に濱口內閣が成立されたが、整理節約の緊縮政策に祟られて、不景氣のドン底へと轉落し、失業者は日を逐ふて增加し、中小商工業者の沒落は月と共に頻出したのであつた。

五年一月には金の解禁を見たが、經濟界には何等回復の兆は見えず、不況は愈々深刻化した。その上同じ月に開かれた倫敦軍縮會議は、政府と軍部との間に確執を生じ、四月に調印を見た該條約は軍部並に愛國主義者の憤懣を買ひ、軟弱外交批難の聲は益々高まつて行つた。かくて十一月十四日濱口首相は、愛國社員佐鄕屋留雄のために東京驛頭において狙擊された。佐鄕屋は倫敦軍縮會議に憤懣し、且つ經濟界の不況を呪つてこの擧に出でたものである。

新興團體の擡頭　かゝる狀勢に刺戟されて國家主義團體は、著しくファッショ化した。即ち彼等は國家の維新、社會の改革を目指して邁進せんとするに至つたのである。共產主義を排擊すると共に資本主義を否定し、既成政黨を排斥すると同時に議會中心主義を否認し、そして一君萬民、君民一家の大義に基いて天皇政治を徹底し、產業大權の確立によつて、全產業の國家的統制を實現し、以て新日本を建設せんとするのがその目的であつた。

この情勢を反映して昭和五年には天野辰夫、中谷武世等の愛國勤勞黨、愛國無產青年同盟をはじめ、長澤左一郎の尊皇急進黨、里見岸雄の國體科學聯盟、伊東祐弘子の關東國粹會本部などが組織され、六年には內田良平の大日本生產黨、津久井龍雄の全日本愛國者共同鬪爭協議會、宮越信一郎の國民解放社などが結成された。又外交問題を主眼とするものとしては頭山滿、朴春琴等の滿鮮問題解決同盟、井上淸純の滿洲

問題解決同盟、橘富士松の東亞振興會、一條實孝公、植原悅二郎等の外交同志會などが結成され、學生團體としては日本學生聯合會、東京愛國學生聯盟、京都愛國學生聯盟などが組織された。

不祥事件の續發　殊に昭和六年に入つてからの、世界經濟の破局的變動に伴ふ我國經濟恐慌の深刻化、並に滿洲事變の突發は、既にファッショ化した我國右翼運動に拍車をかけ、七年二月には井上前藏相、團琢磨等を暗殺した、所謂血盟團事件の突發となり、續いて同五月には五・一五事件の激發となつた。此事件により犬養首相の暗殺が、陸海軍々人によつて行はれたといふことは、國民の一大驚愕であつたと同時に右翼思想が軍人の間に浸潤してゐたかを物語るものであつた。

かゝる狀勢の下に七年に入つては、時局轉向派たる赤松克麿一派の日本國家社會黨、下中彌三郎一派の新日本國民同盟をはじめ、永井了吉の勤王維新同盟、津田光造の日本村治派同盟、大川周明の神武會、大日本青年同盟、東大朱光會、全日本學生協議會、全國愛國青年聯盟、日本國家社會主義學盟、日本ファッシズム聯盟等が結成された。

これより先昭和五年に倫敦で開かれた軍縮會議による倫敦海軍條約は、我軍部の非常なる憤懣を買ひ、青壯年將校をして憤激の餘り、終に結束して國難に當るべく右翼聯盟を結成せしむるに至つた。かくて統帥權干犯問題や、草刈少佐の列車内自殺事件等が發生し、海軍部内には沸き返るやうな紛亂が續く一方、陸軍部内においても不平不滿は山積され、不穩なる形勢は潛行的に進展しつゝあつた。それは日清、日露兩戰役當時における軍部全盛時代を過ぎてからは、日獨戰爭其他の事變があつたにも拘らず、上下を擧げて文弱に流れ、文化運動が次第に躍進を續け、政黨政治は益々勢を得て有らゆる暴威を振ふの趨勢を馴致し、更に世界の各方面において平和淺望の聲が頻りに起り、我國も諸種の平和條約に加盟し軍縮會議にも欣然參加するなど、軍部輕視の風潮を釀成し、勢に乘じた政黨は軍部大臣の文官制をさへ唱道するに至つたから、軍部の硬骨將校は一層前途を憂ひ、内々現狀打破を企圖するに至つたからである。

軍部と政黨　然るに一方既成政黨は、憲政常道論による政權授受の確實性に自負し、その行動は年を逐ふて橫暴に流れ、却つて政黨による專制政治が行はれるのみでなく、その間幾多の疑獄事件が續發して、政黨の腐敗墮落を暴露するに至つた

から、軍部の狀勢は漸次險惡の兆を示し、終には進んで中產階級の味方として、一般民衆の結合を求め、橫暴陋劣なる政黨政治の反省を求め、更にこれを排擊せんとする急進的運動が起り、こゝに軍部對政黨の抗爭は暗々裡に尖鋭化の一路を辿るに至つた。

この時に當り從來暴力團を以て見られてゐた右傾團體は眞劍に政治の革新を企圖するに至り、政黨政治を非とすることにおいて軍部との意見の一致を見、こゝに軍民提携して、既成政黨打破に邁進する機運を釀成した。かくて昭和六年の暮、軍民聯携の最强力な愛國運動を起すことゝなり、全日本愛國者共同闘爭協議會が生れた。これは天皇親政を實現するため反政黨主義、反資本主義を標榜する革命的運動團體である。この日協の參加團體は日本國民黨、急進愛國黨、行地社、大日本青年同盟、日本勞働會等でその前衞隊は、血盟團事件に關係を有つてゐたことが後に判明した。

右に關聯して對外硬同盟の對外同志會が生れたが、かゝる間に滿洲事變が勃發して是等の運動に拍車をかけ、終に五・一五事件を惹起するに至つたのである。

斯くの如くして、國家主義運動は急激にファッショ化して所謂急進的右翼運動の擡頭となり、その間無數の右翼團體が發生すると共に、幾多の重大事件を突發せしむるに至り、遂に二・二六事件の如き一大不祥事件を勃發せしめた。

二・二六事件　昭和十一年二月二十六日の早朝近衞歩兵第三聯隊、歩兵第一聯隊、歩兵第三聯隊、野戰重砲兵第七聯隊などの將兵約千四百名は首相官邸、齋藤内府邸、渡邊教育總監邸及び、牧野前内府の宿舍となつてゐる神奈川縣湯河原の伊東旅館、鈴木侍從長官邸、高橋藏相邸を襲ひ、齋藤内府、渡邊教育總監、高橋藏相を殺害し、鈴木侍從長に瀕死の重傷を負はせた。首相官邸においては總理大臣岡田啓介の從弟松尾大佐を首相と間違へて卽死せしめ、更に勢ひに乘じて是等の叛亂部隊は、麴町區永田町附近の要所に屯して鎭壓に應じなかつたが、戒嚴諸部隊將兵の必死の努力により、流血の慘を見ずして二十九日午後全員の歸順を見たのである。

この事件において青年將校が、妄りに兵力の一部を僭用して、かゝる一大不祥事を帝都の中心において惹起するに至つた動機については、當時東京陸軍々法會議の判決理由書に次の如く記されてゐた。卽ち「この非常時局に處し、當局の措置徹底を缺き、内治外交とも紊亂して振はず、政黨は黨利に

墮して國家の危急を顧みず、財閥また私慾に汲々として國民の窮狀を思はず、特に倫敦條約成立の經緯において、統帥權干犯の所爲ありと斷じ、かくの如きは畢竟元老、重臣、官僚、軍閥、政黨、財閥等、いはゆる特權階級が國體の本義に悖り、大權の尊嚴を攪亂するの致せる所なりとなし、一君萬民たるべき、皇國本然の眞姿を顯現せんがため、速かに是等いはゆる特權階級を打破して、急激に國家を革新する必要あることを痛感」した結果であつて、もと〳〵純忠の精神から發した研究思案であつたが、これが「漸次獨斷偏狹となり、知らず識らずの間に正邪の辨別を誤り、國法を無視するに至り——遂に統帥權の根本を案り、安りに兵力の一部を僭用するも已むなしとなす危險思想を包藏するに至つた」もので、このことは事件の勃發と同時に、彼等の發した趣意書にも、「內外重大危急の際元老、重臣、財閥、軍閥、官僚、政黨等の國體破壞の元兇を芟除して大義を正し、國體を擁護開顯せん」とする旨が記してあつた。

この事件の波紋として、岡田內閣は當然崩壞し、軍事參議員を始め、關係師團長以下もそれ〳〵責を引いて辭職或は休職を仰せ付けられたが、一方軍部においても事件の徹底的な善後收拾と、國軍の再建を期するため軍司令官、師團長會議が東京に召集されて軍紀の肅正、統帥系統の恪守、將校の政治的關心等について意見の交換を行ひ、中央地方を通ずる全陸軍の肅正に關する、一大方針が確立された。

かくて一時全國民を震撼せしめた事件も、軍法會議の判決を最後として一段落を告げたが、さらばと言つて我國の右翼運動が、これに依つて下火となつた譯ではない。非常時局の掛聲と共に、却つて益々旺盛となつてゐる狀態であるが、全團體を通じてその間に何等の統一なく、各自の主義目的に從つて、思ひ〳〵の行動をしてゐるのが現下の情況である。

第十二編　文學知識

第一章　汎論

第一節　文學の意義

文學とは單に詩歌や小說に限つたものではない。また美文や戲曲のみが文學でもない。支那の孔子や孟子の論說文の如きものから、西洋のマーコレーの文章の如きも、日本でいへば紫式部の源氏物語の如き、芭蕉の「古井戸や……」の句の如き、悉く立派な文學なのである。從つて一口に文學といつても、その範圍は極めて廣い。

先づ文學の目的から始めて、その起源や目的などを明らかにし「文學とは何ぞや」の概念から說き進めるとしやう。

文學の目的　文學の極致は「生の活現」とか「生の味ひ」とかにある。昔から文學の目的に「快樂」と「實際的意義」の、二つの極が擧げられて相動搖してゐるが、快樂といひ實際的意義といひ、歸するところ「美」の一成分となつて、共に文藝の中に加はるのである。實際的意義ばかりで快樂が缺如すれば、文藝としての價値がないと同樣に、快樂のみで實際的意義がなくても文藝とはならないのである。

例へば實際的に道德を說くのみで、快樂が伴はなければ修身の書物になるし、快樂のみで實際的意義を缺くならば講談本や落語となつてしまつて、共に藝術品といふことは出來ないこの二者の融合したものが「美」でそれが眞の文藝である。

尤も文學の目的は人生の「眞」を現はすにあるのだから、この「眞」の含まれてゐる道德的意義ならば、必ずしも排斥すべきでない。かゝる場合は「眞」が實際的意義となり、快樂と融合して「美」の要求を充たさうとするのである。これを反對に考へて、文藝を價値あるもの、嚴肅なものとするため「眞」を加味するのではなく、專ら「眞」を發揮せんと努力した結果、道德的な文藝となつたとも考へられるのである。この場合はいふまでもなく「眞」が主となり「美」は從となる譯である。

人生の「眞」を描寫する文學は、書いてある事實か、直ぐに書いてない全體としての人生のやうなものを暗示するもので、讀む中にかゝる人生もあるのかと、樣々な人生問題を考へさせられるが、然かもその何れにも滿足が出來ず、無限に

欲求の情を働かすところに、また無限の快味が感じられるのである。これが「生の味」で、文學の極致ともいふべき一種の宗教的情趣であり、この情趣が新宗教や新道德の出發點となるのである。

文學の起源　文學といふ言葉の起源は支那より發してゐることは、論語を見てもよく解る。尤も論語にある文學といふ言葉は道德を扱つた學といふ意味に用ひられてゐるが、他の德行や政治などゝ區別して、一種特殊なものと考へられてゐたやうである。史記にも「獄舍文學」などゝいふ言葉がある。これは論語よりも意味が廣くなつて、一般文學書册に記載したものといふ意味になつてゐる。後漢書には「有少大志不好文學」と記され、中には恰かも今日文學がある一部の人には、政治道德、實業などの實際方面と違ひ、遊戯に等しいものと考へられてゐるのと同じ樣な意味に使はれてゐるものもある。然し六朝の頃になると、文學といふ言葉は漸くはつきりして來て、殆んど今日用ひられてゐる意味と同じになつてゐる。

西洋では英語でも佛蘭西語でも、獨逸語でも露西亞語でも皆羅典語のリテラチュラといふ語から出た言葉を使つてゐるが、これは「凡て文字に記錄したものといふ」ことを意味し支那の「史記」の中に用ひられたところの文學と相通じてゐる。然も西洋でも近世に至るまで文學に對して一定の定義を下されてゐなかつた。羅馬時代には文學とは單に文字といふ意味にとつた人もあり又文典といふ意味に用ひた人もある。シセロの如きは廣く學問といふ意味に使つてゐた。羅馬時代のみならず文藝復興の時代になつても、まだ今日用ひられてゐるやうな文學の意味は定まつてゐなかつた。それが十八世紀頃になつて、英國や佛蘭西などの文學が盛んになるに從ひ、漸く確定して來たものである。

然し今日と雖もなほ文學には確然と定まつた定義はない。各人各種の定義を下さうと努力してゐるから、玆では是等の人々の定義を基礎として一通りの意味の說明を述べることにする。

文學の形態　文學を廣義の分界からいふと、文學は言語に表はされたものといふことが出來る。即ち手眞似や、身振りでする動作や、線や色彩で表はされる圖畫などは文學ではない。口で歌つてゐる歌や口傳で語る話などは如何に立派であつても、それも亦文學とはいひ得ない。尤も斯るものも皆文學だといふ人もあるが、西洋のリテラチュラといふ語源や、支那

の文學といふ言葉の意味が、皆文字と密接な關係を持つてゐるし、其他の事情から考へても單に言葉に現はされたものといふだけでは物足りない。そこで言葉といふものに次で起る文辭によつて現はされたものが文學であるとすれば間違ひがないやうである。

文學の內容　文學の內容について、マシュー・アーノルドは、これを廣義に解釋して「凡て書册から來る知識は文學である」といつてゐる如く、文學には知識の分子があることがわかる。然し知識の分子は法律書や數學書の方が、文學書よりも遙かに多量であるから、先づ文學と夫等のものとの異る點を見出さねばならぬ。そこで違つた第一の點として擧ぐべきは文學は數學や法律と違ひ情的分子を含むといふことである。科學は凡て理智の產物であり、科學書はこれを書く人も讀む人も何等感情を動かす必要はない。こゝが文學の他の學問と異なる重要な點である。情を取扱ふ情の分子が入つて來ると、これを書くものにも人格や主觀が現はれ、個性が表現されて數學の如く簡單にゆかなくなる。文學が個性の表現だといはれてゐるのは、情の力が加はるからである。科學書は眞理を眞理として現はすが、文學は知識を加味した感情を表現するものである。例へば科學者が一本の草木をとつて觀察する場合、その形態の組織、變化の狀態及び他の植物との相違など飽くまで現知の作用で、事實と法則とを求めやうとするが、文學ではさうしたことを第二段にし、主としてその草木の生命を味はうとするのである。この二つの觀察の態度は全く兩立し得ないものではないが、その一つの、科學的態度か文學的態度かゞ、他を壓して優越の地位に立つことになり、科學と文學とに分れるのである。要するに文學の內容は知識と感情の二つであるが、中でも情の分子が最も大切である。

文學と情　文學の主要成分は情であるが、その情には次のやうな種類がある。即ち我々の心の中に客觀的な知識現象が起つたとき、これに反應して起る情意の作用には三段又は四段の狀態がある。例へば路傍に得體の知れない妙なものが横たはつてゐるとする、それに氣のつくのは知識作用で注意を集中し、そのものゝ正體を見究めて自分の態度を決しやうとするのである。そしてそれが行倒れの人たと知ると、若し懸り合ひにでもなれば面倒だからと、行き過ぎるとか、そんな心配がないと思へば立ち停つて見るとかする。こゝまでは第一段の狀態で我といふものを中心に直下した我的と名附けるもの

である。それからつく〴〵とその行倒れの身の上を考へて、可愛さうだとか何んだ馬鹿な奴だとか思ふ。即ち同情とか反感とか〻起る。これは所謂身につまされて相手の情に立ち入つて考へるので、これは第二段の半我的狀態である。ところでこの批評的になつた心持は、直ぐ何んとか救つてやりたいとか、こんな奴は自業自得だから苦しめて置けばよいといふやうな第三段の實行的階段に移る。これが道德的感情であるこの感情が第三段まで進むと、審美的同情といふものになるのである。全然相手の情を自分に移して主客が一つとなり、我の情で相手の情を動すやうになる、これが美意識といふものである。美意識は更に美的情緒と美的情趣の二つに分つ。美的情緒とは前述の如く色々な情緒が客觀に合した場合をいひ、さういふ心持がある時間を經過した後に、色々な知識や情と解け合つて生ずる、極めて漠とした事後感情を美的情趣といひ、これが第四段の感情である。文學はこの第三段から第四段の情的狀態を描いたものでなければならぬ。驚くとか憫むとかいふ心持を通り越して、悲しいといふ境地に入つて書くか、その驚き憫むのが自分でありながら、自分に眺めて同感することが出來るやうな象で書くものでなければ藝術とはいへないのである。第一段、第二段の主觀狀態を通り越し、第三段第四段の客觀の狀態に入らなければ藝術とはならないのである。

第二節　文學と實生活

文學の目的が生を實現するものであるとすれば、文學と實生活との關係が當然問題になつて來る。更に廣くいへば人生には何んのために文學が存在するかと言ふことになるが、すべて藝術を作つたり觀賞したりするときに純藝術的になる心持は、これを消極、積極兩方面から說明することが出來る。藝術以外の實生活であるところの我々が、日常營んでゐる感覺、思想、情意など種々の活動はすべて、自己の保存及び擴張などがその目的で、從つて凡て一局部的に働くものである。そのために起る快樂の感じや苦痛の感じは、自己の利害に關係して起るもので、自分に利益になるものは快感となり、自分に害のあるものは苦となるのである。歸するところ實生活なるものは、人の利害關係を中心としたものである。これに對して藝術活動には自己の利害感は全然なく、同時に一局部から來る快感や、苦痛の感をも持たない。これが文藝の消極的方面である。一方

これを積極的方面から見ると、手や足の活動をしない代りに、心の活動が生き〳〵と行はれて、前述のやうな人生の妙味を味ふのである。一局部に拘泥して常に、自己の狹い利害にあひ喜んだり、悲しんだりしてゐたものが、靜かに局部我から脫して全我の生の意義に味到することが出來るのである。

第三節　文學の種類

文學は色々の種類に分れてゐるので、その種類を分つことはなか〳〵至難である。その分け方についても色々議論はあるが、外形の上から横に分けるときは詩と散文となり、その內容であるところの作家の態度の、表現の仕方から縱に分けると客觀の文學、主觀の文學、客觀兼主觀の文學の三つになる。これが最も多くの人の一致する分け方である。

詩　詩とは主として情によつて成立ち、その外形を韻律を持つた言葉に托するものであるが更にこの詩を文學の縱の分類法に當てはめると客觀詩（叙事詩）主觀詩（抒情詩）客觀兼主觀詩（戲曲）といふことになる。

散文　散文はその外形の表現を、律語に托せざる情の文學の總稱で、大體次の如きものがある。

散文を縱の文類に當てはめて見ると、散文で書いた客觀の文學の代表的なものは小說である。普通に小說といはれてゐる言葉の意味は、隨分漠然として甚だ廣い意味を持つてゐるのであるが、これを分類するとローマンスとノベルの二種になる。

ローマンスは叙事詩風の小說で、例へば西遊記とか八犬傳とか、ロビンソン・クルーソーといふやうな事件や筋を主とするものである。

ノベルは劇詩風の小說で紅葉、露伴などから今日の作家の書くもので、人物を主とし、事件を從にして寫したものである。この中ノベルの方は近世になつて發達した所謂新らしい小說で、現代の小說の傾向はすべて後者に屬してゐる。

小說に似たものは短篇で、主として極めて小さい人生の一局部を描き、それで人生の全局面を味はせやうとする行き方のものである。

主觀的散文　散文で書いた主觀的の文學には、色々の象をした抒情文や美文や評論文の一部がある。然し評論は智力に訴へるよりも、主として感情に訴へて書いたものでなければならぬのである。

戲曲　戲曲は藝術的價値のある劇の臺本のことで、客觀象主觀の文學に屬し、その形式が律語、即ち韻律をもつた言葉で出來てゐる。

雜文學　以上の小說、抒情文、脚本などを散文の種類として列擧して來たが、散文の中にはなほ是等に入れることの出來ない一部の歷史や、傳記や、日記類や、紀行文や、隨筆ものなどがある。是等は詩歌や小說などの純文學に對するときは雜文學である。

第四節　舊文學と新文學

文學は古くからあり、我國の如きも神世の昔からあつて、各時代々々の思想を反影し今日に及んでゐる。然しこれを文學の內容の上から大別すると、明治以前の文學と明治以後の文學との二つに分けることが出來る。明治以前と以後とではその年數からいふときは、餘りに差が大き過ぎるやうであるが、文學の本質から考へると日本の文學は、明治維新を期として根本的に以前のものと違つて來たのであるから、この類別は適當であるといはれてゐる。

德川時代のものでも又はやはり以前の所謂舊文學は總て美しい綺麗なところや面白い事件のみが、極めて鮮やかに仕組まれた筋を主として作り上げられてゐる。言葉を換へていへば理想的、傳奇的、技巧的、曲據的であつて、自然界や人間界に起る事柄を有りのまゝに寫さずに、成るべく綺麗にしたり、大袈裟にしたり、奇拔にしたり、有らゆる人工を加へて出來るだけ面白可笑しく作り上げてゐる。そのため人間界のことを描いたものも人間離れがしてをり、この點が明治以前の舊文學の特色である。これに反して明治以後殊に日露戰役以後の我文學は、世界思潮の支配を受けて、自然主義の勃興となり、有りのまゝの自然、ありのまゝの人生を描くことに努め、生きた言葉で生きた事實を描くやうになつた。然かもその後と雖も新浪漫主義の影響と世界思潮の影響を極度に受け、絕えず動いて止まない狀態にあり、こゝに新文學の特徵があるのである。

第二章　文藝の傾向

第一節　文藝思想の二大潮流

對立する二大思潮　單に文藝思想に限らず、有らゆる人間思想史上に於て理想と現實精神、物質、靈と肉とは絕えず相對立し

相衝突し、相爭鬪してゐる。そして理想と精神と靈とは常に一聯となり、現實と物質と肉とは又他の一聯となつて各々堅く相結び、兩々相對立し來つたことを史上に見るのであるが、前者は希伯來主義、後者は希臘主義の流れを汲んで、各種思想の潮流をなし、これが古今に亘つて、歐洲の文明と思想とを縱貫する二大潮流となつてゐるのである。

文藝復興運動　歐洲近代の初頭に起つた文藝復興運動は、中世紀に於ける希伯來主義即ち基督教主義に對しての希臘主義の復興であつた。元來理想的であり、精神的であり、靈的であるべき希伯來主義が、全く形式に流れてその內容が空虛となるに及んで現實的、物質的、肉的な希臘主義が、非常な勢を以て擡頭し來つたのである。爾來希臘主義は第十八世紀に於ける啓蒙時代に所謂革新思想として發揮したる活動を示し、有らゆる方面において時代思潮を支配したのであるが、その最も旺盛を極めたのは十九世紀における自然科學の勃興期であつた。

二大思潮の浮沈　これを文藝史上に就て見ると、文藝復興以來古典主義が歐洲の文壇を支配し、殊に啓蒙時代においては擬古主義の隆盛を見るに至り、希臘主義文藝の模倣が一代の風潮をなしたのである。それが第十九世紀の中葉に至り自然科學の勃興につれて、自然主義が希臘主義の現實的、物質的、肉的特色を極點にまで發揮し、科學萬能の潮流に棹して、一世の文壇を風靡したのである。然しそのために希伯來主義が湮滅して終つたのではない。爾來第十九世紀の前半に亘つて隆盛を極めた浪漫主義は啓蒙時代における革新思想家の隨一たるルーソーに發して、希伯來主義の流を酌んだものである。これは獨り文藝上のみならず哲學、倫理、教育など諸他の思想を支配したが、希伯來主義が文藝上最も力强き發現を見たのは、第十九世紀の中葉前後から、自然主義が歐洲文壇を支配しつゝあつた當時、東歐露西亞にも隆盛を來し、終には世界の思壇に偉大な影響を及ぼすに至つた人道主義においてもあつた。この人道主義は希伯來主義の理想的、精神的、靈的なる特色を最も明瞭に、最も强烈に發揮した文藝であつた。

ルーソー

かくの如く希伯來主義に反抗する希臘主義によつて、近代の幕は開かれたのであるが、その近代から最近代に亘つて、

この兩主義は依然相對立し一浮一沈しながら紛々として、絶えざる二大潮流をなし來つたのである。

二潮流の融合　然るに第十九世紀末の懷疑時代を經て、現代に入るや、新にこの二大潮流、兩主義の合致融合といふ偉大な企てが始められた。兩主義の特質たる理想と現實、精神と物質、靈と肉との合致融合がそれである。從來といへども、兩者の對立、衝突、爭鬪は一面からいへば、兩者を合致融解せしむるための準備であつたとも見られるのであるが、現代におけるこの企ては、當にその機が熟して、自から初められたものといはねばならない。自然主義は科學萬能の夢がさめると同時に行き詰り、世紀末の頽廢時代を招來したのである。それを救ふには人道主義は、餘りに宗教的に偏り過ぎてゐた。卽ち自然主義において現實と物質と肉とを見た人々は、又人道主義において理想と精神と靈とを見たのである。そしてこの現實と理想と、物質と精神と、靈と肉とを合致融合せしめる偉大な企ては、既に實現の緒に就いてゐる。これを哲學方面に見るならば實用主義といひ、新理想主義といひ、生命主義といひ、皆この最新の潮流に棹すものであり、その文藝上に現はれたものが新浪漫主義の諸相なのである。

第二節　擬古主義（古典主義）

擬古主義とは英語のクラシシズムに當り、第十七八世紀における歐洲文藝思潮の總稱で、當時佛蘭西を中心として歐洲の文藝が、すべて希臘羅馬の古典に則り、その精神乃至樣式を模倣せんとした思潮を名づけたのである。

希臘羅馬の藝術は統一、均齊、明晰、規律を重んじ、一言にして盡せば整然たる形を愛した。感情よりも理智を尊び、その理智によつて凡べてを工夫し、調和するといふことを藝術製作上の規矩としたのが希臘羅馬の藝術である。均齊、統一、明晰、規律などゝいふ理智的條件は、要するに事物の形式に宿るものであるから、それは同時に形式的であるといふことが出來るのである。

そして又擬古主義は現實平明の事物に、その形式の美を求めたところから、その藝術は形式的であると同時に現實的な特徴を有つたのである。故に擬古主義は其特色として理智的、形式的、現實的であるから整然としてはゐるが、冷たい智巧が勝つて人間本然の感感は不自然に抑壓されて了ひ、從つて其內容が空虛となり、唯だ在來の固定した法則や標準にのみ囚へられた結果、自然と模倣に陷り、個性とか創意とか、又は情熱とかいふものは、殆んど認められないものとなつて終つたのである。然し形式の典雅壯麗なこと、希臘羅馬の精神を復活せしめたことなどは、擬古主義が文藝史上に特殊の地位を有すべき點であるといはねばならぬ。擬古主義文學の代表的作家としては佛蘭西のコルネイ、ユラシーメ、獨逸のレッシング、英吉利のドライデン、ポープなどを擧げることが出來る。

第三節　浪漫主義

浪漫主義は、第十九世紀の初頭に起つた文藝上の大運動で、最初の火蓋を切つたのはジャン・ジャック・ルーソーの「自然に還れ」といふ言葉であつた。それは從來の文藝が甚しく唯理主義、擬古主義に支配されてゐたのに反抗して起つたものである。擬古主義が因襲の型にはまつてゐたのに對し、飽くまでも自由を重んじ、模倣を排して獨創を尙ぶと共に、擬古主義が徒に、智巧に縋り、形式の末に墮してゐたのに對し、人間自然の情緒を主として內容に重きを置き、想像を恣にして超現實的の材料を取扱はんとしたのである。熱烈奔放なる情緒の動くに任せ人工的な小細工を避け、內容を主として形式打破に力を注いだのである。

その內容は一面から見れば自我であり、一面から見れば理想である。かくて個性が尊重され、主觀が重んぜられたのであるが、想像は科學的精神を缺いてゐた當時の弊として、動もすれば空想となつた。然も彼等の揭ぐところは、時代においても場所においても現實を超越し、そして中古がその恰好な時代となり、神祕界が恰好の場所となつた。卽ち空想的、超現實的な浪漫主義の特徴は、更に中古的、神祕的な特性を加へたのである。浪漫主義が中古主義と呼ばれるに至つたのはそれがためである。

ンロイバ

この派の作家としては、佛蘭西にユーゴー、メリメ、スタンダール、ミュッセ、ゴーチエ、獨逸にはゲーテ、シルレル、ハイネがあり、英吉利にはまた最も華やかな浪漫主義時代を現出し、クーパー、ブーク、バーンスを經て、ウォーヅウォース、スコットなどが現はれ、更に浪漫主義の代表者と呼ばれた、バイロン、キーツ、シエリーの三詩人が出たのである。

第四節　理想主義

理想主義は寫實主義に對して、精神的な高尚な情緒を強調し表面に現はれない精神的價値を示さうと努める態度である。この態度は表面の混沌を通じて、その底に流れてゐる善なもの、久遠的なものを探し出さうとするもので、人生の一種の樂天的な見解に基礎を置いてゐる。

この意味からいへば、現實の小說の多くは理想主義的である例へその表現の方法や形式が寫實主義であるとしても、作者の自然乃至人生に對する態度は多く理想主義的だからである。

第五節　寫實主義

寫實主義は事實を有るがまゝに描寫しやうとする主義で理想主義、浪漫主義に對して第十九世紀後半に起つた文藝上の傾向であり、自然主義の前身ともいはるべきものである。

寫實主義は浪漫主義の理想的、抽象的な點を排して飽くまでも現實を對象とし、共に個性を重んじながら、浪漫主義の主觀的、感情的な點を排した。自然に對する態度においても、浪漫主義は自然の美に、自己を同化せしめんとしたが、寫實主義は自然そのまゝを、客觀的に描寫しやうとする。一方が美を求めやうとするに對し、他方は事實を求めんとするものである。そのため寫實主義は客觀的、理智的、實際的で自然主義に似てはゐるが、飽くまでも、事實そのまゝを描寫しやうとする。これに對して自然主義は觀察と分析とを基礎として、物事の眞を描かうとするものである。

寫實主義がやがて自然主義に進展して行つたのは、一歩深く突込んで行く上から當然の成行である。この主義の代表的作家としては、獨逸のヘッベル、露西亞のクープリン、アルツイバーセフなどが擧げられ、バルザックもこの派に屬するものとされてゐる。

第六節　自然主義

第十九世紀の中葉近代科學の勃興と共に、科學的精神が旺盛となつて、一切の解決は科學にありとされた時代、この科學的精神を基調として生れたのが、自然主義文藝であつた。從つて浪漫主義が主觀的、理想的、空想的であるのに反して、自然主義は客觀的、理智的な現實的の文藝である。

有りのまゝに人生を描くことを目的とし、飽くまでも客觀の

まゝに描寫せねばならぬとした文藝で、ゾラやフローベルやモーパッサン等は、皆この立場から小說を書いた人達である。フローベルが、藝術と作者とは全く無共通であるといひ、テーヌが「自然の再現を極意として、作者の個性を沒しなければならぬ」といつたのも、皆自然主義の立場を語つてゐる。

自然主義は原因結果の法則によつて凡てを支配するから、自然主義の作者も自然そのものと同樣の態度で、あらゆる事象に對し唯だ觀たゞけのことを描けばその役目はすむのである。意見を述べたり、解決したりする必要はない。

ゾラ

この無解決のまゝに放置する態度こそ、自然主義の著しい特色であり、强ひて解決することは獨斷であり、獨斷は非科學的であるとしてこれを避けるのである。又自然主義は單なる人情を描くことに滿足せず、深く心理に突込んで行かうとする。心理を描くには生理狀態に觸れなければならぬとして、生理にまで達しなければ止まないのである。ゾラやモーパッサンの作にはそれが著しく現はれてゐる。

又自然主義は好んで暗面描寫し、人生と社會の缺陷と醜惡とを容赦なく描き、社會の暗黑面を白日の下に暴露した。それが人生と社會の眞であるから已むを得ないとしたのである。そして常態を離れた病的現象にも着眼したが、それは近代精神が人間を病的にした結果、人間の病理を科學的に解剖しやうとしたのである。この外斷片的であること、個性の描寫の尊重されたことなども自然主義の特徵である。

第七節　本來自然主義及徹底自然主義

自然主義の純客觀的態度を以て創作に臨まんとする主張を特に呼んで本來自然主義をいふのである。科學的精神を基礎とし、正確如實に人生を描かんとする自然主義は、その方法の方面からいふと、浪漫主義が歌ふといふ心持に富んでゐるに對し描くといふ氣分が勝つてゐる。前者が主觀的であるに對して後者は客觀的である。又目的の方面からいふと、浪漫主義が美を追ふのに對し自然主義は眞を求めるものである。

目的において眞、態度において客觀的、これが自然主義の大體の特質であるが、客觀的といふことには自から二つの態度がある。一は純客觀的態度であり、他は主觀挿入的態度である。

この主觀挿入的態度をとるものを印象派自然主義と名づけるに對して、かの純客觀的態度をとるものを本來自然主義と呼ぶのである。

本來自然主義は所謂ゾライズムを指すもので、ゾラ、フローベル、モーパッサンなどの立場が即ちそれである。フローベルが「藝術と作者とは全く無共通である」といひ、テーマが「自然の再現を極意として作者の個性を沒しなければならぬ」といつたのは、皆この立場を說明したものである。

徹底自然主義はハウプトマンが、近代劇運動を起したときに唱へた主義で、佛蘭西のゾラやゴンクールの說いた自然主義を徹底せしめんとして、自然から受けた印象を極微の分子まで、そのまゝ忠實に再現しやうとするものである。

同時に又日常生活の上で感知する氣分の陰翳を再現せんとし、內容よりも形式や手法に、その主義とするところの特徵が認められる。從つて辭句の排列や、句點の使用に腐心し、寫生の手法、日常會話の忠實なる模寫が極端である。ホルツとヨハンネス・シュラーフとの合作「パパー・ハムレット」は、その模範作と稱せられてゐる。

第八節　印象主義

印象主義は藝術家が直接受けた印象を、そのまゝ作物に表現しやうとする主義で、自然主義が有りのまゝの姿を描かうとするに對して、これは純主觀描寫である。即ち自己の印象を主とし、又その描寫が人に與ふる印象を重んずるものである。

印象主義は初め佛蘭西の美術家達によつて、高唱され第十九世紀後半の畫壇は、殆んどこの主義の風靡するところとなり、廣く文學、音樂、彫刻にまで影響を及ぼした。繪畫上の印象主義とは自然の一瞬時の印象を直下に全體として描寫せんとするものであつて、その特徵は朝夕各時の光と空氣の變化から來る、種々の色調の表現に力めること、アトリエ內の製作を排し、戶外の光線の下で明暗の差を重んずることなどにある。

文藝上では現實をそのまゝ描寫するよりも、感覺的な印象を表現することを重んじ、從つて事物を現象的に觀察し、又人間をも自然の一部として觀察するのである。其他この派の特色とすべきものは、自己一個の受けた印象を表現するに急で、全體の統一を顧慮しないこと、プロットや描寫や筆致の凡てが、單純を旨とすることなどである。

また音樂上では主旋律の開展よりも音色を重んじたことであり、彫刻上では形式上の因襲に反抗して、專ら直接に受ける印象を尊重すると同時に、人體其外彫刻家の對象となる事物を理想化せず、對象の表象を熱烈な調子で再現しやうとすることである。

要するに印象主義はこれを一般的にいへば形式主義、理想主義、主觀主義に對する藝術上の一主義である。即ち藝術家が對象から直接受けた印象を、そのまゝ作物に表現しやうとする主義である。

第九節　新印象主義

歐洲大戰後佛蘭西のヂャン・ジロード・ヴァレリ・ラルボオ、ポール・モオランなどの新進作家によつて新しく採用された印象主義を、新印象主義と呼んでゐる。彼等は在來の印象主義を復活したばかりでなく、現代の人類生活により深い關心を持ち、これに生命と色彩とをその作品に附與したのである。

現代は實利主義の時代で、際限なき利殖の慾望と、動搖の多い忙はしい生活とは、全世界を擧げて自暴自棄に陷らしめてゐる。從つて本能と眼前の快樂との命ずるまゝに行動して、精神上の頼りなさにせめてもの慰めを與へやうとしてゐる。この狀態を見て彼等はいつた。「……それなのに、何を君等はためらふのか。その原因結果の善惡を批判し計量する愚かさをなす前に、我等の唯一の財寶であるところの、與へられた感覺とこの豐饒な肉體とを以て、曲折多い人生の妙趣を味ひ盡さうではないか！」と、そして印象主義などに比べ、世界的な自由な廣々とした空氣を基調とし、新しい感覺と强烈なる刺戟とを世界の到る所に求め、新奇なイメーヂと地方色の豐かな特異さとを、作物の中に巧に盛り上げやうとするのである。

これを要するに新印象主義は、舊印象主義に一層の深みと强みとを加へたものである。

第十節　現實主義

現實主義は實際にあり得ること、有り得るが如きことを藝術の眼目とする態度で、現實感が最も重ぜられてゐる。即ち神經的のものでも、それに現實感を附與しなければ濟まない行き方である。故にゾラの所謂「實驗」が行はれなければならない。然し自然主義のやうに、自然をありのまゝに描くといふのではない。現實感の窮極は象徵に達するものと見るのである。ロダ

ンの「青銅時代」の如きは、人物を直接に型に取つたものであらうといはれるほど、この派の模範とされてゐる。

第十一節　人道主義

人生のための藝術を眞向に振りかざし、人道の理想を說かうとする文藝上の主義である。自然主義は有りのまゝの人生を描寫するだけに滿足したが、人道主義は更に積極的に人類の幸福を增すため同情や、獻身や愛他的行爲を本義として、人生のための藝術を主張するのである。

イトスルト

この主義の創始者トルストイは、藝術を以てパンや水に比し、眞の文學は凡ゆる人々の眞の福利の知識の表現であるとなし、藝術家の運命は犧牲と苦惱であり、その使命は人々の福利を助長し、苦惱から救ひ出すことであるとした。彼の主張が「人生のための藝術」であるとされたのはこれが故である。

彼の主張の如くでありとすれば、藝術家とはそれ自身が、自然又は人生で經驗した感情を他人に傳へるものであり、その感情は最も高い感情であるべく、最も高い感情とはその時代の、宗教的意識を表はす感情でなければならないし、「何れの社會にも人生に對する宗教的意識は存在する。それはその社會が賴り進むところの最大幸福の標的である」といひ、又「藝術は暴力を壓伏しなければならぬ。さうして藝術だけがさうすることが出來る。その使命は神の、換言すれば愛の王國を持ち來さしむることである」とトルストイは說いてゐる。

これによつて見れば、人生のための藝術は、宗教的感情を民衆に傳へ、宗教的意識を社會に宣傳することによつて生れる。それは神の國、愛の王國をこの世に持ち來すべき使命の下になすべき藝術の役目であつて、それがためには藝術家は、自己犧牲と苦惱とを運命とし、人類のために眞の福利を助長し、人類をその苦惱から救ひ出さねばならない――これが人道主義の主張である。

第十二節　頽廢主義

頽廢はデカダンスと稱し、第十九世紀末の懷疑的思想の影響により、病的で偏頗な傾向を現した藝術のことである。最初佛蘭西に興つて後英吉利に及び、スウインバーンやオスカー・ワイルドなどの唯美主義者の一團となり、更に獨逸や伊太利に入り、やがて各國に弘まつたものである。

千八百八十二年巴里の或カフェーの地下室に集つた若い文學者の群が創始したもので、デカダンとは、墮落した人々といふ意味で、佛蘭西のある文明史家が羅馬の文明が爛熟して、衰滅に傾いた時代の人々に名づけた名稱だといふことである。デカダンスの先驅者ヘルマン・バールは「蓋しデカダンス派の藝術は、情識を重んずる所の神經の藝術で、感情や思想の藝術ではない。飽くまで人工を重んじて、自然と遠ざかる藝術は神祕に渴してゐる。常に事象の底深く潛む神秘を表現しやうとする一切の平凡陳腐なるものを厭ひ、異常珍奇なものを求める。要するにデカダンスの藝術は神經過敏なる近代人の刺戟を貪るところから生れたものである。ボードレールの如きはこの典型的詩人である」と。彼等の主張はこの言に盡きてゐる。

第十三節　惡魔主義

惡魔主義とは文藝上カダン派に屬する一派の主張で、反科學的傾向、社會の習俗などについて無感覺、惡を偏重し禮讚することなどをその特徵とする。反科學的傾向とは近代文明の特色たる自然科學的唯物觀、機械觀に對して極端なる憎惡をもち、科學が破壞した美や神祕を取り返さうとする努力である。社會の習俗などに無感覺であるとは、感覺や感情が鈍いといふ意味でなく、自己の藝術に執着するの餘り、一切の社會の道德、宗教、習俗などに對して無感覺の態度を取るに至つたことをいふのである。別言すれば藝術至上主義である。

惡の偏重禮讚はこの派の題材の上に關するもので、この派を代表する「惡の華」の著者ボードレールの詩境は怪異、凄愴の雰圍氣につゝまれた暗黑面で病的、人工的藝術の極致を示してゐる。先驅者は米國のエドガー・アラン・ポーであるといはれるが、惡魔主義の極致を發揮したものは、ボードレールである。彼の作品は題目それ自身が既に惡魔主義的傾向を象徵し然も到る處、故らに不健全で、醜穢な方面に詩美を求めた跡があり〳〵と見え、腐肉と燐光、死と頽廢、毒酒と地獄とが彼の詩の對象である。

第十四節　唯美主義及び耽美主義

唯美主義は耽美主義ともいひ、美を唯一無上の目的とし、そのためには他の一切を顧みない態度である。英吉利のラファエ

ル前派の運動にあつて一種の上古趣味、貴族趣味を齎すことを目的としたのが、藝術上のこの派の濫觴である。その內容が種々に變轉して近代ではボードレールやオスカー・ワイルドが唯美主義者と目され、デカダンの傾向に類して來てゐる。從つて精神よりも官能を重んじ、自然や人生よりも藝術の世界を尙び、美をあらゆる善惡に超越させ情意よりも觀照、內容よりも形式を重んじ、趣味の上では貴族主義であり、類型や平凡を嫌つて特殊や異常を好むものである。

英吉利のオスカー・ワイルドが創唱した文藝上の極端なる快樂主義である。官能が靈性の根本であり、本能その者が精神であり靈魂であるから、何事も本能の命ずるまゝに行つて差支なく、有らゆる肉感の美を漁り、刹那の享樂を趁はうとするものである。この特色を發揮したものに戲曲「サロメ」がある。

ワイルドは「美は倫理よりも高い、それは靈的な世界に屬してゐるからである。美の鑑識こそ吾々の到達すべき最上極微の點で、正邪の念より遙かに個人發展に重大なる意義がある」といつてゐるのみでなく、常に耽美衣裳といふ奇拔な服を着用し向日葵と百合の花とをつけて町を歩き、平凡なる俗衆の生活を輕蔑し、情熱を尙び技巧美を重んじた。

第十五節　享樂主義

人生を解決する何物をも見出し得ず絕望に陷つた者が、快樂の上に辛うじて人生の安住地を見出したのが享樂主義であるが其快樂も精神的なものではなく肉體的、官能的な快樂である。

彼等の好むものは、音響の心地よきことであり、手觸りの氣持よきことであり、色彩の鮮やかなことである。思想や感情の世界に住所を失つて、感覺の中に新しい住家を見出さうとするのである。近代の享樂主義は、樂天觀に立脚するエピキュリアニズムとは異り、快樂を追ひ、官能の刺戟を求めて止まぬ心の底には、何物にも絕望した深い悲しみが流れてゐる。

これを一面から見るときは、人生の苦悶から逃避しやうとする態度とも見られるが、他面から見れば、また死か絕望かに陷るべき瀨戸際に踏み止まつて、新生面を開拓しやうと努力してゐるものと考へられるのである。この派の代表者としては、オスカー・ワイルドをあげることが出來る。

第十六節　戀愛至上主義

戀愛を以て人生至上の目的とする主義である。婦人思想家エレン・ケイは、その作「戀愛と道德」「戀愛と結婚」などに於て大膽卒直に戀愛至上主義を說いてゐる。そして若し最初相愛した男女の戀愛が後に至つて消滅したならば、直にその結婚關係を斷絕して可なりとして、彼女は自由離婚論を主張してゐる。

ルーダンタス

スタンダールは戀愛至上主義者で、生涯に八十六回の戀愛をした。一人の異性に愛を感じなくなると、更に他の異性を求めるのは止むを得ないことで、これを以て成長するものゝ特質であるとしてゐるが、戀愛至上主義には靈的戀愛至上主義と、肉的戀愛至上主義とがある。又一個人についても戀愛結婚において、三つの階段がその內的生活に起るとされてゐる。最初には派手なロマン的な盲目的戀愛が成立ち、それが同棲生活に入つて後に、一度は變形してお互に自覺し自省する。それから後に更に一歩進んで、眞の內在的戀愛關係となり、眞の自由な戀愛生活が成立つといふのである。

詩人ブラウニングは「戀は至上なり」と說き、その八十歲に近い頃の詩に、「人生の至上善は一少女の接吻にある」といつた。「ロメイとジュリエット」「ドン・ファン」「源氏物語」「好色五人女」などがこの派の代表的作品である。

第十七節　汎美主義

汎美主義は凡ての物に美を認める美學上の一主義で、この立場からするときは有らゆるものは其のまゝに美である。若し美と見えないものがあるとすれば、それはその物自體に美が無かつたのではなく、十分に感受性を働かせて見なかつたといふことに歸する。又美には優劣高低の差がある筈なく、それ〴〵の意味で美である。といふのが汎美主義の主張で、新プラトン學派の闘將プロティノスの唱道したのがそれである。

第十八節　神秘主義

神秘主義は有らゆる事象の奧にあつて、理論や認識を以て理解されないものを、直觀によつて知らうとする精神的傾向である。それについてショエットは「神秘主義とは空想を恣にすることでなく、感情の中に理性を集中させたもの、眞に對立する熱愛をいふ」といひ、メエテルリンクは「人生の眞の意義は、五官の觸れ得る世界にあるのではなく、目で見ることの出

來ない、耳で聞くことの不可能な神祕の世界にある」と說き、ホフマンスタールは「宇宙には大なる精靈があつて、不死不滅の力を以て吾等を支配する情緒なるものは、この精靈が吾等の胸の上を步み行く跫音である」と述べてゐる。

アンドレーフ

英吉利のイエーツ、露西亞のアンドレーフなどの露西亞象徵派の作家は、皆この神祕主義の人々である。

第十九節　象徵主義

見ることも聞くことをも得ない無形無象のものを、有形有象のものに寄せて表現することをいふのが象徵で、この象徵を詩の上に採用するものが象徵主義である。

自然主義や高踏派に對する反動として千八百八十五年代から佛蘭西に起つた傾向で、主觀を强調し、個性を作品の上に主張するため、その外面的形式を象徵に採つたものである。故に客觀的事象の描出に重きを置かず、情調を象徵化して表現するに努めた。故に象徵主義においては情調が中心であるから、情調藝術といつても好のである。

ホフマンスタールは「詩又は文章において最大の價値を有つものは、思想や事象ではなくして情調である。人間がある出來事に遭遇すると、一種の情調を生ずる。この情調を寫し取るのが詩人の役目で、事件そのものを描くのは、記錄係や通信記者の仕事である。自然主義派の文學者は、その記錄係のやうなもので決して詩人ではない。又思想を叙述するのは、哲學者思想家の仕事である」といひ、マラルメは「事物を靜思し、瞑想しそれによつて喚起された心中の幻像が飛躍するとき初めて歌をなす。自然主義時代の高踏派詩人は、物の全部を細叙したゝめに神祕を失つた。從つて讀者は恰も創作するときと同じ愉快を得ることが出來ない。物を名指して明かに說明し盡すのは、詩の面白味の大部分を殺ぐもので、少しづゝ次第に暗示された意味を推量して行く所にこそ詩の面白味はあるのだ」と說いた次に象徵主義が如何なるものかを例證して見る。

ヘルマン・バールは、愛兒を失つた母の悲哀を表して「或る深林に小さい樅の木があつた、その氣高い眞直な姿は、やがて天を貫かうとするやうな勢を示してゐたので、老木はひどくこれを愛した、ところが斧を携へた怖しい人が來て、この若木を伐り採つて行つた。そのときはクリスマスであつたから」と述べた。又ラメルは「詩には必ず謎語がなければならぬ」といつてゐる。象徵派の詩人は、表現の曖昧を「曖昧の說」と稱して主張としてゐた。象徵派の藝術が一般から、晦澁難解の譏を受けたのはこれがためである。

第二十節　新浪漫主義

新浪漫主義とは、ネオ・ロマンティシズムの譯で自然主義に反抗し、新らしく浪漫的な傾向を以て擡頭して來た文學の總稱である。自然主義が現實を重んじ、客觀を主とする文學であるとすれば、これはかゝる自然的境地を超え、更にその深奥にまで突き入らうとする文學であり、從つて物質よりも心靈、科學的研究よりも神祕的及び直觀的體驗を重んずるものである。

然し舊浪漫主義が動もすれば盲目なる情熱のまゝに、空虛なる想像に支配されて現實から遊からうとしたに反し、新浪漫主義は既に自然主義によつて、現實の洗禮を受け、懷疑の苦悶を經て來たものであるから、等しく神祕といつても、舊浪漫主義のそれのやうに、夢幻の中から釀し出されたものでなく、痛切なる懷疑思想から出發して現實の奥底に突入し、そこに靈的な世界を發見しやうとするものである。

かうした傾向は哲學方面にも現はれて、新主觀主義、新唯心論の主張となつた。英吉利の批評家アーサー・シモンズは「人人の思想が變化すると同時に、文學もまたその眞髓において齊しく變化した。物質の考察と調整とに、世界は永くその心靈方面を飢うるに任せてゐたが、今やその心靈が復歸して來たゝめこゝに新しい文學が起つた。即ち眼に見える世界が最早現實ではなく、見えない世界が夢ではないといふ意殊の新文學が—」といつた如く、新浪漫主義は主觀の權威を主張し、情緒を殊更尊重するが、舊浪漫主義が徒に狂熱的であり、感傷的であり空想的であつたのに反し、驚くべき程の沈靜な態度と嚴かな態度を以て現實に對し、その深奥に横はる神祕的な心靈的な或物をつかまうとするのである。

殊に作者の主觀そのものが昔の人々に比し遙かに官能的、神經的に銳敏になつてゐるといふ事實が、浪漫的な思想に一層の新鮮味と深刻さとを加へてゐる。この派の作品としては、ユイスマンズの「途上」「ラ・カテドラル」、イブセンの「海の夫人」「我等死より覺むるとき」、ハウプトマンの「沈鐘」ハンネレの「昇天」、メテルリンクの「モンナ・ヴアンナ」などがある。

第二十一節　新古典主義

自然主義や新浪漫主義に慊らぬ人々が、現狀打破の叫びを一つの理論に構成して、新藝術への方向を暗示したのが新古典主義で、獨逸のワイマールを中心にパウル・エルンスト、サムエル・ルブーンスキー、ウイルヘルム・フォンショルツの三人によつて提唱されたものである。

この派の最初の聲明はエルンストによつてなされたが、自然主義派が無形式の戯曲から、再び古典主義の傳統にかへり、樣式と形式美とを具有する、新戯曲を作り出さうといふ主張の最も端的に表はれたのは、「形式の道」といふ論集であつた。彼によれば近代劇は、自然主義のものと新浪漫主義のものとに論なく、皆「形式」を缺いてゐる。是等二つの主義は共に、その根底において全く同一の誤つた出發點から、自然科學的認識に影響されて、一切は因果律的に規定されてゐるといふ誤謬を犯し、人間を全然環境の産物と看做すところの、佛蘭西自然主義派の態度を踏襲し「單純な人間」こそ、人間性の最も奥深いものを現はすものだと誇稱したが、事實は境遇や環境や遺傳の産物は、決して悲劇的題目とならない。環境の桎梏に囚はれて動きの取れないやうな人間は、その實質において動物と何等選ぶ所なく、決して悲劇的の感じを喚起するものではないといふのである。

これは主として自然主義戯曲に對して提出された批難であるが、ルブリンスキーは「新浪漫主義者の心理と世界觀とに就て」といふ評論で、新浪漫派に共通した弱點として意志の薄弱、纖細なる受動性、怪え易き魂、過度の敏感、實生活に遠い孤高獨尊、詰らない氣分や情緒や性的のものを、法外に尊重する小主觀主義などを指摘した。然しながら新古典主義の作物を自然主義や新浪漫主義のそれに比べると、比較にならぬほど量においても質においても貧弱なもので、この派の創作的方面を背負つて立つものは、獨りショルツ位のものがあるのみで、他は唯だ理論を確立したといふ、文學史上の價値しか有たないものである。

第二十二節　新理想主義

新理想主義とは、ネオ・アイデアリズムの譯で哲學上では前世紀の末葉から現代に亘り、主として獨逸に起つた新カント學派の主張がそれであるが、最近におけるオイケンや佛蘭西のベルグソンの哲學も、また新理想主義といふことが出來る。

中でもオイケンの新理想主義の哲學は主知主義、現實主義、自然主義に反抗して超感覺的、超個人的、普遍的、必然的價値の世界、卽ち精神生活の世界を實現せんとするところにその特色がある。文藝上についてこれをいへば新理想主義は、自然主義が徒らに皮相なる偶然の事實のみの描寫に走り、その行き着く所まで行つて終つたとき、反動として復活して來た理想主義的傾向である。然しこの語は一般の思潮に共通する傾向で、文藝上においても一定した主義といはんよりは、寧ろ自然主義後における反動的傾向又はその精神を總稱したものと見るべく、從つて神祕主義、象徵主義、新浪漫主義及び美術上の後期印象派の如きは、凡てこの傾向を有するものである。

第二十三節　新英雄主義及び傳統主義

新英雄主義は佛蘭西の作家、ロマン・ローランが唱へた一種の理想主義である。彼によれば、この現實の世界は有らゆる爭鬪に充ちて餘りに醜い。人間は是等のものに打勝つて行かなければよき生活は出來ない。人生は戰場である。愛と眞理の旗を立てゝ運命に對し、虚僞に對し、不正に對し、戰鬪して進むべきである」と主張してゐる。

傳統主義は國土と歴史を尊重し、國民的特色の鮮かな文學を主張するものである。特有の國土と長い歴史の作つた制度、道德、風俗、宗教などの中に自己を見出し、それを生かして行かうとするのが、この派の主張である。

世界大戰前後に亘り、佛蘭西文壇に起された運動で、獨逸の表現主義と共に最新なる潮流の一として、ポール・ブールヂェー、モリス・バレスなどがこれを唱道した。バレスは「吾々の靈魂は、吾々の祖先の堆積された靈魂から出來てゐる。是等の基礎諸觀念は、吾々の存在の土臺石となつてゐる」といひ、更に「傳統は脊椎骨である。これを持つてゐるときには、吾々は吾々の生活を發明することが出來る」と說いた。

傳統主義は退嬰的保守主義ではなく、祖先から受けたものを更に高め、强めて、これを子孫に傳へやうとするものであるから、進化的であり、未來への積極的活動主義である。

第二十四節　表現主義

表現主義は、最近獨逸を中心として勃興した藝術上の一主義で、描寫にも象徵にもよらずして、端的に人間の精神的經驗

を、そのまゝに表現せんとするものである。從來の印象主義的藝術では外部から人間に入つて來たまゝの印象が全部であつたが、表現主義では印象は單に材料に過ぎず、それを主觀に消化して再現したものがこの派の主張する藝術である。

表現主義運動の先驅をなしたものは繪畫におけるそれで、先づ無用で本質的でないものを一切省略するといふ、技巧上の特長から始まつてゐる。つまり「集中」といふことである。例へば祈禱する女を描く場合、天に向つて高く差上げられた二つの腕は、首や身體よりも遙かに大きく描くに及ばぬ。首などは描く必要はない。祈禱の熱情を表現するためには、唯だ兩腕だけで差支ないからである。この繪畫上の傾向はやがて文學にも取入れられ、世界大戰前に既に新藝術樹立の機運が熟してゐた。

元來獨逸では前世紀末頃から、特に若き人々の間に世界觀の變化してゆく徴候が現はれ、久しく顧みられなかつた「永遠なるもの」「絶對なるもの」につき再び思念を凝らし、形而上學へ轉向すると共に、世界を單一に綜合せんとする傾向が盛んになつた。その矢先へ大戰とそれに打續く內亂とによる、急激なる社會狀態の變化が人心を根底から搖り動かし、有らゆる人類同胞は勿論、禽獸草木の中にさへも、神性を認めんとする宗教的精神を釀成した。それが內外兩方面から表現主義藝術の擡頭に與つて力があつたのである。

今までの藝術は、事物を唯だありのまゝに受取るのみに過ぎなかつたが、彼等に取つては最早あるがまゝの現實を再現するやうな藝術は、到底堪へ得られないのである。そこで新しき學者達は人生に「意義」を求め、そして觀念にあらずして幻影と陶醉、描寫にあらずして集中を求めたのである。從つてその表現は概念的類型的、結晶的となつたが、それは情熱の迸りであり、叫喚であつた。

要するに表現主義の目指すところは、內部生命を端的に表現して、對ふ者を昏倒せしめることである。そこに躍り出すものは、赤裸々の魂そのものであり、生命そのものであつて、これを外部から包被する性格とか環境とかいふ第二義的のものは、棄てゝ顧みないのである。故にこの派の作中に取扱はれる人間は本質的、類型的な代表者であり、決して唯一な個性ではない。彼等は相對的ではなくして絶對的なものを藏し、世界や、人生や、運命をそれが如何に苦しく重いものでも、朗かな微笑と斷乎たる決心を以て、敢然と擔ひ行くことにより、神への道を見出さうとする勇士である。

瑞典のストリンドベルヒ、獨逸のグロテスク劇を創始したヴエデキントの二人がこの先驅者であるが、その後繼者としては劇の方面ではシユテルンハイム、ウンルー、ウエルフエル、トルトル、ゲーリング、小說の方面ではエード・シユミツト、ホリツチエル、ペン、抒情詩の方面ではウイルトガンス、ザイテル夫人などを擧げることが出來る。

第三章　文學の種別

第一節　詩

久しく社會から忘れられてゐた詩が、最近漸く再び文壇に、社會に認められて來て、少し活氣づいたかと觀える。我國詩壇の華やかなりし時代といへば、自由劇場の始められた明治四十二年頃の小山內薰、森鷗外、上田敏、吉井勇、北原白秋、木下杢太郎、江南文三等の活動時代であつたが、その後ヂヤーナリズムから見離されて來たのである。然し日本的、枯淡的、經濟的の思想に籠り過ぎた社會と、ヂヤーナリズムとが、漸く忘れかけられたロマンチツクに再ひ振り向いて來た結果として、當然詩といふものが再認識される域に浮んだのである。そして大木惇夫、尾崎喜八、安西冬衛、瀧口武士、竹中郁、三好達治、丸山薰、田中冬二、岩佐東一郎、春山行夫等が詩壇の現役人として活躍し、第二線には古い先輩株の佐藤春夫、室生犀生、北原白秋等が控へ、女流詩人としてもまた深尾須磨子、木村好子、英美子、永瀨清子、露木陽子、井上淑子、田中律子等が、いづれも時代の惱みからの焦躁、疑惑、反抗などを盛んに歌つてゐる。

詩は英語のポエトリー(Poetry)で、空想によつて制作するといふ意であるが、現今では詩を二種に解釋する。一は文學的の制作で、特に詩的情緒を詩句に記した文學であり、二は韻文のことで、これには叙事詩、抒情詩、喜劇詩、悲劇詩、諷刺詩などの別がある。詩の定義については多くの說があるが、暗示の中に成立すると主張する點において一致してゐる。シエレーは「事物の詩的要素とは想像を活動させ、刺激し、認識され、說明されるより以上のもつた想像に暗示する。その事物の有つてゐる特質である」といひ、ギユヨーは「詩的といふことは美しいといふことゝ同一ではない。美は特に形式の中に又釣合と調との中にあるが、詩は形式が指示するものよりも、寧ろ表記し或は暗示するものゝ中にある」と說き、ブールジエーは純粹

の詩的美は、表出の中におけるより以上に、暗示の中にはないであらう」といつてゐる。尤も和歌俳句などは我國特有の詩形である。

主觀詩　詩歌を分類して主觀的なものと客觀的なものとする場合、主觀詩は純主觀的な詩のことで、個人的詩若しくは抒情詩ともいはれる。主觀詩の特質は歌はれてゐる事柄そのものの如何よりも、歌つてゐる詩人その人に、一切の興味が係つてゐるといふ點にある。又題材の方面からいへば、主觀詩は飽くまでも感情を主とし、作者の感情をそのまゝ讀者に傳へて作者と同樣な感情を喚起させるところにその目的がある。

つまり主觀詩は「眞の感起の適當な、調和的なる想像的表現」である。從つてその喚起する感情の性質によつて單純抒情詩、熱狂抒情詩、反省抒情詩の三つに分けられ、又その感情の根柢となつてゐる題材の如何によつて宗教、愛國、戀愛、自然、祭宴などの頌歌、讃歌、又は哀悼歌などに分つことが出來るのである。

客觀詩　客觀詩は抒情詩などの主觀的な詩歌に對し、客觀的な叙事詩、叙景詩、譚歌などをさすのであるが、叙事詩とはある結構から成つた外界の物語を、客觀的に歌ふ詩であり、叙景詩とは自然の風光に、何等の主觀をも加へずそのまゝに歌つた詩である。譚歌とは主として事件や物語を詠じながら、その間に作者の主觀を織り交へたものである。

客觀詩のうち最も代表的なものは叙事詩で、獨逸の哲學的美學の大成者ヘーゲルはこれについて、「叙事詩の興味は作者自身でなく、そこに歌はれてゐる事件に係つてゐる。例へば希臘の偉大なる叙事詩人ホーマーは、個人として實在の人物であるか否かをさへ疑はれるほど、その實在非實在は問題外である。吾々は唯だホーマーによつて歌はれてゐる英雄達に興味を寄せてゐるに過ぎない。これに反して同じく希臘の偉大なる抒情詩人ピンダーの作に對するとき、吾々はこの詩人によつて歌はれた英雄達などは何うでも好い、唯だこれを歌つてゐるピンダーその人に、一切の興味をかけてゐるのである」といつてゐる。

抒情詩　抒情詩は劇詩、叙事詩と共に、西洋文學における詩の三大部門の一つで、もと古代希臘において七絃琴に合せて歌つた詩である。つまり樂器に合せて、作者の情懷を抒べるのが本來抒情詩であるが、後世、文學の分類上から主觀的文學を總稱して抒情詩といふやうになつた。

希臘や羅馬では夙くから詞賦、讃歌、挽歌などから顯はれ、近代では小曲、小唄などに盛んに採用されてゐる。

ヘブライ文學中ダビデやソロモンなどの作は、最も古く且宗教的感情に優れた點で、古今の讃唱と稱せられてゐる。希臘ではサッフオ、アナクレオン、ピンダロスなどの作があり、羅馬ではダンテやペトラルカなどの名家がある。また獨逸にゲーテ、ハイネ、シラーがあり、英吉利にはミルトンや、バイロンがある。

ボードレール

抒情詩の主題には戀愛、讃歌、頌歌、國歌、悲歌、挽歌などの別があるが、獨逸の學者は抒情詩を感想的抒情詩、感激的抒情詩、回想的抒情詩の三つに分類し、純主觀的なものを感想的抒情詩、詞賦や讃歌のやうな感情の高潮に達したものを感激的抒情詩、挽歌や觀念抒情詩のやうな、回想の分子に富んだものを回想的抒情詩としてゐる。わが萬葉集中の短歌の如きは、殆んど抒情詩であるといつてよい。

叙事詩　叙事詩は前記の如く西洋文學中、詩の三大部門の一で現實又は假設の出來事をそのまゝ叙述するものであるが、今日では一般に客觀的文藝の總稱ともなつてゐる。希臘では樂器に合せて歌ふ抒情詩に對して、吟誦する詩を叙事詩と呼んだ。作者が主觀を沒する點がその特質である。作者は唯だ作中に人物を拉し來りて、景物を入れるだけで出來事を叙述し、事件の發展、葛藤、解決などに自己の意見や見解を挿まないのを常とする。この意味から太古の傳說や神話は皆叙事詩である。希臘のイリアッド、オデッセイ、印度のラーマーヤマなどがそれである。

獨逸の學者はこれを國民的叙事詩と名づけ、後世一詩人の作つたものを特に技工的叙事詩と稱したが、更にこれを古傳的叙事詩、新傳奇的叙事詩、挽歌的叙事詩、宗教的叙事詩、史詩、滑稽的叙事詩、諷刺的叙事詩、教訓的叙事詩などに細別してゐる。尤も近代では叙事詩の形式が散文の中に入り、小說としてその特質を發揮するやうになつたゝめ、客觀的文藝の總稱を叙事詩といふ場合もある。

劇詩　劇詩は全篇が個々の人物の科白から成り、これを舞臺に上せて、その人物の性格と事件との發展を示すものであるが個々の人物の科白は各々一箇の抒情詩を成してゐるから、全

篇を通じて客觀的に事件を發展せしめるのである。故に劇詩は主觀的に作者の感想を述べる抒情詩と、客觀的に事件を叙述する叙事詩とを一つにしたやうなものである。叙事詩はかくの如く作中の人物が、各抒情詩人となり、各々の感想を述べるが、作者はその人物を操つてゐるだけで、己の意見は露骨に述べないのである。

劇詩には古來時間と場所と動作の三つを一致せしむべしといふ、所謂三一致說と稱する法則があつて、通常劇詩は序、葛藤、解決の三段に分れ、更に葛藤が解決に至るまでに昂進最高潮、轉向と細分されてゐる。この細分と序及び解決の五つで悲劇を五幕にするのが古來の通例であるが、幕の中には若干の場や、プロローグや、エピソードなども加はるのである。劇詩を大別して悲劇、喜劇、和解劇及び樂劇とする。和解劇とは悲喜劇のことで、悲劇的葛藤が圓滿幸福に局を結ぶものであり、樂劇とは音樂がその主要內容となる劇である。昔はすべて律語で作られたが近代では散文體を用ひてゐる。

無韻詩　無韻詩は第十六世紀頃に、英吉利に起つた一詩體である。元來詩は字音の配置で韻律を生ずべきものとされてゐたのを、無韻の古典詩から思ひつき、伊太利の文藝復興期のヴエルシ・シオルテイに基いて韻の無い詩もまた優れた藝術であると主張し、押韻を廢して一種の自由詩を生んだのである。佛蘭西に起つた自由詩派の詩と殆んど同じ精神を有つたもので、第十八世紀のポープなどの技巧派の詩人、ウイリアム・クーパーなどの無韻詩には優れたものがある。

自由詩　自由詩は全く律を沒却して終ふのではなく、强音を經とし、熟音を緯とした、古い形式に多少の變化を加へて大部分押韻や類音を殘し、やゝ無拘束な新詩形を作つたのである。佛蘭西のヴエルハーレンやレニエあたりから起つたもので、この派のいふ自由は、內心律の動くまでに形式を作つて行くところに自由があり、絕對的な自由のないことは認めてゐる。無意識に歌ひ、或は內心の發動力が强大である場合、形式を稍や自由に代へることによつて生命ある作品が生れるといふのである。この詩形は氣紛れの出來心や好奇的な得手勝手ではなく、動かすべからざる生の事實、心臟の鼓動に現はれた生理上の律呂に從つてゐるといふにある。從つて散文詩と比較して、遙かに從來の韻を尊重してゐる。我國では岩野泡鳴が自由詩を唱道し、日本古來の長歌の律を應用した形式的自由詩と散文詩に似た、內容的自由詩との別を生じた。

散文詩　散文詩は韻文の形式によらず、散文の形式を取つた詩である。リズムを唯だ文字に現はれたゞけに求めず、もつと內面的に求めやうとするものである。佛蘭西の惡魔派のボードレールが初めて散文詩を發表し、シュールフォルグがこれを踏襲したもので、露西亞のツルゲネーフ、亞米利加のホイットマンも有名である。我國でも近來は殆んど散文詩を用ひてゐる。自由詩はこの散文詩に似てゐるが、散文詩は自由詩よりも更にリズムを無視してゐる點に特徵がある。

ホイットマン

即興詩　即興詩は英語のイムプロヴイゼーションで即座の詩興を即座に詠ふ詩である。原始民族の詩は皆この即興詩で、興の湧くまゝに吟唱する特殊の才能を有つ者を、即興詩人として尊んだものであるが、普通には情熱派と稱する一派の詩人にこの種の詩が多い。

ゲーテは詩は機會詩でなければならぬとし、常に現實が詩の誘因と材料とを與へなければならぬと說き、自分の詩も凡て機會詩で、現實から暗示を受け、これを基礎としてゐるといつてゐる。これによれば現實から受けた即興が、即ち詩の根源であるといひ得る譯である。

教訓詩　教訓詩は人を教訓する目的で、主として道德上、哲學上、宗教上の事柄を歌ふものである。形式は叙事詩的で內容は主觀的詩であるが、これを純教訓詩、象徵的教訓詩、傾向的教訓詩の三種に大別してゐる。例へば純教訓詩は希臘のエンペドクレスの農事やその季節を歌つたもの、象徵的教訓詩は事物を借りて教訓するイソップの或るもの、傾向的教訓詩は諷刺詩パロディなどがこれに屬してゐる。

戲詩　戲詩はパロディー（Parody）のことで諷刺詩とも譯されてゐる。人口に膾炙してゐる名作の形式を踏襲してその內容を變化したもので傾向的教訓詩の一體であつて、嚴肅的戲詩と滑稽的戲詩の二種がある。

パロディーとして最も有名なのは、ホーマーの作といはれる「蛙鼠合戰」であるが、その實これは小亞細亞の或國の女王の兄ピグレスといふ者の擬作である。これを巧みに「イリアッド」の音調を模したのは、希臘人がホーマーの作に現れる英雄を渴仰するの餘り、好戰的になる傾向があるところから、時代の人心を他に轉ぜしめて世界の平和、人類の幸福と

いふ觀念に着目せしめんとして、戰爭の原因がいかに謂れなき誤解に基き、また戰爭の慘禍の如何に甚だしいかを知らせやうと圖つたものである。

第二節　戲曲と劇

アビスクーエシ

劇は芝居又は演劇とも呼ばれ、脚本によつて俳優が舞臺で個個の人間の複雜な言動を、さながらに再現して、觀客に見せる藝術の一形式である。劇を構成する要素は、脚本の外に音樂、衣裳、假髪、背景諸道具、俳優、舞臺監督、科白を影讀みするプロムプター、舞臺などである。西洋の劇は最初劇詩ともいふべきもので、單に觀客の前で朗讀するやうなものであつた。それが次第に幕や場の區別を生じ、動作が複雜となり、劇詩に散文を加へ、英吉利では夙くもシェークスピアの時代に今日の劇の基礎が出來た。我國では鎌倉時代の猿樂の能に端を發し、近世に至つて操芝居、歌舞伎劇が起つたが、後者は淨瑠璃の發達につれて、著しい發展を遂げた。明治に入つてからは、西洋劇の輸入によつて更に進歩し、遂に今日に至つたのである。劇には悲劇、喜劇、樂劇、歌劇、默劇、假面劇、衣裳劇などの種類がある。古く最も演劇の盛んであつたのは希臘と羅馬で、希臘からはエスキユロス、ソフオクレス、ユーリピデスの三大劇詩人が出た。希臘の古代の劇場は丘腹にあつて屋根がなく、道具も非常に簡單であつたといはれる。羅馬劇は希臘劇の輸入によつて榮えたもので、何れかといへば鄙俗なものであつた。近代では獨逸、佛蘭西の劇が最も發達して居り、殊に獨逸では表現主義の勃興によつて、劇界に一大旋風を捲き起した。

戲曲はドラマの譯で、脚本又は狂言とも呼ばれ、種々な事件や問題を劇に仕組んで書き、劇の原本となるものである。

詩や小說はそのまゝ劇として演ずることは出來ないが、戲曲は直ちに劇として演ぜられ、從つて戲曲は人物と行爲とが、その基本的な二大要素となつてゐる。構成上から見るときは、行爲の一致、時の一致、處の一致の三つの法則が存してゐる。これが所謂三一致說であるが、是等の法則を嚴守したのは希臘劇のみで、シェークスピア劇においては既に第二第三の法則は破られてゐる。これによつても解る如く、戲曲では行爲の一致が特に重大視せられ、これによつて始めて戲曲はその完全な形式を備へるのである。

悲劇　悲劇はトラヂディー(Tragedy)の譯で希臘語の(Tragoedia)から出て、山羊の家を意味してゐる。昔希臘では酒神デイオニツスの祭祀に、一團の唱歌者が山羊の皮を身につけて歌をうたつたが、この合唱團が劇の起源をなして、いつしか希臘初期の劇の中心となり、「山羊の歌」なる語は悲劇を意味するやうになつたのである。

悲劇とは人間が運命と戰つて、その戰に敗れることを作意としたもので、これには運命と戰つて敗れる中心的の人物があるが、その運命と戰つて行く動機に、主人公の過失に存するものと、主人公の犯罪に存するものとがある。

アリストテレスはその「詩學」において悲劇を構成する要素としては筋、性格、措辭、感情、場面、音樂の六つを擧げた。筋は事件の結合を意味し、性格は人物の性質を特色づける所以のもの、措辭は人物の思想感情の言廻し方、場面は背景、衣裳其他舞臺面一切を意味し、音樂は合唱に合せて奏する音樂を意味する。

この中でアリストテレスは最初の二つを最も重要視し、中でも第一の筋を重要と考へ、これこそ悲劇の終局目的であり中心原理であるといひ、悲劇の觀者に及ぼす効果を以て同情と危惧の情を喚起せしめるにあるとした。運命の犧牲になつた主人公に對する同情と、吾々もそれと同じやうな運命に陷りはすまいかと危み惧れる感情を、觀者の心理に喚起させるにあるとしたのであるが、かゝる感情は人の精神を高揚せしめ、卑賤無價値な思想から解放する効果を有する。

又アリストテレスはその筋を構成する場合、當然避けなければならないものとして、善人が幸福から不幸に陷つて行く所を見せること、惡人をして不幸から幸福に移らしめること、徹底的な惡人が幸福から不幸へ陷ることを見せてはならぬとした。それは第一の場合は嫌忌の情を起すことになり、第二の場合は悲劇本來の性質に緣遠く、第三の場合は同情や危惧は吾々と同じ人間が主人公である場合に限られ、かゝる場合には何等の反應も起り得ないからであるといふのである。

悲劇は古代希臘の悲劇と、近代のものとは無論その趣を異にし、近代悲劇は古代悲劇よりも餘程複雜で、たとへ劇の結末が不幸に終り悲慘に終るとしても、そこには尙ほ一縷の望みが殘されてゐるのが普通である。

運命劇　運命劇は悲劇の一種で性格悲劇、境遇悲劇に對するも

のである。個人の意志とその境遇や運命との葛藤を主題とし悲慘なる解決を示すもので、この悲劇の根本となつてゐる思想は、運命の必然性であり、劇は人生の否定を以て終るのを常としてゐる。

古代希臘の劇は多く運命悲劇である。希臘の神話では運命をモイラといひ、人間のみでなく神々もその力に支配されると信ぜられたが、モイラの形や數は甚だ漠然たるもので、或時は抽象的な觀念であり、又或時は二人の人間及び三人の女であつた。然しこの運命の觀念が、希臘人の精神を支配した力は非常に深く且廣いものであつた。最上の神ゼウスさへも子供達のために殺さるべき必至の運命の下にあり、個人や國民の運命も凡てモイラの支配下にあるものと信ぜられたのである。希臘古代劇が多く運命悲劇であつたことは、かゝる理由によるものである。

そして運命悲劇の主人公は多く貴人であり、偉大なる性格の持主であり、然もその最後は、實に壯烈を極めるのである。希臘の三大劇詩人であるエスキュロス、ソフオクレス、ユーリピデスなどが、その代表作家であるが、近代の悲劇にもこれに似たものがあつて一種の神祕的、運命的なる偶然事實の支配が劇の主要素となつてゐる。

性格悲劇　性格悲劇はその劇的動因を、中心人物の性格に內在する矛盾葛藤に置く悲劇である。比較的近世に發達したもので、古代希臘の悲劇が主として主人公の運命に動因を求めたのに對し、これは主人公の性格に悲劇の動因を置くものである。シェークスピア劇では「ハムレット」や「リヤ王」などはその代表的なものであり、近代劇ではイブセンの「ブランド」や、ハウプトマンの「寂しき人々」などが性格悲劇の上乘なるものとされてゐる。

境遇悲劇　境遇悲劇は運命悲劇性格悲劇に對するもので、劇中の主人公が、輕重を分ち難い二個の道德力の拮抗のために慘憺たる犧牲に陷るやうなものをいふのである。かうした悲劇は希臘の古代劇に見るところであるが、近代にも同樣な悲劇は存在する。神經質で、懷疑的で、自我意識の强いと同時に自己反省も深い近代人が、富と貧、習俗と自由、道德と本能其他凡ての物が、互の生存のために軋み合ふやうな社會における生活には、境遇の支配といふことが桎梏となつて魂は傷けられ、蝕まれて終に墮落した周圍、腐敗した雰圍氣の中に滅されて終ふ。かうした事實を取扱つたときそこに境遇悲劇が生れるのである。

喜劇　喜劇は悲劇に對するもので、昔希臘においてディオニッス神の祭禮に行はれた合唱團の謠ふ歌又は、その合唱團の人人の嘲笑に値するものをコメディア(Comedia)といつたのに起因するといはれるが、喜劇の價値が十分に認められたのは近代である。

エーマーソン

喜劇は人間をその意欲と偶然との興味ある錯綜中において、事件の結末を愉快な解決に導く戲曲の一種で、その取扱ふ情緒は可笑味に他ならない。エマーソンはその「喜劇論」において、「凡て正しい事や眞である事を實行すべくして、然もそれをしないため、その人が良心の苛責を受けるとき、その事に實際の利害を有する人に取つてはそれが悲劇的でないが、他から眺めると滑稽に違ひない。たゞ吾々の同情心は、時にかゝる滑稽なる事實を、虛心に眺めることを妨げるが、然し如何なる愚事、如何なる惡德も、吾々の道德的同情心の周知しないところ、卽ち相當の距離においてこれを觀察するときは、それは笑ふべきものとなる。喜劇はこの笑ふべき矛盾に對する認知である」と述べた。

喜劇の種類は觀念的なものと寫實的なものとに大別され、前者はアリストファネスの喜劇や、シェークスピアの「テムペスト」がこれを代表し、後者は境遇に重きを置くものと、人物の性格に重きを置くものとがあつて、フライタークやゴーゴリの喜劇は前者に屬し、モリエールの諸作やシェークスピアの「ヴェニスの商人」などは後者に屬してゐる。

卽興喜劇　卽興喜劇は伊太利語のコムメディア・デル・アルテの譯語で、第十六世紀頃伊太利に榮えた喜劇である。全然脚本を用ひず、俳優が舞臺に上つてから、臺詞を卽興的に作り出すことが特徵となつてゐる。

尤も全然卽興によるのでは、會話の進行如何で脫線するか分らないから豫めシナリオといふ一種の筋書を作製して置き、それを舞臺の出入口に貼り附けて置いて、俳優が登場前に一應これを熟讀することになつてゐる。劇の仕組は我國の狂言のやうに大名、太郎冠者、次郎冠者といつた類型的の性格を演ずる數人が登場するだけで、變つた新しい人物は出て來ない。

悲喜劇　悲喜劇は英語のトラヂ・コメディーに當り、時として喜劇の中に統括されることもある。悲劇でも喜劇でもなく、結末が幸福に終るといふのが常例である。喜劇的要素と悲劇的要素との二つが調和されたものといふ意味から、調和的戲曲と呼んだ論者もある。凡て悲劇はその主人公が、死んだり亡びたりすることを以て結末とし、喜劇は登場人物の凡てが最後に融和して幸福に終るのが特色であるが、悲喜劇ではたとへ主人公が惡漢で、それ相當の制裁を受けても、終には善人に立返るといふことになり、又善人は如何に苦しめられても、結局は榮えるといふことになつてゐる。この種の戲曲としてはシェークスピアの「以尺報尺」「ヴェニスの商人」などがあり、我國の歌舞伎劇の大部分はこれに屬してゐる。

神祕劇　神祕劇は中世期の歐洲に榮え、基督教旨や基督教史上に見えた聖者や義人、及びその經典中に現はれた著しい事件などを仕組んだ演劇である。文化の十分に發達しない時代には僧侶以外に文字を解する者なく、又法經や說教も行はれなかつたから、無智の民衆を教誨するためこの神祕劇が起つたのであるが、これは近世劇の發芽とも見るべき教訓劇への橋渡しとなつたのである。

初めはこの劇は寺院の一隅で僧侶自らが、羅甸語で演じたものであつたが、次第に脚本の內容も複雜となり、登場人物も多くなつて寺院外に場所を設け、各々自國語で樂俗が演ぜられるやうになつたものである。

場所は多く寺院附近で簡單な舞臺を作り、湖、山、秣槽、牢獄等、聖書に現はれてゐる風物を代表する粗末な道具立をならべ、舞臺の上手には天國を高く設け、下手には地獄が口を開け、そこから惡魔が出入するやうにしてあつた。演技を助けるために音樂を用ひ、俳優は僧侶を初め學者、商人、職工などで、時には貴族も加はり、社會の有ゆる階級を網羅したものである。

かくて始めは神祕劇の名に値したものであつたが、後には滑稽卑猥に陷るやうになつたので、佛蘭西などでは國會によつて禁止した。

夢幻詩　實人生よりも夢の中の經驗の方が、より眞實であるといふ主張から、夢中における人間の生活を描き出した戲曲が夢幻劇である。代表的作品にストリンドベルヒの「ダマ・スクス へ」及び「夢の戲曲」があるが、彼は肉體を以て體驗する人間生活を夢の世界であり、假象の世界であると見たから

靈の世界、形而上の世界に實在の世界、本質の世界があるとし、そこに解脫の道を求めたのである。「夢の戲曲」の序文においてはストリンドベルヒは「聯絡はないが、然も飽くまで論理的に夢の形式を追ひ、一切のことが起り得べく、一切のことが可能であり、且眞實である世界を攫かうとした」といひ、更にその世界では、「人格が分離し、重複し、倍加し、蒸發し、凝縮し、溶解し、集積する。然し一個の意識が、夫等一切の上に抽んでゝゐる。卽ち夢みるものゝそれが抽んでゝゐる。これに對しては何の秘密もなければ矛盾、狐疑、法則などもない」といつて、夢は絕對に自由な心靈の遊步場であるとし、より高い夢想は現實よりもより大なる實在性を有つと考へた。

問題劇　問題劇は演劇をその取扱ふ主題の方面から呼んだ名稱で、近代劇において多く見られるところである。人間の社會生活、精神生活において、何等かの問題となるものはすべて問題劇の主題となり得るが、特に近代社會における社會問題勞働問題乃至宗教上、道德上の諸問題はその顯著なものである。問題劇はこの種の問題を中心とし、問題をたゞ問題として有りのまゝに提出したものと、これに何等かの解決を與へたものとがある。

傾向劇　作者の主義、思想を宣傳するために作られた劇が傾向劇である。例へばマルクス主義を宣傳する目的で、勞働爭議を題材としたとすれば、それは傾向劇といふべきだが、かゝる宣傳の目的はなく、單に勞働爭議を題材として取扱ひ、勞働者の解放を觀客に感得させたとすれば、それは傾向劇ではなくして社會劇である。

靜劇　靜劇は白耳義の劇詩人、モーリス・メエテルリンクの唱へ出した戲曲の一樣式で、近代劇に一變調を來したものである。宇宙に唯だ一つ實在するものは神祕な運命のみで、幸福といひ不幸といひ死などゝいふものは姿をかへた運命であつて、それが、何時も人間の家の中に立ち廻つてゐるのを人間は少しも知らない。悲劇は故らに異常なる除外例に求めるまでもなく、有りふれた日常茶飯の生活中にある意識の奧を深く掘り下げるならば、人間の心理生活、道德生活の領域の中に、外面的な生活に現はれるより以上の、劇的要素が發見されなければならない。近代劇の作家は須らくこれをなすべきであるといふのが、モーリスの悲劇論である。彼はさうした認識の世界において、通常は人の耳目に觸れることのない

靜かに然も確實に行はれてゐる靈の「動作」を舞臺面に表現しやうとしたのである。簡單なる筋と動作、短い暗示的な對話、對話と對話との間の沈默、夫等を通じて眼前の現實世界の奥に動いてゐる靈の世界の消息を直感させやうとするのが靜劇であるから、靜劇では殆んど動作拔きの氣分とか、情調とかを一篇の主旨としてゐる。

社會劇　社會劇は英語のソーシアル・ドラマ(Social Drama)に當るもので個人と集團、或は個人と社會との矛盾衝突の姿相をそのまゝに描寫した劇で、近代劇の中樞をなすものである近代劇以前にも社會劇と稱すべきものはあつたが、この社會劇に最も力を注ぎ、演劇の上から社會改造の第一聲を放つたものは、近代劇の始祖といはれるヘンリック・イブセンである。

イブセンは人間を、單に自然の背景の中だけに置いて見る態度から一歩を進め、ある意味で社會的機構の臺の上に載せて考へた。然し彼の劇は個人と社會との矛盾衝突といふ方面にのみ限られ、其後の社會劇の特徴である集團と集團、階級と階級との對抗又は鬪爭を描くまでには至らなかつた。

その後イブセンの作風を繼承した社會劇が各國に輩出し、獨のハウプトマン、ズーデルマン、佛のブリュー、キュレル、ニルヴュー、英のビネロ、ショーなどは、その代表的作家となつた。然も吾々の生活と社會的機構との關係は、その後加速度的な緊張の度を加へ、階級對階級の關係葛藤が演劇の主題となるに至り、英吉利のゴルスワージーなどが、この方面で社會劇の新分野に第一の鋤を入れたが、更に大戰後獨逸の表現派の諸作家などは、この階級對階級の鬪爭の白熱化した狀態を描き、表現派の領袖ゲオルグ・トルラーの『群衆――人間』などはその作劇上、從來の社會劇とは全然趣を異にする程の進展を見せてゐる。

動物劇　動物劇は動物を主人公とし、動物の生活を活寫した劇であるが、動物を描くといつても、一種の擬人法によつてこれを取扱ふのである。この種の劇の代表作としては佛蘭西の新浪漫派の驍將エドモン・ロスタンの「シヤントクレール」がある。この種の劇が普通の劇と異るところは、衣裳其他が目新しいことゝ、動物を描きながら結局は人間を諷刺し、または揶揄してゐることである。

童話劇　童話劇は童話の如く、兒童に理解されるやうに作られた劇で、兒童のために演ぜられる劇であるが、兒童は大人よりも直感的で空想性に富んでゐるから、劇も寫實的のものでなく非現實的なものが多い。これは大人にとつても頗る興味があつて、單に兒童のためばかりでなく、大人のためにも童話劇の作られる場合がある。メエテルリンクの「青い鳥」、イブセンの「ペール・ギント」、トルストイの「最初の酒造り」などは有名な童話劇である。

第三節　小說

小說は詩や戲曲の形式ではなく、自由な形式で書いた散文藝術で、ロマンスとノベルの二種に分たれてゐる。その意義や見解については種々の說があるが、元來ノベルといふ文字は伊太利語で、「小さい話」の意であり、現在小說と呼ばれるものとは性質を異にしてゐる。

現在の小說は第十九世紀以後のもので、アベ・ウーエトは、「小說とは讀者に喜悅と敎訓とを與へるために、技巧を以て散文で書かれた戀愛冒險談の假作物である」といひ、クララ・リーヴ女史は「小說は實際の生活狀態の繪畫で、それが畫かれた時代を描寫するもの」といつてゐる。是等に比べると近代の評論家は、より明晰な見解を發表してゐるが、正確な定義を避け、形式を自由にして範圍を限定してゐない。そして綿密に構想を守れと主張するのである。

即ちウォレンは「小說とは構想を有する想像的の散文物語である」といひ、ブリス・ペリは「小說家も詩人も主として人類生活及び、人類生活を圍繞する總ての物に興味を有し、又人類無數の活動に影響を與へる。彼等が實際生活の種々樣々なる危急や、禍福の人物を描寫するを目的として話すところの數多の事件は、體溫器の如き言はゞ機械の構想で、この機械によつて人生自ら己の身を檢査し、目方を計ることが出來る」と述べ、スティヴンソンは、「性格にせよ感情にせよ、動機を選べ、各事件が動機の例證であり、用ひられた各道具が動機に對して、一致乃至は對照の密接なる關係を保つやう注意して構想せよ」と說き、ストダード敎授は「小說はある情緒の展開と人生に及ぼすそれの効果である」との意味を述べてゐる。以上の諸說を綜合して考へると、小說には構想、動機、人生乃至生活、性格描寫、情緒の五つの要素があり、是等が錯綜して渾成された散文藝術が小說である。

本格小說　小說を心境小說と本格小說とに區別するとき、前者は作者の身邊に起つた事件を、殆んどそのまゝに作つたもの

後者は作者の身邊に起つた事件を露骨に書かず、客觀的に描くものをいふのである。近來心理解剖が鋭く行はれるやうになつてから、小說は兎角作者の日記か告白かのやうになつて來たが、これは邪道で、小說は飽くまでも作者が作品の背後にかくれて作中の人物を取扱ふのが本格であるといふところから、この種のものを本格小說と呼ぶのである。

心境小說　心境小說は本格小說に對する創作上の區別で、私小說とほゞ同義である。三人稱で書かないで、一人稱または一人稱の如く書く小說で、主として一個人の生活を卒直に直接に記述し、そこに藝術的價値を示さうとするものである。

或る論者は「――卽ち心境とは腰の据りである。それは人生觀上から來ても、藝術觀上から來ても、或は昨今のプロレタリア文學の主張の如き社會觀から來てもいゝが、要するに立脚地の確實さ、常に間違ひなく自分であり得る心の据ゑやうである」といつてゐる。志賀直哉の「和解」などは、心境小說の代表作であるといはれてゐる。

通俗小說　文藝に對する教養の低い者にも、理解し得られるやうに書かれた小說が通俗小說で、それによつて義理人情を教へ、趣味を高めて行かうとするのであるが、一般には讀者の趣味や嗜好に投ずるため調子を一段下げ、精神的問題には深く觸れず、又性格や心理の描寫に力を入れず、筋の面白味を主とし、家庭の問題や戀愛事件を主題としたものが多い。尤も藝術的小說であつたものが何年か經つて社會的評價の標準が高まつた結果、通俗小說として見られるやうになる場合もある。ツルゲーネフの「其前夜」「ルーディン」などは立派な藝術的小說であるが、今では通俗小說の典型とさへいはれてゐるなどその例である。

夏目漱石

新聞小說　興味をつなぐため、新聞に連載される小說が新聞小說で、日本の通俗小說の大部分は新聞に連載される。この小說は一日に少しづゝ掲載し、それで讀者の興味をひくやうにしなければならないから、作家の自由を束縛し、藝術的に優れた作品は出來難いが、その不自由の中で、特殊の味を出さうと努力する作家もあり、從つて通俗を目的に書くやうになるのである。尤もときには純藝術的小說を連載することがないでもない。

觀念小說　觀念小說は日清戰爭當時、少時の間流行した一體で作品の中に或る一つの觀念を寫した小說である。この種の小說の現はれたのは在來の單調、輕浮な小說に飽き深刻味を求めた結果で、泉鏡花、川上眉山などが悲慘冷酷又は不具病的なる一性格、一事象を捕き、そこに作者が作中に一の觀念を寓して道德的、倫理的質問を讀者に提供し時には作者自らそれに解答を與へたものもある。社會の暗黑面に伏在する或種の罪惡、矛盾、犧牲などを描出して問題を世に提供した趣がある。

科學小說　科學小說は科學思想や、科學上の發明などを主題として描かれた小說で第十八世紀の末葉メルシェが、「紀元二四四〇年」と題した未來記を書いたのが始めである。其後第十九世紀の中頃エチアンヌ・カペエは「イタリア旅行記」の中に潛航艇、飛行機その外新發明の電氣鐵道のやうなものを豫言的に入れて面白い物語を作つた。爾來科學上の發明が激增し、工業が發達するにつれて科學小說も非常に進歩し、「キップリングの一日の仕事」の如きものも現はれ、現今では物質文明の最も進歩した米國で盛んに流行してゐるが、娯樂的讀物としてゞあつて藝術味のあるものは殆んどない。

實驗小說　實驗小說は佛蘭西の自然主義の作家、エミール・ゾラの唱へ出した主張に基く小說の一種で、ゾラの小說「ルーゴン・マッカール叢書」二十卷はその適例である。この小說はクロード・ベルナールの「實驗醫學研究序論」中の所得を應用したもので、ベルナールは其時まで一の技術であるとされてゐた醫學に、實驗的方法を適用して技術から科學へ變へやうと試み、遂にその成功を見た。ゾラはこの適用範圍を更に擴大して、「若し實驗的方法によつて、肉體的生活に關する知識が得られるならば、それによつて情的並に知的生活の知識も得られるに相違ない」とし、科學の研究が、觀察から始まつて實驗により完成されるものとすれば、文學もまた觀察と實驗との科學に外ならぬと說き、小說は人間を一定の個人的及び社會的環境において、實驗した實驗報告書であるとしたのである。

かくして小說家は科學者となり、小說家の仕事は生理學者が、物理學者や化學者の仕事を繼承した如くに、生理學者の仕事を承繼いで觀察と實驗とをなし、これに一種の心理學を作つてその足らざるを補ふことになるのである。從つて小說家が人間の性質を研究する道具は、飽くまでも實驗的方法であり、かゝる科學的研究、實驗的推理によつて、理想主義者

の臆測を次々に征服し、純然たる想像によつて作られた小說は、觀察と實驗との小說に變り行くべきであるといふのが、ゾラの主張である。

目的小說　目的小說は純藝術的ではなく、たとへば教化のためとか、悅樂慰藉のためとか、或は道德問題や、社會問題を扱ふ類の如く、或る一つの目的のために書かれる小說で、ウエルスの諸作がそれである。またストウ夫人の奴隸廢止を目的とした「トム叔父の小屋」、デッケンズのホノルのやうな學校を社會に存在せしめないことを力說した「ニコラス・ニックルベー」、馬にも親切であれと教へたシューエルの「黑馬物語」などいづれも目的小說といふべきである。

戀愛小說　小說には何等かの形で戀愛が取扱はれてゐるが、殊更らに戀愛問題を取扱つた小說が戀愛小說である。戀愛には二種あつて一は肉的要求が根本となり、他は精神的戀愛である。戀愛小說が前者を取扱ふ場合には性的描寫が多く、享樂的、情熱的、樂天的であるが、時には病的になつてデカダン、マゾヒズム、サディズム、狂的淫亂猥褻の戀愛小說になる。また後者の場合には、宗教的、一種の友情、同性愛などが取扱はれ、肉慾的描寫は少く概して悲劇的である。

歷史小說　歷史小說は、歷史的に有名な事件や人物を主題として書かれた小說であるが、必ずしも史實をそのまゝに書くとは限らない。むしろ作者が歷史上の事件を、人物の中に入つて古人の生活を見直し、それを作者の主觀によつて奧深く辿つて行き、そこに近代的な感情や認識を生かした小說をいふので、シンキウィツチの「クオ・ヴアヂス」などがその適例となつてゐる。

自傳小說　作者自身の生活を內容として書かれた小說が自傳小說である。トルストイの「幼年」「少年」「青年」は、內生活を主として書かれた自叙傳小說であり、ストリンドベルヒの「惑困の發展」は單なる自叙傳ではなく、藝術的であることを特色とする。

滑稽小說　滑稽小說は文字通り滑稽を目的として作られた小說であるが、滑稽とは大なる期待を以て緊張してゐる際に、急に事實がそれを裏切つたゝめ、拍子拔けのしたときに感ずる如き可笑しみである。この滑稽がリップによると、主觀的滑稽と客觀的滑稽とに分たれる。主觀的滑稽は主觀が對象に對して、自から滑稽を作る機智の如きものであり、客觀的滑稽は客觀の事實が滑稽を作るところのものをいふのである。我國では文化文政時代に一九や、三馬が出て滑稽本を書き非常に歡迎されたが、一九の「東海道中膝栗毛」三馬の「浮世風呂」などは殊に有名である。

傳奇小說　傳奇小說は傳奇的趣味を主とした小說で、馬琴の「八犬傳」の如きは、最も優れたものといふことが出來る。然し、この名稱の用ひられ出したのは、明治の中葉頃から政治小說、冒險小說、歷史小說などゝ略ぼ時を同じうし、世人が幸田露伴や、尾崎紅葉などの寫眞小說に飽き、傳奇的な讀物が要求せられるに當つて生れたものである。村上浪六の遊俠小說、黑岩涙香の探偵小說なども、一面傳奇小說に屬するものである。

曲亭馬琴

探偵小說　探偵小說は探偵事を主題とした小說で、以前は通俗小說、冒險小說の如く、低級な讀者を相手に書かれたものであるが、今日では探偵小說としての特有の興味と藝術味とを有つたものが多い。一般に小說はクライマックスが、一篇の終りの方にあるが、探偵小說では殆んど全部がその初めにあつて、いきなり大事件が突發するとか、大問題が起るとかして、それを探偵が論理的に、機智的に解剖綜合して、結局解決をつけるのである。興味は探偵の努力と、探偵される者の努力との格鬪にあり、我國では明治二十六年頃から勃興し、黑岩涙香の「鐵假面」、「大金塊」、「死美人」、「人耶鬼耶」などが新聞紙に高等探偵小說と銘打つて出た。大正末から佛蘭西のモーリス・ルブランの探偵小說などの刺激を受けて急に流行し始めたが、飽くまでも科學的に頭の働きが發揮される所に、藝術とは異つた興味を呼んでゐる。

第四節　描寫法の種別

內面描寫　內面描寫とは人物の內面的生活である所の精神狀態心理狀態または氣分などを描寫することである。外面描寫を平面描寫といふに對して、內面描寫を立體描寫ともいふが、外面描寫ばかりで出來てゐる文藝は深い味を缺き、精神的感銘の薄い作しか出來ない。反對に內面描寫ばかりで出來てゐる文藝は精神的感銘はあつても、餘裕のない、生硬な感じを與へる作に陷り易い。

平面描寫　平面描寫とは小說を作る技巧上の語で、藝術品を作る場合、少しも主觀を交へず、結構も加へず、唯だ客觀の材

料を描寫することである。故に主觀を加へないのみならず客觀的事物に對しても少しもその內部に入らず、人物を取扱ふにしても內的精神には立入らず、唯だ見たまゝ聞いたまゝ、觸れたまゝの事實を、そのまゝに描寫するのが平面描寫であるから、當然印象的にならざるを得ない。それで平面描寫は又印象的描寫とも稱せられてゐる。要するに自己の經驗した事物を唯だ平面的に描いて、それが讀者に何物かを考へさせるといふ行き方が平面描寫である。

自然描寫　自然描寫は自然界を描寫することで、主として風物の描寫に用ひ、小說の作中に動く人物の背景の役目をつとめるのであるが、自然描寫だけで一篇の小說を構成してゐるものもあり、この種の作品中には自然描寫によつて人物の行動なり、性格なりの印象を鮮明ならしめるものもある。

心理描寫　心理描寫は心の動き方に對する解剖や批判が他人に及ぼす影響、又はそれについての自分の考へ方や、他人の行爲の內的動機や、心の動き方などを描寫することで、小說に心理描寫のないものは殆んどない。心理描寫には想像によるものと、經驗によるものとがあるが、心境小說が盛んになると共に、心理描寫は一層深刻になつて來てゐる。

性格描寫　性格描寫は小說や戲曲などにおいて、作中の人物の性格を描寫することで、戲曲では主として會話によつて明示し、動作によつて暗示するが、小說では直接的方法と間接的方法とが行はれる。直接的方法は作中人物の性格を作者のある種の表示によつて直接讀者に傳へることで、それには當面の人物の特徵を熟慮して叙述することが大切であるが、何うかすると說明に墮する恐れがあり、事件の進行を阻碍し勝ちであること、又抽象的に流れて具體的な迫力を持たないことなどの缺點がある。間接的方法は物語そのものから讀者の推量により、間接にこれを髣髴させることで、それにはその人物の談話の調子や意味から、自然讀者に氣づかしめることが行はれる。然し行爲は言語よりも雄辯であるから、この方法の最も有效な用ひ方は、その人物に特有の行爲をなさしめ、更にその性格が作中の他の人物に及ぼす影響を表はすことが大切である。

性慾描寫　性慾描寫は官能的、肉感的性慾の描寫のことである從つて純なる男女の戀愛、プラトニック・ラヴなどの描寫は性慾描寫ではない。自然主義が勃興してから暗面暴露、僞らざる告白などが流行して、性慾描寫の露骨な文藝が多く現は

れた。殊にゾラ、モーパッサン、ダンヌンチオン、アルツイバアセフ、ストリンドベルヒなどの作には極端なものがある我國では井原西鶴の作が有名で、その性慾描寫は古今獨步と稱されてゐる。

感覺描寫　感覺描寫は感覺を重んじた描寫法であるが、この場合の感覺は、美學上の感覺としては輕んぜられてゐる味覺、嗅覺、觸覺などを指し、それ等の感覺から物を觀察し、描寫することを言ふのである。つまり、主としてエロティックの匂ひや、エロティックな觸覺などを取扱ふことで、人間の性慾生活に關する事件が主となつて居り、自然主義の作品や、近代デカダンスの取扱ふ對境などがこれに屬してゐる。

第五節　短歌と俳句

短歌は和歌と稱し、日本文學史上最も古い起源を持つて居りその歷史を辿ると三つの隆盛時代を分つてゐる。第一は萬葉集の出來た奈良朝時代、第二は古今集の出來た平安朝時代、第三は新古今集の出來た鎌倉時代がそれである。短歌はこの時代のみに限られてゐたものでなく、各時代を通じてあつたものであるが、この時代が最も盛んであつた。從つて現代においても歌を作り、歌を味はゝんとする者は、先づこの三つの代表的歌集を味ふことが必要である。

萬葉集　萬葉集は我國における最初の文學的產物で、歌を藝術品として讀み且つ味ふやうになつたのは、この頃から初まつてゐるのである。萬葉集の撰者については色々の說があるが大伴家持であるといふのが最も正確なやうである。この中には仁德天皇から淳仁天皇の朝まで、四百四十餘年間に出來た長歌二百六十二首、短歌四千七十三首、旋頭歌六十一首を撰集し、柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、大伴家持などの名歌人をはじめ、天智天皇、持統天皇等皇族方の御製や御歌も收められてゐる。萬葉集の歌の特色は想、詞、調子の各方面に渡つて自然であり、朴實であり、雄健である點と、その時代の人々の僞らざる情が、自然の形をとつて現はれてゐる點にある。

古今集　平安朝時代の和歌の全盛期に出來たもので、萬葉集時代の古典的な表現の方法から進んで一つの新らしい行き方を示し、技巧と情緒とを巧みに配合して、和歌を立派な抒情詩とした點を特徵としてゐる。紀貫之、凡河內躬恒等の活躍したのはこの時代であるが、この頃の歌は主知主義によつて、

以前のやうな情ばかりのものには滿足せず、同じく戀や四季折々の自然物を歌ふにも、理窟の立つた內容と形式の一致した洗練の行屆いた歌となつてゐる。然しそのために理に流れ歌の霑ひの乏しくなつたことを缺點とされてゐる。

新古今集　鎌倉時代の初期に出來た歌集で、これには古今集以後の歌が、古今集時代の題材、用語、形式などを固守して、次第に墮落して行つた後を受けて勃興した所謂新傾向を持つ歌を多く收めてゐる。この新らしい傾向とは、次第に歌の中に讀み込むことを多くして、形式の變化を求めるやうにしたことで、藤原定家はこの時代の代表的歌人である。

三代集　古今集と古今集の後に選ばれた後選集と、拾遺集の三歌集を併稱して三代歌集といつてゐる。

八代集　八代集は右の三代集の外に後拾遺集、金葉集、詞花集千載集、新古今集の五歌集を加へたものゝ總稱である。

今代の短歌　德川時代沈滯してゐた和歌は、明治時代に入り新文學の勃興と共に頭角を表した。そして從來の和歌の行き方を保守する所謂舊派と、奮套を破つて新時代の精神を吹込み、短歌を創造しやうとする所謂新派との二派の分裂を見るに至つた。この兩派は互に相讓らず鎬を削つて歌論を闘はしたが、然も大瀾の如く寄せ來る歐米の風潮は、有らゆるものに革新の氣風をそゝつて、歌壇も遂に新派の勝利を博するところとなつた。さうして舊派の歌は、今は、僅かに御歌所の歌人達によつて、命脈を保つてゐるに過ぎぬ狀態である。

俳句は短歌と共に我國特有の詩で、平民的な匂ひの高い藝術である。僅か十七文字の中に汲めども盡きぬ情趣を盛ることは、俳句以外に絕對に出來得ないことである。日本精神の鼓吹と共に、世の中が益々複雜となるにつれ、將來はこのやうな手輕な藝術が一層盛んになるであらう。

俳句の特色　俳句の特色は餘韻の盡きないところに在る。詩は俳句に限らず語を簡にして餘韻を殘すことが第一要件であるが、簡にすぎて意味が不明になつては何んにもならない。この點を辨へて、表現しやうとする思想の內容の大小により、その形式を考へ、小さいものならば俳句や短歌とし、大きいものならば、詩の形式を用ひるといふ風に題材を選ぶことが肝要である。この意味で俳句の場合は、俳句に適當な題材を選ぶことが必要である。

俳句の歷史　俳句は和歌の連歌ともいふべきものから分れて、別に一體を成した文學で昔は俳句とはいはず、發句といつたものである。そして連歌には連歌の發句、俳諧には俳諧の發句といふ如く、何れもその卷の立句になる、最初の十七綴を指したのであるが、其後永正、天文の頃山崎宗鑑、荒木田守武などが衰微した純正連歌から離して俳諧といふものを始めた。これが俳句の起源である。然しこの時代はやつと發句といふものゝ基礎が出來たゞけで、其後永祿から元龜、天正、時代を經て、松貞貞德が現はれ德川時代の發句の元祖をなし續いて宗因が出て談林派を起し、形式上から俳句の一大革新を企てたのであつた。以下是等の派について說明を加へやう

先づ宗因の所謂談林派の俳句は、俳諧を以て茶前茶後の戲れと見て內容、形式共に自由にして奇拔で、變化のあるものばかりを狙つてゐた。

次は松尾芭蕉によつて正風が生れた。芭蕉は一種の遊戲文學として取扱はれてゐた俳句を、精神から言語に至るまで根本的改革を行ひ、在來の和歌や漢詩に比して少しもひけ目を感じない、堂々たる文學上の地步にまで進めた人である。彼は初め貞德の門に入り、後ち談林派を眞似たが、遂に自己獨特の蕉風を起したのであつて、千人にも餘る多數の門下があり、中でも其角、嵐雪、去來、丈草、許六、支考、野坡、曾良、越人、北枝を蕉門十哲と稱した。この十哲の人々も各々蕉風の特色の中の一方面を受繼いでそれ〴〵一派を唱へ、其角の江戸座、嵐雪の雪門、去來の澁柿舍、支考の美濃風、素堂の葛飾風、涼菟の伊勢風など何れも名高く、元祿時代は俳句の黃金時代であり、一方にはまた伊丹風を開いた鬼貫も控へてゐた。

正岡子規

かくて最も全盛を極めた元祿時代の俳壇も、次第に爛熟の域に達した結果、寧ろ凋落に向つたが、其後半世紀にして又も革命期を迎へ、その先驅者となつたのは大祇樓良などであつた。けれども刷新の實を擧げたものは蕪村、曉臺、白雄などで、その後几董、月居、闌更、去來、成美などが續々現はれ、天明期の隆盛を迎へるに至つた。世に傳へらるゝ天明調はこの期に起つたものである。以來俳句は再び頹廢して天保時代の月並調となり、振はないまゝに明治を迎へた。

明治になつてから俳句は、三たび革新の機運を迎へて隆盛となつた。その巨匠は正岡子規である。子規は蕪村の俳風を

復古して日本派を立てる一方、内藤鳴雪もまた蕉將といふべき人であつた。現在の俳壇に重きをなす人には高濱虛子、河東碧梧桐、荻原井泉水氏などがあり、それ〴〵特意の作風を示して新傾向俳句の絢爛を競つてゐる。

現代の歌壇と俳壇　最近における短歌の方面は、誰の目にも非常に盛んにうつり、その作品は何れも圓熟し完成してゐる。從つて目立た變化などは望み得ないとされてゐる。それがためか歌壇の問題となつてゐるのは「現狀打開の途如何」といふことであるが、それに對する新打開策はどこからも未だ聞かされない。又各部分的問題としては用語の問題、從來の形態の問題、文法の問題などが論じられつゝはあるが、統一までにはなほ長日月を要するであらう。

俳壇ではホトヽギスの高濱虛子が、十一年初夏から約三ケ月ばかりの豫定で佛蘭西を中心に、歐羅巴を巡遊して來たことゝ、無季の俳句の問題とが最近の二つの大きな事件で、無季の俳句の問題はいま漸く口火が切られたといつたときで、今後次第に論爭を重ねらるべきものであるが、今日までのところでは無季を主張する人々の數は少く、その論議も至極狹いものである。小さな問題ではあるが、自選句發表の問題も、俳壇には新らしい刺激を與へたやうである。

俳句の序と曲と題　古い俳書に俳句の三要素として序、曲、題を擧げて居る。序とは句の上に使はれる詞、材料の關係や由來が、所を得る樣に仕立てることで、若しそれが亂雜や不整頓であつては、作者が何を意圖して居るかゞ不可解になる。「風鈴や子猫鶯く窓の下」では、子猫が窓の下に居る因緣來歷が現はされてゐないから、その景象を觀ることが出來ず、從つて趣味を感ずることが出來ない。因緣來歷が現はれる叙法、即ち猫が當然居る筈の叙法が「序」である。曲とは描かんとする對境に趣向が立ち、面白味が無くてはならぬといふことで、然うでない時は事實の報告になり、何の感激も與へない。「此頃や我が家を包む今年竹」といふ句があるとして、これはたゞ或事實を言つたに過ぎず、何の面白味も感得しないことになる。これを只言といつて詩の部類から除外する。この一廉の趣向が「曲」である。題とは句の中心が確かに表はされなくてはならぬことで、これが無くては何のためにその句が出來たか判らなく、趣味の感得も感激も起らない。これが即ち作意の不明といふ病で、句としては問題にならぬ。これを「題」といふのである。

第十三編　美術知識

第一章　汎論

第一節　美術と人生

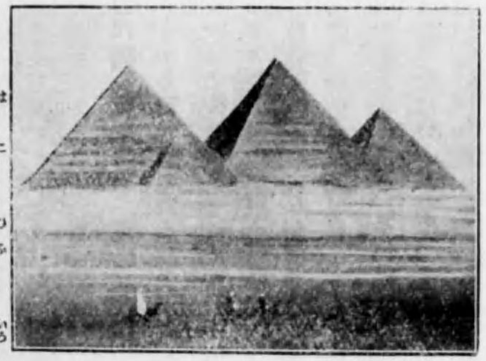
古代埃及の大工事　美術が人類の歷史の上にあらはれたのは、今から約一萬年前の埃及がこれを代表してゐる。當時埃及は一王の配下に屬する立派な一帝國で、王は歷代これをフアラオと稱し世の尊崇を受けてゐた。彼のピラミッドはフアラオの墳墓に相當するもので、クーフといふ所にあるものゝ如きは、その高さ百四十五メートルに達してゐる。この一個の塔を建設するには、今の建築技術的に調べて、何等の機械も無かつた當時としては、延人員十萬人が二十ケ年働かなくてはならないのである。然かもギッエーといふ所へ行つて見るとこの大きさに相當するピラミッドが、七十個も立ち並んでゐる。これは殆ど國民全體を使驅して工事を行つたといつてよい位だが、この大工事を意のまゝに行つたところに、古代埃及のフアラオの權勢が、絕大であつた事を證するのである。

埃及人の疑問　然しこの權勢絕大であるところのフアラオも、いつか天命が來れば死を免れることは出來ない。死ねばこの世から消滅してしまふのである。フアラオ程の威力を揮つた人でもいつか死んで、無に歸してしまふといふこの人生の不可思議な謎が、大いに古代埃及人を刺戟したのである。埃及人はつまりこの人生の根本問題に對して、初めて眞正面に深い疑問を生じたほど、慧智の進んだ世界人文の、當初の先覺者であつたのである。

彼等は考へた。この人間といふものが、一旦死んで煙のやうに消えるのでは、人生は甚だ頼りないものである、人生とはそんな空なものではない、もつと頼れるものであらしめたい——何れはさういへる死生本願から、人間といふものは決して、死んで消滅するものではない、人間は必ず復活する、人間の靈魂は無くなるものでなく、再びこの世に復歸するものと堅く信じたのである。その結果として、あの地上から一町も高く空へ聳え立つ、不思議な塔をこしらへることになつたのである。

靈魂とピラミッド　何故そんなことをしたかと言へば、王が何れこの世へ再び歸つて來る場合その靈魂の目印として聳立せ

しめたのである。それでこのピラミッドの墓の中には、王が死ぬとその遺骸をミイラとして入れた。言ふまでもなく復活永生の場合、再び立つに足る在りし世の體軀のしるしとしてである。



ピラミッド

ミイラの副葬品　この墓穴にはミイラの外に、副葬品として王が平生用ひた器具などを入れた。それからこれも復活永生の場合への目印として、この亡き王はかうした姿であつたといふその姿を、丸彫りに石に刻んで如實に作つたものを入れた。その眼にはガラス玉の如きものを嵌め込み、皮膚には色を塗り、眉を引き、着衣の模樣まで描いて、能ふ限り在りし日の王の姿の通りなものを刻み墓の中に入れたのである。

繪畫や彫刻の起り　王の墓には猶ほ死後の寂寞を慰めるために妃の姿を石に刻んで入れた。また死後の用のためには、生前いつも座右に奉仕した書記生の姿をも石に刻んで入れた。狩の好きであつた王の墓には、墓室の周圍に狩獵の模樣を描き死後にも王が食に事缺いてはいけないといふので、穀物收穫の狀をも記した。この石像や繪が、今日の繪畫であり壁畫などの藝術品なのである。

再生せぬ靈魂　埃及人はかゝる譯で、立派な石の彫物をつくりそれを展覽會などへ出すのではなく、出來上ると直ぐに地下數丈の、暗い墓穴へ埋めてしまつた。何故そんなことをしたかといへば、同じ石の彫物でも、當時と今日とでは、用途も作の目的も、その價値も全然相反してゐたからである。何も石の像などを、好んで作つたのではない。目的はより高い所にあつたのである。一度び死んだ王を、復活せしめたいためにあつたのである。その靈魂不滅の信仰心からである。そのために生前在りし王はかういふ面相の人、かういふ形の人であつたといふ、紛れぬ印を石彫で拵へた。從つて出來上るや早速、碌に日の眼にも當てずに、墓穴の暗い中へ入れてしまつたのである。

埃及人はファラオの再生を信じて、かくの如き事を行つた。

然かるに一度死んだ人は、もう再び生きかへらなかつた。古代のミイラは、たゞ古人の蒙昧を笑ふための古物的材料の如くになつた。かくファラオは一人として再生しなかつたが、思ひも寄らぬものが、生命を得て永久に不死のものとなつたのである。

美術の發見　人間の目には人生は一面、頼りない空寞なものと見えやうとも、どうかするとその頼りない人間の手から、直ちに不死の天に連なるものを、作り出すことが出來るといふ大事實を彼等は發見したのである。知らず〳〵發見したのかも知れないが、發見の事實に至つては嚴然たるものである。彼等が死生本願ゆゑにコツ〳〵と拵へた石の彫物は、それが一旦世に形を現はすと、最早再び死なゝい美術となつたのである。目的の一個の王は、一旦死ぬと再生しなかつたが、その代償として、再び死ぬことのない大きな美術を發見した。これは埃及のピラミッド事業の場合の、古今に冠絶する大問題である。

信仰と美術　この埃及以前の太古は、文字通り頼りない人間であつた。その爪は猫にさへ劣り、その歯は犬にさへ及ばなかつた。日々の生活には、單に生きるといふことそれ自身が、太古の萬世を蔽ふ大問題であつた。衣食住は卽ち人生であつて、この實地問題を片付けずには、一朝の風や夕立にさへ人間はかなはなかつた。死の有無を不思議がるほど、人間には餘裕はなかつたから、どの國でも、太古の傳說の時代といふものには、必ず淫祠の信仰が、人心を深く支配する。人の生死を訝るといふ哲學的解釋よりは、寧ろ人の出生を喜び恐れるといふ現實的釋明に出たもので、これが自然と生殖崇拜となつた。生殖の不思議を、直ちに神業として崇めたのである。

それが西曆紀元前八千年から五百年の埃及時代に至つて、初めて生死に直面して不思議がり、そこに靈を信じ不滅を信じ、死生本願の所に立つことを得る、さうした人智の開明第一時代に到達したのである。そして亡き人を石に彫るといふ彫刻物をも、初めて創作したのである。もとより彫刻美術を起さんとする意思のあつた譯ではなく、生死定めなき人間の世に、滅以上の或るものを頼らうとして、埃及彫刻は由來したのであるが、それが意外にも美術であつたのである。單なる行樂どころではない。人生に必須の死生大願を基因として起つたのである。埃及に一個の像があるといふことは、やがて不滅の人があるといふに等しかつた。この不滅の人を親し

く人間の手で作つたものが、取りも直さず美術の二なき權威となるのである。人間は神が造つたものかも知れないが、その人間は死んでなくなるに反し、人間の手で作つた美術は、心をこめて作ればそれが永久に死なゝいのである。不死の神も人間の思念がつくり出すところだが、美術はこれを親しく形を以て現出せしめるところに、特殊の意味や目的を生ずるのである。

生ける美術　美術の土臺はかくの如く埃及人によつて据ゑられた。彼等の願つた人間の復活は求め得られなかつたが、その願望が正であつたが故に、側體以上の總體の復活永生が裏付けられた。そのためにピラミッドを起したフアラオは再び立たなかつた代りに、その業のために計つた美術の業は不死不滅のものとなつた。さうなると此石像を彫んだ無名の工人、彼のために石を運んだ人、且つその墳墓のために二十年間勞役した十萬人の古代の人夫など、埃及といふ是等の悉くが凝つて、彼の一基の像の中に永く生き動いて居ると稱しても過言ではないのである。これについて埃及研究家のペトリーは、曾て巴里のルーヴル美術館の埃及彫刻を見て「若しも紀元前二千何年のこの書記生が、若し千九百何年にニール河の岸にゐたとすれば、するとこの間の旅行で見たあれが、あの書記生だつたかと埃及の旅行家は誰しもさう思ふ」といつたが、それほど寫實によく出來てゐるのである。無垢純情の發願からこしらへた埃及古王朝の作品は、どの意味からいつても「生ける如く」世界美術史の卷頭に立つて、世紀を睥睨してゐるのである。

第二節　美術の發達

エジプト美術　美術は世の美しさを形に現はす術であるが、元來さういふものが、自然の中に自とあつた譯ではなく、美術のある所には必ず人文があるのである。世界の歴史は永いが美術の歴史はさう太古から初つてゐない。先づ埃及民族が、歴史の上に國家的繁榮を起した頃から、世界の美術が芽を出したのである。

先づこの最初の美術的事業は、衣食住の住から出發して建築物を造つた。美術といつても必要から起つたのである。必要のないものは、世の中に發生する譯もなし、たとへ發生したところで榮えないと思ふが、埃及人も先づ必要から案を立てゝ住家をこしらへた。

尤も彼等は初めから、美術をこしらへる積りではなかつたらしいが、その拵へた人間の住むに足る建築は、後の美術に適つたのである。つまり無から有を出した譯で、人間といふものそれ自身の才智の面白いところである。

それから彼等は、彼等の崇拜する靈魂不滅の信仰心から、死者の在りし昔の形を如實に、そのまゝ石に彫む彫刻を始めたが、この形を造るといふことそれ自身も人智にあつて、自然には無いことである。

メンフイス中心時代　その後埃及は次第に進歩し、メンフイスが中心となつて榮えた時代には、時と共に末廣がりに、この造形技術が進歩して來た。造形といふことに心付いたものがこんどは造形の內部へ、デテールへ、屢々技術へと、細かく進歩して來た。これは當然の順序であるが、メンフイス中心時代の初めに當つて、何を埃及人が造つたかといへば、ピラミッドとメンフイスである。

これは世界の奇蹟だが、美術としてはまだ〳〵有難い物ではない。野蠻であるがたゞ面白いのは、こしらへた埃及人とその作者の個性的な幻想や性格を見ることである。元來は何にもない廣寞たる平野へ、突如として大三角形を盛り上げるといふ、この美術的素因には深い意義があるのである。

ピラミッドの思想は、一度死んだ人の靈魂が必ず世に返るその場合の地上の目印として、尖つた大三角形を地上に聳えしめ、その傍らに千古の見張番として、有名なスフインクスが築かれた。さうしてピラミッドや、マスタバスと稱する矢張りこれも墓の中に、彼等は眞率無垢に王を彫んで入れ、その書記を刻し、長官ラノーフェルを立像として入れた。死んで形がなくなることによつて、人間の發明した形を止めるといふ思想こそ、美術の起源としては適しい發祥といふべきである。

其後も埃及は紀元前三百五十八年頃まで續いた。仕事にもいろ〳〵の消長があつたが、埃及の仕事の最もよい代表的なものは、何んといつても初期王朝時代のもので、其後は追々と變化し、同時に追々と衰微してしまつた。

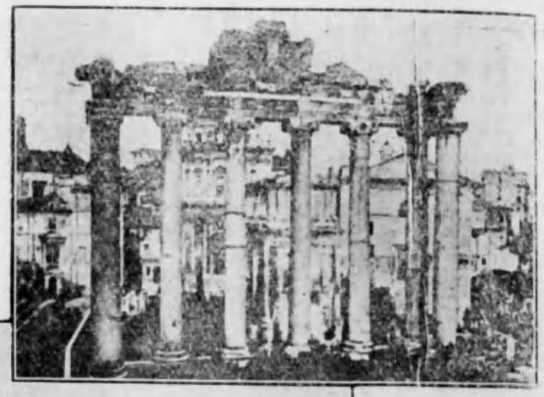
希臘美術　埃及人の發明した造形を、それに代つて進歩せしめたものは希臘である。希臘は美術を、人智の上に確定した第一人者であるが、その例としてパルテノン神殿の如き美しいものを見ることが出來る。かゝる麗精に表現する術は美術の優れたるものであるが、これの造られた時世には尙埃及の物

しか外に手本はなかつたのである。埃及が美術の端を開いた如く、希臘は美術の上の動かすべからざる古典を開いたもので、埃及よりも一歩内部へ入つた譯である。然しそれが紀元前百四十年になると、新興羅馬のために敗られてしまつた。

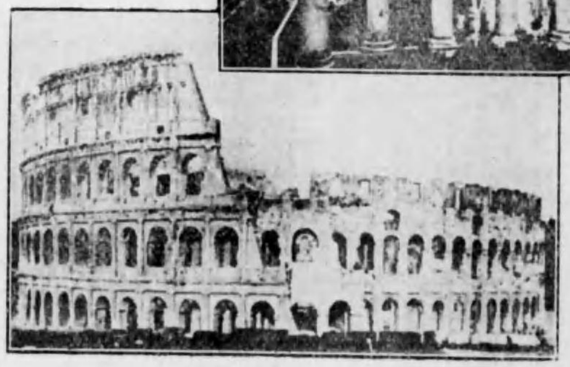
羅馬の美術　羅馬は希臘を倒して、その國土や住民を併呑すると同時に藝術をも所有としたが、この國に至つてその國民性から、今までの唯心的なものとは異つた實用的な、劇場建築、水路などにまで進んだ。元來羅馬は美術に適する材能のものではなく、寧ろ治世經綸に適したものであつた。然し希臘の產出した美術を、類に應じて整理し、歐洲各國へ妥當に散布するには適してゐた。

羅馬の彫刻

希臘　若し歷史に羅馬がなかつたならば、大希臘の美術のも、たゞ地中海沿岸の前世紀の、一地方現象として終つたかも知れない。希臘は美術を產出し、これを彫刻進歩せしめるには多能なものがあつたが、それを散布せしめ、啓蒙的の色合を付けることは不得手であつた。つまり希臘は藝術家肌であつた。より實際的な羅馬が現はれて、希臘藝術を整理し散布したので



古代建築の粹を極めた羅馬の建築　其の一



古代建築の粹を極めた羅馬の建築　其の二

ある。同時にこの羅馬の年代に取つては、そこに餘り冴えぬ美術の、形而下的な役廻りがあつた一方に、善と美の交錯的な問題について、より重大な決定的問題が起つたのである。

クリスチャン美術　それは基督がこの年代に生れて、且つ磔刑されたことである。善の正確な意識的萌芽を、美の爛熟せる末葉が蹂躙したことである。それはこゝで新たに、人文を更生的に立て直す地下の大坑道が開鑿されたやうなもので、その後中世期千年の歷史の表面は暗いが、内部には眞摯な新坑道開掘の鑿の音が、堅實に揮はれてゐる閑却すべからざる闇であつた。

基督以前の西洋にとつては、異教徒の仕事であつたところの藝術が、こんどは心を善に浸透せられた基督教徒の仕事となつたので、彼等の藝術は初め、地下のカタコムから寂しく起つたのである。丁度再び埃及のピラミッド事業を、地の底に繰り返すやうなもので、それが埃及と違ふところは、新時代の基督教徒は、多感の情操的殉難と意識を、頓に事毎に持つてゐた點である。それ故にこの進展は遲々たるものながら、たゞ進み出すとなるとその歩調は強いものであつた。

やがてカタコムの作家は地下から地上に現はれて、バヂリ

カ寺院の作者となつた。そこに紀元第六世紀頃モザイク藝術を起した人となつて、クリスチャン美術にその地歩を固めたのである。さうして一轉してゴヂックの作家となつた。ゴヂックの堂塔の如く天を目ざし、それが地上から建設された例は、希臘美術純情の場合と雖も、これほど善と美の渾然したものは見ることが出來ないのである。果然ゴヂック美術を繼承して生れた十六世紀以後の伊太利半島の仕事は、完全に善理想に對して人工の美を結び、所謂復興の意氣揚々たる、根の強い大業となつた。

復興は一度無くなつたものが、再び世に興る現象だが、全然以前と同じ姿で起るものではない。往古の處女ヴェメスはこゝで聖女マリアとなり、マリアはその膝に死んだ子の基督を抱く經驗があるわけで、美術の情操につゝましく晝夜の差を生じた。たゞ晝夜の差はありながら、無垢の美においても乏しからず、往古希臘に讓らぬものとなつて、復興の意義が初めて全くなつたのである。

近代美術　第十六世紀に至つて基督の羅馬教會が、その過ぎた美を北歐の純理批判的な美學徒によつて襲はれた後は、つまりマルチン・リーテルの宗教改革後は、世界歴史は急激に近代的色調を帶び來り、悲壯なものとなつた一面緊密なものとなつた。

それまでの美術は埃及といひ、希臘、羅馬といひ、伊太利といひその一國の歴史事情が、そのまゝ同時に全歐洲の興亡の歴史となつたが、十六世紀以降は世界は群雄割據の姿となつた。同時に美術も蒔かれた種の如く、到る所に頒布されて細かく、複雜となり、その味は微妙に、その業は多端となつて現今に至つたのである。

第二章　繪畫

第一節　繪畫觀賞の心得

繪畫の三要素　繪畫は空間藝術である。音樂などが時間の經過によつて聞かるべき、時間藝術であるに對して、繪畫は空間によつて成立するから、これを空間藝術と稱するのである。また同じ美術の部門の中で、彫刻や、建築が立體であるに對し、繪畫の空間は平面であり、そして繪畫は西洋畫にしても日本畫にしてもすべて材料、形式、内容の三要素を離れて成立することの出來ないものである。以下この三要素について述べて見やう。

先づ材料といふのは、感情に訴へる印象を表はす材料のことで、具體的にいへば色と光である。紙や絹やカンヴァスは單に素地ともいふべきものであり、繪具は色と光を表現する仲介物である。

次に形式といふのは、材料である色や線の配合物、即ちその描き方のことで、對比とか、調和とか、漸層法とか、約合または對照法とかをいふのである。例へば新綠の森の前に黑い人物を點出すれば、綠と黑とは對比をなし、新綠の森の上に藍色の空を描けば、綠と藍とは調和を示し、同じ新綠にしても、淺い綠と深い綠とを描く場合には、漸層法によるのである。また約合も例へば寺を描く場合、森の中の右に高い塔を描き、左に大きい堂が現はしてあれば、釣合がよく取れてゐることになる。總てこれらを形式法則といつて居るが、この形式の總ては「多樣統一」といふ一つの形式の原則に約められるのである。また作者自身が苦心して、大體の形式の原則に基いて、表はさんとするものゝ骨組をすることを構圖といひ、これが出來上れば形式となるのである。即ち形式は出來上つたものをいふので、構圖の原則も「多樣統一」にあることは勿論である。

最後の内容とは、題材のことである。即ち如何なる所を描き、それに何の意味が現はされてゐるかといふ、その描かれた意味が題材である。もつとわかり易くいへば、繪の内容のことである。

繪畫の樣式　繪畫には形式といふものが、必然的に現はれて居る。例へば日本畫であれば帝展派とか、院展派とかいつたやうに、その系統の共通な色合とか空氣とかが自然に現はれ、同じく洋畫では帝展型とか二科型とか、セザンヌ張りとか、ゴッホの樣式とかいふ風に、自然に一つの型ともいふべきものが現はれる、これが繪畫の形式である。個人にしても大觀型とか、廣業型とかいつて、その畫家の弟子達が、それを學ぶについての一つの系統ともいふべき風格が樣式である。または時代からいつても、その時代に共通な空氣が現はれて、樣式が生じて來るものである。この樣式を心得て置くことは繪畫のみならず、あらゆる藝術を觀賞する上に、最も必要なことである。

繪畫の手法　繪畫の手法とは、一口にいへば描寫法のことで、繪具の塗り方とか、線の引き方とかのことである。樣式は畫

家の主義思想から生じ、繪の大體に關してゐるものであるが、手法はその手先の技巧から生れて、細部に關するものをいふのである。然し、樣式と手法とは離すことの出來ないもので、或樣式の繪畫を作るには、それに相當した手法を必要とするのである。つまり樣式は畫家の頭に卽し、手法は手に則したものである。

觀賞の三階段　繪畫を觀賞するときには、先づその繪に對する感覺が起り、感覺に次いで感情が湧き、次に理智の判斷が生ずるのである。これは美學上から見た觀賞法であるから大體の說明を加へることにしやう。

感覺を正確に銳敏に働かして、それを洗練するといふことは、繪畫觀賞の第一要件である。そして色彩に對する感受性を鋭かにするには、常に高尙な趣味を養ひ、俗惡な色を排して高雅なる色をよしとするやうに心掛けること、形式に關する感受性を養ふには美學を研究すること、內容に對する感受性を養ふには畫題を知る、例へば神話を題材にしたものはその神話を知り、歷史畫ならばその歷史を知ることが必要である。その上自分の思想を練つて置けば、審美的感覺は銳敏正確となるであらう。

感覺のすぐ次に起るものは感情である。この感覺と感情とを合せて第一印象といつてゐるが、第一印象には感情が最も强く活躍して居り、これを鮮明にすることが、觀賞上重大な役目を持つことになるのである。然し審美的感情は穩かなものであつて、如何に慘酷な場面が描いてあつてもまた戰樂の極まつた光景が描かれてゐても、實際を見るやうな激しい感情は起らぬものである。尤も悲しい繪を見れば、見る人も悲しくなることがある。これを感情移入といつて繪畫のみではなく、あらゆる藝術を觀賞する上における重大な現象とされて居るのである。そして第一印象は感じは强いが、何處か漠然としたところがあり、それが分解されて材料感情、形式感情、內容感情となり、繪の三要素に對する感情に分かれるのである。その道の人にあつては、形式感情が一番强いのであるが、素人は內容感情が强く、その題材に重きを置くやうである。また婦人や子供は材料感情に支配されやすい。第一印象はこれらの綜合された複雜な感情であるが、强いていへば、材料感情が最も强いものである。

感情に次いで理智に移り、これを判斷するのが審美的判斷であるが、これも矢張り材料、形式、內容の三方面から判斷

することが出來る。卽ち材料については色の適否及び、その色を持つ固有の美が、完全に發揮されてゐるかどうか、また形式の法則に適つてゐるかどうか、內容については美術的內容であるか否か、また狙つた內容が充分に表現されてゐるかどうかといふ風に、また樣式と手法については、その樣式の優劣を始め、その手法は果してその樣式に適し、內容を表現し得てゐるか否かなどを判斷するのである。さうしてこの判斷には、理解の判斷と價値の判斷とに分れて居り、理解の判斷とはその內容を理解することである。例へばこの繪は秋晴の午後を描いた繪であるとか、別離の情を表した繪であるとか、櫻の靑葉を現はしたものとか、この線は水平線であるとか、地平線であるとかいふやうな事を理解し、その眞僞と適否とを判斷するのである。玆にいふ眞僞とはこの櫻の葉の形は正しいとか、この花の色は正確でないとかいふやうなことであり、適否とは別離の情を表すときはこんな風ではないとか、この地平線は高過ぎるとかいつたことである。次に價値判斷とは美的價値の判斷のことでこれにより藝術の眞價は始めて定まるのである。この場合には櫻の花の形が多少違つてゐやうが、地平線が少し高過ぎやうが、それは問題とすべきものではない。簡單にいへば材料、形式、內容共に優秀なものは、美的價値が高いことになるのである。この美的價値はその繪を見た瞬間に、見る人の心身全部を動かすもので、幾度見直してもなほ動かされるものには、其處に高い美的價値があるといへるのである。

繪畫の批評　觀賞の後に來るものは批評である。繪畫は繪の描けないものには、到底批評は出來ないやうに思ふ人もあるが、畫家の批評が技巧の末に拘泥するに反し、素人の批評は正直で純な、そして自由な心を持つて、繪の內容に觸れてゆくから、適切な批評をなし得るのである。その批評をするにも前述の觀賞準備の上に、更に三四の用意が必要である。第一には作の由來を知ること、卽ち如何なる動機によつて製作したか、また如何なる心狀によつて製作したかといふやうなことを知ること、第二には畫家に對する理解で、卽ちその畫家の性格なり、手腕なりを知ること、第三にはその繪に描かれた時代とか、時代精神とか、國民性とかを知ること、第四には繪畫の歷史を一通り心得てゐることなどである。かうした準備を以てその作品を理解し、說明し、判斷し、批評すべきであるが、要するに批評は觀る人の主觀であるから、そ

の人の教養の程度とか、嗜好とかによつて違つて來るのは勿論である。以上は繪畫のみでなく一般の美術の觀方としても必要な心得である。

第二節　日本畫の歴史

流派以前　我國に於ける繪畫の萌芽は推古朝であらうと考へられて居る。この朝は佛教の興隆に伴づて法隆寺が創建され、建築彫刻などの上にも一時代を劃した時代である。今も法隆寺には、尙ほ天壽國曼陀羅の繡帳や玉虫厨子の密陀繪や、有名な金堂の壁畫（これには異論がある）などが、當時の遺物として殘つてゐるのである。それから降つて天平時代の遺物としては、大和藥師寺の吉祥天畫像や、正倉院の樹下美人圖その他、麻布の佛像などがあるが、何れも色彩艶麗、筆力遒勁にして、その手法の超凡靈妙なことは驚くばかりである。なほ當時は主として佛畫であつたから、一層その內容の神韻に富めることは當然であらうが、その技巧の精妙なことも實に驚くばかりである。然し惜しいことには當時の名工の名は今日まで傳へられてゐるもの殆んどなく、從つて流派といふやうな、判然とした系統は分明でない。いはゞこの時代は繪畫の搖籃とも稱すべき時代で、未だ流派といふやうなものはなかつたと思はれるのである。

大和繪派　大和繪の起原は頗る古く、支那から朝鮮を經て渡つて來た六朝式の畫風と、直接我國に傳づた唐朝式の繪畫とが融合して、それが更に日本化し、こゝに一つの新樣式を成したものである。故に平安朝の繪畫は大陸藝術を日本化したもので、それは取りも直さず大和繪の初期といふべく、平安、鎌倉時代の繪畫はその本期と稱することが出來るのである。かういふ譯で日本畫の眞髓となつたものは大和繪であつて、鎌倉時代はそれの大成した時代である。然るに、南北朝から足利氏の初期になつて、支那に於ける宋元畫の影響をうけたために、從來の大和繪はこの流派に壓されて勢力を失ふやうになつた。この衰頽期の大和繪を特に土佐繪と稱し、平安、鎌倉時代に隆盛を極めた大和繪と區別する人もあるから、ここで大和繪といふのは平安、鎌倉の繪畫のみを指すものである。また大和繪を古き土佐繪といふ意味から、古土佐と稱してゐる人もある。

土佐派と春日派　土佐繪は大和繪の主系をなすもので、普通は承安のころ藤原經隆が、祖父の畫業をついで土佐權守に任ぜられたのがその起原といふことになつてゐるが、土佐繪の流れはおそくも、平安朝の中期に見えてゐた傾向で、經隆の出る頃には既にこの派の特色が發揮されてゐたのである。土佐派に對し春日派といふのがある。これは經隆の父、隆親が、初めて春日神社の繪所預りとなり、自から春日と稱へたところから始まつたといはれて居る。隆親は久安頃の人で、父の隆能に次いで名手の一人と稱せられ、かの有名な「源氏物語繪卷」も、この親子の何れかの作であらうと考へられて居る。經隆は初め父の畫風を嗣ぎ自から春日と號したが、後ちその風を少し變へ、土佐の法を參酌して二派の折衷を試みたものであるから、後世における土佐春日の渾融はすでに、彼によつて始まつたといはねばならぬ。然し世にいふ土佐派の畫風には、當時の春日派と多少區別さるべき特徴があつたやうである。卽ち春日派の特色は纖細な描線を用ひ、濃厚華麗な着色を施して、寧ろ靜在的な人物を畫くに長じ、多く佛畫を作り、後には精緻な宋畫の描法を採り入れるやうになつたが、土佐派の描想は概して輕儁で、運筆は特に豁達自在の趣きがあり、人物の活動を表はすのを得意とし、多く我國の風俗物語を題材として居る。換言すれば春日派の靜的であるのに對し、土佐派は動的である。其處に區別さるべき特徴を持つてゐるのである。經隆前後の人で土佐派の大家と目さるゝ人には鳥羽覺猷、藤原光長、同隆信、邦隆などがある。覺猷は鳥羽僧正と稱して諷刺的の繪に長じ、光長は經隆同樣承安の頃の人で「伴大納言繪卷」、「病草紙」、「餓鬼草紙」などの筆者として世に聞えて居る。要するに土佐派の出現は我國の繪畫が、佛教美術たる範圍を脫して、所謂繪卷物方面に新境地を開拓し出したものである。尙ほ廣い意味でいふ土佐派は、大和繪の殆んど全部を含み、春日派なども土佐繪の名稱の中に包括されることの出來るものである。さうして鎌倉時代に至つて、土佐春日の區別は次第になくなつてしまつたのである。

鎌倉時代の土佐派　鎌倉時代に入つて土佐派は益々發達し、名家相次いで蜚出し、遂に春日派は土佐派に吸收されるやうな傾向を示して來た。殊に光長、經隆等の名手は尙ほ生存してこの時代の初頭の畫壇を飾り、隆信もまたこの期に亘つて、似繪（貌像畫）の名手として盛名があつた。その子には有名な信實があり、父と共に似繪の名家と謳はれた。次いで建長の頃住吉慶忍が出て、攝津の住吉に住し、その繪とともに新寫因果經の畫を描き、下つて中頃以後には土佐吉光が、知恩院

に現存する「法然上人畫傳」を描いた。また同じ頃春日から土佐風に移つたかと思はれる藤原長隆が、子と共に「蒙古襲來繪卷」を合作し、長隆より少しおくれて「春日權驗記」を描いた高階隆兼が出て、所謂る土佐繪の黃金時代を現出したのである。

足利時代の土佐繪　然るに、足利時代に入るに及んで、土佐派は漸く墮落しはじめ、畫法は次第に典型的となり、その着色も纖弱にして裝飾的となり、同時に同じ時代に流行しはじめた漢畫の影響を受け畫風は變化し、昔日の自由洒脫な趣を失つてしまつた。名家としては南北朝の頃「土蜘蛛草紙」を描いた土佐光顯と前後して、似繪の名手豪信や土佐光起などが出た。この光起は後に繪所預りとなり、知恩院の「法然上人繪卷」執筆者の一人と傳へられて居る。更に下つては六角寂濟、粟田口隆光などがあり、春日の繪所にも「清涼寺融通緣起」の筆者の行秀があつた。隆光の繪は卓拔を以て聞え、「石山寺緣起」の筆者に數へられて居る。光信は土佐中興の祖といはれる人であるが、土佐繪の墮落をなげき、家風を加ふるに宋元の畫風を以てし、精麗な一格を出して世に聞え、「清水寺緣起」、「祠富草紙」など多數の作がある。光信は光弘の子で、その娘の千代は法眼元信の妻である。

巨勢派　巨勢派の始祖は金岡である、金岡は清和、陽成、光孝宇多、醍醐の五朝に歷事した人で、人物、花鳥、山水など皆妙を極めたが、遠近を分つに濃淡を以て、頗る巧みにこれを現はした。その後相覺、公忠、公望、弘高等が出た。公忠は唐山水に秀で、公望は日本の風景畫を得意としたが、中でも弘高は最も名高く、一代の作に佛畫が多く、「地獄變相の圖」は殊に深刻を極めたと傳へられてゐる。この派の畫風はもと唐朝の畫風を受けて專ら唐式の筆意を畫き、細大の變化のない溫雅な線を用ひたが、公望から漸く日本化し、後ち次第に詫摩風の筆致に近より、遂にその古風を失ふやうになつた。從つて鎌倉以後は名のある人物は出なかつたのである。

詫摩派　詫摩派もまた平安朝から鎌倉時代へかけての日本畫の一派で、巨勢派の支流といはれて居る。この派は主として佛畫を描き、畫風も初めは巨勢派に似てゐたが、後ち宋畫の影響を受けて一種獨特の新味を出すに至つた。その始祖は爲氏とも爲成ともいつて判然しないが、爲氏は天曆頃の人で名人であつたし、爲成はこの派の最も名手で繪所長者となり、宇治平等院の壁並に扉に「九品來迎」を畫いて有名である。この繪は今日では可なり剝落も甚しくなつてゐるが、尙麗麗無比な原畫の趣を偲ぶ遺物として珍重されて居る。爲成の子爲遠及びその子爲久、澄賀、勝賀などもまたこの派の名人であつた。勝賀の子榮賀は當摩寺の新曼荼羅を畫いて有名であるが、この人は深く宋畫の妙趣を味ひ、李龍眠、顏輝の體を得て、父祖以外に新境地を開拓した人である。描くところの佛畫は、舊風を脫して新味あり、また好んで墨畫を試み後の足利時代における、墨畫の勃興の端を開いたが、足利時代に至つて滅んでしまつた。

北宋派　北宋派は足利時代に渡來し、最も特色ある繪として一世を風靡した。その特徵には水墨を主とし骨法用筆を尙んだものと、院體即ち畫院の守生的な畫風で、花卉翎毛を試みたものとの二樣があつた。この二樣の畫風は當時一世を風靡し、前者の如きは禪宗的精神を持つてゐるため、最も愛好されたものである。北宋派の大家中周文は特に快腕を揮ひ、更に雪舟、雪村、宗舟などの大家が續々と現はれ、中でも雪舟は南宋の畫風をも究めたが、その主とするところは北宋の畫體で足利時代の畫壇を代表する作風を示した。從つてその門流にも雲谷、長谷川の兩派を成し、勢力は戰國時代を經て近代にまで及んだ。然し北宋より出て一層大きな勢力を示し、近世におけるわが畫壇に、一代勢力を示したものは狩野派である。狩野派は雪州と前後して出た狩野正信に始まり、更にその子元信に及んで一層の發展を遂げ、桃山時代には永德、山樂、友松等を出し、續いて德川時代には探幽、常信等の名人が出て居る。

偃山育王山圖

足利時代小田雪舟筆

狩野派　狩野派の始祖正信は、伊豆狩野村の人で、周文に學び、宗舟を師とし、後ち梁崖の筆に倣つて遂に一家をなした。その子の元信は父に學びまた土佐光信の女を娶つて土佐派を極め剛柔、彩墨共に妙をつくし和漢の法を兼ね併せて、狩野家の基をなし、連綿家法を

傳へ日本畫界の牖權を握るに至つた。その間に五代の永德が最も大畫に長じ、義子山樂とゝもに所謂桃山風の豪壯華麗なる一派を立てた。また永德の實子に光信、孝信の二人が現はれ、孝信の子には探幽守信が出て、德川期における狩野派の第一人者となり、その門葉が連綿として畫壇の中堅を占めた。探幽自身は殿冶橋に住したため、その系統を鍛冶橋狩野といひ、弟尚信の系統を木挽町狩野、安信の系統を中橋狩野、義子洞雲の系統を駿河臺狩野と稱し、各門戸を張つて代々德川畫壇に雄飛した。探幽に次ぐ名手として、尚信の子常信があつた。狩野の本家たる中橋系には、安信以後名手は出なかつたが、門人には英一蝶の如き名人を出した。木挽町は常信以後伊川晴川等世に稱せられ、また晴川の門からは近世の名家にして、明治畫壇の先達たる芳崖、雅邦が出た。駿河臺狩野では洞雲の曾孫洞春が名があり、その門人に

國寶　山水圖

足和時代狩野元信筆

曉齋を出し、鍛冶橋狩野からは探信、探淵等が出た。久隅守景も探幽の門下から出た名人の一人である。以上の外に京狩野といふのがある。これは山樂を師とするもので、その子孫に山雪、永納、永樂等が出た。かくて狩野派は政治的勢力と結びつき、社會的地歩を確立し、足利時代には將軍家の御用繪師となり、戰國時代にもまた信長、秀吉に用ひられ、德川時代には同樣御用繪師となり、門流もまた諸侯の聘を受けて重要な地位を占めた。然し德川中葉以後は、その形式精神共に墮落してしまつたのである。

光琳派（新大和繪派）　始祖は光琳といはれて居るが、その前に名人として最もこの派の名を成したのは、光悅と宗達の二人である。光悅は本阿彌家の養子で、書道にも通じて名があり畫は海北、友松を師とし、これに土佐の畫風を取り入れ、獨特の表現を創めたが、その作は超風なものばかりである。宗達は能登の人で、京都に出て狩野永德に從ひ、また住吉如慶についても學び、更に本阿彌光悅の畫風を慕つて各派の長を採り入れ、新風格を表して非凡な畫を成し、殊に人物、花鳥山水共に何れもよくしたといはれて居る。名手光琳も彼に私淑した。尾形光琳の畫風は豪華なる、桃山趣味を繼承した元

祿文化を代表してゐる。卓越なる意匠、清新なる手法の裡に寫生の精緻を混へ設色の艷富を以てし、その間に瀟洒の俳を宿し、天稟の技能は江戸の一蝶と相對立して、而かも優にこれを凌ぐものがあるといはれてゐる。弟の乾山もまた畫をよくし、青淡を以て勝り、かねて陶器をよくした。門人に立林何帛がある。渡邊始興も光琳の風をしたひ、狩野を參酌して別に一家をなしてゐる。光琳の歿後約百年を經て、酒井抱一が生れた。彼は初め狩野派を學びまた宋紫石、歌川派の畫風をも修めたが、最も光琳を慕つて大にこれを世に紹介し、また好んで光琳派の畫風を試みた。然し纖巧典雅なる抱一の作は、到底光琳の高華壯麗に及ばなかつた。抱一の後繼者に鈴木其一、池田孤村、田中抱二などがある。

浮世繪派　浮世繪派は德川の初期に起り、狩野派の繪が武家階級に愛好せられたに對し、これは町人階級にも賞美された。土佐派の岩佐又兵衛が寛永の頃、最も浮世人物をよくしたことから浮世繪の稱が始まり、この畫風は一般に廣まつた。名人としては元祿年間に菱川師宣が現れ、次いで宮川長春、鳥居清信が名をなし、享保から寶曆までの間には西川祐信、西村重長、奥村政信、鳥山石燕、懷月堂（江戸）などの名手が續々現はれた。この後明和、安永、天明、寛政に及んでは名工雲の如く起り、浮世繪は實にその頂點に達した觀があつた。即ち德川春章、北尾重政、鳥居清滿、歌川豐春等は各一派を起し、春章の門からは春英、春好、北齋、北尾の門からは政美（惠齋）、政演（京傳）、鳥居清長、豐春の門からは豐國、豐廣、重長の門からは鈴木春信、石燕の門からは歌麿等の名手を生んだ。その他磯田湖龍齋、鳥文齋榮元、菊川英山、一筆齋文調、池田英泉などが競ひ起り、文化文政にかけては全く浮世繪の世界となつた。文政以後は歌川派が最も時好に投じて殆んど各派を壓し、五渡亭國貞、一立齋廣重、一勇齋國芳等の名工を出し、その筆になる錦繪繪草紙の行はれたことは空前の盛觀であつた。其後は殆んど歌川一派に限られたかの觀があつたが、名工が跡を絶つに至つて漸く萎靡した。其間國芳の門から大蘇芳年が出て北齋、容齋の畫風を參酌して歌川派の舊套を破り、自から新機軸を出して時潮に投じた。浮世繪も土佐、狩野派と同樣肉筆を主としたものであつたが、師宣の頃から一枚繪または草紙物語の挿畫として版下を畫き長春、祐信等のときに至るまでは版下、肉筆相半するが如き觀があつた。其後木版の術漸く

進歩し、書籍及び錦繪の盛んになるに及んで、浮世繪師は版下を專門にし、漸く肉筆から離れ遂に浮世繪師とは、版下繪師の別名の如くになつた。豐國以後においては線條其他、全く標準を摺畫にとり、彩色の如きも筆彩の固有を捨てゝ、全く刷摺の便宜に從ふことのみを期したから、摺畫としては最も精巧をつくし、艶美を極めたが、そのため浮世繪の地位の低下を來した。

南宋派　浮世繪によつて民衆に美術趣味の普及したのは、江戸時代の特色ともいふべきものであつた。この浮世繪と共に當時特殊の新傾向を現はして、斯界を賑したものに南宋派がある。南宋派は明清の畫風を採り入れたもので、當時支那に内亂が起り、明が亡ぶに至つてその遺臣僧逸然、心越等が逃れて渡來し、明風の繪を傳へたに始まつて居る。次いで享保以後に及び清人伊孚九、沈南蘋などが來朝して清初の畫風を傳へたが、漢學勃興の機運に乘じて南宋の繪は忽ち世の喜ぶところとなり、盛んに流行したものである。京畿の間にこの流風を始めたものに祇園南海、彭城百川、郡山の高士柳里恭、京都の池大雅などがあつたが、殊に大雅の山水に至づては一代を雄飛したものとまでいはれて居る。尚ほ與謝蕪村は俳諧に新機軸を出したとゝもに、明畫を採り入れて洒脫奇警な略畫を描き、俳畫を創作した人である。かゝる泰平の世はますます文技が盛んになり、その流風は江戸に及び、更に全國に普及して、苟くも書をよみ詩をつくるほどのものは、閑技として文人畫に親み、これを以て士君子の餘藝となし文雅風流の道と考へる風があつた。文化文政頃より天保に至つては、その名手數ふるに遑ないほどで、中にも東における渡邊華山、椿椿山、立原杏所、京における貫名菘翁、小田海僊、野呂介石、西における田能村竹田、僧鐵翁、木下逸雲等の如きはその最たるものである。中でも江戸における谷文晁は廣く諸流に渉り、南北二宋を研めてこれを折衷融合した人で、以上の諸家とはやゝ選を異にしてゐるが、その門下勢力の偉大なることは、民間比ぶるものがない有樣であつた。

南宋畫

圓山四條派　圓山派は明和安永の頃の人、圓山應擧を始祖としてゐる。初め彼は石田幽灯に學び、更に支那の古畫を究め、當時來朝してゐた沈南蘋の流れを汲む宋生畫の刺戟を受けて研究を重ね、終に一種の寫生派を確立したものである。門下からは蘆雪、素絢、駒井源琦などの名人を出したが、蘆雪は落想奇拔、健筆健腕を以て聞え、素絢は美人畫で名あり、源琦もまた唐美人を描いて名を博した。四條派は蕪村に學び、應擧の畫風を極めた吳春によつて成された一派である。又當時大阪において四條派風を究め、これを流布したものに森徽山及び、その義子一鳳と寛齋とがあつた。また應瑞の門下に中島來章があり、來章の門から出た川端玉章は、明治の四條派の巨人とまで唄はれた人である。

近世の土佐派　德川の初期に至り、足利期の末に衰へた土佐の一派が、忽然として興起した。この土佐隆興の先達として立つものは光起である。光起は祖父光吉の門人戸田光純に學び、寛永の頃泉州境から京都に移り、父祖の畫法を一變して大いに明畫の趣味を混じ、彩色布置、明麗幽遠の中に、筆法の健勁さをたゝへ、光吉以來中絶してゐた土佐の畫風を復興し、近世土佐派の基礎を成したのである。尚ほ光起に先だつて住吉如慶が出でゝ將軍の繪所となつて、土佐派より分れた住吉の一派を成した。光起の家系は後ち廢頽して德川末に至つたが、田中訥言、浮田一蕙、岡田爲恭等が一時に現はれ、ここに土佐派は再び擡頭したのである。訥言は尾張の人で畫技を以て法橋に叙せられ、一蕙はその門下で京から江戸に移つた人である。爲恭は一蕙よりも後れて出たが、行筆精細緻密で着色また鮮麗、近世土佐派の大家といはれて居る。この訥言、一蕙、爲恭の三人は、古土佐の新研究を以て出發し、作品に清新の氣韻を盛り、名を擧げた人々である。

現代の日本畫壇を鳥瞰しても、以上述べ來つた流派の影響を多分に受けては居るが、それに尚ほ自己獨特の境地を開拓し、新らしい手法と洋畫などの長所を參酌して、一新機軸を開いて居るから、以下各團體名の下に略述することに留める。

帝國美術院　帝展の前身である文展が、最初に開かれたのは明治四十年のことである。爾後毎年一回展覽會が開かれて今

日に及んで居るが、これは文部省直轄の展覽會で、一部から三部までに分れ一部は日本畫、二部は洋畫、三部は彫刻となつて居る。出品は何人でも差支ないが、鑑査と審査を經なければならぬ。鑑査とは審査委員が出品を鑑別して合格と不合格とを定めること、審査とは合格したものゝ中から、更に優れたものを審査して選り出すことで、この審査によつて特選が決定されるのである。尙ほ畫壇に功勞のあつた人とか、人格經歷特に推すべき價値のある人には推薦の名を與へられ會員、審査委員、元審査委員、推薦及び前三回引き續き特選に入つた人の作品は、無鑑査で陳列し得る特權が與へられて居る。以上が帝展の大體であるが、帝展の會員となつてゐる人は、押しも押されもせぬ現代畫壇の一流であり、審査員もまた技倆、閲歷とも一流の大家揃ひである。

山月猛虎圖　橋本雅邦筆　明治時代

日本美術院　日本美術院は明治三十一年、ときの東京美術學校長岡倉覺三が、一種の新理想主義を標榜して、畫壇に別種の新運動を試みた結晶物である。最初から美術研究所として建てられたものであるから、彫刻其他の美術工藝にまで及んでゐる。年一回乃至二回展覽會を催し、一時は活力を失つたこともあるが、現今では有力な帝展に對抗する團體として目覺しい活動をつゞけて居る。日本美術院には審査員の制はないが、同人間で認めて、同人に推した人達を同人となし、是等の人々が鑑別を行ふことになつて居る。

國畫創作會　國展は大正七年の創立で、歴史は短いが巧みに新時代の潮流に浮び出で、可なりの刺戟を畫壇に與へて居る。尙ほ外に大小幾つかの團體があるが紙面の關係上省略することにした。

第三節　日本畫の觀方

觀賞的態度　繪を見るためにその前に立つたときは、漫然と臨むのでなく、何よりも觀賞的態度を執ることが大切である。觀賞的態度とは無邪氣で、素直に而もいきゝとした自由な心を持つことである。理智的な冷めたい眼を以て見ることは慣まねばならぬ。

作者の心持を受入れること　さうして作者が形と色とで物語つてゐるところのものを、素直に受け入れることが必要である。作者の主觀とか、或は心持ちの內容に關する批判は暫らく措いて、先づ作者が形と色とをもつて、我々に迫り訴へやうとする氣分乃至心持を、在るがまゝに感受して味ひ、識るやうにすることである。さうすれば若しも優れてゐる作品ならば、觀る人を慰め、樂しませるのみでなく、深く考へさせるものである。時としては悲しみに誘ひ入れるやうなものもあらうが、それによつて觀る人は精神內容を豐かにし、生の意識を充實させることが出來るのである。この意味からも無邪氣な態度が必要であるのは言ふまでもない。

解釋は自由にすること　作者の意圖が何うあらうとも、既にそれを作品として現した以上は、觀る人は作品そのものに即して、あくまでも自由な立場から、獨立的に解釋し鑑賞すべきものである。無邪氣な平靜な、また謙遜な態度を持するといふことは、やがてこの自由な鑑賞的態度に移る前提として必要なのである。即ち前に述べたことはいはゞ第一段の觀照的態度で、第二段の自由に解釋し鑑賞する、鑑賞的態度に至る徑路であるから、この二つの心理作用は要するに同一のものに關着するのである。

第四節　西洋畫の觀方

洋畫も矢張り平面の上に、線と色と形との配合によつて成つたものであるが、日本畫に比して洋畫は、眞に迫つてゐるものといはれるだけに、人物を描けば生きた者の如く見え、生物の果實を描けば、水氣があつて美味さうに見える。また風景畫には、遠近の差が判然してゐて、遠い所は遠く、陽のあたつてゐる所は陽のあたつてゐるやうに見える所から、この特質を通じて觀賞するにも、眞に迫る趣きを標準とすべきやうにいはれて居るが、然しこれは標準とすべきものではない。矢張り繪は平面の上に、線と形と色とを配合し、それによつて人に美感を起させるものであるから、その點から觀るべきである。この線と形と色の配合を、自然から直接求めて來た寫實的のものであるとか、自然を見てその中から、線と形と色の配合の面白い部分を選み出し、それによつて作られた印象的なものであるとか或は曾て經驗した種々の自然を材料として頭の中で融合し、創作的に製作された空想的なものであるとか、その邊のところを

よく見分けるのである。觀方は大體前に述べた、觀賞法を心得て居れば間違はない。然しこゝに至つた洋畫の寫實的空想的の分類は、比較的さうであるといふのみで、簡單に製作の事實の兩端を示したに過ぎないのである。

水彩畫と油繪　一般に西洋畫は、離れて見るべきものと極めてかゝつてゐる人があるが、これは正しい意見ではない。水彩畫や油繪は畫の大きさに準じて、離れて見る距離にも程度があり、あまり遠く離れては筆の跡などが見えず、畫の材料と成つたものだけしか見えない。また近くへ寄つて見ても、それがために綺麗なものが、汚く見えるなどゝいふことは絶對になく、適度のところで見たものを、近くへ寄つて見れば筆觸の味ひがわかるもので、その筆觸の味ひを見、次いで全局の味ひを見るために、適度のところへ離れて見るやうにすべきものである。これは初心者のみでなく素人の見方も同樣である。

印象派の繪畫　印象派の繪畫は、第一節で述べた繪畫の三要素の中、第一の色と光とに重きを置き、さうして自然の一瞬時の現象を、直ちに全體として描寫することに努め、特に色彩に重きを置いてゐる。その先驅者は佛蘭西のモネであるが、それについて彼は「自然を其儘に描寫せよ、然しそれはみな作家の眼に、印象したものでなければならぬ」といつてゐる。印象派の作家の最も得意とするところは、朝夕の空氣の變動から來る、種々の調子を描寫することで、特に物を描く場合には高潤な野外を選び、十分な光線を受けたまゝを寫すことをもつて、最もよく自然の眞相を傳ふるものとし、從來の畫家が好んで落日の幽麗を選べるに對し、印象派の人々は多く日中の日光を愛し、畫室内の製作に反對した。斯くの如く色彩光線、陰影などを重視した結果、明確な輪廓と精細な區劃とを捨てゝ顧みなかつたので、その繪は無定形なりとの批難を受け、また餘りに自然に忠實ならんとして、却つて沒趣味であるとの譏りを受けたが、やがてその長所は忽ちにして廣く認められ、その主張は單に畫界のみならず文學、音樂、彫刻などにまでも普及するに至つたのである。印象派の畫を觀る場合には、常にこの印象派の信條を知り、それから第一印象を明瞭に刻んで、鑑賞の歩を進めて行くやうにすべきである。

未來派の作品　未來派は最近伊太利に勃興した一派で、その主張とするところは、第一に題材の選擇をしないことである。

即ち描かうとする題材、例へば風景とか或ひは靜物とかいふ題材を選擇することなく、描かうといふ要求のあつたときには、浮んで來たそのまゝを、すぐ片つ端から畫にして行かうといふ特徴を持つてゐる。從つて母といへば直ぐ乳房を思ひ出し、乳房だけしか無いやうな女の姿を描いたりなどするのである。第二は時間を描く特徴がある。これまでの繪は運動中のものを書いても、その運動中の一瞬間を捕へて、靜止してゐるものとして書いたが、未來派ではさうではない。競走などの駈けてゐる人を書く場合には、二本の足で駈けてゐるものでも、三本にも四本にも見える。從つて未來派の畫としては、人の足を四本にも五本にも描くのである。次に特色とすべきは、空間の制限を無視することである。遠近法をも無視して、遠くのものでも、自分の視力を集中して書くものはその附近のものより遥か大きく描いたりするのである。要するに未來派や、立體派などは、自然物の形を寫さぬといふ傾向の極端になつたもので、成るべく物の形を見せぬやうにしてゐるやうである。多少據りどころがあつて描いたものもあるが、何によつて描いてあるのか、一向わからないものが多いから、かういふ畫を見るときは、何が描いてあるだらうと探すのは愚の至りである。この種の畫はたゞ畫面に表はれた線と形と色との配合を見て、それから來る感じを味ふより外はないのである。

最近に至つて意識的構成派と名乘る、構成藝術が現はれて來たが、是等も未來派とよく似たものである。構成派が藝術上將來、どういふ位置を占めるかは未知數に屬するから、こゝでは何んともいへないが、新劇などの舞臺裝置や、建築などに追々用ひられて來たから、將來は相當な位置を占めるであらう。

第三章　書畫骨董

第一節　書道及び書蹟の觀賞

書道の起源　書道は晉の成帝の朝、王羲之といふ達人が北郭の祝版に書いた頃に初まり、其後王獻之、唐の孫過庭、白居易等が出でたが、我國では唐の韓方明から、かの弘法大師（空海）が書法を學んで輸入したのが最初である。空海は後に嵯峨天皇とゝもに、書道の二聖と稱せられた人で、その書は變化自在な點において有名であつた。續いて橘逸勢は柳宗元

の書を學んで隷書に妙を得、延喜、天曆の頃には書道も益々盛んになつて小野道風を生んだ。道風は草書の奥妙を極め、新機軸を出して唐風を離れた和風體を示すに至つた。これと時を同じうして紀貫之は假名に秀で、藤原佐理はまた豐潤の風をなし、次いで藤原行成出で、道風に自己の特色を加へて「權跡」と稱する假名の書法も大成するに至つて、いよ〳〵盛んになつた。下つて關白藤原道長、同忠通も各一流の達人であつた。

小野道風筆

御家流　南北朝の頃、北朝の青蓮院尊圓法親王は、書道の衰微を歎きたまひ、權跡の流派に立つて、上代の書法をも研究せられ、遂に流麗な肉太の書法を創め、これを「御家流」と稱した。かくて書道は中興されるに至つたが、間もなく戰國時代に入つて、又々衰微の非運を辿るの外はなかつた。下つて豐臣秀吉の出るに及んで、秀次と共に古筆を好み、これを奬勵した結果、德川初期までに近衛三藐院、本阿彌光悅、照乘等の名手を出した。一方石川丈山は當時宋人の隷書を研究して支那書風を立て、次いで細川廣澤は「臨池古篇」を著して、古法に歸るべきことを唱導した。かくて國學者は和樣を用ひ、漢學者は支那風を用ひるやうになつたのである。

書蹟　書蹟は畫と違ひ、名士、高士の筆蹟に對し、その筆者の人格の尊敬思慕から珍重するのであつて、單にその文字の巧拙のみを論ずるものではない。この書蹟は非常に古いところから存して居り、先づ第一に古いものといへば「古筆切」である。これは平安朝以前の古文書や、消息文などの一片を珍重するので、足利時代から特に重んぜられてゐる。その古きは聖德太子に始まり、經文切れを「經切」といひ、歌書の斷片を「歌切」といつた。また原本の寸法によつて、「四半切」「六半切」「卷物切」「懷紙切」などゝ稱してゐる。是等のものは要するに古いといふ點において、珍重される代表的のものである。

著名なる書蹟　古今集以後の各歌人の書中、貫之、行成、定家西行などのものは、今日では千金を以てするも得難いとされてゐる。僧としては主に禪僧のものが多く、一休、天空、澤庵、江月、隱元、木庵、卽非、獨立、高泉、鐵牛など、風流

人としては紹巴、利休、小堀遠州、松平不昧、片桐石州など武人としては義政、秀吉、家康など、文人としては西鶴、秋成など、坊業の士としては山陽、象山、東湖、南洲などがある。以上列記のものは極めて高價であるが、この外德川時代の儒家の書、國學者の書も相當の價格を有してゐる。近代では福澤諭吉、乃木將軍、東鄕元帥、正岡子規、夏目漱石などの筆も、却々高價に取扱はれてゐる。

第二節　書畫鑑定の心得

書畫を愛玩し觀賞するには、先づこれを鑑定することを要する。その順序として世間には、最初に落款を見、次に印に注意し、最後に書畫を觀る人があるが、これは全然間違つた觀方である。第一印象として大家の眞物は、一見すればどんな素人でも一點の無駄がなく、墨色、氣韻といふものが直ちに胸に來て、何んとなく引き緊つた感じを與へるものである。各流派によつて特色のあるのは勿論であるが、またその個人としても個性の表れが、手法と共に間然するところなく出てゐなくてはならぬ。然しこの個性が餘り確然と現はれてゐるものは却つて怪しいのである。それは贋物を作り出すために、その癖をよく辨へて模倣するからである。作者の人格や氣韻といふものは、これを模倣しやうとしても出來るものではないが、癖だけは模倣し得る。だから觀賞するには、パッと眼に映じたところの氣品とか、迫つて來る全體の感じとかに注意するやうに心掛ければ、直ちに眞贋はわかるものである。また紙の色、墨の色、印肉の色などを以て、その年代を判じやうとするのも全く信用は置けない。是また贋物師の中には、年代によつてその頃の墨を持つて居り、四百年前の雪舟を描くときには、その時代の唐墨を用ひ、二百年前の文晁を模倣するときは、またその時代の墨を器用に使ひ、紙も同樣煤で色づけ、或は天井につるし、またはその部分だけ砂糖水をかけて蟻に食はせ、殊更蝕ましたりする上に、印肉も古い朱を用ひて作り、それに燒鏝を當て、油を除いて巧みに數年を要して成し上げるのであるから、藝術上相當の理解を持つてゐなければ、鑑定は一寸難かしいものとされて居る。

贋物の作り方　今日市井間において發見される贋物は、大抵次のやうな方法で行はれてゐるやうである。

一、がらはめ　がらはめとは表裝だけ古いものがあつた場合これは僧が出ると見込んだものに贋物をうまく嵌め込んだ

り、箱書の眞實のものへ中身をすりかへて贋物を入れるといふ方法である。

二、つぎだし　つぎだしとは落款や印だけ眞物があつた場合贋物の畫に穴をあけてうまく嵌め込んだものである。

三、めくり　めくりとは墨色がよく紙質の裏打の紙へ透つてゐるとき、上の一枚を剝ぎ取り、裏の一枚二枚を眞物のやうに仕立てゝ賣る方法である。

四、以上の外錦繪、浮世繪などの一枚何千圓とするものになると、色が褪せたのを後に色を繼ぎ足したり、古大家の繪でも粗畫であつたものへ、筆を入れて密畫に仕立てたりする方法もある。

素人鑑定法　素人の考へでは、箱書や出所は疑ふ餘地はないものゝやうに思はれるが、昔は箱書といふやうなものはなかつた。その箱書のしてない眞物の書畫を持つて行つて箱書を頼み、いざ賣るといふとき、箱の中の本物を取り出し、これに摺りかへて贋物を入れるとか、大名華族の賣立でも、市中の名もない道具屋が、怪しい一件物まで一所に持つて行つて賣るのであるから、信用にならぬことは夥しいのである。だから素人として鑑定するには、どうしても自己の藝術的修養と、高潔な人格の修養を積んで、良い趣味と時代的特色を解し、價格に釣られるやうなことなく、また人に支配されず、自己の信ずるところに從つて見るやうにせねばならぬ。求める場合にもこの心持で好きなものを求めるやうにすれば、自己の高尚な批判力も進むし、心眼の明も強くなり、少し難かしいものでも、相當鑑定が出來るやうになるものである。序に近年我國における定評ある書畫の鑑定家を擧ぐれば、古畫においては下條桂谷翁、今泉雄作翁、帝室博物館、京大の內藤湖南博士、美術學校の大村西崖、中村不折等である。

第三節　刀劍の觀賞に就て

日本刀の系統　日本刀には新刀と古刀とあり、古刀には、京物備前物、相州物、關物、大和物などがあつて各々左の如き特徴を具へてゐる。

一　京物　太刀の姿に氣品があつて反に元も末もない。これに三條、粟田口、來、綾小路、平安城などの各派がある。

二　備前物　太刀の姿がふんばり強く鋒元より反りが淺い、板目も杢目もあるが、多くは丸鍛である。長船、六支流を始め、福岡一文字、大宮一派などがある。

三　相州物　粟田口國綱が、建長年間鎌倉に招かれた頃から初まり、特徴としては太刀の巾廣く、鎬せまく反も少ない。古今獨歩の正宗一統、即ち五郎入道の養子貞宗、弟子國次などがある。

四　關物　實用的に切味は確かであるが、氣品に乏しく、大和物に似た風があり、氣格は大和物より劣つてゐる。尙ほ關は美濃の鍛冶で六派から成つてゐる。

五　大和物　太刀の姿が細やかに、鎬は擴く高く、腰のところで反つたものと、反らぬものとがある。天國を初め千手院、當麻、保昌などがある。

刀劍鑑定の心得　刀劍の鑑定では刀の切味と、その眞僞を試すのであるが、京物、相州物など皆場所と流派によつて地鐵も異り、刀の形に各々異つた風格があるから、先づ鐵色から全體の調子を見ることが大切である。次に匂とか、沸とか双刀とか刀身の膚に、特種な見分點があるが、これは素人には一寸分らない。それに素人は銘に引きつけられるけれど、これは寛政以後僞銘を切つたものが多いから注意を要する。殊に僞銘は大抵銘の文字が眞直にゆかないで歪んだところがあつたり、銘の文字の緣が崩れてゐたりまくれたりしてゐたり、筆力筆勢がなく、無理な鑢を使つてゐたり、後に鑢を使ひ足したところがあつたりするから、よく注意すれば看破することが出來るのである。

刀劍の名匠　刀鍛冶の祖は天國とか正宗とかいふが、今日民間には是等の上作の部に入つてゐる刀劍は殆んどない。また正宗は殆んど銘を切らなかつたといふから、鑑定も極めて至難といはれてゐる。今日刀劍の名工として、その作品の珍重されてゐるのは、大凡次の人々である。

一　新刀

國宗	文和年間	越中	貞宗 正
國光 不明	相州	弘行光	和 相州
包平 永延	備前	友成 永延	安同 備前
則國 承久	山城	爲國 嘉	祿 山城
守家 天福	備前	安則 永	延 大和
則宗 承元	備前	長光 弘	安 備前
國俊 正應	山城	國永 元	應 相州
包永 眞應	大和	國重 嘉	暦 相州

二　古刀

堀川國廣	天正	山城	肥前國忠吉 寛永 山城
長曾根虎徹	寛文	越前	繁慶 慶長 江戸

南記重國　寛文　紀伊　武藏大掾忠廣　寛永　肥前
理忠明壽　同　山城　仙臺國包　同　仙臺
近江守忠綱　同　山城　助直　天和　京都
井上眞改　天和　攝津　主水正清　享保　薩摩
水心寺正秀　文化　江戸　土肥眞了　貞享　肥前

第四節　陶磁器の觀賞に就て

古代陶磁器　我國は良土に惠まれてゐるので、古くから既に水藥をかけた陶器があつたが、孝德天皇の朝に至つて、肥前唐津で高麗風の製陶が行はれるやうになつた。また僧行基は行基燒を作り出した。それから稍下つて承久年間には、加藤四郎左衞門が出で宋の陶法を學んで歸朝し、尾張國瀨戸で初めて陶器らしい陶器を作り出すに至つた。これが瀨戸物の始めとなり、またわが陶器普及の元をなしたものである。

古瀨戸と唐物　一般に藤四郎と稱せられてゐる加藤四郎左衞門に續いて、二代、三代、四代と相次いで瀨戸より陶器の名工を出し、名作も甚だ少くない。是等の作は多く土が淺黃とか鼠色のものが多く、一體に薄手で內藥を流してゐない。初代藤四郎が宋に渡る前に作つたものを古瀨戸といひ、歸朝してからの作品は唐物といつて居る。古瀨戸は甚だ古雅上品で淡白なる地藥を用ひ、今日では千金を以てするも購ひ難いといはれてゐる。なほ五代以下は下作で、德川幕府の御用を蒙るまで數十代連つてゐる。

遠州七窯　茶道中興の祖であり、古器鑑定に古今獨步の名手であつた小堀遠江守が、全國の陶器を調べ風雅で、茶式に用ひられるものを次の如く選定し、これを遠州七窯と稱した。

色繪鍋島　牡丹香爐

一　高取燒　朝鮮役のとき黑田長政に連れ歸られた鮮人が、筑前の國高取で燒かしめたもので、茶器の名品として有名である。

二　膳所燒　近江國膳所から出た白薄鼠色の土に、柿色の藥を用ひて作つたもので、質は細かで輕く、頗る名品であつたが一代で絕えてしまつた。

三　朱膚燒　大和のもので印は圓形の中に「赤ハダ」としてあり、瀨戸風に似てゐる。

四　上野燒　釜山の陶工が來朝して、上野喜藏と改名し、豐前の國に住して作つたもので、樂燒に似た厚手で、重く色は黑い。

五　肥後燒　土燒で藥は靑黑く光澤あり、靑磁が黑味を帶びたやうに見える。

六　志戸呂　梨子色の土に黃または飴色の藥を用ひ、瀨戸風とは全然異つた古風な雅味を有してゐる。

七　樂燒　支那人から阿米夜なるものが歸化し、京都で一種の陶器を作り出したことに始まる。赤黑質のもので、秀吉が樂の金印を與へたところからこの名が起り、その後もこの印を用ひてゐる。質は軟らかで白く、黑色のものは加茂川の川石を碎いて藥として燒いたものである。皆手捏ねだから一種の風韻がある。

古九谷　赤繪間取松竹梅德利

八　長次郎と乾山　長次郎とは樂燒の祖、阿米夜の子で、德川三代家光將軍の命を受け、茶椀を製し可なりの逸品を出した。薄手で藥溜りなく妙味は黑に多い。樂燒はこの人によつて大成せられ、現代に至るまで十二代を傳へてゐる。また乾山は尾形光琳の弟で、樂燒に倣つて自家獨創の山水花鳥を畫き、品位、光澤共に稀代の逸品を出した。

九　仁淸と木米　仁淸は京都淸水から出た名工で、赤味の華かな中に澁い薄茶色を出した薄手の上作である。彼の死後流派が粟田燒と淸水燒とに分れ、木米は淸水燒に出で、染付の名法を研究して有名である。

一〇　古九谷　寛永年間加賀國大聖寺に始まり、有田燒や支那交趾の陶風を加味し、それに狩野派の下繪を寫して金彩色を施し、濃綠淡純黃の名器を生むに至つた。

一一　伊萬里　肥前の有田泉山は、我國最良の陶土の產地で此處に名人の祥瑞が初めて染附白藥藍繪を作つた。酒井田柿右衞門は我國のバリッシーとも稱さるべき人で、南京燒から研究して白手燒を大成し金襴、濃淡の妙を出し、二代と共に珍中の珍とされてゐる。また有田の北三里の地に大河內窯があつて、鍋島侯の御庭燒と稱す

柿右衞門　藍繪雲龍橫長皿

る、薄手直屬の權手の逸品を多く出した。

第五節　陶器品鑑定の心得

骨董中最も複雜で難かしいのは陶器の鑑定である。その作法は直接手を觸れないやうに服紗を用ひ、手垢のつくことを絶對に避け、最初に心を落着けて全體の形を熟視し、次に盞を取つてよく見る。陶器は釉藥が大切で光澤、品、色をよく見分けねばならぬ。次に內藥といつて、內面にかゝつた釉藥と陶土とをよく見る。陶土には土燒と石燒とあるが、これが更に堅、軟粗、密、純、雜、脆、韌の八種に分れてゐる。色は白、灰、黑赤、淡青等があり、中には年代の垢のため、眞の色を見分け難いものもある。次に絲切といつて、小臺の上から取上げるときの切痕が、細くて締りがあるところにも注意を要する。この方面は流派や陶土によつて、非常に複雜微妙になつてゐるから、實物につき先輩の人から直接に聞くより外はない。

第六節　茶器觀賞に就て

陶器の中心　骨董中の骨董ともいふべきものが、陶器であることは前にも述べたが、その陶器の中心ともなるべきものは、何といつても茶器である。この中でも茶入に通ずるやうになれば骨董道の大見識といつてよい。何をいふも方四寸を出でない天目茶椀一箇が、價十七萬圓もするといふのであるから驚くの外はない。

茶入　第一に珍重される茶入は大名物といつて、秀吉を中心とする桃山時代全盛期の遺物で、初代藤四郎の作にかゝるものが多い。中興物といふのは小堀遠州が選んだ諸國の各陶器で前節に述べた遠州七窯などである。

茶椀　茶椀としては樂燒の長次郎が一番で、一個數千金の逸物さへある。

釜　釜には蘆屋釜（雪舟の下繪）天明釜（下野國天明で鑄られたもの）の外、丸釜大小雲龍、阿彌陀堂などの名高いものがある。形としては角形、屋根形、富士形、瓢簞形が最も喜ばれてゐる。

香爐　香爐は鑄金のものもあり陶器のものもあり、丸彫にしたものもあるが、何れにしても初代藤四郎、名工柿右衞門、乾山に及ぶものなく。形の上では、圓形、菱形、六角、八角などがある。また香を入れる香合も木彫、蒔繪、堆朱、堆黑、陶器などで、これにも名品が少くない。

第四章　美術設備

第一節　博物館及び美術館

博物館は古今、東西の天然及び人工の諸物を蒐集して、これを保存、展覽、研究するところである。その蒐集品を內容によつて美術、科學、歷史の三種に大別し、また建設の位置と職能によつて、中央博物館及び地方博物館の二種とする。昔は觀賞のみを目的としたが、近代の博物館は學藝の研究及び、一般教育機關たることを主目的としてゐる。

藥師寺藥師如來三尊（奈良縣）

博物館は西曆紀元前三百年頃、アレキサンドリヤに設けられたのを最初とし、歐米では早くより發達して獨、英、佛、米の諸國には、いづれも國立大博物館の外に、數百の博物館を所有してゐるが、我國の發達は未だ頗る幼稚である。

美術館は繪畫、彫刻、應用美術品などを陳列する純然たる藝術的建築物で、歐米では往々美術館をも博物館と稱する場合があるが、兩者は區別さるべき性質のものである。我國では大正十五年東京府美術館が上野公園內に設立せられたのを始め、他にも公私多數の美術館がある。次に記するものは博物館及び美術館の著名なものである。

博物館・美術館

東京帝室博物館	東京市	奈良帝室博物館	奈良市
正倉院	奈良市	恩賜京都博物館	京都市
三田博物館	攝津	李王家博物館	京城府
朝鮮總督府博物館	京城	同慶州分館	慶州
臺灣博物館	臺北市	徵古館	宇治山田市
觀心寺寶物館	廣島市	高野山靈寶館	紀州
太秦廣隆寺寶物殿	京都市	仁和寺靈寶殿	京都市
		東寺寶物館	京都市

北野神社寶物館　同　鎌倉國寶館　相模
大山祇神社國寶館　伊豫　出雲大社寶物殿　島根縣
尙古集成館　鹿兒島　大倉集古館　東京市
帝國美術院附屬美術研究所　東京市　美術學校文庫　同
聖德記念繪畫館　東京市　演劇博物館　早稲田大學
東洋文庫　東京市　京大文學部陳列館　京大內
法隆寺　大和　東大寺　奈良市
南禪寺　京都市　三十三間堂　京都市
東福寺　同　金閣寺　同
銀閣寺　同　平等院　山城
中尊寺及金色堂　岩手縣　圓覺寺　相模
建長寺　相模　日光東照宮　下野

第二節　特別保護建造物

東大寺

特別保護建造物は、古建築物中歷史的及び藝術的價値高き物を保存するため、制定された法律により保護され、建築物、繪畫、工藝品などの如く國寶に相當するものである。有名な法隆寺をはじめ、各時代の古社寺建築物中、この法律によつて保護されてゐるものは甚だ多く、國家の所有に屬するものはそのため年々相當の費用を投じて實測し、修理復舊して保存の實を擧げ、またはその建築物が保護建造物であることを國民に知らせ、國民の注意と自覺とを促してゐる。現在特別建造物として指定されてゐるものは、その數約千五百有餘に達してゐる。その著名なるものは次の如きものである。

特別保護建造物

法隆寺　金堂　中門　奈良
五重塔　廻廊
法起寺　三重塔　奈良
法輪寺　三重塔　同
東大寺　法華堂　轉害門　同
勸學院　倉庫　法華堂　同
經庫
新藥師寺　本堂　同
海龍王寺　金堂　同
唐招提寺　金堂　講堂　同
寶藏　經藏
藥師寺　三重塔　同
法隆寺　夢殿　經藏　同
當麻寺　東塔　西塔　同
寶生寺　五重塔　金堂　同
佛隆寺　石室　同
春日神社　社殿　同
春日若宮神社　社殿　同
醍醐寺　五重塔　京都
三千院　本堂　京都
法界寺　阿彌陀堂　同
平等院　鳳凰堂　同
宇治上神社　社殿　同
石塔寺　塔婆　滋賀
延曆寺　相模樣
石山寺　本堂　同
三佛寺　奥院納經堂　鳥取
福德庵　本堂　長野
高藏寺　阿彌陀堂　宮城
中尊寺　金色堂　經藏　岩手

第十四編　音樂知識

第五章　音樂

第一節　音樂の沿革

音樂は生類の感情から發する自然の聲であるが、殊に人類にあつては喜怒哀樂の情がそのときに處し、詩となり歌となつて表はれるものである。また樂器は二世紀の頃、既に埃及にオルガンの前身ともいふべき、ライルがあつた。支那にも神農氏の時代に早くも琴があり、我國では神代に神托琴があつた。是等のものが文化に伴つて進歩發達し、遂に今日に及んだのである。

かく古代から早くも人類の世界に音樂が行はれたのは、第一に靈妙な天與の美に醉はんがため、第二には優雅な精神の修養に資せんがために外ならなかつたのである。音樂を他の生產的事業に比較し、無用の長物視する人もあるが、もし音樂を人類から取り去つたならば、殺風景極まる社會の現出を見るに至るであらう。

第二節　西洋音樂の歷史

太古の音樂　洋樂は印度の古代に始まり、これを埃及人に傳へ、それを埃及人が更に希臘人と猶太人に傳へたものであるといはれて居る。勿論太古のことであるから、當時の樂譜は殘つてゐない。從つて當時の音樂は如何なるものであつたか、甚だ明瞭ではないが、今日のやうに一般の、純正藝術として用ひられたものでなく、宗教用として用ひられたことは事實らしく思はれるのである。

中古の音樂　太古の音樂が宗教音樂として稍發達するに及んで簡單な演劇などに配合せられ、所謂神祕劇なども行はれるやうになつたが、これも今日の歌劇などに比し甚だ幼稚なものであつた。次で中世紀に入つて基督教樂が興り、コンスタンチ大帝の如きこれを大いに奬勵し、アムブローズ、グレゴーなども同樂普及の功勞者であつた。然るに何處までも神嚴で、而かも眞面目でなければならなかつたこの基督教樂も、世の滔々たる風潮に打ち勝つことが出來なくなり、墮落せる世人の嗜好に媚びて次第に俗化し、甚だしく野鄙な音樂となつてしまつた。たまたまイタリー羅馬にパレストリーナが生れ、更

にヨヴアンニ、ビュルイーゲなどが出て墮落せる音樂の大改革を叫び、一千五百六十五年頃に一大改革を斷行し、再び神聖な宗教音樂に立ち返ることが出來たが、更にヘンデル、バッハ等の輩出するに及んで、音樂は全く理想の域に進んだのである。

歌劇　宗教本位の音樂に飽き足らなく思ひ出した一般民衆は、他の方面から音樂への欲望を充さんとするに至り、この欲望の充實のために、新たに生れたものが歌劇であつた。歌劇は聲樂を主とした表情劇で、初め伊太利のオラトリオ（神祕劇）に起因し、至つて神嚴な舞樂であつたが、十八世紀頃になつてからその反動として、極めて不眞面目な喜劇體となつて流行し出した。然し文化の程度が向上するに從ひ、何時までもかゝる喜劇體のものでは滿足される筈なく、佛蘭西から悲劇のオペラが興り、續いて獨逸、英吉利其他歐洲各國から、藝術的な高尚なオペラが生れ出るに至つた。殊に獨逸にハイドン、バッハ、モツアルト、ヴエートウベン等が輩出して、ソナタ曲、シホンニー曲、管絃樂曲などにその天才を發揮し樂界空前の盛觀を呈したが、更にグルックは從來の音樂は時代思想に適合せずとなし、一大刷新を圖つて新音樂の鼓吹に心醉した。續いて獨逸にウエーベル、佛蘭西にベルリオ、墺太利にシューベルト、獨逸にワグネルなど頻々として大家が現れ、聲樂に、器樂に、歌劇に各々その天才的頭腦を働かし、遂に百花爛漫の偉觀を呈する、今日の音樂器の基礎を作つたのである。

歐洲の音樂家　中世から近世、近代へかけて音樂界に貢獻し、また大作曲家として著名なる音樂家の年表とその傑作の重なるものを掲げて參考に供することにする。

ハレストリーナ　伊太利　一五三四年生——一五九四年歿
寺院樂の改革者

バッハ　獨逸　一六八五年生——一七五〇年歿
聖樂中興の祖

ヘンデル

ヘンデル　英吉利　一六八五年生　一七五九年歿
バッハと共に中興の祖として名あり

グルック　獨逸　一七一四年生——一七八八年歿
新派作曲家の泰斗

ハイデン　墺太利　一七三二年生——一八〇九年歿
大作曲家

モツアルト　獨逸　一七五六年生——一七九一年歿
大作曲家麗笛結婚曲（フイガロ）等は著名なる傑作

シュルビニ　伊太利　一七六〇年生——一八四二年歿
歌劇作家、作曲五百有餘中就中レ、ドウョルネー、ロドイスカは有名

ヴエートベン　獨逸　一七七〇年生——一八二七年歿
大作曲家ソナタ、シンホニーの作等枚擧に遑なき大家

スポンチニー

スポンチニー　伊太利　一七七四年生　一八五一年歿
歌劇作家。時の大帝より優渥なる勅評を賜りたる作家

バカニニ　伊太利　一七八四年生——一八四〇年歿
ヴアイオリン大家

ウエベル　獨逸　一七八六年生——一八二六年歿
洋琴家、歌劇オペロン其他の傑作あり

マイエルベール　獨逸　一七九一年生——一八六四年歿
作曲家

ロシニー　伊太利　一七九二年生——一八六八年歿
聲學家

シューベルト　墺太利　一七九七年生——一八三八年歿
聲學家

ドーニチュチ　伊太利　一七九八年生——一八四八年歿
作曲家、歌劇ファボリータは傑作中の傑作

ハレヴキー　佛蘭西　一七九九年生——一八六二年歿
作曲家

ベリニー　伊太利　一八〇二年生——一八三五年歿
作曲家、ノルマー其他の傑作あり

ベルリオー　佛蘭西　一八〇三年生——一八六七年歿
獨唱家、殊に管絃樂の創造と指揮に長ず

メンテルゾーン　獨逸　一八〇九年生——一八四七年歿
作曲家、哲學博士、管絃樂合奏曲で著名

ショーパン　露西亞　一八一〇年生——一八四九年歿
洋琴家

シューマン　獨逸　一八一〇年生——一八五六年歿
有名なる音樂批評家

リスト　匈牙利　一八一一年生——一八六八年歿
風琴家

ワグネル　獨逸　一八一三年生——一八八三年歿
歌劇作家、著名なるタンホイゼル其他の傑作あり

グノー　佛蘭西　一八一八年生——一八九三年歿
聲學家、歌劇の作物多し

第三節　邦學の歴史

神樂と唐樂　我國の音樂は神話にある通り、天の岩戸神樂に溫腸したものであるが、其後奈良朝の頃から、宮中の儀式と

なつて行はれ、國中の各神社でも祭典の場合は、その儀式に模して、里神樂が執り行はれることになつた。また歌垣や踏歌などの雅びた技も行はれたが、何れもその基因は神樂にあつたから、神樂は邦樂の祖といふべきものである。また欽明天皇の御代には、佛教傳來とゝもに唐樂、印度、三韓樂などが傳はつて非常な勢力を占め、遂に宮中樂にまで採用されるに至つた。この頃から我國の音樂は何處となく、唐風となつて來たのである。

催馬樂　催馬樂は昔の風俗歌であつたが、後ちには貴人の間にまで行はれるに至つたことは、萬葉集其他梁塵愚案集などを參酌してもわかることである。次に東遊や和漢人の文詩の雅致あるものに節を付けて朗吟した朗詠などが次々に流行し遊女、白拍子の間にまで神樂、催馬樂の變調した今樣が行はれるに至つた。

琵琶歌　琵琶は承和以後、主として貴紳の間に弄ばれたものであるが、源平合戰を經て鳥羽院の御時、生佛といふ盲人が平家物語を琵琶に合して謠つたことに起源を發してゐる。勿論その以前もあつたが、普及されたのはその後である。生佛の琵琶は忽ち世の歡迎を受け、諸流となつて盛んに流行した。後世の薩摩琵琶、筑前琵琶などは何れもこれに起因してゐるのである。

田樂　田樂は五穀豐饒を祈るとき奏した田舞に基因し、その初めは田舍風俗であつたが、後ち貴族社會の娯樂となつて三條院の治安三年以來盛んに行はれ、殊に足利尊氏、北條高時などは、この道の大家であつたとさへいはれてゐる。

猿樂と能　田樂と殆んど同時に行はれたものに猿樂がある。これは神代猿姫の古事に起因したもので、貞觀三年六月に始められたのを濫觴とすることが、三代實錄に見えて居る。その後平安朝を通じて大流行を來したが、鎌倉時代に入り田樂に壓倒されて衰微した。その後大和の國圓滿井といふ者が現はれ、從來の猿樂に田舞、曲舞、延年舞などを參酌して能樂を始め、各神社の神事に用ひた。寶生、觀世、金剛、今春、喜多、山階、下阪、比叡などは、何れも各神社附屬の太夫であつたが、後世には神事以外にも興行能を行ひ、一般人の觀覽に供するやうになつた。

淨瑠璃と清元　元和偃武以來、貞享、寛永、元祿の頃は天下は全く泰平で、一般民心は文弱に流れ、然も淫靡の風に乘つた文藝が勃興し、同時に民衆音樂も目覺しい發達を遂げるに至つた。即ち當時隆盛の基をなした淨瑠璃をはじめ清元、一中節盤津などがそれである。淨瑠璃は中でも我民衆樂の代表といふべきものであるが、これは比叡山の僧澄憲が平曲に說教祭文其他を調和して創めたもので、名稱の起りは織田信長の次女小野通が物した淨瑠璃物語に、節付けたによるといはれて居る。この淨瑠璃ははじめ扇拍子によつて語つたものであるが、永祿の頃から仲小路といふ盲人が、蛇皮線から考案して作つた三味線と合奏するやうになり、慶長の頃には一層の發達を來し、目貫屋長三郎などにより、操人形と合演するやうになつてから、益々世の喝采を博した。寛永の頃薩摩淨雲が出て淨瑠璃に大改革を行ひ、それより各派諸流となつて各地に一勢力をなして普遍するに至つた。以下の各派は皆淨瑠璃の分派である。

金平節	櫻井丹波少掾平正信	語齋節	承應　近江大掾
大薩摩	大薩摩主膳	士佐節	土佐少掾橘正勝
式部節	貞享　廣瀨式部太夫	永閑節	虎屋永閑
豐後節	享保　宮古路豐後	河東節	一寸見河東
富本節	富本豐前掾	清元節	清元延壽太夫
薗八節	宮古路薗八	春太夫節	宮古路春太夫
繁太夫節	宮古路繁太夫	鶴賀節	若狹掾鶴賀
伊勢島節	伊勢島宮內	喜太夫節	明暦　上總掾喜太夫
嘉太夫節	嘉太夫	治太夫節	貞享　治太夫
義太夫節	攝津の人通稱五郎兵衞		
		肥前節	寛文　江戸肥前掾藤原清政
		外記節	薩摩外記太夫
		半太夫節	半太夫
		常盤津節	元文頃　常盤津文字太夫
		正傳節	寛永　春富正傳
		富士松節	富士松薩摩掾
		新內節	鶴賀新內
		角太夫節	山本土佐掾藤原房正
		一中節	都太夫一中

小唄と長唄　この時代には淨瑠璃とゝもに小唄が流行した。尤も小唄は淨瑠璃のやうに語るものでなく、唄ふものであるが民衆音樂として非常な勢ひを以て普及發達し、左の如き各流派を生み出すに至つた。

めりやす	創始者不詳	隆達節	日蓮宗僧隆達
柴垣節	明暦　創始者不詳	岡崎節	寛文　創始者不詳
土手節	寛文　小唄　創始者不詳	小六節	同上
弄齋節	僧弄齋		
籬垣節	萬治　籬といふ妓		
加賀節	寛文役者間に流行創始者不詳		

道念節　道念三郎　　ほそり寛文　小唄　創始者不詳　投節　元祿　島原に流行創始者不詳
古今節　享保　小唄　創始者不詳　歌澤節　安政　歌澤笹丸　都々逸　天保　扇歌坊

また長唄は元和の頃、駿州の狂言師中村勘三郎が江戸に出で、猿若狂言を始めたに因を發してをるが、その弟勘五郎が天性音曲に巧みであつたので、種々の小唄を參酌して一流を開き、二世杵屋六左衛門より今日に至るまで各流を生じ、非常の流行を見るやうになつたのである。

琴曲　琴曲は文治の頃九州善道寺の僧某が肥前の人玄恕に傳へ玄恕から山住勾當、柳川加賀市等に傳へたが、山住は音曲の天才として幾許もなく檢校を許され、後ち八橋と改名して斯道の普及に盡力した。次で生田、繼山、芳澤の諸流が起り、江戸にも山田流などが初められ頗る盛況を呈するに至つた。

清樂　清樂は文政の頃、長崎の醫師款川蓮が、清人林德建に學んで普及に盡力した結果、明治年間にも日清戰爭頃まで相當に流行したが、其後衰運に赴き今日では、殆んど影を沒してしまつた。

我國の洋樂　明治維新後西洋文化の輸入と共に洋樂は非常な勢ひを以て普及し、今日の我洋樂界の基礎を成したものである洋樂の最初傳はつたのは、維新以前のことゝいはれて居るが明治五年陸海軍に軍樂隊の制度が成り、英國人ジョン・ウヰリアム・フェントンを招聘して、漸く流行の緒に就いたものである。其後宮內省の雅樂所でも歐洲樂を採用し、次で十二年には伊澤修二の盡力で、文部省內に音樂取調係を設け、盛んに音樂教育の研究が積まれた。かくて十九年には取調所を音樂學校と改稱し、高等師範の附屬として專ら音樂教員の養成に努めたが、三十二年四月新たに專門學校令により、東京音樂學校として獨立した。その頃から女子音樂團、東京音樂院、東洋音樂學校などの音樂教育機關をはじめ、各種の音樂團が各地に勃興し、海外へ研究に遊ぶもの多く、一方また世界的樂聖の來朝などによつて益々刺戟され、今日では邦樂以上に洋樂は民衆的のものとなり、東京放送局を初めとして各放送局では、毎日のやうに洋樂が放送され、民衆の心を樂しましめてゐる。

第四節　音樂の種類

聲樂　音樂の種類は非常に多いが、これを聲樂と器樂とに大別することが出來る。聲樂は人類自然の感情に起る作用で、頗る靈妙なものであるが、器樂は人の考案發明によつて成立したものであるから、聲樂は器樂よりも遙かに上乘な音樂といはねばならぬ。聲樂の單純なものには漁歌、馬子歌などの幼稚な唄もあるが、高尙になると唱歌のやうなものとなるのである。また聲樂には獨唱と合唱との二種がある、獨唱は一人で唄ひ、合唱は二人(二部)、三人(三部)、四人(四部)、五人、六人が、各自高低强弱の異る聲音に合して、或る一つの情意を表はすものである。この合唱は頗る理想的なものとして、歐洲では歌劇の最も重要な元素とされて居る。聲樂の場合男子は低音の部分を、女子は高音の部分を歌ふが、この女聲の最高音をソプラノといひ、中音をメゾンプラノ、低音をコントラトル（略してアルト）と稱してゐる。男聲にも女聲同樣の名稱があつて、テノル、バリトン、バスの三階段になつて居る。

日本樂の方面では聲樂の形式のものが非常に多く、琴曲を除く外謠曲でも、琵琶でも、淨瑠璃でも、小唄でも、樂器は單に歌の意味を助ける相手に過ぎず、歌ふのが本位となつてゐるから、邦樂は殆んど聲樂といつても差支ないのである。

器樂　器樂にも種類は非常に多いが管樂器、弦樂器、擊樂器に三大別することが出來る。この三者には各優劣、特徵のあるは勿論、獨奏として用ふべきもの、合奏として用ふべきものなどの別があるから、以下その說明を試みることにする。

一　管樂器　管樂器とは管舌の作用により空氣の振動を起すもので、この種のもので最も普及されてゐるはオルガンである。オルガンの裝置は大仕掛な理想的なもので、その特徵ともいふべきは、ストップと稱する音色の變化を、自由ならしむる裝置のあるのみでなく、雄大森嚴ともいふべき音調を有してゐることである。このオルガンの種類にも二つあつて、一はリートオルガン、二はパイプオルガンである。リートオルガンは普通のものであるが、パイプオルガンはリートオルガンより遙かに大きく、人力または蒸氣力によつて管笛に空氣を送り音響を發せしむる。その大きいのになると一箇の管笛が一尺平方の太さと、二間の長さを有してゐるものさへある。ハーモニュームといふ大樂器があるが、その裝置や構造はオルガンと大同小異である。其他木製の管樂器にはフリュート(横笛)、オボオ(縱笛)、クラリオネット、金屬製管樂器にはトロムペット、ホルン、

トロムボオン、バステウバ、ユルネット、竹製には笛、尺八などがある。

二　弦樂器　弦樂器は絲の振動により音響を發せしむる樂器で、ヴアイオリンの如きはその例である。ヴアイオリンは歐洲の樂器中最も古いもので、今日ある形を成すに至つたのは、十七世紀の頃ガスクバロ・ダ・サロが創めたと傳へられて居る。用材は乾燥した楓板で、それにワニスを塗つて音を圓滑ならしめ、腔洞を造つて四絃を共鳴せしむるやうにしてある。またピアノはオルガンと外形が酷似して居るが、內部の構造は全然違つて、發音體は絲である。從つてオルガンとは音色の表情が異つて居る。其他の絃樂器にはヴアイオラ、セロ、ダブルベースなどがあり、音色は何れもヴアイオリンと大同小異である。これ以外に音色を異にするものに、マンドリン、ギタがあり、和樂器としては琴三味線、提琴、胡弓などがある。

三　打擊樂器　金屬或は木石を擊つて音響を發せしむる樂器で、この部に屬するものにはシンバル、トライアングル、リング、木琴、カスタネット、邦樂器としては鼓、太鼓、拍子木などがある。洋樂の是等は何れも簡單な樂器であるから、管樂器や絃樂器のやうに獨立的なものは少く、主に兩者の補助樂器となつて居る。

第五節　音樂の組織

音樂の要素　音樂の要素は聲音である。さうして音樂は高低の異る音階が、相連結的に進行して旋律を形成し、更にこれを一定の節度によつて構成されたもので、これが音樂の要素である。

旋律と音律　旋律とは音の高低が變化連續したものゝことであるが、然しこの高低の聲音を連續的に進行したのみでは、何等の妙味もないから、これに拍子の緩急、音調の强弱、喜怒哀樂其他の表情を按配するのは勿論であるが、これだけでも尙ほ單調に過ぎ理想的なものとはいはれない。そこで或る一定の法則で、和聲（二音以上の異音が同時に繼續の結果）を附ける必要が出來て來るのであるが、その和聲も常に協和音（高低を組織する二音の響きを同時に耳にしたときよく調和するもの）ばかりでは、耳に飽きが來るから不協和音をも用ひて努めて變化を多くするのである。この音の高低卽ち旋律に對し、音の長短を音律といひ、この兩者は音樂の最も根底となる要素となつて居る。是等の聲音の配置、表情の意匠は總て作曲家の頭腦によつて考案せられ、後演奏者の靈妙な手腕により巧みに表現せられるのである。

內容と形式　日本音樂の內容をなすものは歌詞である。歌詞の意味を理解することによつて或る情緒なり、感情なりを味ふのであるが、洋樂には歌詞がないから、音樂の形式を非常に重んじて居る。その結果としてソナタやフウガの如き、堂々たる建築的なものが生れたものといはれて居る。如何に美しい音でも、たゞ音が絕えず變化してゐては、聽者を疲らしめるから、洋樂では統一された立派な形式を重んずるのである。形式とは、簡單にいへば、旋律の繰返し方が音樂の形式を生むのである。

管絃樂　管絃樂卽ちオーケストラは、形式の完成されたもので、數人がそれ〴〵異なつた樂器を持ち、同一曲を合奏することである。これは古典的音樂の盛時に、貴族の邸內で行はれた室內音樂の發達したものであるが、當時は絃樂四部合奏管絃樂五部又は六部合奏の程度であつた。絃樂四部の場合は管絃樂とはいはぬが、これには普通ヴアイオリン二挺、ヴアイオラ、セロの四樂器を用ひることになつて居る。またヴアイオラの缺けてゐるときには、ピアノを用ひて三部合奏と稱するのである。今日のオーケストラは大きな組織になつてゐて、第一類には絃樂器の一族、第二類には木管樂器の一族、第三類には管樂器中の喇叭類の一族、第四類には拍擊樂器の一族によつて合奏される。是等の各樂器には、音色の上に各各特徵のあることはいふまでもない。卽ち絃樂器の音は弱く細く長く、木管の音は柔かく丸味を含み且艶がある。ブラス樂器の音は强く太く力を感ぜしめ、拍擊樂器の多くは音の高低はないのである。音の高低からいふときは、一番高いのはピラコロフリウトで、これは番外であり、絃のヴアイオリン木管のオボーにクラリネット、ブラスのトロンペットにコルネットは高音樂器に屬し、絃のヴアイオラ、木管ではイングリッシュ・ホルンが中音に屬してゐる。次中音卽ちテノルの部には絃のセロ、木管のバスーン、ブラスのホルン及びトロンボーンが屬し、更に低音部は絃のダブルバス、木管のバスクラリネット、ブラスのトウバなどである。オーケストラは是等の樂器の音色、音の强弱及び高低を以つて、樂曲に對し各持場を分擔して演ずるから、その音の豐富と表現の自由自在なる點において他に及ぶものなく、從つて往時室內音樂

上最高の地位に置かれた如く、今日においても尙ほオーケストラは音樂として最高級の表現を爲すべき目的のものである。オーケストラにおける各種は、それ〴〵一まとめに完成されたもので、即ち同類樂器で和聲上から考慮して、音の揃つてゐる一團をクワイヤア（和聲的團體）といふのである。このクワイヤア中絃樂は最も重要なもので、完全なるオーケストラにおいては、絃樂のクワイヤアだけで六十餘名を要し、而してそれは全員の約三分の二弱に當つてゐるのである。次に大切なのはブラスのクワイヤアで、軍樂隊をブラスバンドとさへいひ、ブラスと木管の拍擊樂器だけで、樂隊を編成する位である。要するにオーケストラは、各クワイヤアが各々完全に獨立しながら、互ひに伴奏するところに妙味が現はれるのである。オーケストラ演奏の際に、前面の中央に立つて棒を振つて全員を指揮する人を指揮者といひ、指揮者は第一音樂を誤りなく演奏せしめるために、全員の拍子の一致、强弱の一致を指導し、第二にはその樂曲に對する「解釋」を、聽衆に徹底せしめる使命を持つてゐる。指揮者の持つ棒はタクトとも、バアトンとも呼ばれてゐる。

和洋調和樂　和洋調和樂とは、日本倆有の音曲と洋樂とを比較し、彼の長を採つて我が短を補ひ、適度に調和して成したところの音樂である。即ち洋樂の科學的組織でもつて、我民樂に適合するやうに創造さるべきところの音樂で、この種の樂は今や各作曲家によつて試みられ、今や非常な勢ひで普及されてゐる。

第六節　音樂の聽き方

音樂を聽くには少くともその作曲の解釋と、歌詞の意味だけは心得てゐなければならない。その上に前節までに述べ來つた音樂の沿革から、樂器の大體に通じて置くことも必要である。勿論研究を重ねて多く聽くに越したことはないが、それの出來ない場合は、大體前に述べた程度の知識を持ち、尙ほ次の事柄をも心得て置くがよい。

一、多少とも自分に音樂の素養をつけること。深い研究はしないまでも、音樂の理論を通俗的に述べた書籍によつて音譜、音階から音樂一般の組織を、養つて置くことが必要である。

二、大家の樂風を知ること。古今樂聖の樂風を知ることも、聽く方にとつて非常によい印象を殘す結果となるものであ

る。ソナタとは如何なる曲か、ジムホニーとは如何なるものとか、ヴェートウベンは何を得意としたか、ストラウスやバッハの作曲の特長はどういふところにあるとかと言ふことなどを知り、出來るならば樂曲の形式を調べて置くのである。大抵の音樂會などでは解說書を呉れるから、よく其處で熟讀してもよい譯である。

三、名曲の梗概を知ること。これは前と重複するやうだが、名曲の梗概に關する一通りの知識を、涵養して置くことをすゝめたい。

以上の知識を得たならば、演奏會などに出席した場合、成る程と思ひ當ることがあるものである。例へば快活の曲は、多く長音階から構成されて居るといふことが、自分の知識でわかつたならば、後の演奏會の場合に幽鬱悲哀な樂曲を聞き、それが短音階で構成されてゐる位のこともわかり、またヴェートウベンの樂風は、森嚴犯すべからざる所があると知つてから、その作曲を演奏會で聞けば、崇高な曲想に感じて、如何にもと合點することが出來るものである。要するにこれまでに理解し得れば、音樂は味はふことが出來るもので、前述した如く常に頭の修養と、耳の修養を怠ることなく、成るべく多く演奏會や音樂會に臨むやうにしたならば、又自然に奏曲や演奏振りの批評も完全に出來るやうになるものである。從つて趣味を增し面白くもなり、面白くなれば一層眞面目に聽く熱心が生じて、同時に充分に耳が肥えて來るといふ順序になり、自から開發することが出來るものである。

第七節　能樂界の動向

能樂の起源は幾多の議論もあるが、昔の申樂から新猿樂に移り、漸次成長して來たものであることは疑ひない。當時の申樂は曲藝的なもの、滑稽的なものを主として歌劇風な能藝が挿入されてゐたもので鎌倉時代、足利時代を經てその能藝が發達し今日の能樂となり、滑稽的な方面が殘つて、今日の狂言となつたと觀るのが妥當である。

殊に足利義政がこれを好み奬勵した際に觀阿彌、世阿彌の親子が出てこれを完成し、豐臣秀吉もこれを好んで家臣に新作をつくらせ、或は自身も演ずるなどのファンであつたが、德川幕府に至り能樂を武家の式樂と定め、觀世、寶生、金春、金剛の四流家元及び囃子方などに祿を給してこれを奬勵したので、各大名等も爭つて能役者を扶持し、これらの保護を受けて三百

年、幾多の名人上手によつて洗練せられ、遂に一大藝術を生み出したのである。

德川幕府瓦解後は、一時衰退廢滅の危機に瀕したが、岩倉具視公其他能樂家の熱心な奬勵で漸次恢復し、今日の全盛を見るに至つたものである。

今日では能樂の民衆化といふことが大に叫ばれ、諸方で素人能會、素人素謠大會、婦人囃子大會などを催し、能樂關係者もまた各流とも、學生や青年層にまで呼びかけて相當の成績を擧げてをり、東京或は京阪などでは春秋には、毎日曙各派が各所においてこれを催し、大抵の田舍でも素謠の聲を聞かぬ所はない程の流行を見せてゐる。

然しそれで能樂界は極盛時代に達したかといへば、或る點では寧ろ能樂界の危機とも見る人がある。それは能樂師の藝に關する眞劍さが、漸次薄くなつて行くことである。即ち盛んな流派の職分は、お弟子が增加し、收入が多くなるにつれて、藝よりも物質に走る傾向が顯著となつたことである。若しこのまゝ推し進んで行つたならば、折角の大藝術も能樂の長所を失つてしまふであらう。

全國を通じ千を以て數へる能樂師のうち、各流二三の人を除いて、果してその演能に、弟子達のお義理でない藝のみを觀賞する、眞の見物を呼び得る人が何人あるかと思ふと甚だ心細い極みである。このところ能樂師たるものは、もつと謙抑な心になつて、この大藝術の眞の藝に精進して行かねばならぬと思ふのである。

その點になると關西の寶生流辰巳推、觀世流の稻田、金剛流の種田、金春流の金春榮、喜多流の正木諸氏が、觀衆を離れて藝の練磨を目ざす研究能を組織したことは、最も有意義な企てゞあると言はねばならぬ。

最近東京音樂學校では、能樂科を本科とし、中學四年修了程度の者から、入學試驗を行つた上入學せしめることになつた。學科は一週技藝十時間、學科十時間で、學科は修身、音樂理論、國語、美學、音聲樂などを課し、修業年限は三ヶ年であるが、特に卒業生のため二年修了の研究科を設けてゐる。

これに對して音樂學校の能樂を、觀世流に限つて敎へるのは甚だ當を得ない、寧ろ不振な流派こそ國家が保護すべきだとか、一生稽古の能樂を僅か三年で卒業せしめて師範とするのは不可能だとか、いろ〳〵の議論も行はれてゐる（觀世左近氏談）。

第十五編　農業知識

第一章　農業の概念

第一節　農業の意義

農業とは、土地を利用して作物を栽培し、家畜を飼育し、或はまた山林の仕立などをして、吾人の日常生活に最も必要な食料を供給するためになす生產の謂ひである。故に農業は產業中における一切の基礎である。

我國は古來瑞穗國と稱せられ、農業を以て建國の精神となしその發達を計つて來たのである。現今我國の商工業が著しく勃興して來たのは一般に知るところであるが、尙ほ國民の六割は農業に從事してゐる狀態で、農業の盛衰が如何に國家に及ぼす影響の大であるかを推知することが出來る。

農業經營の樣式は、その時代と國情によつて多種多樣であるが、その經營方法と規模の大小とによつて大農と小農とに分けられ、またその土地に投ぜられた勞働力と資本の多寡によつて集約農業と粗放農業に分たれるのであるが、我國は土地が狹隘で耕地面積が少ないところから、多くは小農式で集約農法が行はれてゐる。その結果狹隘な國土でありながら、少ない面積から多量の收穫をあげて自給自足の狀態にあるのである。然し其處には自然に缺陷も伴つて、耕地が狹いために十分に機械力を利用する場合が少ないのである。從つて多くの生產費を必要とし、また生產物の販賣や原料の仕入などに當り不利益な點が多いのである。それがために農業經濟は日に〳〵苦境に陷りつゝある狀態である。

玆において有爲なる農村青年にして愛鄕の土地を捨てゝ都會へ都會へと出るものが非常に多くなつたのである。かゝる狀態に置かれてある農業の不振を打開するためには、技術、販賣、經營などの各方面にわたる合理化を叫び、生產費の低下を圖る一面において、收穫增加の途を講ずることは我國における農業の重要性に鑑み刻下の急務とするところである。

第二節　農業の助成機關

農業が我國の重要產業であることは前述の通りである。從つて國家においても、地方自治團體においても、特にこれが發達を期するため、奬勵金や補助金を交付したり、技術指導員を置

いて技術的改良の指導をしたり、又は各種の試驗場を設置してこれが開發に當らしめてゐる。今我國における農業助成機關を見ると、その主なるものは農會、農業に關係ある各種試驗場、各組合、農業倉庫、特殊金融機關、農業教育機關等が設けられてゐる。

農會　我國の農會は凡そ左の四種類に分かれ、農業の指導改良を圖るのが主たる目的で、農會法によつて設立された公共組合である。その事業としては、農業の指導奬勵に關する施設、農民の福利增進に關する施設、農業に關する研究、調査及び農業に關する紛議の調停または仲裁などを行つてゐる。

一帝國農會。　二府縣農會。
三郡農會。　四市町村農會。

組合　我國の農業に關する組合は凡そ左の四種類に分かたれてゐる。

一產業組合。　二畜產組合。
三茶業同業組合。　四重要物產同業組合。

產業組合は組合員相互の利益を計り、產業の發達改良を目的とする組合である。

畜產組合は牛馬や豚、羊などの飼養者がその改良と發達を圖るために組織された組合である。

茶業同業組合は茶の製造及び改良と販路の擴張を目的とした組合である。

重要物產同業組合は重要物產の製造及び販賣をなす同業者が營業上の利益を計り、或ひはその弊害を除去する目的で組織された組合である。

農業倉庫　我國の農業倉庫は農業者が生產した穀物や藏及び地主が小作料として受けた穀物などを一定期間倉庫に保管し、またはこれを擔保として資金の融通をしたり、或ひはまた依頼された保管物品の販賣の仲立取次をも行つてゐる。この種の倉庫は概ね金融機關で、主として產業組合が經營してゐるのである。

特殊金融機關　我國の農業金融機關は凡そ左の五種類に分れ、短期の資金融通には信用組合を利用し、長期のものは不動產を擔保として日本勸業銀行や府縣の農工銀行を利用してゐるのである。

一日本勸業銀行。　二府縣農工銀行。
三信用組合中央金庫。　四信用組合。　五產業組合。

試驗場　我國における農業に關する試驗場は左の十餘種類に分かれ夫れ〴〵技術的改良の研究に當つてゐる。

一農事試驗場。　二林業試驗場。　三園藝試驗場。
四茶業試驗場。　五蠶業試驗場。　六畜產試驗場。
七種馬牧場。　八種馬育成所。　九種馬所。
一〇種羊場。　二一種鷄場。　三地方種畜場。

農業教育機關　我國の農業教育機關としては帝國大學農學部を初め、高等農林學校、高等農業學校、蠶絲專門學校、高等蠶絲學校、高等園藝學校、其他多數の中等程度の學校が設立されてゐる。

第三節　作物

作物とは稻、麥、大豆のやうに、その果實、葉、莖、根などを採取するために田畑に栽培する植物の總稱である。元來作物は山野に自生した野生物であるが、我祖先が多年の間これに人工的改良を加へて今日に至つたものであるから、今日一般に栽培せられてゐる作物は、その性質、その形狀においても殆んど原始的野生物と遠ざかつてゐるのである。從つて今日の作物はこれを人工作物といふことが出來る。故にこの人工作物は野生物よりもその質が弱いから病害蟲などに侵され易い。そこで吾人農業立國民は、この作物に對し完全の保護を加へて發育を助け、その特性を發揮するやう努めねばならぬ。而して作物を大別して普通作物と特用作物の二種類とする。

普通作物　普通作物とは人畜の食用に供する作物のことで、左の四種に分類される。

一穀菽類。　稻、麥、粟、豆類、玉蜀黍などである。
二蔬菜類。　大根、蕪菁、漬菜類、甘菜、芋類、瓜類などである。
三果樹類。　柿、梨、桃、苹果、梅、李、柑橘類、葡萄などである。
四飼料類。　桑、牧草などである。

特用作物　特用作物とは加工製造して食用又は特殊の用に供する作物のことで、例へば茶、煙草、甘蔗、大麻、藺、藍などである。

第四節　土壤

土壤はその中に含まれてゐる砂と粘土の割合によつて砂土、埴土、壤土の三種に分けることが出來る。

砂土　砂土は七割以上の砂と三割以上の粘土分とから成るもの

で、耕鋤し易いが水分と養分を保有する力が弱い。

埴土　埴土は俗にネバツチといひ、六割以上の粘土分と四割以下の砂とから成るもので、水分と養分を保有する力が強いが、空氣の流通が惡いので、乾燥すると固まつて割目を生ずるから耕鋤するに困難である。

壌土　壌土は俗にマツチといひ、砂土と埴土とが混合したやうなもので、兩者の中間の性質を有するから作物の栽培に適するのである。

以上の外二割以上の腐植を含むものを腐植土といひ、火山灰の堆積したものを灰土といひ、五割以上の小石を含むものを礫土といつてゐる。尙土壌の含有する砂、粘土、腐植土の分量によつて壌質砂土、植質砂土、腐植質壌土其他に分類されるが、土壌の中で最も作物の栽培に適するものは適當の腐植した腐植質壌土である。

耕地　耕地とは作物の栽培に用ひる田畑のことをいふのである。田には乾田と水田とがあり、畑は園などといはれてゐる。耕地の土壌の上層は多量に腐植質を含み、その下層よりも暗色である。この上層の土壌を表土、その下層の土壌を心土といふ。耕土の部分は表土で植物の根は專らこの部分より養分を得るから、これを作土ともいはれてゐる。

整地　整地とは田畑に種子を播いたり苗を植ゑるとき、その障害物即ち雜草や刈株、小石、木切其他のものを取除いて植物の栽培に適するやうに土地を整理することをいふのである。だから整理の目的は先づ障害物を除去し、土地を打起して土塊を碎き土壌を軟かにするにある。その理由は土地が堅いと氣水の流通が不充分のため、溫度が低くなつて作物の發芽を妨げるからである。從つて發芽が十二分でないと根が蔓延しないから、完全に養分を取ることが出來ない。その結果莖葉が發育しないから自然と收穫が少なくなる譯である。

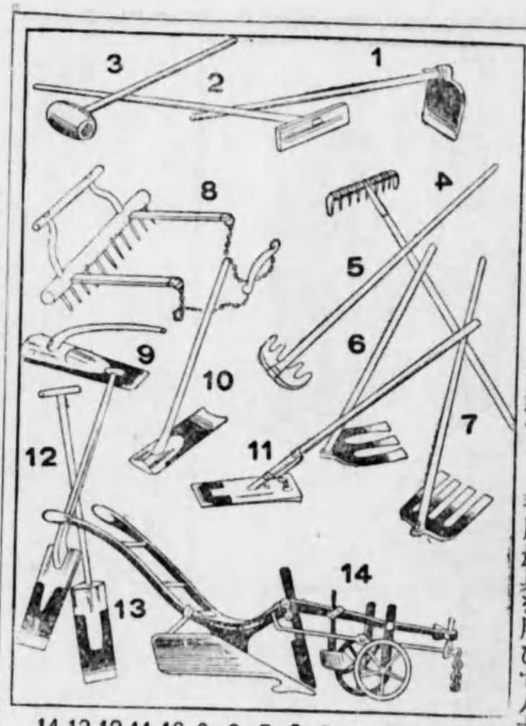
故に整地するときには出來るだけ深耕するのがよろしい。完全に深耕すると耕土が深くなるから根も十二分伸びて多くの養分を自由に攝ることが出來る。從つて空氣や水の流通もよくなつて、作物の生育を助けることになる。耕鋤は土地によつてその時期と方法が異なるが、概ね秋冬の候に牛馬を使役して行ふのが通例となつてゐる。

第五節　整地用農具

整地用農具中で耕鋤用のものには、手用のものと畜力用のものとの二種ある。手用のものゝ最も普通なものは鍬と鋤とである。鍬には普通鍬、金鍬、唐鍬、備中鍬などがあり、鍬は鑺、風呂、柄の三部から成つてゐる。鋤には江州鋤、京鋤、鑄鋤などがあるが、その構造は鍬と同じである。また畜力用のものは犂でこれには抱持立犂、床犂、改良犂などあるが、其他西洋犂もある。

犂を用ひ牛馬の力によつて耕すと、手用農具を用ひて人力によるよりも深く耕されるから、大面積の耕鋤には犂を用ひるのが得策である。

土塊を碎く農具には畜力用に馬鍬があり、手用に杁、レーキ、木ざらひ、金さらひ、木斫などがある。



1 鍬　2 杁　3 木斫　4 手耙　5 同　6 股鍬　7 同　8 馬鍬　9 普通鍬　10 同　11 鑄鍬　12 江州鋤　13 京鋤　14 西洋犂

第六節　育種及び選種

育種　作物の栽培には種子が良くないと、如何に保育に努めても好成績を擧げることが出來ないから、種子の育成には充分注意しなければならぬ。種子の育成は雜種蕃殖、純系分離などの方法によつて作物の變異を促すのである。そして採種には、その變異したものゝ中から、最も良い形質のものを選擇すべきである。種子はその品種の特質を最もよく備へ、發芽歩合が良くて盛大であり、形狀が正しくて大きく、色澤が良くて重く、適當に成熟した新しいものが最も優れてゐる。

選種　選種とは種子の良否を選み分けることをいふのである。普通行はれる方法は篩選、颺扇選、比重選で、主に種子の大小と輕重とを選別するものである。比重選中で最も普通に行はれるのは鹽水選である。その法

は適宜の桶に清水を入れ、これに適量の食鹽を熔し、その比重を檢めて種子を笊に入れ、水中に沈めて能く攪伴し、浮んだ種子は金綿杓子などで掬ひ去り、沈んだものだけを取つて清水で能く洗ひ、これを適當に乾燥して用ひるのである。食鹽の代りに智利硝石、硫酸アンモニアなどを用ひることもある。

1 比重計　2 鹽水の中に種子を入れた所　3 浮んだものをすくひ去る所　4 浮んだ種子を入れる笊　5 水流し場

小麥、裸麥の比重は稻や大麥に比べて大きいから、選種には苦鹽汁の濃いのを用ひるのである。

第七節　作物の栽培

すべて作物の栽培は、播種に始まつて收穫に終ることは、農業立國々民の等しく知るところであるが、今茲にその概說を述ぶれば、

播種　播種とは作物の種子を田畑に播き下すことをいふのである。その方法には次の三種がある。

一條播法　條播法は廣く用ひられる方法で、一定の距離に平行に作條を設け、その中に種子を連續して播くのである。この方法によると空氣の流通、日光の透射がよろしいから作物の成育は良好である。多く大根、粟などの播種に應用されるのである。

二點播法　點播法は作條内に一定の間隔を置いて一粒乃至數粒づゝの種子を點々播く方法で、大豆、落花生、鉈豆などに應用する。この方法は他の方法に比し多くの勞力を要するが、作物の成育は最も良好である。

三撒播法　撒播法は苗代または苗床などに種子を撒布して播く方法で、勞力を要することが少ないが、作物の發生が不整で、良好な成育を遂げることは出來ない。それでこの方法は山野を開墾した際粗放に播種する場合にのみ應用されるのである。

四覆土　播き下した種子には水分を與へて發芽を促すために土を覆ふのが普通である。これを覆土といふ。覆土は一般に大粒の種子には厚く、小粒の種子に薄くする。又土地が乾いてゐるときには厚く、濕つてゐるときには薄くするのである。

五播種量　種子を播くにはその分量に注意しなければならぬ。分量が多過ぎると、作物が密生して日光を受けることが少ない。從つて空氣の流通が能くないから作物の發育が惡い。また疎に過ぎると徒らに地積を損し成長が不揃となつて收量を減ずるから、播種量は過不足共に不可で、その中庸を得ることが肝要である。

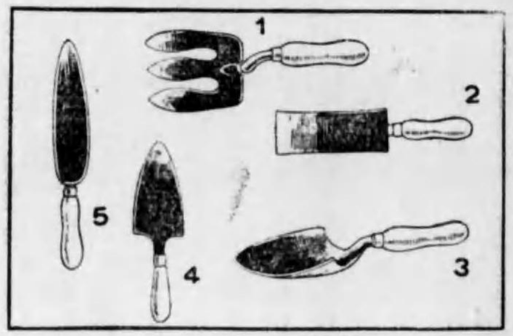
六播種期　種子の發芽は溫熱によつて異なるから、作物の種類、品種と栽培の目的とに從ひ、最も適當な時期に播種すべきである。この適當な播種期は地方によつて異なるが、大體春秋二季に播種される。春播の期節は岸岸前後から八十八夜の頃まで、秋播の時節は秋の彼岸前後から土用の頃までを普通とするのである。

苗床　作物には本圃に直播して栽培するものと、一旦苗床に播種して苗を育成し、後に本圃に移植するものとがある。苗床は溫床と冷床とに分かれてゐる。

一溫床　溫床は落葉、藁、廐糞などの發熱物を床下に堆積して溫度を高くしたものである。

二冷床　冷床は人工的の發熱物を用ひず、太陽熱だけによるものである。

移植器



1 移植三叉　2 4•2 掬ひ　3 5•3 鍬植

移植　移植とは苗床で適當な大きさに育成した作物の苗を本圃に移植することをいふのである。移植には假植と定植との二種がある。移植については次の諸點に注意しなければならぬ。

一苗を移植する一時間以前に苗床に灌水し床土を濕して置き苗の根を傷めないやうに土を附けて掘り取ること。

二苗が大きく根が少ないときは、莖や葉の一部分を適宜切り捨てゝ植付けること。

三苗を移植する日は曇天で靜穩の日を選み、移植後に苗の凋れる虞ある場合は、灌水を行ふこと。

第八節　作物の管理

作物は發芽後または移植後適宜に間引、摘芽、蔓返し、剪根中耕、土寄、除草、灌漑、排水、施肥並に鳥獸害、蟲害、病害の豫防などを要する。これを作物の管理といふのである。

間引　間引とは密生してゐる作物につき不良の苗を拔き取つて良いものを殘し、適當な間隔を保たしめることをいふのである。間引は作物によつてそれ〴〵適當な時期に始め、數日を置いて二三回行ひ、作物の間隔とその個體の良否を選別するのである。

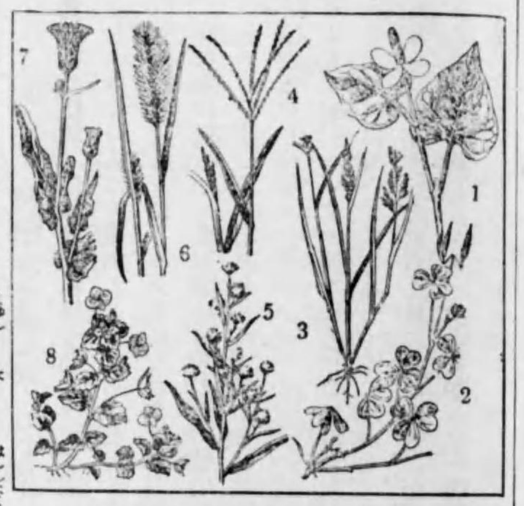
摘芽　摘芽とは無用な枝や葉の發育を制して、目的とする部分を發育させたり、或ひは成長を抑へて結實を促がしたりするため、作物の芽を摘み取ることをいふのである。

中耕　中耕とは作物の中間の土を耕すことをいふのである。中耕は土を軟かくして根の成長と蔓の延びを良くし、且つ空氣や水の流通を自由にし、肥料の分解と土壤の風化とを助け、又雜草を除いて作物の發育を促がすなどの効能がある。中耕は雨天及びその直後でない時に行ふべきものである。

土寄　土寄とは作物の成長中に根の露出又は倒れるのを防ぐためにその根に土を寄せることをいふのである。土寄は根の長い作物には特に必要である。これは通例中耕と共に行ふことになつてゐる。

蔓返し　蔓返しとは甘藷や南瓜に行ふ手入のことであるが、是等の作物は地上に蔓延した莖節から根が出て、成熟を後れさせるのみならずその收量を減ずる傾きがあるので、時々蔓を左や右に反して、不用の根を發せしめぬやうにする目的のために行ふのである。

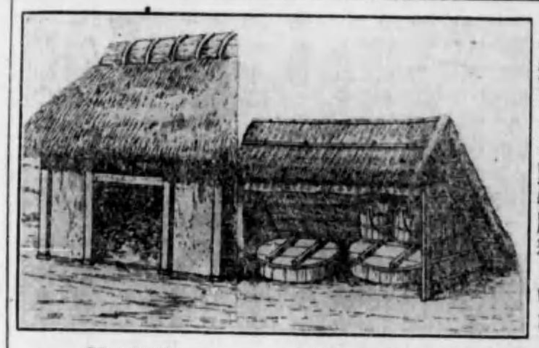
除草　除草とは作物に混じて自生する雜草を除去することをいふのである。雜草の繁殖力は非常に迅速なので、これを放置して置くと、管に作物の養分を奪はれるのみならず、日光を遮り、空氣の透通を妨げ、害蟲を發生せしむるなど作物の成育上大なる害を及ぼすので、これが蔓延しない中に除かなければならぬのである。種子に寄つて蔓殖する雜草は開花前に除くやうにし、根、莖などに寄つて蔓殖する雜草は掘り取つて焼き棄てるのである。



1どくだみ
2かたばみ
3にはほこり
4めひじは
5あれちのぎく
6ちからしば
7のげし
8おほいのふぐり

施肥　作物に必要な養分は多くは地中または空中に在るもので足りるのであるが、窒素、燐酸、加里の三養分は屢々地中に缺乏するから、その不足を補はなければならぬ。その補ふ養分を肥料といひ、肥料を作物に施すことを施肥といふのである。

肥料は色々に分類されるが、その效果の直接間接によつて分けると、前記三要素の一つ以上を含有し、直接作物の養分となるものを直接肥料といひ、土壤及び他の肥料に活用して間接に作物の成育を助けるものを間接肥料といふのである。また物質の種類によつて分けると、下肥、厩肥、堆肥、魚肥骨粉などを動物肥料といひ、綠肥、油粕類、糠などを植物肥料といひ、過燐酸石灰、硫酸アンモニア、智利硝石、硫酸加里、草木灰などを鑛物質肥料といひ、動物質肥料と植物質肥料を有機肥料といひ、鑛物質肥料を無機肥料といふのである。また效果の遲速によつて分けると、下肥、硫酸、アンモニア、智利硝石、過燐酸石灰、硫酸加里などを速効肥料といひ、堆肥、厩肥、骨粉、綠肥などを遲効肥料といる。



堆肥小屋

つてゐる。更に播種、移植前に施すものを基肥といひ、作物の成長中に施すものを追肥といふのである。

施肥は作物の種類、土質、氣候などによつてそれ〴〵異なるものであるから、作物の性質を知り土質を調べ、氣候に順應して適宜に施すべきである。それで施肥に當つては肥料を色々に調理しなければならぬ。例へば大豆粕のやうなものは碎いて施し、硫酸アンモニア、智利硝石などは水に溶して用ひ、下肥は能く腐敗させ稀釋し薄くして用ひるが如きである。

病蟲害の防除　作物は病に罹り易くまた害蟲に侵され易い。そして作物の病は傳染力が速いから、黴菌の寄生した作物を發見したら、直ぐにこれを除いて燒くことが必要である。總て病蟲害は發生してから驅除するのは困難であるから、發生前にその豫防に努めねばならぬ。次に主なる防除劑の製法を説明する。

ボルドウ液　ボルドウ液を作るには硫酸銅百二十匁を小桶に入れ、一、二升の熱湯を加へて能く溶かし、後水を加へて一斗五升にする。また別の小桶に生石灰百二十匁を入れ、少量の水を加へて風化せしめ、後水を加へて一斗五升の石灰液とする。更にこの兩液を同時に別の大桶に注入し、能く攪伴して混和せしめた後、試驗紙でその反應が中和せるや否やを確めた上、これを布などで濾過して撒布するのである。

銅石鹼液　銅石鹼液を製するには適量の石鹼の粉末を石油罐に入れ、これに湯一、二升を加へて十分に溶かした後、六匁の硫酸銅を入れて攪伴しつゝ炭火にて溶解し、これに水を加へ一斗にして撒布するのである。

油乳劑　油乳劑を製するには石鹼十二匁乃至十五匁を薄く削りこれを石油罐に入れ水五合を加へて煮沸溶解せしめる。また別に石油一升を罐に入れて炭火にかけ、攝氏七十度位に熱して、湯氣の生ずる頃に手早く石鹼液をその加熱した石油に注入し、手喞筒で五分間ばかり能く混合せしめ、乳狀になつて稍や粘り氣が出たら止める。これを適宜に稀釋し薄くして撒布するのである。

益鳥、益蟲　作物の害蟲を捕食する鳥類を益鳥といひ、燕、四十雀、椋鳥、雲雀、鶺鴒、鵯、啄木鳥、鳴、梟、杜鵑、小雀などがそれである。是等の益鳥は特に法律によつて保護されてゐる。

また蜻蛉、蠅蜘、蠶、クサカゲロウ、ヒラタ虻、廣蟲などのやうに害蟲を捕食する蟲類がある。また馬尾蜂、小糠蜂、寄生蜂などのやうに害蟲に寄生してこれを斃す蟲類もある。これを總稱して益蟲といふのである。蠶、密蜂なども益蟲の一つである。

第二章　穀菽類（荳類）

穀菽類は單に荳類とも稱せられ、主食物や副食物に供する目的で栽培する草本植物のことをいふのである。この種の中稻、麥、粟、稗、黍、玉蜀黍など禾本科に屬するものを禾穀類といひ、大豆、小豆、豇豆、蠶豆、豌豆、菉豆など荳科に屬するものを荳菽類といふのである。

第一節　稻

稻は印度の原產と稱せられてゐる。我國では國民の常食として日常必須の作物である。稻は天祖　天照大神が天孫を降し給ふ際に、親しく三種の神器を授け給ふと共に、民の食ひて活くべきものなりと仰せられて、齋庭の稻穗を授け給ひ、天孫が日向國高千穗宮に降臨し給ひ、初めてその稻穗を蒔き給へりといふ。されば我國には神代の昔から稻作が行はれ、建國と深い關係があるのである。爾來御歷代の天皇が親しく天神地祇を祭らせらるゝにも神穀を用ひさせ給ふのである。これは稻作御奬勵の大御心によるものと拜察し奉る。

我國の稻作は建國と深い關係があつて、古來から稻作を重んじたゝめ、その栽培の精巧と米質の優良なことは世界第一である。それで米の產額は內地丈けでも六千萬石に上り、これに朝鮮と臺灣の產米を加へると八千萬石を超えるのである。然るに我國の人口は年々增加の傾向を辿り、內地の生產高を以てしては到底その需要を充たす能はず、年々外國米を十七萬石餘輸入されてゐる狀態である。

米の收穫高が過去五十ヶ年に如何に變遷して來たかを知るため、明治十九年以降昭和十年に至る五十ヶ年を各々十年毎に區分し、各期の平均收穫高とその增加率を示すと次の通りである。

期別		平均收量（石）	增收率（%）
第一期	明治一九—明治二八年	三九、〇五七、九九三	—
第二期	明治二九—明治三八年	四一、七七五、四七七	七
第三期	明治三九—大正四年	五一、一四六、六七五	二二
第四期	大正五—大正一四年	五七、九九四、〇八一	一三
第五期	昭和元—昭和一〇年	六〇、〇一六、三三二	三

右の表に依る第三期に最大の增加を見せ、第五期に最小の增加を見せてゐる。

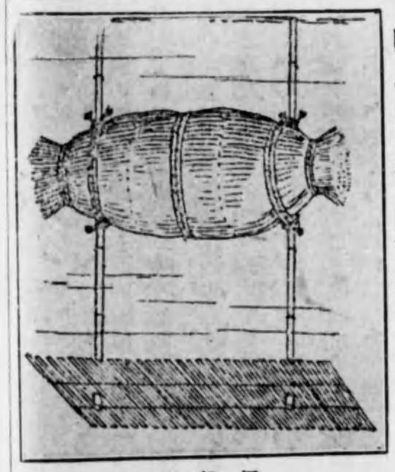
一　稻の品種及び効用

品種　稻の品種は頗る多く我國で栽培されるものでも千種近くある。稻には水稻と陸稻とあり、これを共に粳と糯とに分ける。また有芒と無芒とがあり、成熟の時期によつて早稻、中稻、晩稻に分ける。その品種により風土の適否、收穫の多少品質の良否などがあるのは何れの作物も皆同樣である。

効用　稻はその主產物である米の外に、藁、籾殼、糠などの副產物を生ずる。米は主に飯に炊く外餅菓子、飴などを製に用ひ、また粉として調理用に供し、麴として酒、味噌を造り、またその澱粉は糊に用ひる。藁は繩、莚、叺、菰、草履草鞋などを作るに用ひ、または家畜の飼料とし或は製紙の原料とする。籾殼は養蠶の必需品である。其他器物、鷄卵、果實などの荷造の塡充材料として用ひられてゐる。

二　稻の選種及び浸種

選種　稻の種子は採種田から採種した重くて大きいものを選ぶが良い。この種子を選ぶには篩選、風選をして鹽水選をする必要がある。選種の方法については第一章第六節に詳細に說明してあるから同項を參照されたい。

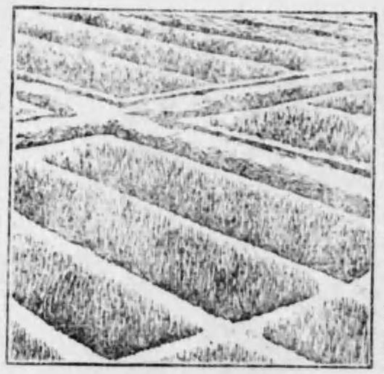


浸種法

浸種　選種した稻の種子（種籾）を播く前に水に浸すことを浸種といふ。浸種の目的は發芽に必要な水分を與へて發芽を促し、また播種に當つて種子を沈み易くするためである。浸種の方法は小さい俵か荷に入れて緩く括り、河、池などの淸水の水面下一尺許りの處に吊して、水面に浮び出ないやうに錘を附け四五日間浸して時々反轉するのである。桶を用ひる場合は隔日毎にその水を取り換へ、種子の腐敗しないやうに注意すべきである。

三　苗代

苗代の選定　浸種を終つた種籾は能く水分を去つて苗代に播き苗代で苗を育てゝから、本田に移植するのが通例である。苗代は水の掛引に便利で日當りが能く、空氣の流通や日光の映射が能く、冷水や汚水の流れ入らぬ處を選ばねばならぬ。そして粘質土は稻を刈取つた後に耕して置き、豆春更に鋤返して土壤を碎き、砂質土は播種の二、三週間前に除草して鋤耕を施し更に鋤返しを行ふのである。



短冊苗代

苗代の耕鋤は稍や淺くし深過ぎないのを可とする、そして水を注ぎ畦畔を塗つて代掻を行ひ、表面を能く均してから、水を落して播床を作る。播床の長さは一定しないが幅は四尺位にするのが適當である。これを短冊形苗代といふ。この苗代は播種、除草及び害蟲驅除などに便利である。

種籾は一坪につき凡そ四合位を厚薄なしに撒播する。本田一段歩に要する苗代の面積は約十坪で足るのである。

苗代の管理　播種後苗の二寸內外迄は水の掛引きに注意し、日中は淺くし夜間は深くして苗の成長を良好ならしめ、雜草や螟蟲の蛾などを除く。播種後四十日位經つと苗は七八寸となり、葉先が稍や黃色となつて移植に適するやうになる。

四　田植

苗代で仕立てた苗を本田に移植するのを田植といひ、また挿秧と稱することもある。田植の時期は地方によつて著しく違ひ早いのは五月中旬より、遲いのは六月下旬に至る所もある。

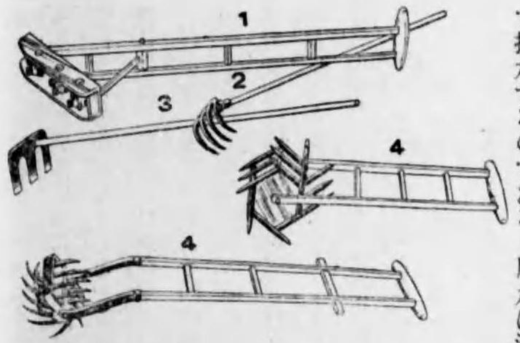
本田の整地　田植をするには先づ本田の整地をする。一毛田では冬、春の間に耕鋤して置き、二毛田では裏作の收穫後直ちに耕鋤して土塊を碎く。これを塊返しといふ。後水を引き入れ泥土で周圍に畔塗をして水の洩れるのを防ぎ、馬鍬で土塊を碎いて表面を平にするのである。

植付　稲の苗を本田に移植するのを植付といふ。苗代には充分水を灌へ苗の根を損じないやうにして拔き取り土を洗ひ落し適宜の束にする。苗を植付けるには左手に苗の束を持ち右手で分け、四五本を一株として淺く植ゑるのである。植付は正條植にして張繩または定規を用ひ正方形植、長方形植、正三角形植などゝする。植付ける苗は稲の品種、田地の肥瘠などによつて一樣ではないが、普通一坪に三十株乃至七十株を植ゑるのであるが、時としては百株以上を植ゑることもある。植付が終つてから一方より靜かに灌漑し、浮苗の有無を調べるのである。

代掻

田植

灌漑　灌漑は移植した際は淺くし以後二三日間は稍や深くし、其後は一寸内外の深さに止め、時々排水して土壤の内部に空氣や溫熱の透通を能くする。稲の成育の進むにつれて多く灌漑し、穗孕期から穗揃期に至る間は殊に灌水を多くし、その後は次第に水量を減じ、穗先の垂れる頃には全く灌漑を止めて排水するのである。用水は河、溜池の水を用ひ、又地下水を利用することもあるが、灌漑溝により引入れるのが通例である。



1 形舟　2 雁爪　3 鍋備爪　4 中打田車

除草　一番除草は田植後十四五日を經て苗の根が付いた頃に、雁爪、または田打車で株間を打起す。この場合には二、三日を經て雁爪均しを行ふのが通常である。二番除草は一番除草後一週間ばかりを經

てから行ふ。このときから穗孕頃までは十日目毎に手または田搔萬能などで株の周圍を數回除草する。最後の除草である止草は遲れないやうに注意すべきである。除草の目的は雜草を除く外、土壤を軟かにして根の蔓延を自由ならしめ、尙ほ空氣や溫熱を土中に透通させて肥料の分解を促して、稲の成育を良好ならしめるもので、中耕の作業をも併せて行ふことになる。

施肥　本田に用ひる肥料の種類は頗る多く、その主なるものは下肥、魚肥、油粕、豆粕、燐酸肥料、草木灰、堆肥、綠肥などであるが、氣候、土質によつて各々適否がある。効能の遲いものは塊返しの際に施し、速いものは代掻の際及び田植後にも施すものである。

六　稲の病蟲害

稲の病害の主なるものは稲熱病、稲葉枯病、稲麹病などである。その中最も恐るべきは稲熱病である。是等の病害を豫防するには過度の濕潤、過量の施肥、密植などを避けて稲を健全に育てることが肝要である。

害蟲　稲の害蟲中大害を與へるものは螟蟲、浮塵子、螟蛉などである。

螟蟲　この害蟲は年二回發生するものと三回發生するものとがある。これを驅除豫防するには卵塊採集、蛾の點火誘殺、枯莖拔取、白穗拔取などの方法がある。

浮塵子　この害蟲の種類は甚だ多いがウンカ及びヨコバヒの二種類に分ける。何れも年四五回發生し、その繁殖力が強く稲の汁液を吸收して遂に枯死せしめる。これを驅除するには越冬の潛伏所である畦畔の雜草を刈り拂ひ、または注油法が最も有效である。

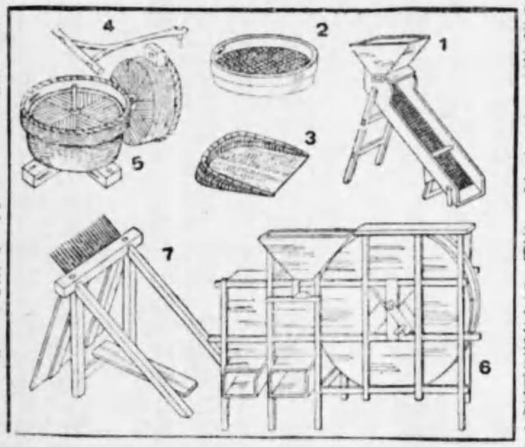
螟蛉　この害蟲は尺蠖のやうな運動をして稲の葉を食する。幼蟲の驅除には穢を水面にふり置き、拂ひ落して水中に沈下させ、成蟲は點火驅除法によるのである。

七　稲の收穫

稲の刈取は穗が黃熟した時期にすべきである。黃熟しない前に刈取ると青米が多く收量が少なく、貯藏中に蟲害に罹り易い。また黃熟期を過ぎて刈取ると、光澤を失ひ、品質が劣惡となり、脫粒し易く、鳥害なども多いから收量を減ずる。稲を刈るには稲刈鎌を使用する。鎌には普通鎌、鋸鎌、波狀鎌などがある。

刈り取つた稲は小束にして稲架に掛けるか、または束にせず

に稲株を枕にして地上に擴げて數日間乾かし、籾が乾いて爪で割れない程度になつたら、稻扱で籾を扱き落すのである。從前は稻扱を用ひたが、近頃は石油發動機で脫穀機を廻轉し、または足踏脫穀機を用ひて籾を選別する。



1 萬石篩　2 篩　3 箕　4 柄　5 磨　6 唐箕　7 稻扱

籾は莚の上に擴げて充分に乾燥した後、磨で籾摺を行ひ、唐箕などで稃、塵芥などを除き、篩また

は萬石篩にかけて籾と玄米とを分ける。摺り殘りの籾は再三籾摺をする。然し長く貯藏する場合には籾摺をせずに籾の儘で置く方がよろしい。玄米は尙一度唐箕にかけて屑米や不純物を取り、俵または袋に入れて貯藏する。一段歩の收量米は二石乃至三石位が普通である。

第二節　麥

大麥と小麥は共に小亞細亞、コウカサスの原產と稱せられてゐる。我國では稻作とその起源が同じで、また稻に次ぐ重要な穀物である。田では稻の裏作とし、畑では夏作の收穫後に栽培する。內地における最近の麥の收穫高は大麥、小麥、裸麥を合せて二千五百萬石以上に及ぶのである。

一　麥の品種及び效用

品種　麥には大麥、小麥、黑麥、燕麥の四種あり。大麥には更に皮麥、裸麥の二種がある。また大麥はその穗の形によつて二條麥、四條麥及び六條の三種に分けられる。小麥は芒の有無によつて有芒と無芒とに分け、更に穀粒の皮の色によつて赤小麥と白小麥とに分ける。

效用　大麥の用途は極めて廣く、挽割または押麥として麥飯に用ふる外、味噌、醬油、飴などの原料に供しまたは飼料とする。特に近來は麥酒の釀造や酒精の製造に盛に用ひられる。麥稈は肥料や燃料に供し、また麥稈眞田及び細工物として重要なものである。小麥は多く製粉して麵麭、麵類、菓子など

の製造に用ひる外、醬油、味噌などの原料に供される。また製粉の副產物である麩は牛の飼料として貴ばれる。麥稈は眞田として帽子其他の細工物に用ゐ、屋根を葺きまた繼包にも用ひられる。

二　麥の選種及び播種

選種　麥は播種前に鹽水選によつて選種してから、黑穗病を豫防するために冷水溫湯浸法を行ふ。即ち種子を五六時間冷水に冷した後、華氏百二十度位の溫湯に入れて二三分間溫め、更に百三十度位の溫湯に五分間浸してから取り出し、直ちに冷水を注いで冷却するのである。

播種　麥は通常稻の裏作としまた畑では夏作の後作として栽培する。その播種期は地方によつて異なるも、大抵十月中旬から十一月上旬である。播種は條播または點播とし一段歩の播種量は大麥は四五升、小麥、裸麥は三四升である。

近頃麥作改良方法の一として廣蒔法が行はれる。從來より蒔幅を廣くして中耕や鎭壓などを行はないで、專ら土入を行ふ耕作法である。

三　麥の管理

中耕　中耕は最初苗が二三寸に成長した頃行ひ、麥の北側に土を寄せて寒い北風に當らないやうにする。その後は一二回行ひ、最後には畦の立つ頃に行ひ根際に土を寄せる。然し廣蒔法による場合は土入だけで中耕を行はぬ。

土入　土入は發芽後二三葉を生じた頃から、土壤の乾燥した晴い日を選び、經鋤簾で作間の土を掬ひ、麥の上方から振り込む。麥の幼少な頃には三分目位の細目のものを用ひて僅に一二分の深さに振ひ込み、成長につれて六分目の大目のもので段々土量を增し、四五回目には一寸位の深さとし出穗前に終るやうにする。

鎭壓　鎭壓はこれを麥踏といひ、霜柱のために浮上つた土を壓し鎭めるに行ふもので、通常足で踏み付ける。十二月頃から翌年二三月頃に渉つて數回行ふのである。然し廣蒔法によると鎭壓を行はぬ。

施肥　發芽後二三寸に成長した頃に第一回の施肥を行ひ、春の彼岸の候迄に追肥を終り、其後は施肥をやらないやうにする。麥の基肥として堆肥、魚肥、油粕、過燐酸石灰、草木灰などを施し、追肥として下肥、智利硝石などを施す。小麥は大麥より施肥量が少くてもよいのである。

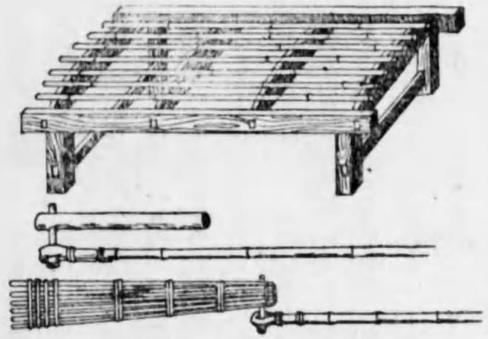
四　麥の病蟲害

病害　麥の病害には色々あるが、その主なるものは黑穗病、赤澁病、立枯病などで、何れも菌類の寄生によつて起るものである。黑穗病は俗に麥奴ともいひ、最も目立つて分り易き病害である。これを防ぐには冷水溫湯浸沙を行ふか、または被害穗を拔き取る。赤澁病を豫防するには堆肥、下肥などの過用を避け、土地の日當りや空氣の透通を良くする。立枯病を防ぐには窒素質肥料の過用を避け、被害株を拔き取つて燒却するのである。

害蟲　麥の害蟲には金龜蟲、叩頭蟲、地蠶、蚜蟲、麥蛾などがある。是等の害蟲は多く點火誘殺法で驅除する。また貯穀の害蟲は二硫化炭素で燻蒸するのである。

五　麥の收穫

五六月の頃麥の穗先が黃熟したら、これを刈り取るべきである。若し刈取が黃熟期より早過ぎたり後れ過ぎると品質が惡くなつて收量を減ずる。刈り取りは晴天の日に鎌で根元より刈り、圃場または麥架にかけて一兩日乾燥する、麥稈と穗が充分乾燥したら、麥扱で穀粒を扱き落し、更にこれを連枷で打つて芒を去り、後篩に通し、唐箕にかけて能く選別する。能く乾燥してゐる場合は直ちに袋または俵に入れて俵裝するも、通例は一兩日間乾し冷却してからそれを行つてゐる。麥の收量は一段歩につき大麥は二石乃至三石、小麥、裸麥は一石乃至二石である。



穀打臺（上）　連枷（下）

第三節　荳菽類

菽類はその果實を目的に栽培するもので、大豆、小豆、豌豆、蠶豆、落花生などはこの類に屬する。何れも蛋白質に富む重要な食用である。尙ほ蔬菜用として蠟莢や未熟の種子を得る。また莖や葉を飼料、肥料などにするために栽培することもある。大豆は果實の形によつて平大豆と丸大豆とに分け、收穫期によつて夏大豆と秋大豆とに分ける。我國內地における一ヶ年の產額は約三千萬石に上るのである。その効用は食用とする外味噌、醬油、豆腐、納豆、菓子などの原料に用ひ、家畜の飼料とする。また油を搾り取つた粕は肥料にもなるのである。

大豆を栽培する土地は完全に鋤耕しないのがよいのである。その理由は土地が餘り肥沃に過ぎると、莖や葉が伸びて結實を妨げるからである。多くは麥の間作とし、五六月頃麥條の間を淺く耕し、七八寸位隔てゝ二三粒宛點播するのである。然し同地に連作すると發育不良となるから、毎年地を變へて輪作するのがよろしい。

肥料は主に加里肥料を用ひ、これに燐酸肥料を適宜に加用する。バクテリヤの媒介によつて空氣中の窒素を吸收するから、窒素肥料を施す必要が少ないのである。

中部以下莢が褐色になつて枯れる頃に引拔き、日光に當てゝ能く乾燥した後、連枷で種子を打落し、篩、唐箕で選別してから再び乾燥して貯へる。收量は一段歩につき一石乃至一石五斗位が普通である。

第三章　蔬菜類

蔬菜類とは副食物に供する目的で栽培する草本植物のことをいふのである。蔬菜類は果菜類、葉菜類、根菜類の三種に分ける。茄、トマト、胡瓜、西瓜、甜瓜、南瓜、蕃椒など果實を採取するものは果菜類で、漬菜類、甘藍（タマナ）、葱、菠薐草など葉や莖を採取するものは葉菜類に屬する。また大根、蕪菁、甘藷、馬鈴薯、牛蒡など根や莖を採取するものは根菜類に屬するのである。

茄の品種

1大圓茄　2千成茄　3山茄　4博多茄　5水茄

第一節　果菜類

茄は漬け或は煮また燒いて食する。溫暖な氣候と砂質壤土に適する。二三月頃溫床に播種し發芽後は間引を行ひ、三四葉を生じた頃に一回假植を行ひ、五六葉になつた頃本

圃に移植するのである。普通條間は二尺乃至四尺、株と株の間は一尺五寸乃至二尺とする。移植後には除草と土寄を行ふ。茄は果實の成長と共に次々に採收されるから、屢々施肥が必要である。トマトは赤茄ともいひ、生食或は煮食し、またはソースを造り、罐詰や漬物とする。早春に苗を仕立て、本圃に移殖し、不用な腋芽を摘み取り支柱して結實させる。病害には立枯病、青枯病があり、害蟲に、擬瓢蟲、根切蟲などがある。

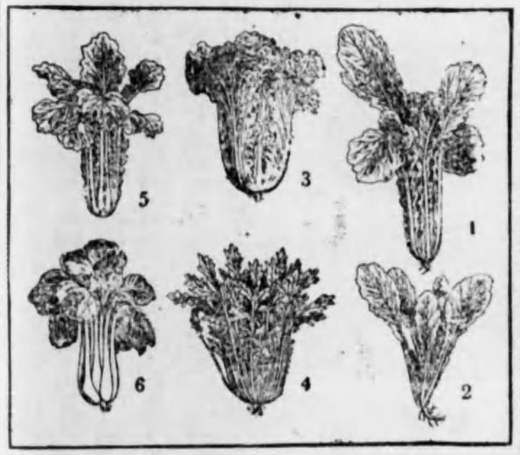
胡瓜　胡瓜は普通には鹽漬または酢採にして常食とされてゐるが、時として煮て食する場合もある。肥汎な砂質壤土に適する。三月頃溫床に播種して一二回假植を行ひ、霜害の虞れがないやうになつてから本圃に移植する。移植後は施肥、土寄を行ひ、三四葉を生じた頃摘心して枝蔓二三本を出させ、蔓が延びたら支柱を與へる。病害にはベト病があり、害蟲には瓜守がある。瓜類にはこの外南瓜、西瓜、越瓜、甜瓜、多瓜、扁蒲などがある。

果菜類は三四年毎に輪作するを可とする。尙ほ瓜類は摘心を行ふと結實が早くなるばかりでなく、且つその品質をも良くするものである。

第二節　葉蔬類

漬菜類　漬菜類は葉を漬けまたは煮て食するもので、その種類が甚だ多い。

一白菜は葉は淡綠色で縮んで軟かく、葉柄は太く短かくて色が白い。二山東菜は葉は淡綠色で廣く、葉柄は長くて直立し色が白い。三體菜は葉は綠色、匙形で多肉柔軟である。四京菜は葉は多數簇生し細く缺刻が深い。五三河島菜は葉は縮まず纖維に富み稍や剛く葉柄は淡綠色であ



1 三河島菜　2 小松菜　3 白菜　4 京菜　5 山東菜　6 體菜

る。六壬生菜は京菜に似てゐるけれども葉は缺刻がない。七小松菜は葉柄が長くて直立してゐる。この外に高菜、芥菜などがあり、また輸入したものには結球性の山東白菜、直隷白菜、芝罘白菜などがある。

漬菜類は一般に冷涼な氣候に適し、土質は肥汎で砂勝のところに良品を產する。八月中下旬頃播種し發芽後は四五回間引、施肥、中耕、土寄を行ふ。肥料は速効性のものを多く施し、收穫迄肥切がしないやうにする。幼時害蟲に侵されることが多いから、心喰蟲、地蠶、蚜蟲、サルハ蟲などの除蟲に努めねばならぬ。

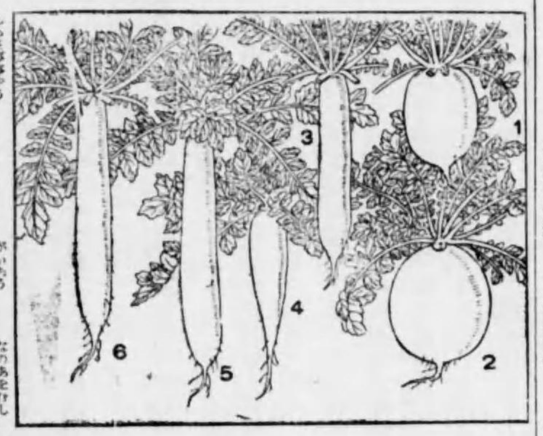
甘藍　甘藍は歐洲の原產である。生のまゝまたは煮て各種の調理に供し或は漬けて食する。寒冷な壤土、埴土の地に適し連作を不可とする。普通甘藍と縮葉甘藍とがあり、各々早生、中生、晩生の別がある。春または秋に苗床に播種し、一二回假植して後本圃に移植する。その後中耕、除草を行ひ數回追肥を施す。充分結實したら直ちに採收すべきものである。病害に腐敗病があり、害蟲には蚜蟲、地蠶、螟蛉などがある。

葱　葱は煮食する外香辛料として生食される。關西地方では綠色部を採收する綠葱種を好むけれども、關東地方では白色部の多い根深種を好む。四五月頃と七八月頃とに苗を本圃に移植する。本圃は深耕して深さ七八寸の溝を作り堆肥其他の基肥を施して土を覆ひ、溝の一側に寄せて一二本宛三四寸を隔てゝ植ゑ、髭根が隱れるほどに土を覆ひ、苗が根付いてから、數回下肥を施しまた土寄を行ふのである。其外葉菜類には色々の種類がある。葉菜類は一般に冷涼な氣候に適するから、多くは秋から春にかけて栽培する。肥料は常に堆肥、下肥、燐酸肥料などが施されてゐる。

千住葱

第三節　根菜類

大根　大根は漬け或は煮また生で食する外、切干、吊干などにも製せられる。その種類は甚だ多いが、大別して春大根、夏大根、秋大根及び時無大根の四種に大別する。秋大根には練馬、宮重、櫻島、方領、聖護院大根などがある。大根を栽培



1 晩成練馬　2 早生練馬　3 方領　4 宮重　5 聖護院　6 櫻島

幼蟲（上）　成蟲（下）

サルハ蟲

するには土壌を深くし土塊を碎き施肥して播種し、發芽後には數回間引を行ひ屢々追肥を施して中耕、土寄をする。病害には腐敗病白銹病などがあり、害蟲には菜螟蛉、地蠶、サルハ蟲などがある。是等は石油乳劑、除蟲菊が用ひらる。石油乳劑の三四十倍液を撒布して驅除する。

蕪菁　蕪菁は葉、根共に食する。風味は大根よりもよい。また耐寒性も大根より強い。その種類には近江、天王寺、聖護院の良種があり、特別なものには緋蕪菁、日野蕪菁、長蕪菁、小蕪菁などがある。栽培法は略ぼ大根と同樣であるが、土壤は淺耕でよろしい。害蟲にはカブラバチなどがある。

甘藷　甘藷は蒸し或は燒きまたは煮て食するの外切干とし、澱粉、アルコールの原料とする。甘藷を栽培するには三月頃種藷を溫床中に伏せ、發芽して一尺計りに成長した後、蔓を適宜の長さに切つて種蔓とし、五月頃霜害の虞がないやうになつてから、麥の條間に堆肥、油粕、糠などを施し、淺く斜に一本づつ挿植する。普通株と株の間は一尺二三寸である。蔓の成長するに從ひ中耕、除草を行ひ、蔓が作間に蔓莚するやうになつてから數回蔓返しを行ふ。病害には黑痣病、蔓割病などがあり、害蟲には葉卷蟲、芋蟲などがある。

馬鈴薯　馬鈴薯は塊莖を食する外飯に交ぜて米の代用とし、また澱粉、アルコールの原料とする。これを栽培するには先づ種薯を選び、大きなものは切半して切口に木灰を塗り、三四月頃または八九月頃切口を下方に向けて植ゑる。條間二尺內外、株間一尺內外を普通とする。發芽して數寸に伸びた後

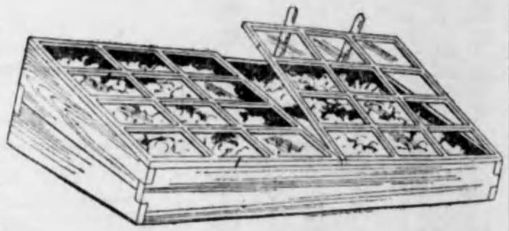
強さうな芽一二本を殘して他を摘み取り、また花梗を出したら開花に先だつてこれを摘み取つて土寄をする。肥料は堆肥油粕、過燐酸石灰、草木灰などを施し、追肥には下肥を施す。病害中最も恐るべきはベト病である。これを豫防するには五月下旬頃から、ボルドー液を時々葉に注ぐ。害蟲には擬象蟲などがある。この外玉葱、胡蘿蔔、牛蒡、百合、薯蕷、里芋、蓮、慈姑、山葵などがある。

蓮、慈姑などは水田に栽培するけれども、其他の根菜類は畑に栽培する。一般に土質は輕軟肥沃で耕土の深いのを可とする。

第四節　促成栽培及び軟化法

促成栽培　促成栽培とは茄、胡瓜、豌豆、トマト、西洋苺などを寒中の溫床內で栽培し、季節外れに生產することをいふのである。作物は冬季でも適當の溫度と日光を得ると、能く生育成熟するものであるから、その季節でなくとも適當な溫度を與へて管理すると結實するのである。

溫床は日當りの能い溫暖な處を選び、地上または地を掘つて馬糞、落葉などの發熱物を踏み入れ、その上に土を盛り周圍を木框または藁で固め、框の上を莚、硝子障子、油紙障子などで覆ふ。苗の假植は三四回行ひ、また溫床で溫度を保ち續けるのは普通三四十日であるから、苗の假植には床を代ゆることが大切である。我國で普通用ひられる溫床は幅四尺、長一丈二尺のもので、これをフレームと稱し或は木製または煉瓦製またはコンクリート製とする。



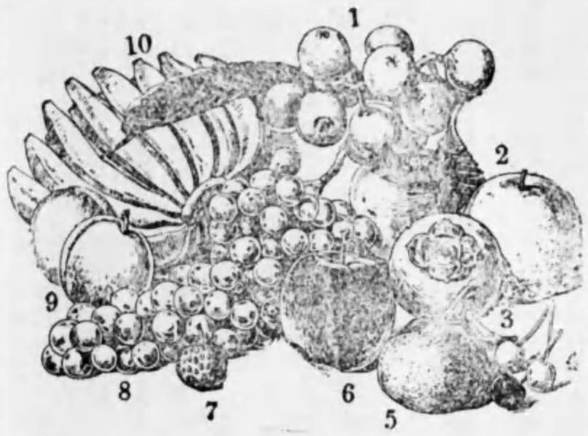
溫床

軟化法　野蒟蒻、生薑、アスパラガスなどは、圃場で適當な土を盛り上げ日光を遮り溫熱を與へて軟化することがある。これを軟化法といふのである。この法は溫床でも容易に出來るが、別に軟化窖を作つて行ふのが便利である。軟化窖は普通傾斜地の側面から穴を掘り、底部を幅九尺、長さ一丈二尺とし、これに二個の床地を設け、天井の高さを六七尺にする、入口には日光を遮るため扉か幕などを吊すのである。

第四章　果樹類

第一節　果樹の種類、效用、適地

果樹は果實を採收して食用に供するために栽培する木本植物である。



1 枇杷　2 梨　3 柿　4 櫻桃　5 蜜柑　6 苹果　7 和蘭苺　8 葡萄　9 桃　10 バナナ

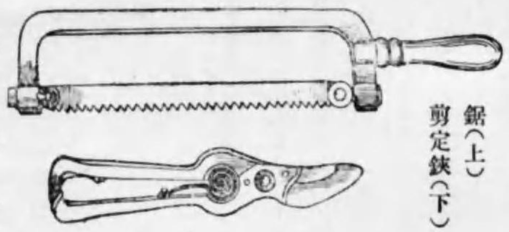
種類　果實は凡そ次の四種類に大別されてゐる。

一 仁果類　梨、苹果、枇杷、石榴、柿、柑橘類などはこれに屬する。

二 核果類　桃、杏、梅、李、櫻などはこれに屬する。

三 漿果類、無花果、葡萄、木苺、須具利などはこれに屬する。

四 乾果類　胡桃、栗などはこれに屬する。



剪定用具

鋸（上）
剪定鋏（下）

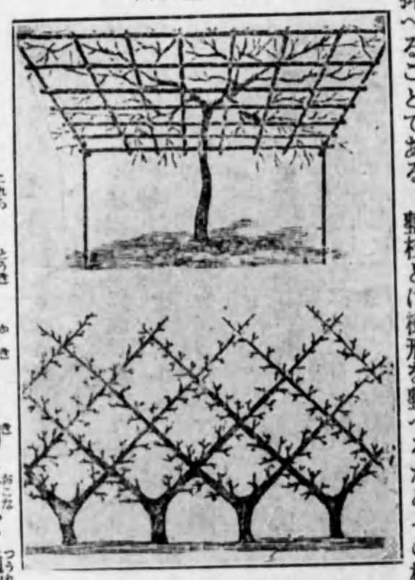
效用　果實は清涼の味があり、食慾を進め精神を爽かにし消化を助ける。生食の外乾果、砂糖漬、鹽漬となしまたジャム、ゼリー、果酒などを造り、清涼飲料の原料となる。

適地　果樹は一般に風の強くない降雨の少ない地方の傾斜地または瘠地に栽植する。また柑橘類、枇杷などは暖地に適し、苹果、櫻桃などは寒地に適する。梨、柿、桃、葡萄などは何れの地にも適するけれども、溫和な地方から良品が出る。

第二節　果樹の管理

剪定、整枝　果樹の栽培で最も大切なのは剪定と整枝である。剪定は成長の旺盛な枝または不用の芽を切つて、過度の成長を抑へることである。整枝とは樹形を整へるためその枝振を

果樹の整枝法



棚作（上）　垣作（下）

切ることをいふ。是等は冬季と夏季の二期に行ふを通例とする。何れも結實作用を起して結實を多くする。整枝法には棚作、垣作、杯狀形仕立、ダイヤモンド仕立、ピラミット仕立があつて、裝飾樹形として仕立てるものが多い。

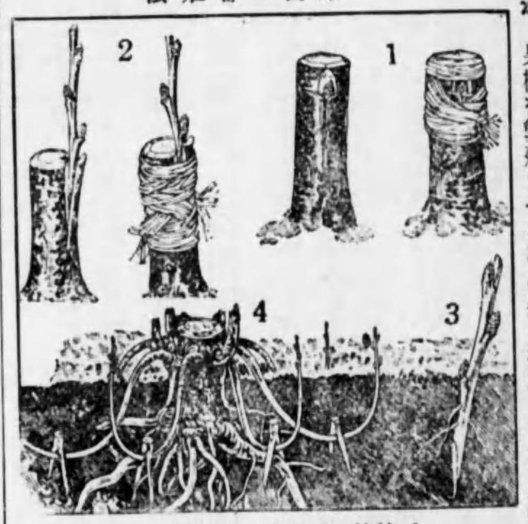
摘果、袋掛　結實が多過ぎると果實を不良にし樹勢を衰弱させて、翌年の收穫を減ずるから、樹勢に相當の果實を殘して他は摘み取る。これを摘果といふ。また梨、苹果などには蟲害を防ぐために袋を掛ける。袋は新聞紙や半紙などの反古に柿澁をふくつたものを用ひる。

施肥　幼樹には窒素、燐酸、加里の三種の肥料を等分に施し、老樹には窒素肥料を多く與へる。また發芽前と結實期には速効肥料を與へ、收穫後には遲効肥料を與へる。

第三節　果樹の繁殖

繁殖法　果樹を繁殖させるには多く接木、挿木、壓條などによるのである。接木には切接法と芽接法とあり、切接木法は樹木が將に活動に入ら

果樹の繁殖法



1 接枝　2 接芽　3 挿木　4 壓條

うとする二三月頃、二三の芽がある果樹の枝を接穂とし、適當な砧木に密着させて動かないやうに縛る。芽接法は八九月樹液の運行が稍や衰へた頃、新梢の腋芽を砧木に密着させて動かないやうにする。挿木は果樹の枝を五六寸か一尺位に切り取り、地中に挿して置いて根を出させる方法で、床挿、畑挿、鉢挿などがある。何れも發育の盛んな嫩枝を小刀で四十五度位斜に切り、土地は濕つた個所が能く、乾かないやうにするのである。壓條は母樹の枝を屈げて地中に埋めて根を出させてから、母樹より切り離して苗とする方法である。

苗の移植　果樹の苗を移植するには、秋から春にかけて苗を丁寧に掘り出し、根や枝の剪定をしてから、整地した地に穴を掘り、その中心に苗を植ゑ根を四方に擴げて土を被せるのである。

第四節　果樹の病蟲害

病害蟲　果樹の病害の主なものは桃に炭疽病、宿葉病。梨には赤星病、黑星病。苹果に腐爛病、花腐病、柑橘類に瘡痂病、煤病などである。害蟲には桃、梨、柑橘類に介殼蟲。桃、梨に蚜蟲。桃に果蠹蟲、象鼻蟲。苹果に綿蟲。柑橘類に赤壁蝨などがある。

防除　果樹の病害に對してはボルドウ液、石灰硫黃合劑を施し害蟲に對しては石油乳劑、石灰硫黃合劑、除蟲菊石鹼合劑を施し、または青酸瓦斯の煙蒸を行ふのである。

第五章　特用作物（工藝作物）

特用作物とは普通作物に對する名稱で、これを工藝作物ともいひ、作物自體が直接に我々の日用に供することが出來ず、加工して始めて用ひられる作物のことをいふのである。大麻、楮、三極、藺の如く纖維を需めるものを纖維料類といひ、落花生、胡麻、荏、漆、櫨などの如く油蠟を採取するものを油蠟料類といひ、甘蔗、甜菜などの如く糖分を得るものを糖料類といひ、茶、煙草、珈琲、ココアなどの如く嗜好に屬するものを嗜好料類といひ、人蔘、薄荷、除蟲菊などの如く藥用に供せられるものを藥料類といふのである。この類の作物は特產地があり、その栽培もまた特殊の熟練と經驗を要するので、普通一般に栽培されるものではない。今その主なるものを列擧すれば次の通りである。

大麻　大麻の莖の纖維を採つて麻絲、麻布を製し種々の用に供する。大麻類はラミーに、亞麻はリンネルにその纖維を織る。溫帶や熱帶の强風のない山間の肥沃な砂質壤土に適する。

大麻

楮　楮の內皮は製紙の原料に用ひられる。その方法としては先づ枝條を刈取り蒸して皮を剝ぎ、これを乾燥して黑皮とし、其外皮を除いた白皮を精製して製紙の材料とするのである。

藺　藺は疊表、莫蓙、花莚などの原料にする。また七島藺（琉球藺）は琉球表、疊後表などの原料にする。

雲臺　雲臺はその種子を搾つて油を採る。搾粕は肥料となる。これには普通種と蓖種とがあり、普通種は油分に富み收穫は多いが成熟が晩いから畑作に適する。蓖種は稻の後作として田に耕作するに適する。

櫨　櫨は果實から蠟を採り、鬢附の原料とする外、艶出し、錆止めの塗料、紙、マッチ、石鹼などの製造、各種の蠟引に用ひられる。

漆木　漆木の幹に傷を付け流れて出る樹液を取つて漆とする。またその果實から蠟を製造することが出來る。

人蔘

漆木

人蔘　人蔘はその根を强壯劑とする。我國內地では福島、長野、鳥根、群馬、茨城の諸縣で栽培してゐる。朝鮮の產額は最も多い。人蔘を栽培するには花壇のやうな畑を設けて播種し、除草などの手入を能くし、四年許りで收穫する。人蔘は十五年乃至二十年位は同じ畑に栽培することが出來る。最近內地での年產額は二萬八千貫餘である。

甘蔗　甘蔗はジャバ、布哇、西印度などの熱帶地方に適し、我國では臺灣、沖繩縣、鹿兒島縣などで栽培され蔗糖を製する。

甘蔗

最近我國での年產額は十六億二千五百九十萬斤で、その價額は九百十四萬五千圓である。

茶　茶は春または秋に播種し、通常四年目位から茶摘をする。春に新芽が四五葉開いた頃に一番茶を摘んで上茶に製する。其後約一ヶ月後に二番茶を摘む。製茶には綠茶と紅茶とがある。綠茶は摘み取つた葉を三四十分間蒸して速かに冷した後焙爐に移し能く揉みながら乾かして製する。茶の收量は一段歩につき五十貫乃至二三百貫が通例である。紅茶は生葉を日光に曝し、萎れたものを揉んで箱に入れ、壓して醱酵させた後乾かして製する。我國で有名な茶の產地は靜岡縣、京都府であるが、其他鹿兒島、熊本、三重、奈良、埼玉、茨城、宮崎、福岡の諸縣よりも產する。最近の年產額は玉露、煎茶、番茶、紅茶、其他を合計して千二百十六萬八千貫で、その價額は二千三百二十六萬圓に上つて居る。

煙草　煙草は熱帶、溫帶の砂質の地に適する。葉はニコチンを含み製して喫煙の材料とする。春播種して苗床に仕立て、二三寸に成長した頃本圃に移植し、施肥、中耕、土寄、病蟲害の防除などの手入をなし、葉の黃熟するのを待つて收穫し、乾燥して貯藏するのである。我國では栃木、鹿兒島、福島、茨城、神奈川、德島などの諸縣で栽培される。

煙草

第六章　觀賞類

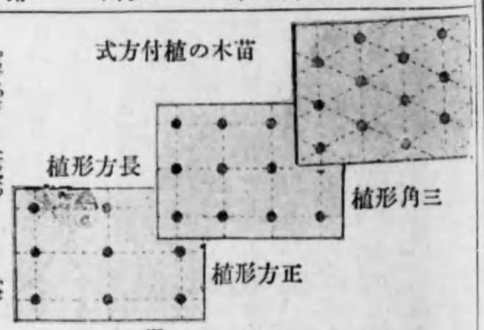
觀賞類には種類が頗る多いけれども、これを庭樹と花卉とに大別される。庭樹には常綠を賞するものがあり、紅葉を愛するものもあり、また花を觀賞するものがある。その主なものは松、梅、櫃柏、公孫樹、櫻、椿、竹などで種類が甚だ多い。花卉には一二年生花卉と多年生花卉とがある。一二年花卉とは春季に播種するとその年內に枯死するものや、秋季に播種すると翌年に至つて枯死するもので、朝顏、百日草、コスモスなど

は種子が自然に親木から落下して發芽するもの、または根株から發生する蘖芽を育てる天然造林法と、苗を仕立てゝ後植付ける人工造林法とがあるが、後者の方がよいのである。

苗木の仕立　苗木を仕立てるには苗床を作りこれに播種して土砂を覆ひ、發芽するまで新しい藁を並べ、その上から細い竹で壓へる。發芽後は藁を除き土地の乾燥や日光の直射を防ぐために日覆をして除草、施肥をする。林地に移植する前に一二回床替を行ふ。かうして苗の成育のよいものは滿二年生のものから、晩秋または初春に林地の移植をする。これを山出といふのである。

植栽　苗木を植付けるには先づ地拵をしなければならぬ。地拵をするには雜草や竹木などを燒却することもあるが、成るべく刈り掃ひ山腹の横へ置いて土留とし、また腐敗させて肥料とするのがよろしい。

植付の方法には三角形植、正方形植、長方形植などある。山出苗は濡蘚に包んで運び、前に正しく繩を張り目印のあるところに植穴を設ける。これに苗を植ゆるには枝の多い方を南方に向け、日光が幹に直射するを防ぐやうにする。また葉に表裏があるものはその表面を南に向け、急峻な山腹では裏面を谷の方に向ける。根は曲げないやうにして植穴に下し、細土を入れてこれを被ひ固く踏み付けて置く。植付の翌年からは年々下刈を行つて苗木の成長を助け、尙ほその成長に從つて技打、間伐などの手入を怠らないやうにする。



保護　森林には病害、蟲害などの外火災、寒害、暑害、風害、雪害などの障害が多いから、病害の豫防驅除は素より森林監視人を置いて山火事や盜伐などを防ぎまたは防火線、防風林、防雪林を設け、或は砂防工事などをして置く必要がある。

第四節　林產

森林からは樹木を取る外、尙ほ各種の副產物が取れる。左にその主なものゝ製造と栽培について述べる。

木炭製造　木炭の製法には火消法と火取法の二種がある。火消法は炭材が炭化するのを待ち、炭窯を密閉して自然に火を消

えさせる方法である。この方法で製した炭は質が軟かで外部が黑いから黑炭といふ。火取法は炭材が炭化してから、炭竈から出して火を消す方法である。この方法で製した炭は質が硬く外部が白いので白炭といふ。

木醋製造　木炭を製造する際竈から出る煙を管に導いて冷却して木醋を造る。この液で醋酸や、木精酒精を製造する。

樟腦製造　樟の材または葉を水蒸汽によつて誘發し、樟腦を製造する。

椎茸栽培　椎、楢、櫟などの樹木を晩秋に伐採してそれを五尺位の長さに切り、切目を付けて榾木を造り、陰地に立てかけて置き、これに椎茸の菌を發生させる。

松茸栽培　松茸の胞子を集めてこれを泥水に混ぜ、松茸の生ずる松林地に撒布して繁殖させる。

第五節　我國林業の概要

山又山の我國は世界有數の森林國である。最近の第七次山林要覽による林業の概要を統計で示すと次の通りである。

本邦林野總面積	四五、六九九、一一五町歩
國土全面積に對する比率	六七%
内地山村總數（北海道を除く）	二、九〇〇
全國森林の蓄積	九、〇二七、八九九、〇〇〇石
全國木材（用材）生産量	七二、七一四、〇〇〇石
同　需要量	七六、九二二、〇〇〇石
全國木炭生産量	六二四、八四八、〇〇〇貫
内地林業勞働者總數	一、七四一、八一三人

第八章　養畜

養畜は家畜を飼育して乳、肉、卵などの食料と、毛、毛皮などの工藝品とを得るばかりでなく、尙ほその力を耕作、運搬などに利用するを目的とするものである。また家畜とは人家に飼養される動物の總稱で、牛、馬、羊、緬羊、豚、鷄などその種類は五十餘種に數へられてゐる。

我國の畜産業は甚だ振はなかつた。それは我國民は古來から魚肉を常食として鳥獸の肉を常食としなかつたのに原因する。衣服の原料も麻、綿、繭などから取り、牛馬は唯だ耕作、運搬のために飼養するに過ぎなかつたからである。然るに人口の增加と生活樣式の變化に伴つて、畜産物の需要は激增し、また農業でも畜力の利用が進められるに至つたので、養畜業が發達するやうになつた。然し國内生産の增加は需要を充たすこと

である。多年生花卉とは莖葉は冬枯れるが年々地中に根莖または球根を殘して生育するもので、菊、福壽草、ダリヤ、百合などである。次にその一二について說明する。

朝顏　朝顏は花姿と色彩の變化に富んでゐる一年生花卉で大輪咲、變咲などがある。朝顏を栽培するには培養土を作り、園土に川砂を混ぜ油粕などを施して置く。五月頃播種し發芽後肥大な苗を一本宛鉢に植ゑる。移植後は摘心と摘芽をして花や芽の發生を促し、常に灌水し時々薄い液肥を與へる。支柱は仕立方によつてすることもあり、又なさぬこともある。珍妙な變咲にするには人工交配によつて新種を育成しなければならぬ。

菊　菊は我國民の最も愛翫する多年生花卉で、花姿や香氣は極めて高雅である。菊には切菊、秋菊、寒菊などがあるが、最も多く賞翫されるのは秋菊である。菊は株分または挿木によつて繁殖させる。株分は十一二月頃と春の彼岸頃に行ふ。挿木は五六月頃二三節を殘して切つた莖を挿し根が出てから鉢に植ゑる。移植後は仕立方に應じて摘心と摘芽を行ひ支柱に與へ、適宜に灌水し時々薄い液肥を施す。菊の害蟲には蚜蟲、菊虎、地蠶などがある。

第七章　森林

森林とは樹木の集團したところの謂ひで、その土地を林地、その樹木を材木といふのである。

第一節　森林の種類及び效用

種類　森林には天然林、人工林、單純林、混淆林、針葉樹林及び濶葉樹林などの種類がある。

效用　森林には種々の效用があるが、先づ直接の效用としては家屋、家具、襦梁、汽車、汽船、電柱、鐵道枕木などの用材から薪炭材に至るまで一切木材を供給してゐる。其他副産物として下草、落葉、種實、枝條、樹皮などは紙に製し、饅田を作り絲に紡ぎ、または乾餾して木醋、木精などを製する。尙特殊の樹木からは松脂、漆、樟腦、護謨、コルクなどを製するのである。

森林の間接の效用としては水源を涵養し、洪水を豫防し暴風及び飛砂、頹雪を防ぎ、氣候を調和し魚族の産卵に便し、またこれに食餌を與へ、空氣を淸淨にして衞生に資し、風致を雅美ならしむるなど無限の效用があるのである。

第二節　材木の種類

我國の材木の種類は頗る多く、恐らく千有餘種の多きに數へられてゐる。左に重要な材木について述べる。

杉　杉は如何なる地質にも能く生育するのがその特長である。用途は極めて廣く材は各種の機械、器具を作り或は建築用となる。その枝葉は薪とし、皮は屋根を葺くに用ひ、葉より線香を作る。

檜　檜は杉に次いで廣く造材される材木で、杉よりも上等の用材に用ひられる。材は光澤があり美麗で香芬がある。且つ保存期の長いことは到底杉材の及ぶところではない。

赤松　赤松は多く岩石地や砂地に能く生育する。材は檜や杉に及ばないが、その價が安いから各種の用材に供される。また薪炭材や土工材に用ひるときは杉に優るのである。

黒松　黒松は防潮林または防風林として海岸に造林される。材は赤松より絹や劣るも樹脂が多いので、その採取用に供することがある。

落葉松　落葉松は寒冷の地に造林するに適する。材は耐久力があつて能く水濕に堪へ、且工作を施すに容易である。家屋、船艦、橋梁、電柱其他の用材とするに適する。特に船艦材としては米國產のオレゴンパインに代用し得る良材である。

樣　樣は他の樹木と違ひ日光の射來するところを好む。この樹木は我國における薪炭材の王ともいはれ、これに優る樹木がないのである。

栗　栗の材は堅硬で能く水濕に堪へるので、鐵道の枕木、家屋の土臺などとして賞用され、また船の舵、櫂などを造るにも適する。その種子は食用にする。

櫟類　櫟類は暖帶地方に生ずる常綠樹で貴重な木材である。我國に產する櫟類には八九種の種類がある。材は機械、器具の製造に用ひまた薪炭材とする。

樺　樺はその材質は堅牢で且靱力がある。船艦、建築用材に供され、また近頃は椅子、食卓、客車などを造るに用ひられてゐる。

樟　樟は溫帶、熱帶兩地方に繁茂する樹木で、樟腦製造の原料に供する。材としては各種の裝飾用器具を造るに用ひられる。

第三節　造林法

山地や原野に材木を仕立てることを造林といふ。その方法に

が出來ないので、年々多額の畜產物が輸入されてゐる。その中羊毛が過半で最近における輸入額は一億九千百七十六萬餘圓に達してゐる。最近は豚、鷄などの小家畜や緬羊の增加は著しく、兎、蜜蜂もその數を增し、我國畜產の將來に向つての發達は主としてこの方面に期待されてゐる。最近における牛、馬、緬羊、山羊、豚の飼養數は次の通りである。

牛	一、六一四、七九八頭
馬	一、四六四、二八九頭
緬羊	三五、九五三頭
山羊	二五三、七三八頭
豚	九八〇、七三八頭

第一節　牛

牛は耕作、運搬などに使役し、乳や肉は食用に供され、皮は革具に用ひ、脂肪は食用及び工業用に供し、骨は種々の細工物に製造される。

品種　牛はその用途によつて乳用種、肉用種、役用種に分ける。乳用種は腰部はよく發達し、股間に大きな乳房がある。外國種のホルスタイン種、エアシア種、ジェルシー種、短角種などはこれに屬する。肉用種は體が大きく長方形である。ショートホーン種などがこれに屬する。役用種は骨が太く脚が強い。日本牛、朝鮮牛などがこれに屬する。我國では但馬牛、肥前牛などが最も名高い。

飼養　牛の飼養は舍飼と放牧による。舍飼は寒い間は牛舍に入れて飼養するのである。牛舍は高燥の地に設け、南東に面せしめ、換氣、採光を能くし、時々敷藁を取換へて舍內

を清潔にする。規則正しく食事を與へ、また水及び食鹽を給與し、朝夕運動を充分になさしめる。使役後には休ませて飼料を與へる。毎日藥で皮膚を摩擦し、時々毛櫛で摩擦する。悪癖をつけないやうに注意し、尚ほ牛疫、鵞口瘡などの傳染病に侵されぬやう注意し、若し發病した場合には直ちに獸醫を招いて治療を受けしめることが肝要である。

第二節　馬

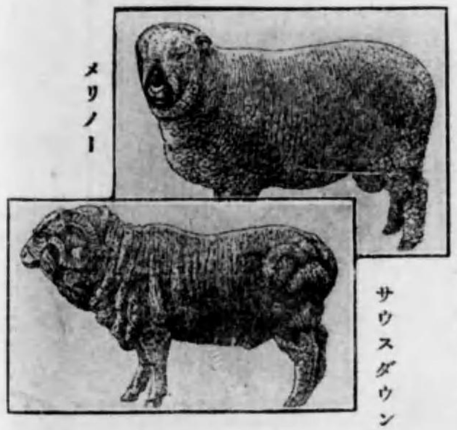
馬は耕作、運搬などに使役するの外、乘用、競馬用及び軍事用として重要な役目を帶びてゐる家畜であることは吾人のよく知るところである

內國種は耕作用、軍事用に適し南部馬、三春馬、薩摩馬などは名高い。外國種では、アラビヤ種は乘用として第一である。サラブレッド種は競馬用として貴ばれ、ハックニー種は挽用または乘用に適する。クライスデー種は農用として使役されてゐる。發病などの用意は前節の牛と同樣である。

第三節　豚、羊、山羊

豚　豚は體質が强壯で氣候の變化に堪へ、雜食性で飼料を選ばず、繁殖力が强く成育が速かである。その生肉は食用にする外、ハム、ベーコン、罐詰とし、また脂肪、毛などを利用する。品種にはバークシヤ種、ヨークシヤ種、日本種、支那種などがある。豚舍は南向の地を選び舍內を清潔にする。

羊　羊は山羊に對して綿羊ともいひ、溫順な家畜で毛用を主とするけれども、また食用にもなる。品種には毛用種にメリノー種があり、肉用種にシロップシヤー種、サウスダウン種がある。我國で鋭意その飼育を奬勵したので、最近では年に四萬七千頭餘を飼育し羊毛年產額は實に二十七萬ポンドを突破するに至つたのである。



山羊　山羊は毛用、肉用、乳用に供する。その乳汁は牛乳よりも滋養分があつて、消化し易いので小兒や老人の飲料に適する。

第四節　鷄

我國における養鷄の歷史は遠く神代にまで遡るが、卵や肉の生產を主とするやうになつたのは明治維新以後である。而して農家の副業に賣くするやうになつたのは、歐洲大戰以後である。昭和二年に鷄卵增殖十ヶ年計畫が樹立されて以來、急激な普及を見るに至つた。卽ち最近の飼養戶數三百萬九千戶、その總飼養羽數五千百六十九萬八千羽、價額三千三百八十五萬三千圓、產卵總數三十六億八百六十七萬五千個、この價額七千九百十二萬五千圓で、數量においては增殖計畫初年度に比し殆んど倍加の狀態になつてゐる。大正十一二年頃には支那から約七億八千萬個、この價格約一千八百萬圓（全消費額の四割弱）を輸入してゐたのであるが、現在ではその輸入を防ぎ、逆に比律賓やシベリアなどに輸出してゐるのである。

鷄　には品種多く、卵用種にはレグホン、ミノルカ、アンダルシヤンなどあり、肉用種にはブラマ、コーチンなどあり、卵肉兼用種にはプリマウロック、ロードアイランドレット、名古屋コーチンなどあり、其他愛翫用種としてはチヤボ、シヤモ、長尾鷄などがある。

孵化　鷄を孵化させるには種鷄の純良なものに新鮮な種卵を用ひ、これを母鷄に抱かせるか。または孵化器に入れて孵化させるのである。卵に適當な溫度を與へると、胚は段々發育して雛となる。凡そ二十一日位で孵化するのである。

育雛　雛には孵化の翌日から一二日間は卵の黃味を煮て碎いて

與へ、その後は屑麺麭、碎米、割麥、麩、魚類などを細く刻み混ぜて與へ、また時々野菜、肉なども與へる。尙ほ常に清水を絶へないやうに與へなければならぬ。かうして三十日乃至五十日經つたら母鷄から離す。人工で孵化した雛は假母器で育雛を行ふのである。

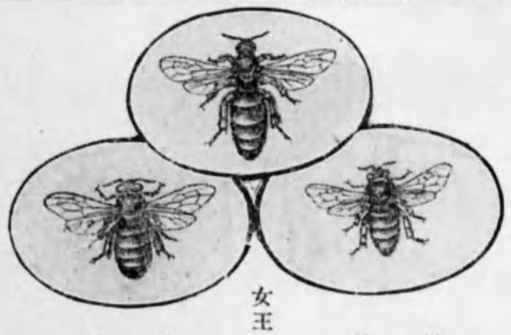
飼養　鷄舍は乾燥した日當りの能い處を選び、十羽につき一坪位の廣さに造り、塒木、産卵箱を設け、運動場には砂浴場を設けて砂浴させて羽蟲の寄生を防ぐ。糞や其他の不潔物を除いて舍内を清潔にする。飼料は主に穀類、青菜などを毎日淡水と共に與へ、産卵鷄には貝殻や卵殻などを與へ、換羽期には特に昆蟲、肉類を與へる。

第五節　蜜　蜂

近來養蜂は副業として漸く盛んとなりつゝある。最近の平均年産額は蜂蜜、蜜蠟を合せ約六十八萬貫、その價額は壹百拾二萬圓餘に達してゐる。

蜜蜂は自から蠟を出して巣を作り、花粉と花蜜とを集めてこの中に貯へるので、これを飼養すると蜂蜜と蜜蠟とを取ることが出來る。

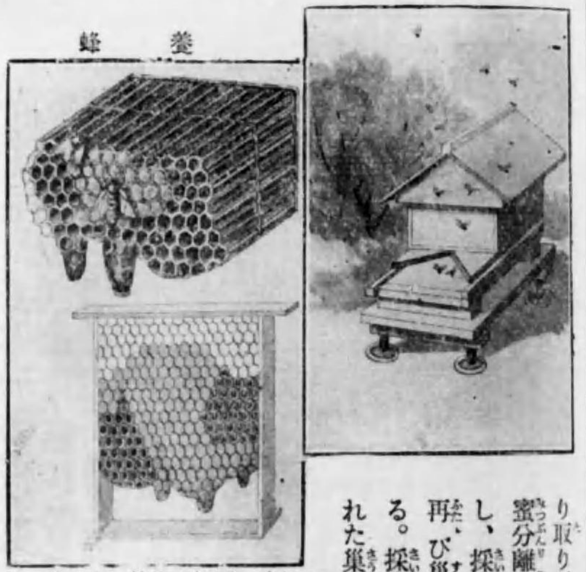
品種　今日最も多く飼養されてゐるものは日本種と伊太利種とである。日本種は體が小さく強壯で何處でも飼はれるが、大群をなさないから蜜量が少ない。伊太利種は性質が溫和で飼ひ易くまた蜜量も多い。



分封　一つの巣の中に二女王が出ると、一女王は蜂群の一部を引連れて他に新しい巣を造る。これを分封といふのである。毎年五月頃から數回に行はれる。

飼養　蜜蜂の飼養には巣箱を用ひる。巣箱は夏は涼しく冬は暖かい木蔭などのある場所に置く、冬季は菰や藁の類で巣箱を包む。集蜜に不足した蜜蜂には砂糖を與へるのである。

採蜜、製蠟　採蜜は夏季土用中に一回と晩秋に一回行ふ。幼蟲のゐない巣枠を巣箱から引出し、蠟で造られた蓋を刀で切り取り、遠心力蜂蜜分離器で廻轉し、採蜜してから再び巣箱に入れる。採蜜の際に破れた巣脾や、不用の部分や、蜜房の蓋などを熱湯で溶かし、汚物を取り去り蠟を精製するのである。



第九章　養　蠶

我國は氣候が溫和で地味が桑の栽培に適するので、養蠶業が廣く行はれる。その起源は古いのであるが、外國との交通、貿易の途が開け、生絲の輸出を見るやうになつてから急に發達して、今日の盛況を見るに至つたのである。試みに最近の統計を見ると、養蠶に從事する農家戸數百八十九萬四千戸、桑園面積五十八萬二千町歩、産繭額八千二百六萬貫、この價額三億五千八十六萬圓、生絲類の産額五億二千二百萬圓、その中輸出生絲は三億八千七百萬圓、屑絲、眞綿、玉絲二百五十萬圓である。而して約その八割は米國に仕向けられてゐる。然るに近來繊維レーヨンの進出が頗る盛んになつて來たので、養蠶業の地位は不安定となつた。茲に於て政府は諸種の蠶業對策を講じ、昭和十一年の特別議會では遂に懸案の産繭處理統制法を制定した。最近における世界の生絲産額を示すと次表の通りである。

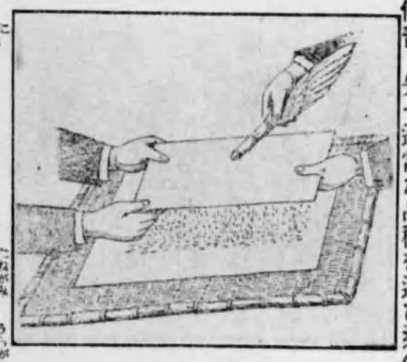
日本	四三、六〇一	伊太利	一、八三〇
朝鮮	一、九六二	佛蘭西	一、四五九
支那	四、八一〇	班牙	一、四五九
東歐諸國	七六八	其他	一、四五九
		計	五三、〇八〇

第一節　蠶の飼育

品種　蠶の品種は諸種に分けることが出來る。孵化の回數によつて一化性、二化性、多化性に分け、飼育の時期によつて春蠶、夏蠶、秋蠶に分け、繭の色によつて白繭種、黄繭種、綠

繭種に分け、産地によつて日本種、支那種、歐洲種などに分ける。從來我國で飼育されてゐた品種には小石丸、角又、又昔、青熟、大和錦、龍田姫などがあるが、近時は蠶兒の一代雜種が有利であるのを知り、專らこれを飼育するに至つたのである。

催青　先づ適當な品種を選び桑の芽の出始める頃、種紙を貯藏箱から出し催青箱に入れて催青を行ふ。催青には華氏五十五度位から次第に七十二度位まで溫度を高めると、蠶種は青色を帶びるのである。



掃立

掃立　催青した蠶種は凡そ二週間經つと孵化して蠶兒が發生する。これを蟻蠶といふのである。種紙を裏返し羽箒の柄で輕く打つて蟻蠶を白紙の上に落す。これが掃立である。この場合に蟻蠶の重量を秤る。蛾量の一匁中には約一萬頭があつて、これを一尺坪に擴げて養ふのが通例である。

給桑　掃立てた蟻蠶は適當の廣さに擴げ、蛾量の二三倍量の桑葉を刻みて與へ、その成長するに從ひ給桑の回數、分量及び剉切の大きさを加減するのである。

眠起　蠶兒は發育中五六日目毎に皮を脱いで成長し、その際は桑を食ふのを止めて靜息する。これを眠といふのである。眠の前に止桑として桑を與へる。起蠶は頭を動かして桑を欲しがるから桑を與へる。眠中は靜かにして蠶座を動かさないやうにする。孵化してから第一回の眠までを一齡、第一眠から第二眠までを二齡といひ、以後順次五齡に至るのである。

除沙、分箔　除沙とは蠶糞や殘桑などを蠶座から除くことで、粟糠、籾糠などを撒きその上に給桑し、蠶兒の匐ひ上るのを待つてこれを行ふ。分箔とは蠶兒の成長につれて蠶座を擴げることである。これは除沙と同時に行ふのが通例であるが、五齡になつてからは除沙のみを行ひ、分箔を行はないのである。

上簇、收繭　蠶兒が五齡を過ぎると老成して食慾を減じ、體は透き通り頭を擡げて結繭の場所を求める。これを熟蠶といふ。熟蠶は簇に入れて繭を結ばせる。これが上簇である。上簇の際は蠶室内の換氣や氣溫に注意して室内を乾燥せさる。上簇後凡そ一週間經つてから上中下繭及び同功繭などに分けて繭掻を行ひ、製絲用の繭は速かに乾燥して殺蛹するのである。

蠶病　蠶兒を斃死せしめる病には種々あるが、その重なものは軟化病、硬化病、膿病、微粒子病、蠶蛆病などである。

軟化病　この病は一種のバクテリアの寄生によつて起るもので蠶病中最も恐るべきものである。これを豫防するには高溫多濕を避け、蠶室、蠶具を清潔にして、蠶兒を健全に育てるのが肝要である。

硬化病　この病は一種の菌類の寄生によつて起るもので、白彊病、綠彊病などがある。その死體は腐敗せずに硬化する。その豫防法は軟化病と同樣である。

膿病　この病は下等動物の寄生によつて起るもので、蠶體が膨大して乳白に變じ、皮膚が破れて膿汁を出す。その豫防法も軟化病と同樣で、蠶室や蠶具を清潔にする外、蠶室内の空氣の流通を能くし、溫度が激變しないやうにする。

微粒子病　この病は一種の原生動物の寄生によつて起るもので死體、排泄物などから傳染し、或は卵によつて傳染するから蠶室や蠶具の消毒を能くし、母蟻の蠶病檢査を細密にして、無病の蠶種を得るやうにしなければならぬ。消毒には蒸氣消毒、昇汞水清毒、フォルマリン撒布消毒などを行ふのである。

蠶蛆病　この病は蠶蛆の寄生によつて起るもので、蠶病中最も恐るべきものである。これを防ぐには蛆蛹を殺して蛆蠅が繁殖しないやうにし、桑園の密植を避け排水を能くし、蠶蛆の虞ある桑園の桑葉は稚蠶に與へぬやうにする。

第二節　桑の栽培

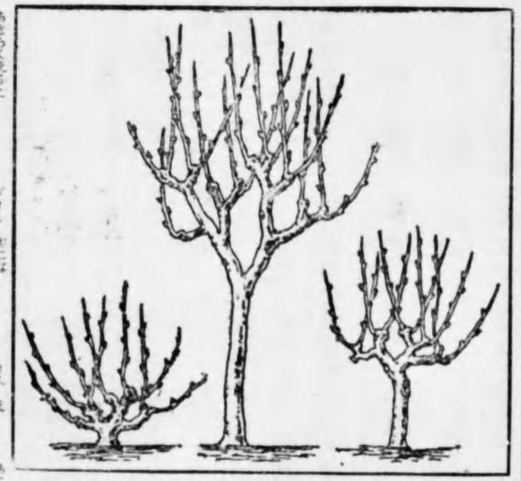
我國における最近の桑園反別が五十八萬二千餘町歩で、明治三十三年から同三十七年に至る五ヶ年平均三十一萬二千町歩に

比較すると殆んど倍加してゐる。これを桑の仕立法によつて區別すると、根刈七割二分、中刈一割五分、立通八分、高刈五分である。立刈、高刈のやうな粗放な方法は一般に東北地方に多く南に下るに從つて少ない。桑園の整理改植は養蠶經營の合理化及び繭生産費の低下策として極めて重要なことである。

品種　桑は發芽の早晩によつて早生種、中生種、晩生種の三種に分ける。早生種は節曲、市平、柳田、振袖で、掃立當時の稚蠶から二三齡までの蠶兒に與へる。中生種は魯桑、赤木、鶴田、九紋龍などで、二齡から四齡の蠶兒に與へる。晩生種は高助、十文字、細江、鼠返し、小幡などで、四五齡の蠶兒に與へるのである。

繁殖法と仕立法　桑樹を繁殖せしめるには接木、挿木、壓條、實生などがあるが、最も簡單なのは壓條、挿木、接木である。また仕立法には根刈、中刈、高刈、立通などがある。根刈は土際から一尺位までの高さに幹を截り、毎年數條の枝を出させる法で、溫暖で霜害の少ない地方に適する。中刈は一尺から三尺に、高刈は三尺から五尺位に截る法で、氣候が稍や寒冷で霜害、水害などの多い地方に適する。立通は自然の成長に任せ刈り取らずに高く仕立てる法で、積雪の多い地方に適するが摘桑に不便で且つ蟲害に罹り易いのである。

桑の仕立法



中刈　高刈　根刈

管理　桑苗は春に植付ける。施肥は春發芽前と夏刈取後と秋落葉後との三回に行ひ、また寒肥をも與へる。大豆粕、過燐酸石灰、堆肥、下肥、油粕などを用ひる。年四回中耕を行ひ、株直は刈取後なるべく早く鋭利な鍬か鎌で行ふ。また結束を行ひ解束は翌春の發芽前に行ふのである。

霜害　霜害を防ぐには桑園の所々に火を焚いて煙と水蒸氣とを發生させ、或は桑園に棚を造つて桑樹の上に莚などを掛け、或は莚、菰などで各株毎に桑樹を包むのである。

病蟲害　桑の病害には萎縮病、紋羽病、赤濕病などがある。害蟲には介殼蟲、天牛、尺蠖、毛蟲、巣蟲などがある。

第十章　農産製造

第一節　農産製造の範圍

農産製造は農産物を原料として、農家が自らこれに加工したは變形せしめて新しい生産物を造ることである。而してその範圍は極めて廣く、製絲、製麻、製茶、製糖、製莚、製繩、澱粉製造、味噌製造、漬物製造、乳製品製造、豚肉加工、乾燥蔬菜製造、乾果製造、ジャム製造、麥稈眞田製造、除蟲菊製造などであるが、農家の副業としないで、大規模の設備と大資本とを以て經營するものは純然たる工業となるので、茲にいふ農産製造ではない。故に農産製造といふのは農家が農閑期を利用して營む副業を指すものと解すべきである。

第二節　農産製造品

農産製造品は前に述べた通り澤山あるが、次には一般農家の副業として製造することが出來るものゝ中數種を説明する。

一　梅干

原料　梅干は梅を鹽漬にして造つたもので、永く腐敗しないのと携帶に便利なので、副食物として需要が多い。

梅干にする梅は大きさが中位で多肉のものがよい。品種としては白加賀、養老が最も適し、豐後梅はこれに次ぐ。成熟したものはよいが過熟したものは不適當である。

製法　梅干を製するには先づ梅を一晝夜位水に漬け、これを取り出して梅一リットルに對し、食鹽二・五リットル位を混ぜて瓶に漬け、押蓋と壓石を載せて五日乃至七日間位置く。次にこれを簀に上げ擂げて二週間位陰乾にし、更に三四日の間鹽水中に漬ける。その次には一日中陰乾にし、夜もその儘外氣に曝して翌日はまた元の鹽水に漬ける。かうして陰乾、夜曝、漬込を五六回繰返すと出來る。尚ほ鹽水中に紫蘇の葉を揉んで梅と一緒に漬けると、梅は美赤色となる。また紫蘇卷は梅干を一個宛紫蘇の葉に包んで漬けるのである。

二　切干

種類　大根または甘藷などは生の儘用ひる外、これを切干にし保存して用ひられるのである。

大根の切干には千切干、輪切干、蠶切干、割干などがあ

る。千切干は大根を細刻器で細かく切り、陰乾或は火力で乾燥したもので、鼈切干は千切干より大きく切り、輪切干は輪切りにしたもの、割干は大根を縦に數條に割つて乾燥したもので、何れも種々の料理に用ひられる。

製法　甘藷の切干にはこれを生の儘輪切または縦切にして乾燥したものと、一旦これを蒸して切干にしたものがある。蒸した切干を作るには先づ甘藷を一時間半位強い火力で蒸し、後文火にして充分に蒸し、溫い中に皮を剝いて一日位置く。これを藷切器で〇・五糎位の厚さの縦切にし、竹簀に擂げて陰乾にする。そして藷が鼈甲色になり曲げても折れなくなつたところで、これを俵につめ、二週間位貯藏すると表面は白粉で被はれた切干となるのである。

三　麵　類

饂飩の種類　饂飩は饂飩粉（小麥粉）を原料として製する食品で、これに煮饂飩と乾饂飩とがある。

製法　乾饂飩を製するには先づ饂飩粉に食鹽水を加へて十分に捏ね、これを板に乘せ麵棒で押し延ばして平たくする。更にこれを筒狀に卷き輪切りにして細長く引き延ばし、竿にかけて陰乾にし適當の長さに切るのであるが、近頃はこれを造る機械が出來たので、機械製のものが多い。乾饂飩は永く貯藏が出來るから專ら商品とされて居る。煮饂飩は饂飩粉に食鹽水を加へて捏ねたものを新しい蓆に包んで其上を足で踏み、これを取出して麵棒で延ばし細く刻んで煮たものである。煮饂飩は直ちに食べなければならぬから專ら自家用である。

麩製法　麩は小麥粉から造つたもので蛋白質に富む食品であるがこれを製するには小麥粉を桶に入れて充分に捏ね、これを笊に移し桶の上で水を加へながら揉む。かうすると小麥粉の澱粉は水に洗ひ流されて桶の底に沈み、蛋白質は粘質な塊となつて笊の上に殘る。完全に澱粉を洗ひ流した粘質物は長圓形の棒となし、これを燒釜に入れて燒けば麩となるのである。尙ほ麩を製する際に出來る小麥粉の澱粉は正麩といひ、糊または菓子などを造るに用ひられるのである。

四　蒟蒻粉及び蒟蒻

蒟蒻粉　蒟蒻粉は蒟蒻の根である蒟蒻玉から製した粉末で、主に蒟蒻の製造原料として用ひられる。其他織物や防水などの糊として工藝にも用ひられる。これを製するには蒟蒻玉を能く水洗し、竹篦でその黑皮を取り、これを厚さ五糎位の輪切となし、竹串にさして充分に陰乾にし、木臼、製粉機などで粉碎して精製するのである。蒟蒻粉は純白で能く乾燥したものがよい。

蒟蒻　蒟蒻は蒟蒻粉から製する我國特有の食品である。また蒟蒻は保溫性に富んでゐるから、溫布代用として醫療にも用ひられる。蒟蒻を造るには蒟蒻粉に水を加へて充分に捏ね、三十分間置きにこれに石灰乳を混ぜた煮沸水を入れ、暫時煮沸して取り上げ、型に入れて形を付け再び煮沸して造るのである。尙白瀧蒟蒻は底に澤山の孔がある型を用ひ、この中から壓出して線狀としたものである。

五　納　豆

種類　納豆は大豆から造るもので、消化し易い蛋白質に富んだ食品である。納豆には東京納豆、西京納豆、濱納豆などがある。多少その製法を異にしてゐる。

製法　納豆製造に用ひる大豆は小粒の品種がよい。先づ大豆を充分煮熟して冷却しない中に藁包に包み、これを攝氏三十五度乃至四十度に溫めた室或は藁か落葉を堆積した床に入れ一晝夜置くと、大豆は粘氣を帶び粒の間に粘質物が出で納豆となる。納豆は粘り氣が強く色澤、香味があり、軟かくもなく硬くもないものがよい。

六　晒　餡

種類　晒餡には赤小豆から造つた赤餡と白小豆や白菜豆から造つた白餡とがある。何れも澱粉、蛋白質などの榮養に富み、菓子、汁粉などの原料に用ひられる。

製法　晒餡を製するには能く洗つた豆を釜に入れ、水を加へて蓋に重石を載せ、約半時間位煮沸して半煮とする。次にこれを少し冷し白に入れて能く搗き碎き、麻袋か笊を用ひ水を加へながら桶に濾し込む。そして桶内に細粒が沈澱するとその上の液を去り、再び水を加へ攪拌して淸澄せしめる。かうしてこの操作を二三回繰り返し、沈澱物が綺麗になつたところで、これを取出して乾燥する。乾燥は火力でするのがよい。尙ほ晒餡を濾し取つた餡粕は豚などの飼料に供せられ、また搾汁は洗濯用になるのである。

第十一章　最近の農業問題

第一節　米　穀

米穀自治管理　農村問題の中で最も重要なものは米穀問題である。それで政府は昭和八年米穀統制法を制定して、毎年度に

於ける米穀の最低價格と最高價格とを公定してその統制を圖ることに努めたが、更にこの法律をして一層完全ならしむるには內地、朝鮮及び臺灣を通ずる過剩の米穀を統制するため、民間生產者の團體をして、それを自治管理せしめる必要を認め、昭和十一年の臨時議會に米穀統制法の一部の改正案と共に、米穀自治管理法案及び籾共同貯藏助成法案を提出するに至つた。然るに全國の米穀業者は米穀自治管理法案は吾吾の生存權を奪ふ惡法だといつて、日本商工會議所などを動かして、猛烈な反對運動を始めた。これに對し產業組合や農會はその通過を希望して協力運動を始めたのである。

かくの如く米穀自治管理法案は民間に於て賛否の二大動向に分かれたので、議會でも賛否兩論が對立して、色々と議論が闘はされたのであるが、衆議院はこれに附帶決議を附けて通過せしめ、貴族院に於てもまた希望決議を附けて通過したので、遂にその制定發布を見るに至つたのである。

この法律は內地、朝鮮及び臺灣を通ずる過剩の米穀を統制するため、その地域で民間生產者の團體をして、その自治管理を行はしめることを目的とするものである。然かし法文の通讀のみでは要領を得ぬから、その要領を說明する。

一過剩米の推定　過剩米穀量及び統制數量の決定が、本法適用の第一着手であるが、これは政府が每年米穀年度の初めに內地、臺灣及び朝鮮の全部を通じ、米穀收穫高、米穀現在高を供給に立て、過去の消費量狀況を參酌して定めた消費見込高と、理想持越高を需要に立てゝ需給の推算を行ひ、その結果過剩數量の生ずる見込の場合は、その數量を內地、朝鮮、臺灣に割當てゝ統制せしめるのである。

二統制數量の內外地に對する割當　過剩米の一定數量の內地、臺灣、朝鮮に對する割當の割合は、內外米穀の各々管外移出數量の增加趨勢の外、米穀管外移出數量及び米作柄の豐凶をも參酌して定めることになつてゐるが、その割當は本法附則で當分の中內地百分の三十五、朝鮮百分の四十三、臺灣百分の二十二と定められてゐる。但內外地の米作が異常なる場合などには多少この割合を變更することが出來るのは言ふまでもないことである。而して前述の內地外地全部を通ずる米穀の需給推算、過剩米として統制する數量、その數量の內外地に割當てる割合は、米穀自治管理委員會を設けこれに諸問して定める。

三統制團體　過剩米の統制團體としては、內外地に一定地域（內地では市町村、朝鮮では府、郡、島、臺灣では廳または郡市區域）を區域とする米穀統制組合を設立せしめ、更にこの機能を充分發揮させるために、上級團體として地方米穀統制組合聯合會の制度を設けてこれを統轄せしめる。然らば統制組合は必ず設けねばならぬかといへば、內地の如き生產者の團體として產業組合または農會の發達してゐる所では、產業組合または農會に統制組合の事業の代行を認められてゐるから、必ずしも米穀統制組合の設立を要せぬ。

四統制團體に對する統制數量の割當　統制機關が內外地を通じて整備すると共に、前揭の方法によりその統制數量が決定すれば、政府は各地方米穀統制組合聯合會（または事業を代行する團體）に右の數量を割當てゝ當該聯合會は所屬の統制組合（またはその事業を代行する團體）に統制數量を割當て更に組合員に及ぶのである。

五割當數量の貯藏と解除　統制組合は組合員に割當てたる數量の寄託を受け貯藏する。而して貯藏米穀は內地米價格が米穀統制法の標準價格より一割程度値上りして、政府よりの解除の許可または命令がある迄は貯藏を繼續する。

六貯藏困難の米穀　統制組合の貯藏能力その他の事情を參酌して、その貯藏が困難であると認める部分は、希望により政府が買上げる。その買上價格は內地米に付ては米穀統制法の最低價格により、外地米に付ては內地米最低價格決定と同樣の方法により、生產費、物價その他の經濟事情を參酌して定める價格による。

七貯藏米穀の越年の場合　次の十月を過ぐるも尙ほも解除されぬ場合は、政府は一定價格により買上をなし、古米格の補償をなすなどの處置を講ずる。

八貯藏者に對する助成施設　政府は出來得る限り米穀資金を供給し、また統制する米穀の貯藏期間中は金利保管料に相當する助成金を交付する。

九第二次統制實施　上述の統制を行ふも更に其後の天候の如何によつて、實收高が豫想高よりも遙に多く增加し、米價が最低價格を下らんとするときは、政府は米穀自治管理委員會に諮問して、更に第二次の統制を爲すことを得る。この場合統制を命ずる團體は米穀生產者の團體のみならず米穀取扱業者の團體にもこれを爲さしめることを得る。

これは米穀が既に生產者の手を離れて、取扱業者の手に移つてゐるものもあると豫想されるので、特に米穀取扱業

者の團體を加へて統制の徹底を期したのである。

而して米穀取扱業者の團體は內地においては小樽、酒田、新潟、東京(橫濱を含む)、名古屋、大阪、京都、神戸、廣島、下關、門司、熊本などの主要米穀集散地における問屋、卸賣商などの中で、一箇年間に一定の數量以上の取扱をなす米穀商を以て組織せしめる。然し米穀取扱業者の組織する商業組合または重要物產同業組合は行政官廳の許可を受けて右の事業を代行し得ることゝなつてゐる。

第二次統制の方法及び助成施設などは第一次統制と同樣であるが、貯藏困難な米穀を團體の希望により、政府の買上ぐる價格は、外地米に付ては前の場合と異り、標準最低價格、內地米との格差、運賃諸掛を參酌して定める價格の範圍內において時價に準據して定める。

而して昭和十一年五月二十七日法律第二十二號を以て公布せられた米穀自治管理法の條文は左の通り第一條より第四十六條から成つてゐる。

第一條　本法ハ內地、朝鮮及臺灣ヲ通ズル過剩米穀ヲ統制スル爲內地、朝鮮及臺灣ニ於テ米穀ノ自治管理ヲ行ハシムルコトヲ目的トス

第二條　米穀生產者、土地ニ付權利ヲ有スル者ニシテ米穀ヲ小作料トシテ受クルモノ及命令ヲ以テ指定スル之ニ準ズル者ハ米穀統制組合ヲ設立スルコトヲ得

第三條　米穀統制組合ハ法人トシ第一條ノ自治管理ヲ行フヲ以テ目的トス

第四條　米穀統制組合ハ其ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ニ限リ之ヲ行フモノトス

一　第四十三條(第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)ノ規定ニ依リ組合ニ於テ統制スベキ米穀ノ數量ヲ組合員ニ對シ割當ツルコト

二　組合ニ於テ統制スベキ米穀ヲ貯藏スルコト

三　前號ノ規定ニ依リ貯藏シタル米穀ニ付組合員ニ資金ノ融通又ハ其ノ斡旋ヲ爲スコト

四　第四十九條、第五十條(第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)又ハ第五十七條ノ規定ニ依リ米穀ノ賣渡ヲ爲スコト

五　貯藏米穀ノ倉庫證券ヲ發行スルコト

六　第二號ノ規定ニ依リ貯藏シタル米穀ニシテ貯藏ヲ解除シタルモノノ委託ヲ受ケ販賣又ハ保管シ其ノ他米穀ノ自治管理ニ附帶シ必要ナル行爲ヲ爲スコト

前項第五號ノ倉庫證券及其ノ發行ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　米穀統制組合ノ地區ハ內地ニ在リテハ市町村、朝鮮ニ在リテハ府、郡、島、臺灣ニ在リテハ廳又ハ郡市ノ區域ニ依ル

特別ノ事情アルトキハ米穀統制組合ノ地區ハ前項ノ區域ニ依ラザルコトヲ得

命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外市町村等ノ區域ニ增減アリタルトキハ其ノ區域ヲ地區トスル米穀統制組合ノ地區モ亦之ニ應ジテ增減アリタルモノトス

第六條　米穀統制組合ノ名稱中ニハ米穀統制組合ナル文字ヲ用フベシ

本法ニ依リ設立シタル米穀統制組合ニ非ザレバ其ノ名稱中ニ米穀統制組合タルコトヲ示スベキ文字ヲ用フルコトヲ得ズ

第七條　米穀統制組合ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ地區內ノ第二條ニ揭グル者ヲ以テ其ノ組合員トス

第八條　米穀統制組合ヲ設立セントスルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ地區內ノ組合員タル資格ヲ有スル者ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得テ創立總會ヲ開キ定款ヲ議定シ其ノ他必要ナル事項ヲ定メ行政官廳ノ認可ヲ受クベシ

第九條　行政官廳ハ必要アリト認ムルトキハ區域ヲ指定シ組合員タル資格ヲ有スル者ニ對シ米穀統制組合ノ設立ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ設立ヲ命ゼラレタル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ創立總會ヲ開キ定款ヲ議定シ其ノ他必要ナル事項ヲ定メ行政官廳ノ認可ヲ受クベシ

設立ヲ命ゼラレタル者命令ノ定ムル期間內ニ設立ノ認可ヲ申請セザルトキハ行政官廳ハ定款ノ作成其ノ他設立ニ關シ必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第十條　米穀統制組合ハ設立ノ認可アリタル時又ハ前條第三項ノ規定ニ依リ定款ノ作成アリタル時成立ス

前項ノ場合ニ於テハ行政官廳ハ遲滯ナク組合設立ノ旨並ニ組合長及副組合長ノ住所氏名ヲ告示スベシ

第十一條　米穀統制組合成立シタルトキハ其ノ地區內ノ組合員タル資格ヲ有スル者ハ總テ其ノ組合員トス

第二條ニ該當スル者ニシテ第七條ノ命令ノ定ムル所ニ依リ組合員タル資格ヲ有セザルモノハ定款ノ定ムル所ニ從ヒ米穀統制組合ニ加入スルコトヲ得

第十二條　米穀統制組合ニ總代會ヲ置ク

總代會ハ組合長、副組合長及總代ヲ以テ之ヲ組織ス

第十三條　米穀統制組合ノ組合員ハ命令ノ定ムル所ニ依リ組合員中ヨリ總代ヲ選擧スベシ

第十四條　左ニ揭グル事項ハ總代會ノ議決ヲ經ベシ

一　收支豫算

二　經費ノ分賦收入方法

三　事業報告及收支決算

四　借入金

五　定款ノ變更

六　第三十七條ニ於テ準用スル第八條ノ同意

七　第四十三條(第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム)ノ割當

前項第一號、第二號、第四號及第五號ニ揭グル事項ノ決議ハ行政官廳ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第十五條　定款ノ變更ハ總代會ニ於テ之ヲ組織スル者半數以上出席シ出席者ノ三分ノ二以上ヲ以テ之ヲ議決ス

定款ノ變更ガ地區ノ增減ニ關スルトキハ前項ノ規定ニ依ル議決ノ外新ニ編入セラレ又ハ削除セラルベキ區域內ノ組合員タル資格ヲ有スル者又ハ組合員ノ三分ノ二以上ノ同意アルコトヲ要ス

第十六條　本法ニ規定スルモノヲ除クノ外總代會及役員ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條　特別ノ事情アル米穀統制組合ハ命令ノ定ムル所ニ依リ總代會ヲ設ケズ組合員ノ總會ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

總代會ニ關スル規定ハ總會ニ之ヲ準用ス

第十八條　米穀統制組合ニ左ノ役員ヲ置ク

組合長　一人、副組合長　一人、評議員　數人

役員ハ組合員中ヨリ之ヲ選任ス但シ組合長及副組合長ハ其ノ他ノ者ヨリ之ヲ選任スルコトヲ妨ゲズ

役員ノ選任及解任ハ總代會ニ於テ之ヲ行フ

役員ノ解任並ニ第二項但書ノ規定ニ依ル組合長及副組合長ノ選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

組合長ノ職務ヲ行フ者ナキトキハ行政官廳ハ總代ヲ指定シ組合長ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

組合長及副組合長ノ選任及退任ハ第四項及第二十六條ノ場合ヲ除クノ外其ノ旨ヲ行政官廳ニ屆出ヅベシ

行政官廳第四項ノ認可、第五項ノ指定若ハ第二十六條ノ解任ヲ爲シ又ハ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ遲滯ナク其ノ旨ヲ告示スベシ

第十九條　組合長ハ組合ヲ代表シ組合ノ事務ヲ總理ス

副組合長ハ組合長ヲ輔佐シ組合長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

評議員ハ組合長ノ諮問ニ應ジ並ニ組合ノ業務執行及財産ノ狀況ヲ監査ス

第二十　總代會ノ議決ヲ經ベキ事項ニ關シ臨時急施ヲ要スル場合ニ於テ總代會成立セザルトキ又ハ之ヲ招集スルノ暇ナキトキハ命令ノ定ムル場合ヲ除クノ外組合長之ヲ專決處分スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ專決處分ヲ爲シタルトキハ組合長ハ次ノ總代會ニ之ヲ報告スベシ

第二十一條　米穀統制組合ハ第十八條ノ役員ノ外定款ノ定ムル所ニ依リ職員ヲ置クコトヲ得

前項ノ職員ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十二條　米穀統制組合ハ定款ノ定ムル所ニ依リ其ノ組合員ニ對シ經費ヲ分賦シ及過怠金ヲ徴收スルコトヲ得

米穀統制組合ノ經費又ハ過怠金ヲ滯納スル者アル場合ニ於テ其ノ組合長ノ請求アルトキハ市町村ハ市町村稅ノ例ニ依リ之ヲ處分ス此ノ場合ニ於テ米穀統制組合ハ其ノ徴收金額ノ百分ノ四ヲ市町村ニ交付スベシ

市町村ガ前項ノ請求ヲ受ケタル日ヨリ三十日以内ニ其ノ處分ニ著手セズ又ハ九十日以内ニ之ヲ結了セザルトキハ組合長ハ行政官廳ノ認可ヲ得テ之ヲ處分スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ町村制第百十一條第一項及第四項ノ規定ヲ準用ス

前二項ニ規定スル徴收金ノ先取特權ノ順位ハ市町村其ノ他之ニ準ズベキモノノ徴收金ニ次ギ其ノ時效ニ付テハ市町村稅ノ例ニ依ル

朝鮮及臺灣ニ於ケル米穀統制組合ノ經費及過怠金ノ分賦徴收滯納處分、先取特權ノ順位及時效ニ關シテハ命令ノ定ムル所ニ依ル

經費ノ分賦及過怠金ノ徴收ニ關シテハ勅令ノ定ムル所ニ依リ異議ノ申立、訴願及行政訴訟（朝鮮ニ在リテハ異議ノ申立、臺灣ニ在リテハ異議ノ申立及訴願ニ限ル）ヲ爲スコトヲ得

第二十三條　米穀統制組合ハ定款ノ定ムル所ニ依リ使用料及手數料ヲ徴收スルコトヲ得

第二十四條　使用料及手數料ノ徴收、米穀ノ寄託其ノ他米穀統制組合ト組合員トノ間ニ於ケル權利義務ニ關シテハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外民事訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十五條　行政官廳ハ米穀統制組合ニ對シ組合ノ事務ニ關スル報告ヲ爲サシメ、組合ノ業務執行又ハ財産ノ狀況ヲ檢査シ定款、收支豫算又ハ經費ノ分賦、收入方法ノ變更ヲ命ジ其ノ他監督上必要ナル命令又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十六條　行政官廳ハ米穀統制組合ノ決議若ハ選擧又ハ役員ノ行爲ガ法令若ハ定款ニ違反シ又ハ公益ヲ害シ若ハ害スルノ虞アリト認ムルトキハ決議、選擧若ハ當選ヲ取消シ、役員ヲ解任シ總代ノ改選ヲ命ジ、組合ノ事業ヲ停止シ又ハ組合ノ解散ヲ命ズルコトヲ得

第二十七條　米穀統制組合解散又ハ合併ヲ爲サントスルトキハ總代會ノ議決ヲ經且其ノ組合員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得尙合併ノ場合ニ在リテハ定款ヲ議定シ其ノ他必要ナル事項ヲ定メ行政官廳ノ認可ヲ受クベシ

米穀統制組合分割ヲ爲サントスルトキハ前項ノ規定ニ準ズル議決及同意ノ外分割ノ各組合ノ組合員又ハ組合員タル資格ヲ有スル者ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得且定款ヲ議定シ其ノ他必要ナル事項ヲ定メ行政官廳ノ認可ヲ受クベシ

第十條及第十五條第一項ノ規定ハ前二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

前三項ニ規定スルモノヲ除クノ外解散、合併又ハ分割ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十八條　米穀ヲ取扱フ販賣組合（以下米穀販賣組合ト稱ス）ノ存スル市町村ニ於テ特別ノ事情アルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ米穀統制組合ノ事業ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ米穀販賣組合ニ於テ之ヲ行フコトヲ得

米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ米穀販賣組合ナキ市町村ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ農會ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ米穀統制組合ノ事業ヲ行フコトヲ得

第二十九條　米穀統制組合ノ事業ヲ行フ團體ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ團體員ニ非ズシテ其ノ區域内ニ於テ米穀統制組合ノ組合員タル資格ヲ有スル者ニ對シ團體員ニ準ジ第四條第一項ニ掲グル事業ヲ行フコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ第四條第一項ニ掲グル事業ヲ行フ團體ハ前項ニ規定スル者ヨリ團體員ノ例ニ準ジ使用料及手數料ヲ徴收スルコトヲ得

第三十條　米穀統制組合ノ事業ヲ行フ團體ガ第四十三條ノ規定（第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ニ依ル割當ヲ爲ス場合ニ於テハ總會又ハ總代會ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス

米穀統制組合ノ事業ヲ行フ場合ニ於ケル前項ノ團體ノ監督及總會又ハ總代會ニ關シテハ勅令ヲ以テ特例ヲ設クルコトヲ得

第三十一條　米穀統制組合及其ノ事業ヲ行フ團體ハ團體相互ノ聯絡ヲ圖リ米穀ノ自治管理ヲ行フ目的ヲ以テ地方米穀統制組合聯合會ヲ設立スルコトヲ得

第三十二條　地方米穀統制組合聯合會ハ法人トス

第三十三條　地方米穀統制組合聯合會ノ地區ハ内地ニ在リテハ道府縣、朝鮮ニ在リテハ道、臺灣ニ在リテハ州ノ區域ニ依ル

第三十四條　地方米穀統制組合聯合會ニ總會ヲ置ク

總會ハ會長、副會長及議員ヲ以テ之ヲ組織ス

第三十五條　地方米穀統制組合聯合會ノ議員ハ命令ノ定ムル所ニ依リ米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ノ代表者ヲ以テ之ニ充ツ

第三十六條　地方米穀統制組合聯合會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一人、副會長　一人又ハ二人、評議員　數人

役員ハ議員中ヨリ之ヲ選任スルコトヲ妨ゲズ

前項但書ノ規定ニ依ル會長及副會長ノ選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第三十七條　第四條第一項、第六條、第八條乃至第十條、第十一條第一項、第十四條乃至第十六條、第十八條第三項乃至第七項、第十九條乃至第二十一條、第二十二條第一項及第二十三條乃至第二十六條ノ規定竝ニ第二十七條中解散ニ關スル規定ハ地方米穀統制組合聯合會ニ之ヲ準用ス

第三十八條　勅令ノ定ムル所ニ依リ行政官廳ノ許可ヲ受ケ道府縣ヲ區域トスル米穀ヲ取扱フ販賣組合聯合會（以下道府縣米穀販賣組合聯合會ト稱ス）ハ地方米穀統制組合聯合會ノ事業ヲ行フコトヲ得

第三十九條　地方米穀統制組合聯合會ノ事業ヲ行フ道府縣米穀販賣組合聯合會ハ其ノ區域内ニ於ケル米穀統制組合及所屬組合ニ非ズシテ米穀統制組合ノ事業ヲ行フ團體ニ對シ所屬組合ニ準ジ第三十七條ニ於テ準用スル第四條第一項ニ掲グル事業ヲ行フコトヲ得

第四十條　地方米穀統制組合聯合會ノ事業ヲ行フ道府縣米穀販賣組合聯合會第四十三條ノ規定（第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ニ依ル割當ヲ爲ス場合ニ於テハ總會又ハ總代會ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス

第三十條第二項ノ規定ハ前項ノ團體ニ之ヲ準用ス

前條ニ規定スル米穀統制組合及其ノ事業ヲ行フ團體ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ代表者ヲ第一項ノ總會又ハ總代會ニ出席セシメ表決權ヲ行使セシムルコトヲ得

第四十一條　政府ハ毎年内地、朝鮮及臺灣ヲ通ジ米穀需給推算ヲ行ヒ米穀ノ供給過剩ナリト認ムルトキハ其ノ過剩數量ノ範圍内ニ於テ定ムル一定數量ノ米穀ヲ内地朝鮮及臺灣ニ於テ統制セシムルコトヲ得

前項ノ米穀需給推算ノ方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第一項ノ一定數量ノ内地、朝鮮及臺灣ニ對スル割當ノ割合ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ内地、朝鮮及臺灣ノ米穀管外移出數量ノ增加趨勢ノ外ニ米穀管外移出數量、米穀收穫ノ豐凶等ヲモ參酌シテ之ヲ定ム

第四十二條　前條第一項ノ米穀需給推算及統制スベキ米穀ノ數量竝ニ同條第三項ノ割當ノ割合ニ付テハ米穀自治管理委員會ニ諮問シテ之ヲ定ム

米穀自治管理委員會ノ組織及權限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十三條　政府ハ第四十一條ノ規定ニ依リ内地、朝鮮及臺灣ニ付定マリタル數量ヲ各内地、朝鮮及臺灣ニ於ケル地方米穀統制組合聯合會又ハ其ノ事業ヲ行フ道府縣米穀販賣組合聯合會ニ對シ割當ヲ其ノ米穀ニ付統制ヲ命ジ、地方米穀統制組合聯合會又ハ其ノ事業ヲ行フ道府縣米穀販賣組合聯合會ハ其ノ割當テラレタル數量ヲ米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ニ對シ割當ツルコトヲ要ス

米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ハ其ノ割當テラレタル數量ヲ團體員及第二十九條ニ規定スル者ニ對シ割當ツルコトヲ要ス

朝鮮及臺灣ニ於テ統制セシムベキ米穀ノ數量ノ割當ニ付テハ前二項ノ規定ニ關シ勅令ヲ以テ特例ヲ設クルコトヲ得

第四十四條　地方米穀統制組合聯合會若ハ其ノ事業ヲ行フ團體又ハ米穀統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體前條ノ規定ニ依ル割當ヲ爲サザル場合ニ於テハ政府ハ之ニ代リ割當ヲ爲スコトヲ得

第四十五條　前二條ノ割當ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十六條　米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ハ其ノ割當テラレタル數量ノ米穀ヲ貯藏スルコトヲ要ス但シ其ノ貯藏ヲ解除シタルモノ及第四十九條又ハ第五十條ノ規定ニ依リ政府ノ買入ヲ爲シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第四十七條　米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ノ團體員ハ第四十三條又ハ第四十四條ノ規定ニ依リ割當テラレタル數量ノ米穀ヲ命令ノ定ムル所ニ依リ米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ニ寄託スルコトヲ要ス第二十九條及第三十條ニ規定スル者ニ付亦同ジ

第四十八條　米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ハ第二項ノ場合及勅令ノ定ムル場合ヲ除クノ外第四十六條ノ規定ニ依リ貯藏ノ解除ヲ爲スコトヲ得ズ

政府ハ必要アリト認ムルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ第四十六條ノ規定ニ依リ貯藏シタル米穀ニ付其ノ貯藏ノ解除ヲ命ズルコトヲ得

第四十九條　政府ハ米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ガ貯藏スベキ米穀中貯藏能力其ノ他ノ事情ニ依リ貯藏困難ナリト認ムルモノニ付當該團體ヨリ賣渡ノ申込アリタル場合ニ於テハ買入ヲ爲ス

前項ノ買入價格ハ内地ニ在リテハ米穀統制法第二條ノ最低價格、朝鮮及臺灣ニ在リテハ勅令ノ定ムル所ニ依リ米穀生產費物價其ノ他ノ經濟事情ヲ參酌シテ定メタル價格トス

第五十條　政府ハ必要アリト認ムルトキハ米穀統制組合又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ガ第四十六條ノ規定ニ依リ貯藏シタル米穀ニシテ當該米穀年度ヲ超ユルモ其ノ貯藏ヲ解除セラレザルモノニ付買入ヲ爲ス

前項ノ買入價格ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十一條　命令ヲ以テ指定スル地ニ於ケル米穀取扱業者ハ米穀統制組合ヲ設立スルコトヲ得

前項ノ米穀取扱業者ノ範圍ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十二條　米穀商統制組合ハ法人トシ第一條ノ自治管理ヲ行フヲ以テ目的トス

第五十三條　第四條第一項、第六條及第八條乃至第二十七條ノ規定ハ米穀商統制組合ニ之ヲ準用ス

第五十四條　勅令ノ定ムル所ニ依リ米穀取扱業者ノ組織スル商業組合又ハ重要物產同業組合法若ハ朝鮮重要物產同業組合ニ依ル同業組合ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ米穀商統制組合ノ事業ヲ行フコトヲ得

第二十九條及第三十條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第五十五條　勅令ノ定ムル所ニ依リ政府ハ第四十一條ノ統制ヲ爲スモ米穀ノ供給過剩ニシテ米價ガ米穀統制法ニ基キテ發ス

ル命令ニ定ムル標準最低價格ヲ下ラントスル虞アリト認ムルトキハ米穀自治管理委員會ニ諮問シテ一定數量ノ米穀ヲ內地朝鮮及臺灣ニ於テ統制セシムルコトヲ得

第五十六條　前條ノ場合ニ於テハ政府ハ各內地、朝鮮及臺灣ニ於ケル地方米穀統制組合聯合會若ハ其ノ事業ヲ行フ團體又ハ米穀商統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體ニ對シ前條ノ一定數量ヲ割當テ其ノ米穀ニ付統制ヲ命ズ

第四十三條乃至第四十八條及第五十條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依リ統制ヲ命ゼラレタル場合ニ之ヲ準用ス

第五十七條　政府ハ米穀統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體又ハ米穀商統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體ガ前條ノ規定ニ依リ貯藏スベキ米穀中貯藏能力其ノ他ノ事情ニ依リ貯藏困難ナリト認ムルモノニ付當該團體ヨリ賣渡ノ申込アリタル場合ニ於テハ買入ヲ爲ス

前項ノ買入價格ハ內地米ニ在リテハ米穀統制法第二條ノ最低價格、朝鮮米又ハ臺灣米ニ在リテハ勅令ノ定ムル一定價格以內ニ於テ時價ニ準據シテ定メタル價格トス

第五十八條　朝鮮及臺灣ニ於テハ第十二條、第十八條、第十九條及第三十六條ノ規定（第三十七條又ハ第五十三條ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ニ關シ命令ヲ以テ特例ヲ設クルコトヲ得

第五十九條　地方米穀統制組合聯合會又ハ其ノ事業ヲ行フ團體ノ役員命令ノ定ムル第四十三條ノ規定（第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ニ依ル割當ヲ爲スニ必要ナル行爲ヲ爲サザルトキハ五百圓以下ノ過料ニ處ス米穀統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體又ハ米穀商統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體ノ役員命令ノ定ムル第四十三條ノ規定（第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ニ依ル割當ヲ爲ス必要ナル行爲ヲ爲サザルトキハ亦前項ニ準ジ

第六十條　非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前條ノ過料ニ之ヲ準用ス

第六十一條　米穀統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體又ハ米穀商統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體第四十六條ノ規定（第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ニ違反シタルトキハ其ノ法人ノ業務ヲ執行スル役員ヲ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ組合又ハ團體第四十八條第一項ノ規定（第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）ニ違反シタルトキ亦前項ニ同ジ

第六十二條　米穀統制組合若クハ其ノ事業ヲ行フ團體、地方米穀統制組合聯合會若ハ其ノ事業ヲ行フ團體又ハ米穀統制組合若ハ其ノ事業ヲ行フ團體ノ役員、第二十一條ノ職員、總代、議員、組合員又ハ代議員本法ニ依ル割當又ハ貯藏ニ關シ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ要求若ハ約束シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス因テ不正ノ行爲ヲ爲シ又ハ相當ノ行爲ヲ爲サザルトキハ五年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ場合ニ於テ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス若シ其ノ全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハザルトキハ其ノ價額ヲ追徵ス

第六十三條　前條第一項ニ揭グル者ニ對シ賄賂ヲ交付、提供又ハ約束シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シタル者自首シタルトキハ其ノ刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第六十四條　第四十九條、第五十條、（第五十六條第二項ニ於テ準用スル場合ヲ含ム）第五十七條ノ規定ニ依ル米穀ノ買入ニ關スル一切ノ歲入歲出ハ米穀需給調節特別會計ニ屬セシム

附則　本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十一條第一項ニ規定スル一定數量ノ內地、朝鮮及臺灣ニ對スル割當ノ割合ハ當分ノ內同條第三項ノ規定ニ拘ラズ內地百分ノ三十五、朝鮮百分ノ四十三、臺灣百分ノ二十二トス但シ政府ハ內地、朝鮮及臺灣ニ於ケル米穀收穫ノ豐凶等ニ依リ米穀自治管理委員會ニ諮問シテ之ヲ變更スルコトヲ妨ゲズ

籾共同貯藏助成　籾の共同貯藏助成はかつて昭和五年と八年の大豐作に當り、籾の共同貯藏を奬勵して、大なる效果を收めたので、その施設を恒久的のものとして、籾の共同貯藏を行はしめるものである。これは米穀統制法などによる出廻期調節と共に、米穀市場出廻を調節し、國庫負擔の輕減を目的とする趣旨と、豐作の際における備荒貯蓄の制度として意義あるものである。而して昭和十一年五月二十八日法律第二十四號を以て公布せられた共同貯藏助成法の條文は次の三條から成つてゐるのである。

第一條　政府ハ產業組合、農會其ノ他勅令ヲ以テ指定スル團體ガ米穀ノ出廻數量ノ調節又ハ備荒貯蓄ノ目的ヲ以テ籾ヲ貯藏スルトキハ之ヲ助成スル爲貯藏團體ニ對シ米穀需給調節特別會計ニ屬スル米穀ヲ交付スルコトヲ得

前項ノ交付ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第一項ノ規定ニ依リ交付スル助成米ノ數量ハ毎年三十萬石ヲ超ユルコトヲ得ズ

第二條　政府ハ本法ニ基ク命令ニ違反シタル團體ニ對シ其ノ交付ヲ受ケタル米穀ノ價額ニ相當スル金額ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトヲ得

第三條　本法ニ依ル助成米ノ交付ニ關スル一切ノ歲入歲出ハ米穀需給調節特別會計ニ屬セシム

附則　本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（九月十五日勅令第三百二十八號ヲ以テ同年九月二十日ヨリ施行）

第二節　蠶絲

政府は前に產繭の處理を統制するため、第六十七議會に產繭處理統制法案を提出したが、大製絲業者や繭絲中間商人を中心とする猛烈な反對に遭つて不通過に終つたのであるが、第六十九臨時帝國議會に再びこれを提出したところが、別に大した問題もなく通過した。而して昭和十一年五月二十三日法律第九號を以て公布せられたる產繭處理統制法の條文は左の通りである。この法律の制定と共に蠶絲業法及び蠶絲業組合法もその一部分が改正された。

第一條　養蠶者ノ採ルベキ繭ノ處理方法ハ地方ノ狀況其ノ他特